



松本城上空から山辺谷・林城址を望む



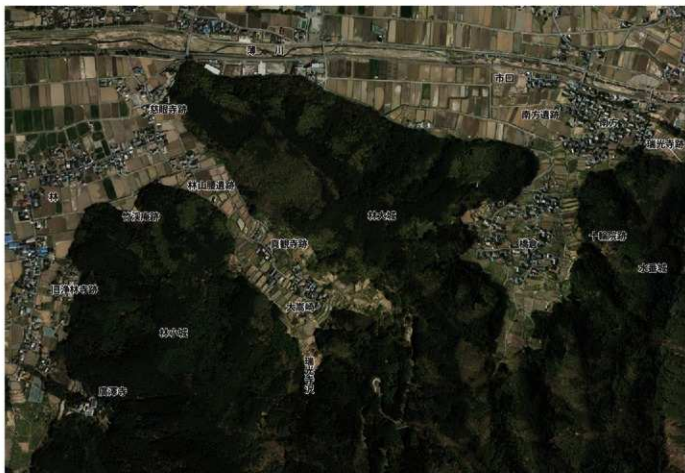
井川城址上空から山辺谷・林城址を望む



井川城址全景



林大城九十九折から松本市街を望む



林城址（大城・小城）とその周辺

例 言

- 1 本書は、松本市井川城1丁目に所在する井川城址（松本市特別史跡「井川城跡」を含む）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成25年度～平成27年度にかけて実施し、そのうち平成26・27年度については国庫補助事業として実施した。各調査の実施期間は以下のとおりである。

平成25年度 6月17日～7月31日：中条保育園建設予定地内の試掘調査（井川城址および近接地内）
8月1日～3月31日：井川城址の遺構確認調査（第1次調査）
平成26年度 4月14日～3月30日：井川城址の遺構確認調査（第2次調査）
平成27年度 4月1日～3月30日：整理作業及び報告書刊行
- 3 本書では、井川城址ともに小笠原氏城館群を構成する同里山辺・入山辺に所在する林城址（大城・小城、長野県史跡「林城跡」を含む）についても、関係する遺跡として概要を収録した。
- 4 本書の執筆分担について、本文冒頭に記名のないものについては、以下のとおりである。

第IV章第3節2：三村竜一、同3：原田健司、同4：小山奈津実、同5：宮島義和、その他：竹原 学
- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記・復元：内田和子・佐々木正子・竹平悦子・洞沢文江
遺物実測・拓本 焼物：久保田瑞恵・竹内直美、土製品：竹内直美、石器：白鳥文彦、原田健司
木製品：荒井留美子、金属製品：洞沢文江、拓本：竹平悦子・洞沢文江
写真撮影 石川真理子・熊谷博志（遺構）、棚アンドン（空中写真）、伊藤 愛・福嶋彩子（城跡他関連文化財）、宮嶋洋一（遺物）※記名原稿掲載写真を除く
一覧表作成：荒井留美子・石川真理子（遺構・土層他）、福嶋彩子（焼物）、三村竜一（土製品）、原田健司（石製品）、小山奈津実（金属製品）、宮島義和（木製品）、
トレース：荒井留美子（遺構図・木製品）、竹内直美・久保田瑞恵（焼物）、原田健司（石製品）、洞沢文江（金属製品）
DTP：荒井留美子・石川真理子・伊藤 愛・小山奈津実・竹原 学・福嶋彩子
表紙作成：伊藤 愛

なお、林大城縄張図（図版22）は、笹本正治氏、中井 均氏を交えた現地踏査結果に基づき、長野県立歴史館遠藤公洋氏に現地調査から図面作成までの作業を依頼した。
- 6 巻頭図版1・4に使用したGIS写真は松本市資産税課所蔵のものを許可を得て使用した。
- 7 本書の中で使用した名称や図の表記は以下のとおりである。
 - (1) 城館跡における址と跡の使い分けは、前者が遺跡・遺構名、後者が史跡名および一般的な呼称を表す。
 - (2) 遺構略称 建物址の礎石・柱穴→柱、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝、不明遺構→SX
 - (3) 遺構・地図中の方位は他文献の引用図を除き真北を指す。
 - (4) 焼物実測図断面の塗り分け 白：土師器・土師質土器、黒：須恵器・陶磁器
 - (5) 灯明皿として使用された焼物は使用に伴うタール・煤状炭化物の付着範囲を灰色で示した。
- 8 第II章第1・2節及び第VI章第1節に係る参考文献は第IV章末に掲載した。
- 9 調査期間中における協力者および指導・助言者は第I章中に名前を記した。
- 10 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823 松本市中山3738-1 電話0263-86-4710 FAX0263-86-9189）に保管している。

目 次

巻頭図版

例言

目次

表目次・図目次・史料目次・写真図版目次

第Ⅰ章 調査の経過	
第1節 調査の経緯	11
第2節 調査の経過	13
第3節 調査体制	14
第Ⅱ章 小笠原氏城館群と府中小笠原氏	
第1節 小笠原氏城館群と松本平の城館跡	15
第2節 小笠原氏城館群を構成する各城館跡の概要	17
第3節 史料から見た小笠原氏と城館	24
第Ⅲ章 林城址の概要	
第1節 林城氏の環境と過去の調査	35
第2節 林城址周辺の遺跡と文化財	38
第3節 林大城の縄張構造	42
遠藤公洋	
第Ⅳ章 井川城址の発掘調査	
第1節 調査概要	53
第2節 検出遺構	
1 遺構の概要	55
2 骨格となる造成遺構と旧地形	56
3 郭内空間の遺構	60
4 郭外空間の遺構	65
第3節 出土遺物	
1 焼物	67
2 土製品	76
3 石器・石製品	76
4 金属製品	77
5 木製品	79
第Ⅴ章 自然科学分析	
第1節 井川城址試掘・第1次調査出土試料の自然科学分析	81
・バリノ・サーヴェイ團	
第2節 井川城址第2次調査出土試料の自然科学分析(1)	94
・関イビソク	
第3節 井川城址第2次調査出土試料の自然科学分析(2)	108
・バリノ・サーヴェイ團	
第4節 井川城址の自然科学分析と景観復原	112
・辻 誠一郎	
第Ⅵ章 総括	
第1節 調査のまとめ	121
第2節 城郭史から見た信濃の中世城郭と林城	126
・中井 均	
第3節 信濃の中世・戦国史と小笠原氏城館群	134
・笹本正治	
表	
図版	
史料	
写真図版	
報告書抄録	

表目次

- 第1表 井川城址地区別遺構一覧
第2表 井川城址土層一覧
第3表 井川城址焼物一覧
第4表 井川城址中世焼物の地点・器種別集計

- 第5表 井川城址石器・石製品一覧
第6表 井川城址金属製品一覧
第7表 井川城址土製品一覧
第8表 井川城址木製品一覧

図版目次

- 図版1 小笠原氏城館群周辺の遺跡・文化財
図版2 松本市域の主要城館跡
図版3 桐原城址縄張図(三島正之作図)、『桐原城古図』
図版4 山家城址縄張図(福原圭一作図)
図版5 埴原城址縄張図(福原圭一作図)
図版6 林城址(大城・小城)と周辺の遺跡・文化財
図版7 林城址周辺の小字界
図版8 『文政3年慈眼寺論所立会絵図』に見る林大城、昭和23年の林城(米軍撮影)
図版9 林大城見取図
図版10 林大城縄張図(宮坂武男作図)
図版11 林大城縄張図(三島正之作図)
図版12 林大城昭和63年Ⅱ郭東屋建設に伴う発掘調査平面図
図版13 林城址見取図・鳥瞰図、林小城見取図
図版14 林小城縄張図(福原圭一作図)
図版15 水番城址縄張図(福原圭一作図)、林城址周辺見取図
図版16 林小城詳細測量図
図版17 林山腰遺跡E区全体図
図版18 林山腰遺跡出土焼物(1)
図版19 林山腰遺跡出土焼物(2)、一覧表
図版20 林大城削平地群切岸計測値・石積計測値・堀切断面図
図版21 林大城詳細測量図
図版22 林大城縄張図(遠藤公洋作図)
図版23 『小島村絵図』に見る井川城址付近、井川城址見取図
図版24 井川城址周辺の小字と地割

- 図版25 井川城址調査区の位置と造成遺構全体図
図版26 井川城址現況地形・造成遺構断面図
図版27 井川城址試掘8トレンチ
図版28 井川城址1次6トレンチ
図版29 井川城址2次7トレンチ
図版30 井川城址2次8・9トレンチ
図版31 井川城址試掘1～3トレンチ・2次10トレンチ
図版32 井川城址試掘4・5トレンチ
図版33 井川城址試掘6・7トレンチ
図版34 井川城址1次1・2トレンチ(1)
図版35 井川城址1次1・2トレンチ(2)
図版36 井川城址1次3トレンチ
図版37 井川城址1次4トレンチ・2次4トレンチ
図版38 井川城址1次5トレンチ・2次5トレンチ
図版39 井川城址2次1トレンチ・2次2トレンチ
図版40 井川城址2次3トレンチ
図版41 井川城址2次6トレンチ
図版42 井川城址焼物(1)
図版43 井川城址焼物(2)
図版44 井川城址焼物(3)
図版45 井川城址焼物(4)
図版46 井川城址焼物(5)
図版47 井川城址焼物(6)
図版48 井川城址土製品、石器・石製品(1)
図版49 井川城址石器・石製品(2)
図版50 井川城址金属製品(1)
図版51 井川城址金属製品(2)
図版52 井川城址木製品(1)
図版53 井川城址木製品(2)

史料目次

- 1 主要史料一覧
2 主要史料選

- 3 建武以後の信濃守護
4 小笠原氏と城館をめぐる関係年表

写真図版目次

- 1～4 林大城遠景・各部の状況
5 林小城各部の状況
6・7 林山腰遺跡近景・検出遺構・出土遺物

- 8～16 井川城跡各調査区・遺構
17～22 井川城跡出土遺物



山家城址



桐原城址

●林城址 (大城)

●林城址 (小城)

埴原城址

松本城跡

●井川城址

小笠原氏城館群の位置



第1章 調査の経過

第1節 調査の経緯

井川城址は、松本市井川城1丁目に所在する、室町時代の信濃守護小笠原氏の居館推定遺跡である。一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地（松本市遺跡番号172）となっているほか、櫓台跡と伝わる塚状のマウンド部分（4552-ロ）が昭和42年に市特別史跡「井川城跡」として指定を受け現在に至っている。居館跡推定範囲とされる、頭無川により南から西を囲まれた楕円形の地割内の現況は、南西の一部に宅地があるもののその他は水田および畑地となっており、周辺の宅地化が急速に進む中、奇跡的に破壊を免れている。

これまで、本遺跡における考古学的調査は全く実施されておらず、『信府統記』の記述や地名・伝承からその存在が推察されるに過ぎなかった。また、近接地における開発行為に伴う試掘調査もこれまで数回実施されているが（図版25）遺構・遺物は全く出土せず、遺跡に関わる手掛かりは何ら得られていない。

平成24年、この地に民間による宅地開発が計画されたため関係者と協議を行った結果、遺跡の重要性についての理解を得られたため、笹本正治信州大学副学長を指導者に迎えて事前に確認調査を実施することと決定したが、一旦この開発計画は保留となった。一方、居館跡推定範囲に接する北東側、廣正寺との間に広がる荒地（湿地）と個人駐車場（4570、4582-4他）において、松本市中条保育園の移転改築が計画された。そこで、松本市教育委員会は、建設担当課である保育課と協議を行い、埋蔵文化財包蔵地および近接地となっている同敷地について試掘調査を実施し、調査状況を踏まえながら保護方針を検討することとした。

試掘調査は建設予定地南半分の荒地（用地A）を対象に、平成25年6月から8月までの実施した（試掘1～8トレンチ）。併せて、遺跡のより詳細な情報を得るために西側の居館跡推定地内の個人所有地（用地C、4552-イ・4553・4562-2）について、地権者の同意を得て調査を実施した（試掘6・7トレンチ西半）。

その結果、一段高い居館推定地内からは中世の遺構・遺物が伴う人為的な盛土造成跡が、また建設予定地のどの境界直下からは堀状の遺構が、さらに荒地東側からも礎石建物他遺構・遺物が多数検出されることとなった（試掘5・8トレンチ）。これにより、保育園建設予定地内南半部（用地A）には中世の遺構遺物が確実に分布することが確実となった。また、居館推定地の盛土造成遺構や堀状の掘り込み遺構の存在を重視し、時期的にも15世紀を中心とする室町時代であることから、これらが井川城址に関わる遺構である可能性が高いものとみて、遺跡の保護について再協議をすることとなった。

協議にあたっては、信濃守護家の居館推定遺跡としての重要性から、早い段階より文化庁および県教育委員会の指導・助言を得、平成25年12月には文化庁記念物課の近江俊秀調査官が来松した。その結果、検出遺構が居館跡やそれに関連するものである可能性が高いこと、

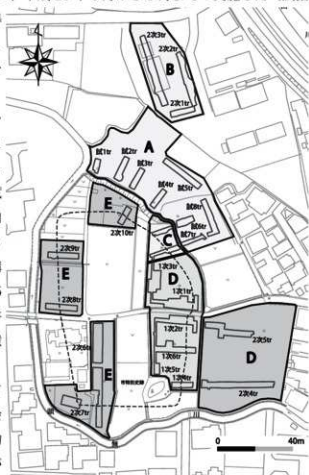


図1 井川城址用地と調査トレンチ

しかも、守護クラスの居館跡推定地が開発されずに保存されている状況は極めて価値が高く、早急に遺跡の保護を図る必要性を指摘された。また、同様に、小笠原氏に関わる城郭遺跡として泉史跡に指定されている林大城他小笠原氏城跡との一体的な保存・活用が必要との指導も受けた。

一方、保育園建設に関しては、遺跡を記録保存し計画通り建設を進めるか、あるいは建設を断念し他に用地を取得するかの2案を軸に検討を重ねた。しかし、老朽化・狭隘化が深刻な中条保育園の移転改築が喫緊の課題で他に用地の確保が難しいことと、コンブス工法と呼ばれる特殊工法の採用により、遺構面を保護したうえで建物の建設が可能との技術的見通しが立ったことにより、最終的には遺跡の保護と保育園の共存を模索することとなり、文化庁からは市としての明確な方針を示すよう求められた。

こうして、遺跡の保護と調和を前提とした中条保育園建設と、保育園を含む井川城址の保護方針、今後の調査計画を盛り込んだ「井川城跡の整備・活用方針について」が策定され、庁内および教育委員会での協議を経て平成26年4月に市議会教育民生委員協議会に協議した。

この間、保育園建設計画に伴う試掘調査はひとまず7月をもって終了し、調査方針を固めたうえで8月からは文化財保護法99条に基づく範囲・内容確認調査（第1次調査）に切り替え、地権者の理解・協力のもと居館跡推定地内の確認調査に着手した（用地D、1次1～6トレンチ）。保護方針策定後の翌平成26年度は、国庫補助事業として4月から第2次調査に着手し（用地D・E、2次1～10トレンチ）、居館跡推定地内の盛土造成遺構の規模・構造の把握と造成面上の遺構・遺物の確認、居館跡推定地外の遺構確認、および前年度未調査だった保育園建設予定地北半部の遺構確認を実施し、平成27年3月末に調査を終了した。

一連の調査から居館跡推定地内には不整形な土壌状の盛土が全域に広がり、その上面には15世紀を中心とする室町時代の遺構・遺物が濃密に分布することが判明した。また礎石建物他の遺構が密集する状況と、威信財を含む焼物の多出をみたため、居館跡の可能性が一段と高まった。

調査終了直前の3月26日には、文化庁が設置する「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」（委員13名）に出席して井川城址と泉史跡「小笠原氏城跡」を「小笠原氏城館群」として一体的に保存・活用する構想について報告し、専門委員からの意見を聴取した。

一方、整備・活用方針で一体的な保存・活用をめざすこととなった泉史跡小笠原氏城跡については、小笠原氏本城として中核的な存在をなす林大城について縄張調査を実施することとなり、平成26年7月に笹本正治氏、中井均滋賀県立大学教授、遠藤公洋長野県立歴史館専門主事の3名を指導者に迎えて最初の踏査に着手し、平成27年度までの2年計画で継続的な縄張調査の実施と縄張図の作成を進めることとなった。平成27年度は、引き続き国庫補助事業により整理調査を実施するとともに、平成27年6月5日には再び文化庁近江俊秀調査官の来松を受け、県教育委員会、調査指導者として笹本正治氏を交えた検討会を開催し、文化庁設置検討会での報告結果を踏まえて、「小笠原氏本城の変遷」をテーマに井川城址と泉史跡のうち林城址（大城・小城）の3城館址について「小笠原氏城館群」の仮称で保存・活用を図ること、残る桐原城・山家城・埴原城については、今後県教育委員会の主導により関係自治体とも連携し、松本平に分布する同時期の特徴的な城郭群を構成する山城として、広域的な保存・活用を目指していく方向性を確認した。

林大城の縄張調査は、平成27年11月に中井均氏、遠藤公洋氏を交えて縄張図素図の確認を現地にて実施し、図面の完成に向けての作業を進めた。また、林小城をはじめ県・市指定史跡となっている市域の山城についても指導者を交えて踏査を行った。

なお、井川城址の保育園予定地以外の調査地はすべて個人所有であり、調査に際しては5名の地権者と8名の耕作者から格段の理解と協力を得た。また、指導体制については、同じ中世遺跡である殿村遺跡の調査指導委員会（笹本正治委員長ほか5名）が先行して組織されていたため、併せて井川城址の調査についても指導を仰ぐこととした。従って、井川城址としての新たな調査指導委員会は設けなかった。

第2節 調査の経過

<平成25年>

- 6月17日 試掘調査開始
- 6月28日、7月4・24日 笹本正治氏現地指導
- 7月31日 試掘調査終了
- 8月1日 第1次調査に移行
- 8月10日 第1回現地説明会開催(181名)
- 8月30日 河西克造氏現地指導
- 9月4日 辻 誠一郎氏現地指導
- 9月13日 中井 均氏現地指導
- 11月17日 殿村遺跡調査指導委員による現地指導
- 12月11日 文化庁近江俊秀調査官現地視察
- 12月14日 第2回現地説明会開催(170名)



文化庁調査官視察

<平成26年>

- 2月21日 鎌田地区町会長に第1次調査成果を報告(30名)
- 3月11日 「井川城跡の整備・活用方針」について庁議に協議
- 3月16日 殿村遺跡発掘5周年記念シンポジウムにおいて調査成果を報告(132名)
- 3月31日 第1次調査終了
- 4月14日 第2次調査開始
- 4月12日 松本市遺跡発掘報告会に第1次調査成果を報告(130名)
- 松本市遺跡発掘速報展に第1次調査成果を展示
- 4月17日 文化庁近江俊秀調査官現地視察
- 「井川城跡の整備・活用方針」について市議会教育民生委員協議会に協議
- 5月23日 市議会教育民生委員会管内視察
- 7月13日 博物館主催あがたの森考古学ゼミナールにおいて調査成果を報告(62名)
- 7月28日 鎌田小学校教職員26名現地見学
- 7月31日・8月1日 遠藤公洋氏・笹本正治氏・中井 均氏現地指導(林大城・井川城)
- 9月18日 松本地域景観育成サポーター運営会議で調査成果を報告(松本合同庁舎)
- 10月14日 鎌田中学校総合的な学習の時間「しらかばタイム」での調査概要説明(170名)
- 11月15日 現地説明会開催(161名)
- 11月20日・12月5日 鎌田小学校3年生・6年生現地学習(179名)



現地説明会

<平成27年>

- 2月7日 松本市遺跡発掘報告会に第2次調査成果を報告(133名)
- 松本市遺跡発掘速報展に第2次調査成果を展示
- 3月26日 小笠原氏城館群(仮称)の保存について、文化庁「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」に報告
- 3月30日 第2次調査終了
- 4月27日 遠藤公洋氏・笹本正治氏・中井 均氏現地指導(林小城・埴原城)
- 6月5日 文化庁近江俊秀調査官現地視察(林小城・伊深城)
- 7月18日 鎌田地区公民館にて調査成果の地元報告会開催(50名)
- 10月14日 中井 均氏現地指導(市特別史跡伊深城跡)
- 10月17・18日 殿村遺跡調査指導委員会による現地指導(林小城・伊深城跡)



小学生現場見学

<平成28年>

- 2月6日 松本市遺跡発掘報告会で調査成果を報告(250名)
- 松本市遺跡発掘速報展に調査成果のパネルを展示
- 3月30日 井川城址発掘調査報告書刊行



調査指導委員会

第3節 調査体制

<平成25年度>

調査団長 吉江 厚

調査担当 熊谷博志（主事）、石川真理子（嘱託）

調査員 河西克造、笹本正治、森 義直

発掘協力者 今井文雄、太田行信、川崎勝英、猿楽あい子、清水陽子、関口 滋、烏居和幸、林 秋好、
宮澤昭敬、柳 さおり

事務局 松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（主査）、柳澤希歩（嘱託）

指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<平成26年度>

調査団長 吉江 厚

調査担当 熊谷博志（主事）、石川真理子（嘱託）

発掘協力者 朝倉秀明、白田岳大、金井秀雄、黒崎 奨、小岩井 洋、齊藤智子、坂口ふみ代、曾根原 裕、
田中勇一郎、西村一敏、古屋美江、待井正和、道浦久美子

整理協力者 市川二三夫、内田和子、久保田瑞恵、佐々木正子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、
洞沢文江、前沢里江、八坂千佳、安田津由紀

事務局 松本市教育委員会文化財課

内城秀典（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<平成27年度>

調査団長 赤羽郁夫

調査（整理）担当 竹原 学（課長補佐）、石川真理子（嘱託）

整理協力者 荒井留美子、竹内直美、洞沢文江、宮本章江

事務局 松本市教育委員会文化財課

内城秀典（課長）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<指導・助言者>

殿村遺跡調査指導委員：笹本正治（信州大学副学長）・小野正敏（元人間文化研究機構理事）・辻 誠一郎（東京大学大学院教授）・中井 均（滋賀県立大学教授）・水澤幸一（胎内市教育委員会）・中澤克昭（上智大学准教授）、遠藤公洋、河西克造、木下 守、熊谷康治、後藤芳孝、沢柳秀利、白沢勝彦、関沢 聡、浜野安則、藤澤良祐、保柳康一、森 まどか（愛知学院大学大学院）

<地元協力者・資料提供者>

荒井 明、荒井 齊、荒井正史、伊藤英雄、犬飼豊作、折井喜代子、金山栄吉、久保田稲男、小池幸永、小岩井俊忠、小林幸子、今野忠紀、鈴木進一、武田資史、花岡 豪、濱 涉、林 利親、古幡琢朗、宮坂昌憲、柳澤一則、山崎英夫、横林克夫、横山時夫、鎌田地区公民館、鎌田地区連合町会長会、京都府立総合資料館、廣正寺、里山辺公民館、天龍寺、東京大学史料編纂所、長野県立歴史館、林古城会、本願寺、松本市文書館、松本城管理事務所、山辺歴史研究会、霊源院

第Ⅱ章 小笠原氏城館群と府中小笠原氏

第1節 小笠原氏城館群と松本平の城館跡

室町時代、信濃の府中であった松本の地には守護家小笠原氏の本拠が置かれた。第1章でも触れたように、本報告ではこれを「小笠原氏城館群」と仮称する。小笠原氏城館群は、次の3箇所の城館跡で構成される。一つは、室町時代に小笠原氏が府中進出した際に最初の拠点となった井川城跡（遺跡名：井川城址）で、平地の居館跡である。もう一つは、井川城に後続し、戦国時代における小笠原氏の本拠となった林城跡（遺跡名：林城址）で、松本盆地に臨む尾根上に築造された大城と小城2つの山城で構成される。林城には、これに加えて山麓居館である「林館」があったとされるが、現在その所在は特定されるに至っていない。

昭和54～57年度に長野県教育委員会が実施した中世城館跡分布調査によると、旧四賀村、奈川村、安曇村、梓川村、波田町を含む松本市域には89箇所の城館跡が掲載されている。また、松本市の埋蔵文化財包蔵地台帳では92箇所が登録されている。しかし、それらの中で築城経緯が明らかなのはほとんどなく、まして今日地表に残された遺構は廃城時以降の姿であり、築城当初の様子が窺い知れるものは皆無とてよい。多くの城はおそらく在地勢力が築き、その後小笠原氏から武田氏支配時代を経て、天正10年（1582）に始まる小笠原貞慶の松本城を拠点とした支配時代までの政治情勢の中で、あるものは支配者層の支城となり、またあるものは反対勢力の拠点ともなった。その中において、井川城跡および林城跡は、信濃守護家の直接的な本拠地であったことが歴史上明らかであり、地域の政治動向を城館の面から知るうえでは特に重要な存在といえる。

建武政権樹立に際し功績を取めた小笠原貞宗は、建武元年（1334）頃に信濃守護としての歩みを開始し、



図1 小笠原氏城館群と松本平一円の城郭群（イメージ）

1340年頃までには所領を得て府中へ進出し井川館を築いたとされる。国人勢力が強い信濃においては、守護とはいえその支配は決して盤石なものではなかった。従って小笠原氏の実効支配が信濃全域に及ぶことはほとんどなく、主たる基盤は府中を中心とした信濃中南部にあった。また、船山（現千曲市）や平芝（現長野市）等、14世紀から15世紀初頭における守護所は北信濃に置かれていた。この間、小笠原氏は一貫して守護の地位を維持できたわけではなく、大塔合戦をはじめとする国人勢力等の反乱によりたびたびその職を失い、それに伴ってしばしば信濃は幕府や鎌倉府の直轄下に置かれた。こうした中、応永32年（1425）に守護に復活し小笠原氏を中興したのが政康で、資料には現れないものの、この頃には井川城が守護所となっていたのではないかとの見方も可能である。江戸時代に松本藩が編さんした歴史書である『信府統記』では、井川城の西に続く鎌田、さらには征矢野までが曲輪の内と記されている。曲輪の内という表現はともかく、井川城を中心として一帯には広く城下町が形成されていた可能性を示すものとも受け取れ、次節に記すように周辺の文化財や地名の点からもそれを窺うことができる。

小笠原政康の死後、その跡目をめぐって小笠原家内に亀裂が生じ、府中と伊賀良が対立する。後者はさらに小笠原政秀のいる鈴岡と松尾に分裂し、三家分立の様相をみせた。守護家一族の対立が進む中、15世紀半ば過ぎに府中の小笠原清宗は井川から東方4kmの林の地に館を移し、山上に要害を築いた。断片的な史料からはその具体的過程は見えてこないが、鈴岡の政秀による府中乱入が幕を引く15世紀末までには本拠の移転が完了したのではないかとみられる。こうした平地の居館から要害を背景とする山麓へと本拠が移る状況は、応仁の乱を契機とする戦国時代の深まりにあっては、むしろ全国的な動向といえるものであった。このように、戦国時代、16世紀前半における府中小笠原氏の本拠は林の地にあった。今日目にすることができる林大城・小城の遺構は本拠を構成する施設の一つである山上の要害に過ぎず、山麓には館や町、寺社からなる領域が形成されていたに違いなく、これらを一体的に捉える視点が必要となる。

林城は、天文19年（1550）の武田晴信進攻により他の支城とともに自落し、小笠原氏の支配拠点としての歴史を終える。武田氏は深志城を鎌立て府中支配の新たな拠点とした。天正10年（1582）の織田氏による武田氏滅亡とそれに続く本能寺の変による信長の死により、信濃を含む旧武田氏領国はかつてない軍事的緊張下に置かれた。かねて府中回復をもくろんでいた小笠原貞慶は徳川家康を背景に府中回復を果たし、深志城を松本城と改めて支配拠点とした。その年の上杉氏、北条氏、徳川氏、木曾氏による旧武田領争奪戦に始まり、在地の反対勢力の掃討や上杉景勝との攻防が続いた天正13年までの間、貞慶によって安曇・筑摩一円の城が修築され、今日各地の山城に見られる本格的な戦闘に備えた縄張はこの時完成したのではないともいわれている。またこうした軍事的緊張が和らいだ後、貞慶は本格的に城下町の整備に乗り出しており、近年の発掘調査により次第にその姿が浮かびつつある。

天正18年の豊臣秀吉による徳川氏の関東移封に伴う小笠原貞慶の下総移封により松本城主となった石川氏は、国宝として現存する松本城天守の築造に着手した。それまでの地域の城郭とは一線を画し、豊臣氏の威光を反映した織豊系城郭が松本の地に出現したのである。徳川幕府の下、慶長18年（1613）の石川氏改易により、小笠原秀政は大名として松本藩主に返り咲いた。近世大名としての小笠原氏の歩みは、その後九州小倉の地において幕末まで続くことになった。

このように、中世の守護から戦国領主を経て近世大名へと命脈をつないでいった小笠原氏という武家の歩みを、松本という一地域において城館から辿ることができるのである。また、松本の中世から近世の歴史を語るうえで、その政治・軍事的象徴となった中世城館「小笠原氏城館群」と近世城郭「松本城」が市域に揃って存在していることは大変意義深い。

こうした点からも、小笠原氏城館群は松本城とともに極めて歴史的価値の高い城館跡としてその学術的価値付けと歴史資産としての保護が急務であるといえよう。

第2節 小笠原氏城館群を構成する各城館跡の概要

1 井川城址

(1) 立地と環境（図版1・2、巻頭図版1～3、写真図版1）

井川城は、松本盆地の南部、女鳥羽川、薄川、田川、奈良井川等、盆地を構成する主要河川が集まる低湿地帯にある旧市街地の南、松本市井川城1丁目字井川にその伝承地があり、中世においては榊荘の一角だった。また、旧村名を小島村といい、その名が示すように奈良井川と田川に挟まれた標高585mの低湿地帯に立地し、田川系統の河川による網状流の中に形成された小島のような微高地の一つに館が構えられたのであろう。そもそも館の名称である「井川」も周囲に流れや沼があったことに由来するものであるし、かつて宅地化が進行する以前は、館推定地の南、字古城一帯に沼地が広がっていた。その他、「深志」あるいは「深瀬」や、井川の西にある「鎌田」の語源も、こうした水の豊富な景観から発したものとされる。

字「井川」の地名は周囲より一段小高い南北130m・東西90mの楕円形地帯を指し、地割内の南東の一角にあり矢倉台の跡と伝わる塚状の高まりとともに、かつての本城の名残とされ（『信府統記』）、地割の南から西を回り込むように北流する頭無川が館を囲む堀に見立てられてきた（図版23）。現状においては往時の姿を偲ぶことはほとんどできないが、推定地一帯は耕地のまま近世以来の景観を伝えている。

史跡としての井川城の歩みは、戦前の県史跡を経て昭和42年2月1日に塚状の高まりが「井川城跡」として市特別史跡の指定を受け、現在に至っている。また、それを含む推定地一帯が井川城址として周辺の埋蔵文化財包蔵地となっているが、これまで居館の実態に迫るような考古学的調査は行われておらず、周辺の試掘調査からも何ら手がかりは得られてこなかった。そのためこれまでの研究は、次第で詳述するように井川城に直接関わる一次史料がほとんどない中、もっぱら小笠原氏の系図である『笠系大成』や『信府統記』の記述、地域の伝承だけが拠り所となっていたのである。従って、「小笠原氏城館群」を構成する城館跡としてこれを位置付けるためには、考古学的調査による居館跡の遺構確認が必須の要件であり、そこに今回の調査の意義と目的がある。

(2) 周辺の遺跡と文化財（図版1）

次に、井川城址周辺の遺跡・文化財に目を向けてみたい。まず、井川館が成立する中世以前は、頭無川の上流域にある出川周辺や高宮周辺に弥生時代中期から平安時代にわたる生活域が広範に形成された。これらの居住域は松本市街地を中心とする低湿地帯に面した微高地上、標高590m～600m地点付近に分布し、低湿地帯の中にある井川城址周辺には広大な生活領域は見出されなかったと考えられる。しかし、本調査において、旧地形の微高地からは平安時代ひいては古墳時代に遡る遺構・遺物が得られており、松本城下町周辺でも縄紋～古墳時代に至る生活痕跡が断片的に得られている等、今後注意を払うべき地域といえる。

中世の遺跡は、頭無川上流域の出川遺跡において湧水の激しい低湿地帯から15～16世紀代の集落跡が検出され、さらに南に続く出川西遺跡の最近の調査では、南松本貨物駅の東に接して威信財的な青磁袋物や窪地の整地を伴う方形区画溝が検出された。井川城址とは頭無川沿いにわずか1.3km上流であり、不明な点の多い隣接する多賀神社の成立等とも合わせて関連が注目される遺跡である。

次に井川城址周辺の城館と文化財に目を向ける。まず、井川城址の北1.6kmに深志城がある。古くは坂西氏が館したといい、井川館の後を受け深志城とした鳥貞永が、永正元年（1504）に現在の松本城の地にこれを移したという。深志城はその後武田氏の府中支配の拠点となった。次に、北西1kmには渚館址がある。大塔合戦で守護を解かれた小笠原長秀が没した館と伝わり、跡地の建つ常徳寺周辺に方形の地割をみる事ができる。井川城址の北には廣正寺がある。戦前までは阿弥陀堂といい、小笠原長基の後室が観音堂の傍ら

に庵を結んだのが起りという。隣接して神明宮があり大日堂の地名も残される。これらの宗教施設は館跡から見て鬼門の方角にあり、計画的に配置された可能性がある。鬼門の守りを固めるもう一つの宗教施設に、1km北西にある宮村明神（現深志神社）がある。暦応2年（1339）小笠原貞宗により諏訪明神を勧請したと伝わり、こも下層に古墳時代の遺構があることから、市街地の低湿地帯における古くからの生活域の一つだった。一方、井川城址の西、鎌田の地にはかつて小笠原長基が応永9年（1402）に勧請したと伝わる天満宮があり、後に松本藩主小笠原秀政によって宮村明神の北に移され深志神社となった。他にも井川城址の南東には小笠原貞宗が祀った男山八幡宮が創始といわれる城殿宮がある等、館跡周辺には宗教施設が多い。また、井川城地区内を南北に通過する旧道沿いをはじめ館跡周辺には中ノ小屋、屋敷内、関屋敷等の地名・地割が多く残っているが、近年の宅地開発で地割の改変が進行し、かつての景観は急速に失われつつある。これらのことから、井川城址の周辺には、寺社や屋敷地、町等の計画的な配置が窺え、館を核とした一つの拠点が形成されていたと見る事ができるだろう。

2 林城址（図版1・2）

(1) 立地と環境

林城址は、松本盆地の東縁を画する筑摩山地、三峰山に端を発する薄川が開析した河谷が、扇状地となって盆地に臨む谷口の左岸にあり、南東の高遠山（1317m）からのび薄川河道に突き出した尾根の先端付近に山城が築かれる。林大城は別名金華山城、橋倉城山ともいい、松本市里山辺林字日向山から入山辺橋倉字日影に所在する半ば独立した尾根の頂部、標高846mに主体部を構える城で、その城域は約1km×400mに及び、金華橋との比高約200mを測る。林小城はその西、大嵩崎沢による狭く奥深い小谷を挟んで対峙する尾根上に立地し、行政上は松本市里山辺林字前山に所在する。別名を福山城ともいい、主郭の標高796m、城域700×510m、林集落との比高約145mを測る。両城跡ともに、今日まで比較的良好にその縄張をどどめており、古くから一対の城として本城と支城の関係が認識されてきた。しかし、山麓に所在したとされる林館はその痕跡すら確認されておらず、現在も特定されていない。

この3城跡は昭和42年の松本市史跡指定を経て、昭和45年10月22日に「中世200余年に亘り、信濃守護として府中を本拠に活躍した小笠原氏の構築にかかもの」として「小笠原氏城跡」の名称で長野県史跡の指定を受け、昭和55年には山家城跡、埴原城跡が支城として追加指定された。小笠原氏や信濃の中世城郭研究が進んだ今日、武田氏支配時代以前の小笠原氏支配下における築造者や縄張構造と、天正10年（1582）以降の小笠原貞慶支配時代における軍事的緊張下で相次いで修築されたとされる城郭の役割や縄張構造は区別して評価をすべきであり、その価値付けをめぐっては見直しが必要であろう。

なお、これらの城跡は、それぞれ林城址、桐原城址、中入城址（山家城）、埴原城址の遺跡名で周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが、林城址におけるこれまでの記録に残る考古学的な調査は、昭和63年の大城における副郭の東屋設置に伴う発掘調査のみである。一方、林館の推定地の一角でもある山麓の大嵩崎谷に所在する林山腰遺跡では大規模な発掘調査が行われており、林における拠点形成に関わる重要な成果をもたらしている。これらについては、周辺の遺跡・文化財とともに次章で詳しく触れることとする。

(2) 林城址と松本平の城郭群

林城址は、小笠原氏の本城であるとともに、旧安曇・筑摩郡下を中心とした中信濃一円に広く分布する山城の構成要素でもある。これらの山城は、林城址をはじめとする松本市域の県史跡や市史跡指定の城郭のように発達した縄張を有し規模の大きいものから、早落城や虚空蔵山城跡の峯ノ城といった山上の稜線を堀切で切断しただけのシンプルなもの、またほとんど造成の痕跡を留めない小さなものまでさまざまである。前

者については、三島正之氏を中心とする近年の縄張研究から、主郭周辺の構造や尾根上の削平地、堀切や堅堀といった施設に広く共通する特徴が存在することが指摘され、旧小笠原氏支配領域に分布する特徴的な城郭構造と捉えられている。林城址を理解するうえでこの城郭構造についてはあらかじめ踏まえておく必要があり、以下に県史跡5城跡を例に小笠原系城郭の主な特徴を述べる(図2～5)。

立地 尾根中腹の半島状のピークを利用して主郭を構える場合がほとんどで、林大城のように尾根頂上に立地する城は少ない。この立地は、主郭背後の堀切等の構造に関わってくる。

主体部の構造 城によって主郭の規模はさまざまであるが、基本的な形態としては隅丸のプランである。郭の両側面と背面の三方あるいは四方を土塁で囲み、とりわけ背面は高土塁とする。その内外面には石積を施し石塁とする城も多い。虎口は側面に設けることが多く、桁形虎口や平入虎口が認められる。

石積 多くの城が主郭の周囲に石積を伴い、時には副郭や虎口周辺、その他の曲輪まで及ぶ(桐原城址等)。おそらく土木効果よりも視覚効果を狙った石積として、主要部や虎口に導入されたと考えられる。松本平東部山地に広く分布する安山岩やひん岩の板状節理を利用した平らな割石を布積みすることを特徴とするが、伊深城跡では例外的に河床礫を用いている。垂直に近く不安定な積み方のため、背面に控え積みと呼ぶべき隠れた2列目の石積を伴うことが多く、裏栗石は見られない。こうした積み方のため当然高さを稼ぐことができず、多くの城はせいぜい1～1.5m程の高さに留まる。また、算木積みの技法も有さないため、虎口を例外として隅部を設けない。そのために主郭のプランが隅丸を呈している。さらに、石積の安定を図って、法面上の構築に際しては、群馬県の新田金山城や東京都の八王子城に見られる顎止め石と同様の、根石を前にせり出させる構造を採用するものがあり、その顕著な例は埴原城址や虚空蔵山城跡にある(図4・5)。

こうした低い石積だけでは切岸の高さを確保することができないためか、斜度の急な切岸の最上部に鉢巻状に巡らせることが多い。桐原城址では中段や裾にも腰巻状に築いている。また、どうしても高い壁が必要となる場所では、埴原城址に見られるように途中でテラスを設けてセットバックさせた、2段構造の石積として高さを確保している。なお、山家城と青柳城(筑北村)の石積はこうした技術の到達点をみられ、石材の大きさにばらつきがなく面が揃い、高さも3m近くに達している。

堀切と堅堀 主郭を尾根中途に設けるため、必然的に背後には大堀切を設け、尾根筋を遮断する。その高低差は大きく、2、3重に設けることが多いが、大規模なものでは山家城のように5重になるものもある。主郭以外にも尾根の随所を堀切で切断し、ことに埴原城では主体部から派生する尾根の先端や基部に徹底した堀切を設けている。堀切は前後に土塁を設け内側の切岸を高くし塁線とすることがある。特徴的な点として、堀切から連続して長大な堅堀を尾根裾近くまで下ろすことで、しかもこれらを途中で合流させることが多い。また、城によっては堅堀に土塁や石塁を沿わせたり(林大城・青柳城・虚空蔵山城等)、薬研堀の堅堀を途中で屈折させることがある(桐原城址等)。その他の堅堀のあり方として、林小城、桐原城、埴原城、水番城等では主体部周辺に連続堅堀(畝状堅堀)の導入が認められる。

削平地群 林大城・小城や桐原城では、主体部から派生する長く続く尾根上を狭小な不整形の削平地で埋め尽くす空間が見られる(図3)。これまで触れてきた主体部周辺や堀切・土塁にみられる軍事施設として発達した縄張構造に対して、塩尻市域の妙義山城や飯綱城等にも顕著に認められるこうした未発達とも受け取れる不整形な連続削平地群は、武田氏進攻以前の古い構造を残すものであるとの見方も示されている。

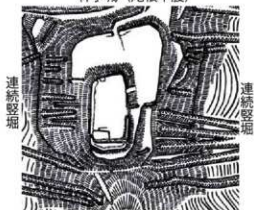
以上、特徴的な点に絞って松本平の山城を概観してきたが、一方において、それとは全く異なった特徴を有する城も知られており、例えば山家城址の秋葉神社付近の曲輪(図2)や武居城(朝日村)では、武田氏の山城の特徴の一つとされる放射状堅堀を伴う帯曲輪がみられる。また、上に挙げたような旧小笠原氏支配領域に特徴的な城郭においても、これまで認識が及ばなかった構造上の特徴があるのか、そうした点も念頭に、林大城の縄張調査を行った結果について、次章で報告する。

<土塁で囲む主郭と背後の大堀切>

林大城 (尾根頂部)



林小城 (尾根中腹)



桐原城 (尾根中腹)



山家城 (尾根中腹)



埴原城 (尾根中腹)



<異なる特徴 (武田氏系か)>

山家城 (尾根頂部)



0 50m

図2 松本市域の山城各部の特徴(1)

<下方で合流する豎堀と堀切による尾根の切断>



埴原城



林大城



桐原城



桐原城

<尾根上の連続小削平地群>



林大城

0 100m



林小城



埴原城

図3 松本市域の山城各部の特徴2)



桐原城主郭の石積



桐原城段曲輪の石積 (控え積みか)



桐原城蓮法寺跡の石積



同左 控え積み



山家城主郭の石積



青柳城主郭の石積と控え積み



埴原城主郭の石積 (セットバック)

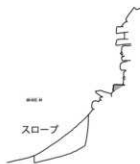
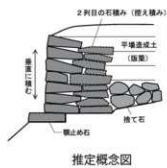


埴原城主郭の石積 (顎止め石)

<主郭周辺の石積>

図4 松本市域の山城各部の特徴(3)

平場群最上段 中央の石積



S=1/60



平場群最上段 西端の石積



S=1/60



<顎止め石を伴う石積：虚空蔵山城跡>

図5 松本市域の山城各部の特徴(4)

第3節 史料から見た小笠原氏と城館の動向

1 府中を中心とする小笠原氏の動き

本項は信濃小笠原氏関係の史料を収集した後、井川城址・林大城・小城に関わりの強い府中小笠原氏についての史料を抽出し、それらの史料調査の結果読み取れた府中家の動向を報告するものである。基本的に一次史料を対象としているが、最近の研究で得られた本報告に関する学説を引用・紹介するとともに、今後検討しなくてはならない課題を提示した。なお、収集史料および関連年表、信濃守護一覧を巻末に掲載した。

(1) 小笠原貞宗までの小笠原氏の動向

元暦元年(1184)、源頼朝は木曾義仲の遺子義高の残党が謀反を起こすという風聞から軍勢を甲斐国へ遣わすが、その中に小笠原次郎長清がみえる。これが小笠原氏の史料上の初出となる。本来の名は加々美次郎長清で『尊卑分脈』『小笠原系図』ともに、加賀美遠光の次男としている。当初は加賀美姓も併用しており、文治5年(1185)に頼朝から範頼に宛てた書状でも「かがみとの」「二郎との」と呼ばれている(『信濃史料』3巻367)。この書状から長清は頼朝に寵愛されていたことが窺え、以後、頼朝の主要な寺社参詣・供養・法会といった儀式に供奉・随兵している。加賀美遠光は武田と同族の甲斐源氏で、文治元年(1185)8月16日の小除目で信濃守を任じられる。また、翌文治2年(1186)10月17日の『吾妻鑑』で長清は信濃国伴野庄の地頭であったことがわかる(史料3)。承久の乱において長清は東山道大將軍の一人に任命され、一族を伴って参戦する。その結果恩賞として西国に守護職・地頭職を得て進出した系統と在地に留まる系統とに分かれることになる。

鎌倉末期の元亨3年(1323)「北條長時十三回忌伝事記録」(史料4)に砂金20両・銀剣1・馬1疋を進上した「小笠原信乃前司」がみられ、これを長清直流の小笠原宗長に比定する説がある(吉井功兒1993)。それに従うと宗長は信濃守であったことになり、嫡子貞宗の信濃進出の足掛かりになった可能性を示唆する。

(2) 小笠原貞宗と府中(井川)進出

小笠原貞宗の信濃における初見は建武2年(1335)3月「市河助房等着到状」(史料6)である。中先代の乱鎮定に関するもので、代官市河助保が着到したのは船山(現千曲市)であり、「善光寺より馳せ付け」としている。『明月記』安貞元年(1227)9月25日の条には善光寺附近に「後庁」があると書かれているように(『信濃史料』4巻14)、建武年間にも善光寺を中心に国衙の職務を分掌する機関があったことが推定され、そこに詰っていた在庁官人や武士(明月記では「眼代」)がいた。武士たちが着到した船山は守護所であった可能性が高く、着到を承了した貞宗は信濃守護であったのだろう。同じ史料には「府中騒動について、同十六日御発向のあいだ浅間宿(松本市)に到着」とあり、史料8では国司(堀河光継)を迎えるため貞宗が浅間に向かった旨が記されており、筑摩郡浅間近辺に国衙があった可能性が高い。建武3年(1336)2月23日貞宗は市河経助等を率い、筑摩郡の麻績で国衙の在庁官人と思われる深志介と戦っている(史料9)。この時は市河氏を伴っていることから船山から向かった可能性が高いが、史料7に見られるように安曇郡住吉庄を宛がわれ、府中周辺に地盤を固めてきたこと、暦応3年(1340)6月24日には伊那郡大徳王寺城に立て籠もった北条時行に対し「当守護小笠原貞宗、府中の御家人とあい共に同二十六日に馳せ向かい」とあり(史料10)、府中の御家人たちを統率している様子が窺えることから、信濃中部を支配する拠点(城館)があったものと思われる。このことから井川に館を構え始めたのも14世紀前半のこの時期ではないかと推定される(後藤芳孝1996)。康永3年(1344)11月12日、貞宗は所領・守護職を嫡子小笠原政長に譲る(史料11)。しかしその中に住吉庄が含まれていない。これに関しては建武3年(1336)から暦応3年(1340)まで貞宗が信濃守護であった痕跡がなく、小林計一郎氏はこの間の守護を村上貞貞としている(小林1972)。よって住吉庄は貞宗の手を離れていた可能性がある。しかし貞宗が守護に再任された後の貞宗3

年(1347)4月26日足利尊氏は春近領半分(筑摩郡塩尻・鳥立以下の郷村)を宛がう(史料12)。貞宗は同年に亡くなるが(史料13)春近領は嫡子政長に安堵され(史料14)、孫の長基には春近領關所分が宛がわれる(史料15)。それまで伊那郡伊賀良庄を地盤としていた小笠原氏は府中に重要な所領を手に入れることになった。

(3) 小笠原長秀と大塔合戦

永徳3年(1383)2月13日、小笠原長基は子息の小笠原長秀に所領を譲る。史料16に示した通り信濃内外に多くの所領をもっていたことがわかる。しかしこの後小笠原氏は春近領を失っていた時期があり、応永5年(1398)8月24日に足利義満により住吉庄と春近領が返付されている(史料17)。これは長基の死後信濃守護が上杉朝房・斯波義種・斯波義持など小笠原氏以外の人物が着任していたためであり、長秀が守護になる前後に返付されたものとみられる。このように住吉庄・春近領は信濃守護の領地と捉えることができる。さらに応永6年(1399)5月10日には信濃春近領の下地一円を宛がわれる(史料18)。

このようにして伊那郡および府中での立場を一応盤石なものとした長秀は北信濃・東信濃にその威勢を及ぼす手段に出る。まずは守護代官の入部を試みるが嶋津国忠が反発し、それを退治するために赤澤秀国と小笠原柳置入道清忠が発向し、市河興仙が応援するが目的は達成していない(史料21)。そしてついに守護である長秀自身が善光寺に入ることになる。善光寺は当時の信濃の政治・経済の中心地であった(後藤1996)。しかし同時に善光寺平は守護小笠原氏に強力に反抗する村上氏の勢力地盤でもあった。長秀にとってはこのままでは一国守護になりえないため、守護としての政務を強行しようとするが、これが村上氏などの国人勢力および利害を同じくする武士たちによる大文字一揆の反発を買い、応永7年(1400)9月の大塔合戦を引き起こすことになる。この合戦の経過を記した『大塔物語』は原本の成立が文正年間(1466～1467)以前のものでかなり信憑性が高いとされる(後藤1996)。一次史料としては応永7年11月15日の「市河興仙軍忠状」(史料23)があり合戦の経過が分る。足利義満も市河興仙の大塔合戦での働きに対し感状を出している(史料22)。合戦は長秀が塩崎城(長野市)に立て籠もり、国人方がそれを攻める形となるが、小笠原の一族でもある佐久の大井光矩が村上満信との交渉した結果、塩崎城包囲網はとかれ長秀は京都に帰る結果となった。守護職は応永8年(1401)に斯波義持に移るが、翌年には信濃国は幕府料国となり細川慈忠が代官を勤めている。長秀は応永12年(1405)11月9日に弟の政康に所領を譲る(史料24)。小笠原氏は信濃守護から遠のく形となる。

(4) 小笠原政康による中興

政康は応永6年(1399)10月10日に右馬助に任じられ(史料19)、翌月には大内義弘を守護(小笠原長秀)の手に属して退治する命令を足利義満から受けている(応永の乱、史料20)。大塔合戦の後、長秀から政康へ譲渡された所領が安堵されたのは応永23年(1416)12月晦日で、將軍は足利義持であった(史料25)。上杉禪秀の乱後関東の鎌倉府では足利持氏の専制が始まり、政康はそれに対抗する立場として動いた。それにより応永25年(1418)9月9日に住吉庄・春近領を返付され(史料26)、府中での地盤を安定させた。応永30年(1433)に鎌倉府の幕府への反抗を終息させた後、春近領内の船山郷(現千曲市)を宛がわれ、北信濃方面に勢力を伸張させる(史料27)。続いて応永32年(1425)2月3日に大膳大夫に任じられ(史料28)、同年12月15日には信濃守護に補任され、信濃小笠原氏を再興させることに成功する(史料29)。翌年には守護として信濃に初入国を果たし、足利義持より太刀を贈られている(史料30)。正長元年(1428)8月28日に信濃春近領下地一円を拝領しているが「応永六年(1399)五月十日の旨に任せ」とあり、これは小笠原長秀が春近領下地一円を宛がわれていた時のことを示している(史料31)。この段階で小笠原政康は信濃小笠原氏の歴史上最も広大な領地を獲得したことになり、守護としての地位も安定したものとなる。近年村石正行氏は「信濃国の場合小笠原政康が府中井川館に守護所を移すまで、守護所は北信

濃に置かれていた」と述べている（村石 2010）。確かに体制的にみるとその可能性は高いように思われる。ただそれを直接示す史料がないことが残念であり、今後考古学的成果も交えて検討する必要があるだろう。

政康は將軍足利義持・義教 2 代の間信濃守護として関東・越後への対応、そして信濃国内の統治にあたった。永享の乱に続いての結城合戦において信濃の武士を率いて参戦し、足利義教より感状を得ている（史料 32）。政康は治部大輔入道正透を名乗って以降、自筆の置文を残している。そこには「伊賀良の事は六郎（小笠原光康）に任せ候。」「当家の事は五郎（小笠原宗康）・六郎兩人ならではあい計らいまじく候」と記されている（史料 34）。ここでは府中のことには一切触れておらず、小笠原の本拠はやはり伊賀良庄という意識が強かったことが窺える。また讓状も残されておらずこのことが後の混乱を招くことになる。

5) 小笠原氏の分立

小笠原宗康は政康の嫡子であり、結城合戦にも参戦し足利義教より御内書を受けている（史料 33）このままいけば宗康が政康の後を継ぐのが自然であったが、政康の兄長将の子持長が政康の遺跡継承に絡んでくる。ここで一度整理をしておく、宗康および光康は伊賀良庄に勢力基盤を置いた「伊那小笠原氏」と呼ばれ、政康の兄長将とその子の持長は府中に地盤をもつ「府中小笠原氏」として大きく区別される。持長が宗康の相続に絡んできたのは、府中を勢力範囲に収めているという点もあるが、政康の兄長秀の讓状に書かれていた「政康以後実子無くば、政康の手により、舎兄播磨守長将の嫡男彦次郎（持長）に譲与すべきものなり」という一文による（史料 24）。本来ならば嫡子として宗康が相続することになるが、前述のように政康は讓状を残さなかったため、持長も自分の権利を主張してきたのである。解決は幕府への訴訟にもちこまれ、文安 2 年（1445）11 月 24 日の連署状により宗康が勝訴する（史料 35）。その結果を不満とする持長が宗康との合戦に及んだと言われている（漆田原合戦）。この合戦が行われた確証となる史料には恵まれないが、ここで宗康は敗死したとされる。年不詳であるが細川持賢から武田信重に送られた、宗康の遺跡・守護職を小笠原六郎（光康）に譲与する旨を伝えた書状に、「そもそも小笠原大膳大夫（宗康）方の事、是非なき次第に候、殊に力を落とされ候御心中察し存じ候。」と書かれており、宗康の戦死を示しているのではないかと推定される（史料 36）。

小笠原光康が所領を受け継ぎ、守護職に補任されたのは時期的に文安 3 年（1446）と思われる。「諏訪御符礼之古書」文安 4 年（1447）の御射山祭の頭役に伊賀良が割り当てられ、「守護六郎殿」の名が見える（『信濃史料』8 巻 234）。光康が遠江守に任官するのは宝徳 2 年（1450）であるので（史料 38）、記述に矛盾はない。ところがその文安 4 年に小笠原持長が守護職を補任されていたことを示す史料が「天龍寺文書」の中に存在していた。それが史料 37 である。宗康は大膳大夫を名乗っていたが、文安 4 年の段階ですでに死去しており、次に大膳大夫に任官したのが持長である。「守護使の入部を停止せらるべき」とあるように、それができるのは守護だけであることからこの時期の守護は持長であったと思われる。花岡康隆氏は持長が守護であった期間は文安 4 年 7 月から 11 月までとする（花岡康隆 2012）。この目まぐるしい守護の交代には光康のバックに立つ細川氏と持長のバックに立つ畠山氏の勢力争いがあるといわれる（花岡 2012）。

府中小笠原氏である持長は「諏訪御符礼之古書」宝徳 4 年（1452）の五月会で漆田に頭役が割り当てられ「守護殿大膳大夫持長勤む」とあることから、再び持長が守護職を補任されていることがわかる（史料 39）。しかしこの後しばらく守護に関する史料は見られなくなる。ただ康正 2 年（1456）の「足利義政御教書案」で小笠原国松（政秀）に本領・新領ともに領掌が認められている（史料 40）。政秀は宗康の嫡子であり、年不詳であるが政秀を名乗り左京大夫に任官した後の「足利義政御内書」には信濃国守護に小笠原左京大夫政秀を補任したことについて「よろしくその意を得候なり」と小笠原家長宛てで書かれている（史料 45）。家長は光康の嫡子である。これ以後光康・家長の系統は松尾城を本拠とする。宗康・政秀の系統は伊那の鈴岡城に寄る。持長・清宗の系統は府中井川館を本拠としていたが、清宗の代に林城（現松本市里山辺）に本拠地

を移したとされる（中川治雄 1988）。このように小笠原は松尾・鈴岡・府中の3家に分裂したことになる。

〔6〕 応仁の乱と府中小笠原家の動向

「諏訪御符礼之古書」には、応仁元年（1467）7月15日より小笠原兵庫助政貞（政秀）が伊賀良より府中に乱入し、小笠原信濃守宗清（清宗）を攻めたという記述がある（史料46）。井川館が襲撃されたと推定され、清宗は翌年11月4日に狂乱して死去したと伝えられる（『信濃史料』9巻15）。この後は清宗の嫡子長朝が府中家を継いで民部大輔を称し、活発な軍事行動をとるようになる。文明12年（1480）には仁科盛直との戦いが行われ（史料48）、戦況は長朝側が優勢で9月20日には仁科・西牧（満兼）・山家（満家）の連合軍と戦い、山家城を攻めて山家孫三郎を戦死させている（史料49）。文明13年（1481）4月には長朝と山家光家が敵対する。神長諏方政満は光家に加勢をして伊那勢を率いて出陣する。しかし仁科氏と香坂氏が神長に同心して思いがけず和田城を攻めるという挙動に出て戦いは終息している（史料51）。文明16年（1484）5月には諏訪大祝家の繼満が鈴岡家の政秀等の援助を受け諏訪片山城に進軍するが、長朝は安曇・筑摩2郡の軍勢を率いて攻撃している（史料52）。このように府中小笠原の長朝の積極的な活動により、その軍勢も安曇・筑摩2郡に及び充実してきていた。父清宗が築城したとされる林城の構えが強固になり、林館が整備されたのはこの長朝の時期の可能性もあり、今後の研究の一視点となるだろう。

ところが長享3年（1489）の諏訪上社五月会の右頭が割り当てられた捧庄では、小笠原左京大夫政貞（政秀）が頭役を勤めている（史料53）。このことから政秀は再度の府中攻撃に成功し、この時期支配下においていたことがわかる。これ以後の状況を伝える史料には恵まれないが、「諏訪御符礼之古書」には長享3年8月2日に小笠原民部大輔朝長（長朝）合力のため香坂殿が府中へ出張したという記述があり（『信濃史料』9巻481）、これが政秀の府中攻撃に関するものと推定される。花岡康隆氏は『溝口家記』（笠系大成附録）の記述から、長朝は家伝の文書とともに更級郡牧之島城に逃れ、その後政秀は周辺の国人層から反発を受けた結果府中家と和睦し長朝を養子として府中を明け渡し鈴岡に戻ったとしている（花岡2015）。

その後長朝は松尾小笠原と戦った形跡もみられるが、伊那への出撃は嫡子の貞朝以降その子の長棟の代に活発になっている。特に天文2年（1533）に伊那への侵攻が行われる（史料54～56）。そして天文3年頃までには長棟が松尾の小笠原定基の嫡子貞忠を屈服させる形で小笠原家の統一がなされたとしている（花岡2015）。

〔7〕 武田家の進出と小笠原長時

天文14年（1545）より武田晴信による信濃侵攻が本格化する。父長棟の跡を継いだ小笠原長時は林城および林館を本拠にしていた。天文14年6月14日、武田軍は林近所まで放火に及び、ついに小笠原の館に放火して、翌15日塩尻の桔梗ヶ原で勝鬨をあげた（史料57）。これに対し長時は村上氏・仁科氏・藤澤氏と同心して天文17年（1548）4月5日に諏訪社下宮へ打ち入り放火する（史料58）。しかし同年の7月19日塩尻峠（勝弦峠）の戦いで武田軍に大敗を喫してしまう（史料59）。この後の長時について守矢信実は「牢人に候」と記しており、長時は本拠を持たない牢人の身になったことを示す（史料60）。長時が強固な城館群を背後にしながらなぜこのように敗北していったのかは課題であるが、笹本氏の述べるような在地不掌握（笹本1996）という状況にも原因があるのではないかと考えられる。

天文19年（1550）7月5日に長時（小笠原大膳大夫）は足利義輝が正式に将軍になった祝いとして進物を贈っている（史料61）。後述のようにこの年武田侵攻により林大城以下岡田・深志・桐原・山家の5城は自落する。長時は天文17年に敗れてよりこの間どこにいたか定かではないが、京都にいる同族の小笠原氏を通じて将軍家との接点を保っていたことが指摘されている（村石正行2013）。同年10月21日長時は村上義清の援助を得て安曇郡平瀬城に陣を張る（史料63）。しかし翌天文20年（1551）10月24日武田晴信は平瀬城を攻め取り、平瀬城の城割を行いさらに鎌立をしている（史料64）。これによって長時は完

全に没落したものとみられる。永禄4年(1561)3月4日に將軍足利義輝が長尾景虎に宛てた「小笠原大膳大夫帰国の事、異議なきよう馳走神妙たるべく候。」という御教書(史料66)から、当寺長時は越後にいた事がわかる。その後の足取りとしては摂津国芥川にやはり同族とされる三好長慶を頼っており、山科言繼は「信濃国牟人、三好方これを頼みて芥川に住す。子喜三郎(貞慶)参会す」と記している(史料67)。長時は京都の民家に居住したり会津へ赴くなどその居所を替え、ついに信濃には帰らずに生涯を終えたという。武田晴信は深志城を普請し、府中を完全に支配する状況となった。

(8) 天正壬午の乱と小笠原貞慶の復権

小笠原貞慶は長時の三男にあたるという。右近太夫を名乗りその初出は天正3年(1575)で2通の文書が確認される。ひとつは笠系大成附録の案文であるが、織田信長より「必ず来秋は、信州表に到って出勢あるべきの由候の条、早速御還補のこと勿論に候。」と記された書状(史料69)で、ひとつは小山秀綱に長篠の戦いの結果を報告し、甲州への出馬を要請する書状の中に「委曲小笠原右近太夫伝達あるべく候」と記されている(史料70)。この2通の文書から貞慶は信長から領国還補を条件に家臣となる依頼を受け、同年中にはすでに家臣として活動していることがわかる。また小笠原流の弓馬術師範としての側面も見え、天正9年6月10日に越後の色部修理大夫に伝授状を与えている(史料74)。旧領の武士たちとの接点は天正10年(1582)3月14日に二木重吉に二木の郷300貫を出すという宛行状案がある(史料75)。この3日前の3月11日には武田勝頼の自刃により武田家は滅亡している。この宛行状は帰国を念頭に置いた約束手形と考えられるが、信長は信濃を4分割し安曇・筑摩2郡を木曾義昌に与えてしまう。しかし6月2日の本能寺の変によって織田政権が瓦解し、信濃は上杉・徳川・後北条・豊臣による激しい勢力争いの舞台になっていく。

信長自刃の直後にあたる6月12日、貞慶は後庁勘兵衛に書状を送る(史料76)。石川数正のとりなして、徳川家康の威光をもって信濃に入ることを伝え、その協力を要請したものである。そして6月14日入国に成功した貞慶は後庁勘兵衛に謝意を伝えている(史料77)。しかし入城するべき深志城は越後勢に合力を受けた貞慶の伯父小笠原洞雪(玄也)が先に確保していたという。この辺は史料が乏しく詳細はわからないが、史料78に見られるように天正10年7月8日に二木重吉に「二木の郷かさねて宛行」との宛行状案がある。「かさねて宛がう」というのは貞慶が3月14日に出した宛行状に対応するもので、自分が深志城主であることを強調したものであろう。その11日後の7月19日貞慶は三村(後庁)勘兵衛に筑摩郡洗馬3000貫文の知行を宛がう(史料79)。これは先の書状で「本意においては、後庁の名字相続さすべく候。知行の儀は、洗馬にて堀廻三千貫出し置き候」と約束したことを実行したものであり(史料76)、深志城を奪回したことを示す。しかし木曾義昌は史料80に見られるように桐原や林といった筑摩郡内の諸郷に勢力をもっていた。よって貞慶の急務は、小笠原が不在の間の安曇・筑摩両郡の武士の統率や処分であった。信濃小笠原氏は本来伊那郡の伊賀良庄を本領としてきた一族であり、筑摩郡・安曇郡の国人や武士たちには武田を頼ったり、上杉に近づいたりするものが多く、史料を見る限りでは二木氏・犬飼(甘)氏・溝口氏など限られた勢力しか持ち合わせていなかった。そのような中で安曇郡の日岐城を攻め、打ち破るという大きな仕事を達成する(史料81・82)。貞慶が徹底的に攻める意志を見せていた日岐城主仁科盛武は最終的には旗下に入り、天正11年(1583)8月には所領を与えられるとともに、日岐の本領まで安堵されている(史料87・88)。それとは逆に家臣でありながら謀叛の疑いで粛清された者もいる。赤澤部少少輔がその一人であり、彼は筑摩郡刈谷原の城に在番していたものとみられる(史料83)。さらに古殿盛勝・塔原(海野)三河守幸貞も逆心の罪で殺害されている。特に塔原幸貞は、貞慶によって天正10年11月に滅ぼされたといわれる会田氏の一族であり、武田統治の時代は信玄に対し起請文を指し出している人物である。また、麻績城・青柳城をめぐる北信濃から攻め込む上杉の勢力との間に苦戦が続いている(史料86)。そのようななかつては敵であった仁科衆が鬼無里(現長野市)を「悉く打ちちらし」という働きをみせ、千見城(現大町市)をも落として

いる(史料 89)。懸案の麻績城・青柳城についても天正 12 年 4 月 19 日に徳川家康より感状を受けており(史料 90)、このように貞慶の復権は困難ながらも前へ進んでいったといえる。さらに城普請の状況を伝える史料もある。史料 85 は犬飼久知が長らく在番していた城に関する記載の中に「吉日次第御馬を出され、その地の御普請あるべきよしに候」という一文がみられる。犬飼久知が在番していた城を特定することはできないが、可能性としては日岐城が挙げられる。また千見城も仁科上下業に普請を申付けており、二本盛正と山田善兵衛が普請奉行として赴いている(史料 93)。このように今後の有事に備える動きの中、天正 13 年(1585) 11 月 19 日に真田昌幸宛ての豊臣秀吉からの書状が届く。「一信州・甲州両国の儀、小笠原・木曾伊与守とあい談じ、諸事申し合わせ越度なきよう才覚もつものに候こと。」とあり、信濃国・甲斐国には大名を配置せず、小笠原貞慶・木曾義昌・真田昌幸 3 人の国衆の相談によって治めるように指示が出された(史料 92)。天正壬午の乱の余波はこの時点で一応止まった。

⑨ 近世大名としての小笠原氏

天正 17 年(1589) 貞慶は嫡子の秀政に家督を譲り、その代替えについて徳川家康より承認を受ける(『信濃史料』16 巻 563)。しかし天正 18 年(1590) 7 月秀吉は家康に関東八州を与え、徳川系大名を関東へ移封する。それに伴って秀政は下総古河へ移る。関ヶ原合戦後の慶長 6 年伊那郡飯田に移封され、家康の江戸幕府開府に伴って近世大名としての藩の統治が始まる。

慶長 18 年(1613) 松本城主石川康長が大久保長安事件に連座し改易となり、秀政は 8 万石で松本に入封する。秀政の松本領内での仕事はまず検地であった。しかし慶長 19 年 4 月に始まったこの慶長検地は各村々に年貢帳差出しを命じた旧態の指し出し検地だったと推定されている(中川治雄 1996)。また交通網の整備に取り組み、特に宿場に対しては間屋・肝煎の優遇策をとり、また伝馬役の制度の充実も図った。

そのような矢先大坂冬の陣が起り、秀政の嫡子忠脩が出陣するとともに巨額な戦費の調達がなされた。すなわち将軍家に対する軍役が命じられたのである。元和元年(1615)の夏の陣では秀政も出陣するが、息子忠脩とともに戦死する。元和 3 年(1617)には松本へ戸田(松平)康長が入封し、小笠原氏は播磨国明石へ転封となり信濃小笠原氏の歴史は途絶えることになる。

2 文献に見る小笠原氏城館群

本項は井川城址・林城址に関わる文献史料を調査した結果を報告すること、同様にそれらを取りまく城館についての文献史料調査の結果を報告するものである一次史料に恵まれないため、近世に成立した史料および市町村史での学説を援用してできるだけ詳述を試みた。

(1) 井川城址

ア 文献史料に見る井川館

中世の史料としては史料 46 が挙げられる。応仁元年(1467)に鈴岡家の小笠原政秀が府中に乱入した事件で、信濃守(清宗)が御頭の櫓を立てた所へ指し寄り、櫓を切り折った兵が死去したことから、神長が切折った櫓に神灰などを添え「井河堀」へ捨てまいとある。政秀の狙いは府中家当主の清宗であったから、当然その本拠を攻めているはずで、ここに出てくる「井河堀」は井川館の周囲の堀とみてよいだろう。これが史料における「井河」の初出になる。次に史料 51 である。文明 13 年(1481) 4 月、小笠原長朝と山家光家の対立が発端となり光家を援護するため諏訪上社惣領家の諏訪政満が伊那の兵を引率し出兵したところ、仁科と香坂が政満に同心したのはよしが和田城を攻めるといふ不測の事態が起こった。その結果「井河・山家無為の儀有るべし」すなわち長朝の本拠である井川館も光家の本拠である山家城も平穏無事であったという内容である。

井川館の成立については『笠系大成』および笠系大成附録『増補満口家記』がそれを類推するための史料

となる。『笠系大成』では小笠原貞宗の嫡子政長が元応元年(1319)もしくは文保2年(1318)に信府筑摩郡井川館で生まれたとする。これに対し『増補溝口家記』では年代表記がないが、政長は筑摩郡中川館で生まれ、長基が筑摩郡井川館で生まれたとしている。元弘3年(1333)8月4日の「後醍醐天皇論旨」では小笠原彦五郎(貞宗)に美濃国中河御厨を宛がっており(『信濃史料』5巻216)、『笠系大成』にみられる政長の生年よりかなり後になる。また、『増補溝口家記』の筑摩郡中川館については不明である。しかし両史料の記述から井川館の成立に関したのは貞宗と類推され、時期は貞宗が信濃守護として活躍する建武政権下や室町初期の頃ではないだろうか(後藤1996)。

イ 『信府統記』に見る井河ノ城

享保9年(1724)に編纂された『信府統記』には「松本城古記録」(史料95)、「松本城古記」(史料96)に「井河ノ城」という呼び名で記述がある。史料95では島立右近が井河の城から松本へ移ったと書かれている。井河の城については「四方に流れありて井の字の如くなるゆえに井河の城」とし、築いたのは誰であるかわからないが小笠原によって寛正6年(1465)に修復され、深志城と名を改め文亀年中(1501～1504)まで林の城主と兼ねて持っていたと説明されている。史料96は「小島村古城地」とし、「井河の城と称う沼城なり」と書かれている。本城については地形が少し高く、広さは東西40間ほど、南北16～17間とし、東に虎口の跡が1か所あるとする。その頃はもう畑で現在残る塚状の部分については「土手形矢倉台跡と見ゆる所塚のごとくなりてあり」と書かれ、現在とほぼ同じ景観だったようだ。周囲の流れは川ではなく近辺の出水で幅が広く、「川の向こう西の方に鎌田村あり、これより西南五六町ばかりに征矢野村ありこの北の方まで三の曲輪にて今に堀の跡あり。今の鎌田村は曲輪の内なりし」と書かれておりかなり広範囲(征矢野・鎌田まで)が曲輪の内であったと伝わっている。「小笠原家が長く在城しており林の館に移った後も兼ね持っていた」とされている。

ウ 井川城址をとりまく城館

笹本正治氏は『松本市史』において市域の中心部に残る居館として、井川城の他に渚城・殿城・清水城・小屋城の4つを取り上げて概説している(笹本1996)。これらの中で文献に現れるのは小屋城である。ただし「小屋城」という名ではなく「村井の城(松本市芳川)」として『高白齋記』に登場する。まずは天文17年(1548)10月2日の辰酉の刻に巳の方向に向かい高白齋が村井の城の鎌立をする。次に天文19年(1550)7月15日、酉の刻に「いぬいの城」を攻め取り、勝間を上げ、武田晴信は村井の城に馬を納める。村井城は別名小屋城ともよばれ、武田氏の小笠原氏攻略の前線基地であった。また、近世に成立した『笠系大成』の小笠原長秀の項には「同(応永)三十二年(1425)甲辰三月十五日、渚城において遁く」とあり、長秀が渚城(松本市渚)で死去したことを伝えている。

(2) 林城址

ア 文献史料に見る林館・林城

中世の史料では天正18年(1550)小笠原秀政が下総古河に移封になった後、豊臣秀吉は小笠原貞慶の「分御札明」を行う。すなわち貞慶の持分であった所領や城・屋敷の調査ということであろう(史料94)。そこには「日ごろ小笠原あいかえ候青柳城・大城・千見城景勝人数を入れ置き」と書かれている。『信濃史料』では青柳城と大城を筑摩郡、千見城を安曇郡としている。もしその通りとすると大城は林大城を示す可能性が高く、貞慶は日ごろからこの城をかかえおり、林城は使用されていたことになる。ただこの段階で信濃北部の千見城、川中嶋近くの青柳城は別として、松本城に近い山辺の林城まで上杉が兵を入られたかどうか疑問が残る。後藤芳孝氏は「大城」を日岐の大城(東筑摩郡生坂村)を示すのではないかという指摘をされている(後藤氏の御教示による)。『笠系大成』には天正10年(1582)9月に「日岐之大城を攻む」と記されているが、天正10年8月の文書(史料81・82)は日岐城攻撃の記事であるが、特に「日岐城」「日岐大城」

という用語は使っていない。この点は今後の重要な課題である。

林城・林館の成立については『笠系大成』『増補溝口家記』ともに、小笠原清宗が井川館で生まれた最後で、清宗の嫡男長朝以降は長時まで(『増補溝口家記』では貞慶まで)林館で生まれたとしている。林城について『信府統記』は「林村山古城地 林村より辰の方十町九間小笠原家の要害なりこれを小城という」「同山古城地

林村より卯の方十七町小笠原家の要害なり。これを大城という」と林小城・大城両方の記述があるが、特に成立時期には触れていない。『東筑摩村誌 1』(東筑摩郡教育会編 白塔社版)の「里山辺村」には「林城城」の項があり「小笠原清宗これを築き」と書かれている。笹本正治氏は、小笠原清宗のときに井川より約4km東に位置する林城(金華山城)に居館を移したとしている(笹本1996)。前述のように清宗は応仁元年(1467)に小笠原政秀の襲撃を受けており、翌年没しているため、清宗が林城・林館を築城したとすればそれ以前15世紀中頃～後半の始めにかけての時期と予想がたつ。『松本市史(昭和8年刊)』では清宗井川の東方1里に一大山城である金華山城(一名籠鼻城・ふつうには林城)を築くとして、その着手は長禄初年(1457)で平時の居館はその山麓に構え前面平地に城下町を經營すると述べている。ただ従来の説は築城と同時の寛正元年(1460)に直に移住したというものであるのに対し、清宗・長朝2代とも井川に居館し、実際に移ったのは長朝の晩年である延徳明応年間(1489～1500)ではないかと述べている。

イ 『高白齋記』等に見る戦国後期の林館・林城

『高白齋記』天文14年(1545)6月の記録に「林近所まで放火す」とあり、その後に「小笠原の館を放火す」と記されている。よってこの館を林館と捉えてよいと思われる(史料57)。同じく『高白齋記』天文19年7月15日の記録に「子の刻大城・岡田・深志・桐原・山家五ヶ所の城自落す」と書かれている(史料62)。ここに現れる大城は林大城と見てよいだろう。また、岡田は伊深城のこととみられる。林大城は城主小笠原長時が牢人となってから2年後に「自落」という形でその終焉を迎えている。『増補溝口家記』には「林の大城曲地(竈地力)たるによりただちに一門平瀬に越しなされ」という記述がある。ここでも林は「大城」である。『増補二本家記』には「林」の地名が多く書かれており、「林の城」という言葉もある。長時は完全に林を本拠としていたようだ。ただここでは『信府統記』に記載が見られる「林小城」には触れていない。小城の役割について今後検討する必要がある。

ウ 林城址をとりまく城館

山家城は古くからこの地に根付いていた神氏系の山家氏(後述)によって築かれたと考えられる。文明7年(1475)5月(史料47)に「山家常陸介光政在所を開け候、和田へ落ちられ候」とあり、この在所が山家城あるいは館を示すものと思われる。文明12年(1480)9月20日には、小笠原長朝が山家へ寄せ懸け、城櫓を責めて山家孫三郎が戦死している(史料49)。すでに小笠原氏が林城を領有していたこの時期は、非常な緊張状態が続いていたものと推定され、翌年も長朝と山家光家が対戦している(史料51)。

『信府統記』では「中入山の古城地」として「今これを山家の城と言ひ伝ふ。山家薩摩守という者、永正の頃(1504～1520)この辺を領せり」と書かれている。『松本市史』(第4巻旧市町村編Ⅳ第3章入山辺)では永正2年(1505)には折野(のちに山家)薩摩守昌治が播州姫路からやって来て、小笠原貞朝に属して山家を本拠にしたとしている。

桐原城については史料に恵まれないが、『信府統記』の「松本領古城記」には桐原山の古城地として記述がある。桐原大内蔵真智が寛正元年(1460)にこの城を築いたとしている。ただ桐原の地は遅くとも康正年間(1445～1457)には一旦山家氏の手に入っている。史料41は康正3年(1457)の諏訪上社社会の頭役を桐原に割り当てたもので、山家為家が勤めている。寛正4年(1463)の花会宮頭も桐原に当てられており、山家為光が勤めている(史料44)。しかし神氏系山家氏の衰退後の文明17年(1485)には再び小笠原氏と桐原氏の支配下に入る。その後の様子は不明だが天文19年には自落している(史料62)。

3 井川城址および林城址周辺における地域（村落）の動向

本項では井川城址・林城址の母体となる荘園や郷村の様子を示す史料調査及びそれらに含まれる歴史的に古いとされる地区の史料調査や聞き取り調査の結果を報告する。

(1) 井川城址周辺

井川館の母体となった所領は捧庄である。安元2年(1175)の「八条院領目録」に「棒(捧)」とみえるのが初出で(史料1)、文治2年(1186)の「未済庄々注文」には八条院御領中村庄・捧北條庄と記されている(史料2)。井川館成立後は宝徳4年(1452)に小笠原持長の代官(史料39)、寛正2年(1461)に小笠原持長(史料43)、文明12年(1480)に小笠原長朝(史料50)、長享3年(1489)に小笠原政秀が(史料53)捧庄に当てられた諏訪上社の祭祀頭役を勤めている。長祿2年(1458)の若澤寺(松本市波田)の金鼓銘に「捧庄畑郷」とあり(史料42)、捧庄がどのような範囲に広がっていたかは不明である。遅くとも天正13年(1585)には荘園としては解体しており、庄内という地域の中が小島・出川・筑摩といった郷村に分割されている(史料91)。

小島(松本市井川城)は本来井川館があった郷村で、永祿9年(1566)9月3日の武田信玄諏訪社上社再興次第の中に「小嶋・征矢野」とみえるのが初出である(『信濃史料』12巻642)。捧庄としてではなく各郷村宛てに再興費の負担が要求されており、各村の自治の様子が窺える。井川城在住の横山時夫氏所蔵文書には寛正4年(1463)に小嶋井川城を建て直して深瀬城と呼び、城主は小笠原長棟であった等が記されたものがあり(史料97)、『信府統記』以外の近世の史料としては貴重である。

小笠原氏進出以前の捧庄は平安末から鎌倉前期において大内氏が領有し中でも大内惟義が権力を握っていた。しかし承久の乱でつぶれその後鎌倉後期まで史料がない。大内氏没落後は北条英時が捧庄を手に入れる。嘉暦4年(1329)の諏訪上社の頭役結番の二番五月会に左頭として捧庄半分、北條英時が頭役を割り当てられている(史料5)。信濃を治めるにはこの捧庄を握ることが重要であると考えられていたようだ(井原今朝男2001)。鎌倉幕府が滅び北条氏の勢力が一掃され、小笠原氏が進出してくるようになる。

(2) 林城周辺

山家郷には山家氏が土着しており山家城を構えていた。この一族がいつ頃山家の地に定着したかはわからないが『松本市史』は諏訪社の信仰の拡大とともに諏訪上社の神氏が入ってきたと推定している(第4巻旧市町村編Ⅳ第3章入山辺)。史料49で山家孫三郎が討ち死にしたことに対し、神長守矢満実が「口惜しき次第なり」と書いていることからもそのつながりが読み取れる。しかし神氏系の山家氏は文明13年(1481)の史料51の光家を最後に史料から姿を消す。その後永正2年(1505)には折野薩摩守昌治が小笠原長朝に属して山家を根拠としたようだ。『増補二木家記』には「山辺は折野石見が孫なり」と書かれており、折野氏が山家を名乗ったものと推定される。当初は小笠原に属していた折野山家氏は昌治の後の昌矩の時に武田氏に臣従したとされており、天文23年(1554)に山家松壽は武田晴信から所領を安堵されている(史料64)。

元龜2年(1570)には武田信玄から山家郷に対して諏訪上社祭祀の頭役を命じられている(史料68)。同様に天正5年(1577)には武田勝頼から山家郷に対する頭役の命令がある(史料71)。

桐原郷は『吾妻鑑』六「未済庄々注文」(1185)では「相(桐)原庄」と記されている(『信濃史料』3巻380)。蓮華王院の荘園だったようで、これが桐原の初出である。『諏訪御符札之古書』享徳3年(1454)に御射山の頭役を大和守秀国が「好みて当てられ候」と進んで頭役を行っている(『新編信濃史料叢書』2巻9)。姓がないため桐原氏であるかは判断できないが、康正3年(1457)花会頭役が桐原に割り当てられた際は山家為家が勤めている(史料40)。さらに寛正4年(1463)花会頭役も山家泉守為光が勤めており(史料43)、応仁の乱以前の桐原郷は山家氏が地頭を勤めていたことがわかる。また文明3年(1471)に桐原

に頭役が割り当てられた際の地頭は島津惟宗忠国であった（『信濃史料叢書』2巻31）しかし文明17年（1485）の五月会流籠馬に府中桐原・神田が割り当てられ、小笠原中務源光政が頭役を勤めるとともに、桐原次郎三郎有知が代初めとして役目を果たしている。この段階では小笠原氏が桐原郷の地頭を勤め、桐原氏も支配に加わっている様子が窺える。『増補二木家記』において桐原氏は一貫して小笠原長時の味方であったことが記されている。しかし長時没落の後は折野山家氏の支配下となり、天正5年には山家左馬允が武田勝頼から桐原郷1000貫文の地を与えられている（史料72）。

林城の城下町であったとされる林には林六郎という人物がいたという伝承がある。慈眼寺の開祖とされるが、坂上田村麻呂の伝説とつながられ、林城との関わりは記されていない（「金華山慈眼寺縁起」山辺学校歴史民俗資料館蔵）。林と小笠原氏の関わりは政康の代からで、『松本市史（昭和8年）』では広沢寺の前身の龍雲寺は政康の建立とする。政康は嘉吉2年（1442）に卒したとされ（『信濃史料』8巻170）、永享11年（1439）に筑摩神社本殿を寄進したという説に基づくと龍雲寺の創建は15世紀前半の早い時期と推定される。なお、筑摩神社は井川館と林城をつなぐ東西の道のほぼ中間にあり、「中林」という地名が残る（聞き取り調査）。

中世における林氏の存在を各種史料であたってみると『笠系大成』に見られる。まずは天文11年（1542）10月28日小笠原長時出陣の際の旗本の中に「林某」と見え、武田晴信と戦うと書かれている。また、小笠原貞慶の深志城奪回の場面で「ある書にいわく、箕輪下条・溝口・林・犬甘等をして先鋒となし、なかなか采配を二木に許す」と記されており、小笠原の家臣でしかも旗本クラスの武士として「林氏」が存在した可能性を示唆している。これを直に林城や城下町と結びつけることはできないが、念頭におく必要はあるだろう。なお林地区には林藤助屋敷跡（伝承地）がある。小笠原清宗の次男（3男の説もある）藤助光政の屋敷跡と伝わり、清宗が林の要害城を築き本人と長男は井川館に住み、藤助を城代としたという説がある（聞き取り調査）。

前述の慈眼寺に伝った文書に天正5年（1577）8月15日の「武田勝頼寄進状」があり、「祈祷料として林村の内において一貫文の所附け置き候。」と書かれている（史料73）。この文書について『信濃史料』では「なお研究の余地あり」としている。武田氏が滅亡した後に筑摩郡を領有した木曾義昌が出した天正10年（1582）宛行状には「桐原の内において、百貫文の所宛がうべく候。並びに林の郷預け置くべく候」とあり（史料80）、天正10年で「郷」であった林が天正5年の段階で「村」であったのが疑問である。やはり戦国期の郷村として林郷と考えるのが自然ではないだろうか。

橋倉は天正の末頃と思われる「筑摩安曇郡御朱印御高附」（『長野県史近世資料編』5巻1）では林村と併記され総石高が示されている。両郷は戦国期以前は密接な、ひとつの郷に近い関係だった可能性もある。大嵩崎集落の最上部には林六郎が屋敷を構えていたとされ、「六郎」の小字名等が残る（聞き取り調査）。

南方には『信府統記』によれば「南方山ノ古城地」があり、城主はわからないが小笠原家没落後武田家に属したと記されている。水番城を示すと思われる。水に恵まれない大城はカシワ沢を水源として等高線に沿って橋倉集落を迂回するようにして引水していたと伝えられる（聞き取り調査）。

<引用文献>

- 井原今朝男 2001 『講演 中世史料にみる信濃府中—平野社と浅間郡—』『松本市史研究』—松本市文書館紀要—第11号
後藤芳隆 1996 『第三編第三章 小笠原氏のもとで』『松本市史』第2巻歴史編1 原始・古代・中世
小林計一郎 1972 『信濃守護考』『信濃中世史学』吉川弘文館
笹本正治 1996 『第三編第四章 戦国争乱のなかで』『松本市史』第2巻歴史編1 原始・古代・中世
花岡康隆 2012 『小笠原氏内訌についての一考察』『信濃』第64巻第10号信濃史学会
花岡康隆 2015 『総論 信濃小笠原氏研究の軌跡と成果』『信濃小笠原氏』シリーズ・中世関東武士の研究第18巻 戎光祥出版
中川治雄 1988 『林城—信濃守護小笠原氏の居城』『信濃史学会研究叢書2 信濃の山城』郷土出版社
中川治雄 1996 『第一章第三節 徳川政権の成立と松本』『松本市史』第2巻歴史編II 近世
村石正行 2010 『十四世紀内乱期の守護所と善光寺周辺—小笠原氏史級郡進出を素材にして—』『善光寺の中世』高志書院
村石正行 2013 『小笠原長時の外交活動と同名氏族間交流』『史学』82 三田史学会
吉井功兒 1993 『建武政権期の国司と守護』近代文芸社

第三章 林城址の概要

第1節 林城址の環境と過去の調査

1 林城址周辺の環境（図版1・2・6、巻頭図版1・2・4、写真図版1）

林城址のある山辺谷は、薄川が開析した西に開口した河谷で、林城址付近から大きく開けて広大な扇状地を形成する。その扇端は県付近まで達して市街地の低湿地帯に臨む。現在の薄川の河道は林大城直下からまっすぐ西に向かい、井川城址の北東で田川に合流するが、これは武田氏時代、女鳥羽川等とともに付け替えが行われたためといわれている。それ以前の古い河道は、清水付近を経て西に向く現在の女鳥羽川に至ったものと想像され、県町遺跡の発掘調査では北西方向に走る河道の痕跡が数箇所確認されている。また、薄川の豊富な伏流水は扇端付近で湧水となって地表に現れ、源智の井戸に代表されるように、古来松本城下の水源として利用されてきた。

薄川がもたらす豊富な水に育まれ、薄川扇状地は松本市域でも最も古くから開発された地域の一つとなった。とりわけ、扇状地両翼の低湿地帯や扇端以西の低湿地帯に臨む一帯には、堀の内遺跡や県町遺跡等弥生時代中期以降大きな集落が形成されていった。また、これらに先行する弥生時代前期の再葬墓群が針塚遺跡から見つかっている。古墳時代には弥生時代以来の集落が拡大する一方、5世紀から7世紀にかけて針塚古墳や丸山古墳、林城址に近い南方古墳、人穴古墳等、地域の開発主導層の古墳が築かれ、特に5世紀末の針塚古墳は内行花文鏡が副葬された竪穴式石室を有する積石塚古墳であった。

奈良・平安時代に至ると、下原遺跡や石上・薄町遺跡等、それまで開発の及ばなかった扇央付近にも生活域が拡大されていった。古代、この地域は山家郷に属し、正倉院宝物の麻布に「信濃国筑摩郡山家郷戸主物部東人…」の墨書が見える。当時郡において「信濃布」は有名だった。また、文治2年(1186)の『吾妻鏡』には桐原の名も登場する。一方、奈良時代末に小県から移ったとされる国府の推定地の一つに惣社付近があげられているか確定には至っていない。また、弥生時代以来の拠点的な生活域である県町遺跡からは緑釉陶器が多出し、緑彩陶や越州窯系青磁も出土する等、官的な性格も帯びた巨大な集落だった。

古代末期、末法思想の広がりはこの地にも及び、桐原の海岸寺沢上流の尾根上に海岸寺経塚が築かれた。経塚に隣接して磐座もあり、そこから見下ろす弘法平と呼ぶ谷間には平安中期の千手観音立像を伝える海岸寺の旧境内があつて、一帯に信仰の拠点を形成したようだ。一方、薄川の水に対する人々の信仰は篤く、扇頂近くに鎮座する須々岐水神社は水分神に対する祭祀が起源と考えられ、延喜式神名帳にも登場する古い社である。また、扇端の県町遺跡の南には国府八幡宮とも呼ばれた筑摩神社がある。

山家谷はまた、武石峠を経て小県に通じる交通の要衝でもあった。こうした点に着目して中世には諏訪氏系の神氏が入り、山家氏を名乗って道を監視できる山上に要害(山家城)を築く一方、麓には居館や町とともに徳雲寺を開いた。また、在地の土豪である桐原氏は、海岸寺沢の西に桐原城や山麓居館を築いた。

2 絵図・見取図・縄張り図に見る林城址調査の歩み（図版8～13）

次に、林城址における過去の調査の歩みについて、ここでは過去に描かれてきた城の姿、すなわち絵図、古写真、見取図、縄張り図からこの城に対する見方の変遷を迫りたい。ちなみに林大城は、昭和42年の市史跡指定以前に観光用道路として林道が開削されたため、主体部の外縁を中心に本来の構造が失われてしまった。当時の記録もなく考古学的な調査がほとんど進んでいない現状において、かつての遺構の姿はたとえ断片的でも過去の記録に頼らざるを得ず、その点において以下に紹介する資料は大変重要なものといえる。

〔1〕『文政3年慈眼寺論所立会絵図』（図版8上）

近世に描かれた林大城である。幕末まで金華橋近くにあった真言寺院の慈眼寺と林村の土地訴訟に関わる絵図で、同寺の伽藍を知るうえでも参考となるものである。

林大城は、主郭や北西に続く尾根上の曲輪群とそれらを分ける堀切が濃淡で描かれる。また、金華橋から主郭に至る当時の道も朱線で記されている。特徴としては、主体部を構成する4つの曲輪、すなわち主郭1、副郭2、後郭4、そして現在駐車スペースとなっている3郭が堀切を挟んで梯子状に連なる様子が忠実に描かれていることで、簡略ながら主郭の周囲をとりまく6・9郭も表現されている。主体部に続く大小の削平地群①・②は簡略な表現であるが、小削平地群②の先にある石塁を伴う堀切が正確に表現されている点に興味深い。また、道筋は大削平地群①から主体部まで曲輪群の北東辺を通るように描かれており、中央を貫く現在とは異なるようにも見える。さらに、曲輪群に樹木が一切描かれていない点にも注意を払っておきたい。

〔2〕『長野県町村誌』（図版13上）

明治11年入山辺村の書き上げ所載の見取図で、「小笠原信濃守源朝臣清宗城址」の項に添えられた見取図と林大城・小城と大嵩崎谷の俯瞰図である。見取図は非常に簡略で、主郭1とその周囲を2重に囲む曲輪、大削平地群の一部が表される。主郭を含む主体部は背面側（東）に虎口が描かれている。

〔3〕『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』（図版9左）

大正15年刊行の第7輯所載の図で、主体部と大削平地群までが図示されている。前者は主郭1（本丸）と堀切を隔てて副郭2（二ノ丸）、3郭（三ノ丸）が描かれる。主郭北東の雁金形の6郭や主郭をとりまく帯曲輪9、副郭北東の段郭の表現のほか、林道による破壊を受けた3郭「三ノ丸」が土塁で囲まれている点に特徴がある。また、3郭と主郭に石積の表現がある。後者は、削平地群最上段の三日月形の14郭を「四ノ丸」、その数段下の方角を呈し現登山道に面して石積を残す16郭を「五ノ丸」としている。また、削平地群から主郭に向かう道は現在とほぼ同じ曲輪群の中央を進む道筋を表しているようである。

〔4〕昭和23年米軍撮影航空写真（図版8下）

国土地理院がWEB上で公開しているもので、林城址周辺の旧地形判読にも有用なものである。林大城は、主郭1全城および副郭2～大削平地群①北東側の樹木が伐採されているため、曲輪や堀切の状況を比較的鮮明に読み取ることができる。林道で破壊された曲輪も測量図との比較から検討が可能である。また、大嵩崎谷から城に至る道筋がいくつも見え、林小城の下方で合流する堅堀も鮮明に読み取ることができる。さらに大嵩崎谷の旧地割が鮮明である点も後述する林山腰遺跡における平場遺構を考察するうえで興味深い。

〔5〕戦後の見取図・縄張り図（図版9～11）

図版9の中と右は昭和63年発行の『信濃の山城』所収のものである。右は『長野県の中世城館跡分布調査報告書』掲載図と同じ原図から起こしたと思われる、元は林道開削以前に作成されたものとみられる。模式的な表現が多く堀と道の区別がつきにくい、林道開削以前の主体部の状況がわかる貴重なものである。本図によれば、主体部と削平地群①を分ける堀切Dに土橋は描かれず、3郭は土塁で閉塞されているようにも見える。さらに大嵩崎谷側の帯状の9・10郭は、現状のように後郭の背後から東側までは回り込んでいない。その他、大嵩崎の真観寺跡付近から副郭2に至るつづら折れの道も描かれている。

中の図は3郭の土塁が破線で復元され、堀切Dの土橋部分も堀の輪郭線が破線で描かれていることから、林道開削後に作成されたものとわかる。以前の状況が破線で復元され、副郭北東辺の段郭には土塁が明瞭に描かれていることなど参考にすべき点も多いが、描画範囲が限られている。

なお、同書の中で中川治雄氏は、主郭1をとりまく鉢巻状石積がかつてはもっと残っていたこと、北側通路部分（北東辺の虎口のこたか）では発掘が行われ、土塁の中心に乱積み石積があったと記述している。大変興味深い内容であるが調査の詳細は全くわからない。

図版 10 は宮坂武男氏が平成 7 年に作成し『図解山城探訪第五集』に発表した縄張図である。それまでの見取図とは一線を画す、作図技法に則った完成度の高い縄張図である。各部の描写においては、例えば主体部を構成する曲輪や堀切・塹壕等に伴う土塁等、現地における注意深い観察の結果が反映されている。また、主体部の城内道も仮説が提示されており、林大城の縄張研究の基礎的資料足り得る内容といえる。

図版 11 は平成 8 年刊行の『松本市史』歴史編 1 に掲載された三島正之氏作成の縄張図で、これまで発表された図の中では最新のものである。作図範囲は宮坂図を超え、主体部背後の尾根鞍部にある 13 郭からさらに南東に上昇する尾根上までを作図範囲とし、これまであまり視野の及ばなかった堀や曲輪が新たに図示されている。また、先に触れた小笠原系の城郭の特質をまとめた三島氏ならではの、下方で合流する堀や虎口、土塁等に対する観察眼を図から見て取れる。

以上のように、江戸後期から現在に至るまで、林城に対する捉え方の変遷を垣間見てきた。近年では宮坂図や三島図に示されるように、最新の城郭研究の成果が縄張図に盛り込まれる一方、冒頭に触れた林道工事による破壊を受けた主体部周辺等、過去の歴史の中で改変を受けてきた履歴が時代とともに風化し、かつての姿を想像しにくくなっている印象も受ける。今後の課題として、過去の履歴を辿りながら縄張研究を深化させるとともに、何より発掘調査による考古学的な検証が必要不可欠となつてこよう。

なお、本調査に先立つ平成 20～23 年、松本市教育委員会はこれまでの縄張研究成果を取り入れて、県史跡小笠原氏城跡の詳細測量を実施した。その成果である林大城および小城に係る測量図は図版 16・21 に示したとおりであるが、今回実施した林大城の縄張調査および図版 22 の縄張図の作成に際しては、この測量図を活用した。また、縄張調査に付随して 2 か所の残存石積における築石寸法の計測、また主体部から削平地群にかけての堀切の現地測量に基づくエレベーション図作成を実施した。さらに、削平地群各段の切岸の斜度・斜面長についても計測を行った。それらの結果は図版 20 に図・表で示した。

3 林大城の発掘調査（図版 12・21）

昭和 63 年 7 月、林大城の副郭 2 において東屋設置が計画され、それに伴って事前に記録保存調査が実施された。しかし、これまで成果の公表がされてこなかったため、調査者の所見を基に概要を報告する。

この調査では、現在東屋の建つ副郭北寄りに 8m 四方の調査区を設け、表土から人力で掘り下げが行われた。まず、かつて主郭にあった古峯神社の拝殿に関わるものが、瓦を多量に含む腐植土を 10 cm 程下げたところ柔らかい黄褐色土に達し、南西部を中心に集石状の山石の分布がみられたが特に顕著なあり方を示さず、明確な遺構とは認めなかった。

集石を記録後さらに掘り下げを進めると、地表から約 25 cm で非常に固い黄褐色整地土面に達し、掘立柱建物址 1 基、ビット 2 基、土坑 1 基が検出された。掘立柱建物址は N-38°-W に軸を取り、これは副郭の軸方向と同じであった。2 間・3.6m 四方の総柱建物で、径 25～55 cm の各柱穴は灰色の覆土で明瞭に検出されたが、西隅だけは見当たらなかった。また、柱穴は検出面から 30～45 cm の深さがあった。土坑は掘立柱建物址の南西にあり軸方向を揃える。1m 四方の方形土坑で深さ 29 cm であった。他に建物址の南西にも 1.35m 間隔で曲輪の軸方向に並ぶビットがあった。遺物は土器小片 3 点のみしか得られなかった。

本調査はさらに、調査区の周囲に 7 か所の試掘坑を設けたが、掘り下げは表土層の除去までにとどまり、山石の散布を確認して終了した。

林大城ではこの他、橋倉に下る尾根上、現在携帯電話のアンテナが建っている箇所においても平成 15 年に試掘調査を実施しているが、遺構・遺物は得られていない（図版 21）。また、先に触れた主郭土塁における発掘調査については、その実施時期、実施者を含め全く情報が得られておらず、事の詳細は不明と言わざるを得ない。

第2節 林城址周辺の遺跡と文化財

1 山辺谷の城館跡（図版2～5、巻頭図版1・2・4）

本節では、林城址周辺の遺跡と文化財について、小笠原氏の本拠に関わる林、大嵩崎、橋倉、南方地区を中心にみていく。それに先立ち山辺谷を中心に所在する県史跡「小笠原氏城跡」の概要を記しておきたい。

(1) 桐原城跡（長野県史跡、図版2・3）

蓮法城ともいう。大城から薄川扇状地を隔てた対岸、追倉沢と海岸寺沢に挟まれた大蔵山の中腹、標高952m地点に築かれた城で、寛正元年（1460）に在地の土豪で小笠原氏に臣従した桐原大内蔵真智の築造と伝わる。尾根を3重の堀切で遮断して築いた、背面土塁・鉢巻状石積を伴う主郭を頂点に扇形に曲輪群が展開し、追倉沢側と海岸寺沢に登城口がある。南西の尾根筋方向は2箇所に2重堀切を設けて遮断し、堀切間には不整形の小削平地群が見られる。対照的に西側の3郭以下には短冊形の整然とした段郭群があり、さらに堅堀で南北2群に分かれる。北群は桁形虎口が伴い石積が徹底して導入される。その他、大堀切から追倉沢に下る堅堀は壮大な畝状堅堀となり、また随所に折れを伴う堅堀が見られる。平成19～20年には南西の尾根裾で農道建設に伴う堅堀の調査が行われた。

なお、尾根西裾には主郭と同様な石積を伴った平場があり蓮法寺跡と伝わる。また、松本市立博物館には曲輪や背後の導水路、峠道と番所、山籠の村・道、桐原氏館や寺社等が克明に記された『桐原城古図』が伝わる。同図にも描かれているように、海岸寺沢を隔てた東の尾根には支城とみられる霜降城がある。

(2) 山家城跡（長野県史跡、図版2・4）

別名中入城という。大城の東3.7km、山辺谷を奥に入った薄川右岸にあり、北沢と中山沢に挟まれた秋葉山の尾根中腹から頂部に立地し、大きく2つの城域①・②から構成される。下の城域②は尾根中腹にある小笠原氏領域の城に通有の縄張で、先に触れた高さ3m近い石積や石塁を伴う主郭の背後に5重の大堀切を設ける。ここから3方向に派生する尾根はその基部や先端部を堀切・堅堀で遮断している。登城路は徳運寺裏から曲輪の続く長い尾根伝いに主郭に至るルートと、上手町集落裏の古城の窟から谷筋を登るルートがある。一方、5重堀切を先に進んだ尾根の頂部、秋葉社のある地点には石積を全く伴わない長楕円形の曲輪からなる城域①があり、堀切を隔てて同じような形態の副郭が連なる。それぞれの曲輪には帯曲輪が巡り、主郭においては放射状に幾筋もの堅堀が下される。尾根中腹の曲輪群とは全く異質な構造であり、武田氏の築城形態であるといわれている。従って、上の城域①が先行するのではないかとみられる。

本城は、初め神氏系の山辺氏が築き、元弘元年（1331）には徳運寺を開いたと伝わる。山籠には館があったほか、上手町集落には古い町の構えが残る。神氏が滅んだ後、小笠原氏の手引きにより永正2年（1505）に折野山辺氏が入るが、天文17年（1548）の塩尻峠の戦いで武田方に属して反小笠原勢力となった。

なお、本城の南西、薄川を隔てた対岸にある宮原城（要害城）は支城と考えられる。

(3) 埴原城跡（長野県史跡、図版5）

林城址の南4km、中山地区にあり、文献史料がなく築城経緯の不明な城である。林城とは高遠山を経て稜線沿いに連絡可能な位置関係である。和泉川と宮入川に挟まれた標高994mの尾根上に立地する壮大な城で、鉢巻状石積や桁形虎口、磐座を思わせる岩塊を伴う主郭1の背後には同規模に近い副郭2があり、背面の高土塁と尾根を遮断する堀切は壮大である。堀切から背後の尾根には南斜面を中心に畝状堅堀が施される。また、主体部から5方向に派生する尾根筋は、先端部や基部に堀切・堅堀を配して稜線上には削平地を連続させ、徹底的に主体部の防御を固めている。登城口は西麓の蓮華寺裏にあり、古い町割の残る町村集落から続く道を上り詰める。山籠居館の跡とみられる「御屋敷」、「梅屋敷」と呼ばれる平場を通過して谷

間から尾根筋に向かい、途中水場や虎口がみられる。一方、南からの登城路は比高が小さく、道沿いの谷間には亀ノ井と呼ばれる平場がある。本城址の西、中山丘陵の頂上には鎌形原砦址があり、本城の支城的な関係とみられる。なお、主郭に至る道筋からは内耳鍋や青磁碗が採集されている。

2 林城址周辺の遺跡と文化財

(1) 林小城（長野県史跡、図版1・2・6・7・8・13～16、巻頭図版1・4、写真図版5）

林小城は、林大城と対の関係となる城で、小笠原氏城館群を構成する3城館の一つである。この城については今後縄張りや石積の調査を実施予定のため、本報告では簡単に概要を述べるにとどめる。

既に述べているように、大城とは大嵩崎谷を挟んで相対する尾根の中腹、尾根幅が最も狭まった標高774m地点に主郭を構える城で、主郭・副郭・3郭からなる主体部と、北東および北西にのびる2つの尾根上の削平地群からなる。主体部は隅丸長方形の主郭に鉢巻状石積が比較的良好に残存し、側面と背面に土塁を巡らせる。背面の堀切はそれほど大規模ではないが、東西両斜面には2、3条の堅堀が続く。主郭の北には石積と枳形虎口を伴う隅丸方形の副郭があり、コの字状に主郭を囲む。また、主体部両側面には畝状堅堀が伴い、これは大城には見られない構造である。尾根上の削平地群は広く緩い尾根頂部を捉えどころのない不整形の削平地で埋め尽くしただけの空間で、主体部の発達した縄張りとは対照的な姿である。また、主体部後方の尾根も幅が広くなだらかな稜線が続くが、堅堀を配する以外は未整形のままの空間となる。

登城路は西麓の浄林寺跡から谷筋を登るルートと、大嵩崎側のカマを經由するルートがある。後者は大城のから大嵩崎谷を経て本城を結ぶ最短ルートである。

(2) 水番城址（図版1・2・6・7・13・14、巻頭図版1・4）

大城の東、橋倉谷を隔てた南方山の標高830m地点に主郭を構える小規模な城で、大城の水源警護を目的に小笠原清宗が築城したといわれる。ちなみに大城の水の手である化粧水（井戸）には、水番城の東のカシワ（梶葉）沢から引水して本城址の南を越え、大城背後の尾根鞍部を経て引水したルートと、大藁沢から引水したルートがあったといわれる。本城址の縄張りは単純で主体部以外には堀を除いてほとんど人工的な手が加わらないが、主郭背面には石積が伴い堀切は4重となる。また堀切背後の西斜面には畝状堅堀を備えている。

本城址は林城の水番にあたったという伝承や後述の橋倉谷との関係の中で、大城・小城と一体的な関係にあった小笠原氏の拠点を構成する一施設として、今後はその可能性を考究していく必要があると考える。

(3) 林山腰遺跡と南方遺跡

ア 林山腰遺跡（図版1・6・7・17～19、巻頭図版4、写真図版6・7）

林大城の南西麓、林の旧慈眼寺跡付近から大嵩崎集落にかけて広がる縄紋時代中期～中世の遺跡で、過去2回の発掘調査と1回の試掘調査が行われた。第1次調査は昭和62年に慈眼寺跡の南側一帯で行われ、縄紋中・後期および平安時代の住居址に加え、上層から中世の竪穴建物址2基、掘立柱建物址・柱列、土坑群が検出されたが遺物は出土していない。第2次調査は、平成14年度に林集落と大嵩崎集落の間に広がる延長310mにわたって連続する棚田状の水田において実施された。ほ場整備に伴う調査で、A～Eの5地点、2,500㎡に及ぶ調査により、各地点から中世の遺構ないしは遺物が得られた。特に注目されるのは5基（C区1基、E区5基）検出された礎石建物址で、その存在から棚田状の地形（図版8下）が中世に造成された平場に由来するものであることが判明した。特に広く調査を実施したE区からは、平場を縁取る石列や3間×6間以上の大型建物を含む礎石建物址5基に加え、蔵建物の土台の可能性のある長方形の石列4、土坑、溝状遺構等が見つかり、建物は平場の奥側に計画的に配置されている状況が窺えた。

さらに注目されるのは、火災整理に伴うとみられる大型土坑（土7）から一括資料の焼物群が出土したこ

とで、その主要器種は大窯製品、とりわけ大窯1段階に限定される端反皿の一括資料であった。作出する貿易陶磁とともに15世紀第4四半期～16世紀第1四半期に取まり、時間幅の狭い非常に良好な資料である。他地区からの出土品も含め、総合的な焼物の時期は古瀬戸後期IV新段階～大窯1段階にまとめ、後者が主体となる。また大窯2段階以降は非常に希薄で、皆無に等しい状態であった。

こうしたことから、礎石建物等を伴う平場群は15世紀後半に造成が開始され、15世紀末～16世紀初頭に隆盛し、16世紀中葉以降終息していくものと捉えられた。E区の平場や建物の性格を考えるうえで参考になるのが南西に隣接する斜面に存在する「真観寺」の地名で、礎石建物を主体とする平場の構成は、寺院跡の可能性も十分考えられる。

試掘調査は、平成26年に林小城の東麓、「釜挟」とも「侍挟」とも呼ばれる一帯で実施した(図版6・7)。ここには「カマ」(地獄の釜)と呼ばれる池があり、堤が築かれることから谷水を集めた溜め井戸とみられる。その周辺にも棚田状の地形が残され、試掘により2箇所内で内耳鋼片を伴う整地盛土を確認、林小城の水の手ともいわれる湧水の周辺まで遺跡が広がることが判明した。

ところで、林山腰遺跡は調査範囲を超えて大嵩崎集落のまで続いていると考えられる。これは、集落内に「小屋下」「小屋上」等屋敷の存在を窺わせる地名が残る(図版7)、棚田状の地形が連続すること、景観的にも麓の林集落を見下ろす高所に位置することから窺え、より重要な施設が存在していた可能性も十分考え得る。また、平成26年に集落上方の字「入畑」における試掘を実施したが(図版6)、ここでは中世の造成跡や遺物は見られず、遺跡の範囲は集落までで収まると考えられた。

一連の調査成果から、大嵩崎谷には大規模な中世の造成遺跡が広がっており、その造成が15世紀後半に開始され、15世紀末から16世紀初頭にピークを迎えることが判明した。こうした造成遺跡が一般的な集落ではありえず、居館や武家屋敷、社寺に特有の遺構が複合して広い領域を形成している状況であろうことは明らかで、こうした大規模な事業を広く範囲にわたって行い得た勢力は、同じ時期に山上に城郭を構えた小笠原氏を置いて他に考えられないであろう。この調査は、林一帯における小笠原氏の拠点形成を考えるうえで非常に重要な知見をもたらしたものとしよう。

ちなみに大嵩崎は近世に分村するまでは林村の一部だった。考古学的な所見も合わせて穿った推測をするならば、「林館」の所在地は、林一帯の中では大嵩崎谷こそ最もふさわしい場所と考えられないであろうか。林城址が大城・小城の相対する2城から成り立っている意味合いも、やはり大嵩崎谷との関係の中で理解すべきで、15世紀後半以降、大嵩崎谷を中心に新たな小笠原氏の拠点が築かれたとみるべきであろう。

イ 南方遺跡(図版1・6・7、巻頭図版4)

平成63年のほ場整備事業に伴い、南方集落の西に広がる字松葉田を中心とした一帯で調査が行われた。その結果、縄紋時代前期末の集落跡や7世紀の横穴式石室墳に加え、12世紀後半～14世紀前半の焼物を伴う5基の竪穴建物址や土坑、ピット、溝からなる集落跡が検出された。焼物に手づくね成形の土師質土器皿が高い組成で出土し、分析にあたった原明芳氏は儀礼との関わりを指摘している。なお、調査地に北接する段丘下には「市口」の地名が、また東には「屋敷添」の地名も残されており注意される。これらの遺跡や地名のあり方は、この地域における活動が中世前期以前に遡ることを示しており、林城築城に至る地域の状況を考えるうえで大変有益な成果である。

ウ 寺社・町跡(図版1・6・7・15、巻頭図版4)

林町跡 林城と林館を核とする小笠原氏の拠点周辺には、町や寺社が計画的に配置されたと考えられ、『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯ではその推定図も提示されている(図版15左)。

それによると、金華橋から大城の麓で鍵の手に折れて小城の北を西に向かい、再び南に折れて小城の西麓を南に向う道筋には「立町」「横町」「山辺小路」「獄址」「倉址」等の地名が残され、林城の城下を形成した

町跡と伝えている。この道筋はまさに林集落として現在も同じ佇まいを残す。そして、図では町を貫く道筋の裏手、大城の麓や小城の北麓～西麓にはいくつかの寺が記されている。また、重要拠点とみられる大嵩崎谷にもいくつかの寺があったと記されており、町とともに寺が重要な存在であったことに気付く。

慈眼寺跡 『金華山慈眼寺縁起』によると林六郎なる人物が開祖と伝わる真言寺院で、小笠原清宗以来の祈願所だった。はじめは金華山（林城山）福山の峰にあったが、大永2年（1522）に山麓の地に移されたといわれる。江戸時代には大城の北西端、物見台跡といわれる高台に観音堂があり、ここを堂平という。廃仏毀釈により廃寺となり、昭和63年のほ場整備で伽藍の地割も失われた。なお、林の里長六郎は、大嵩崎に屋敷を構えていたと伝わり、集落内に「六郎」の地名がある。

廣澤寺 小笠原政康が嘉吉元年（1441）に開いた臨濟宗の護法山竜雲寺を前身とし、持長の時に曹洞宗となり長棟が竜雲山廣澤寺に名を改めたと伝わる。小笠原氏の菩提寺で、清宗が林に館を移したとされる宝徳3（1451）年に先立ち、既に政康の代には林との関係が築かれつつあったことを示しているのであろうか。竹溪庵跡 林小城の北麓にあり、廣澤寺の隠居寺として長棟の室が住んだという。

浄林寺（浄蓮寺）跡 林小城西麓に推定地がある。清水山華嚴院と号し、最初は中林にあったという。『信府統記』では永正年間に開かれ、長朝の代に焼失し、長時の代に後の松本城下に移されたと記される。

真観寺跡 林山腰遺跡E地点近くの斜面に「真観寺」の地名が残る。明応2年（1493）真定が中興した高野山金剛頂院末の真言寺院と伝わる。林城落城後浅間に移され明治に廃寺になったという。

瑞光寺跡（大嵩崎） 小笠原長時の3男喻益が住持したと伝わる。林小城東麓の瑞光寺沢に地名が残る。

千鹿頭神社 延暦年間に林六郎が勧請したと伝わる。当初は千鹿頭山山頂にあって、中世に社殿が焼失した後現在地に移ったという。林六郎に関わる伝承は定かではないが、慈眼寺とともに林の地では歴史の古い宗教施設ということになり、宗教空間としての林の性格を考えさせる。

一方、林城の尾根を越えた東側、橋倉の谷にも目を向けておきたい。先にも述べたように、水番城との関係や橋倉から大城に通じる登城道の存在等考慮すれば、大嵩崎谷と同様、この谷も小笠原氏の拠点の一角だった可能性は高く、橋倉集落の直線的な町割の起源や、谷口の南方集落と中世前期の南方遺跡との関係等、今後追求すべき課題といえる。また、この谷にも諏訪社のほかいくつかの堂社があった。その起源は定かではないものの、林と同様に集落や宗教施設が一つの景観を形成していることに注意しておきたい。

瑞光寺跡（南方） 南方集落の東にかつて堂があったという。大嵩崎谷の瑞光寺と何らかの関係があったのか、詳細は分からない。

十輪院跡 水番城の西麓にあったといい、周辺に堂平の地名が残る。天保5年の『新四国略図』には、八十八箇所巡りの八十番として「ハシクラ ゼゾウ 十輪院」の記載が、南方の瑞光寺、林の慈眼寺、廣澤寺とともにみられる。

最後に、少し視野を広げて、小笠原氏や地域振興にかかわる次の社寺についても簡単に触れておきたい。

須々岐水神社 薄川の水分神に関わる社で、その歴史は古代以前に遡る。薄川扇状地の上に位置し、林大城からは見下ろす位置にある。古くから開発の行われたこの地域では非常に重要な信仰の拠点だった。

兎川寺 飛鳥時代に聖徳太子によって開かれたという寺伝をもつ真言寺院で、中世の隆盛期には小笠原氏の庇護のもと、24坊を有する大きな寺であったと伝わる。

筑摩神社 国府八幡とも呼ばれる古くからの鎮守社で、室町時代の社殿建築の特徴を残す三間社流造の本殿は永享11年（1439）に小笠原政康が寄進したものである。室町時代の社殿様式が顕著なものとして重要文化財に指定されている。また、神宮寺の安養寺梵鐘には、永正11年（1514）に小笠原幸松丸（長棟）らが大檀那となって鑄造し施入したとの銘文がある。府中進出後、小笠原氏はここを源氏の守護神として厚く信仰したという。社が井川城と林城を結ぶ中間点の中林に位置する点にも注意を払っておきたい。

第3節 林大城の縄張構造

遠藤 公洋（長野県立歴史館）

1 遺構（図版6・20～22、巻頭図版1・4、写真図版1～4）

(1) 地山の形と遺構の分布

『松本市史 第二巻歴史編1』は、市域の城の特徴として、埴原城・林小城・山家城・桐原城を念頭に置きながら「尾根に深く広い堀切をいれて敵の侵入にそなえている」点を挙げている。しかし、林大城は、これらの城とはやや構造が異なる。それは、埴原城・林小城・山家城・桐原城などが、主体部背後の尾根続きが、より高所となっているのに比べ、林城が主体部を頂点とした半独立峰であることによる。

林城がある金華山は、西北西の方向の尾根を頂点とする、ほぼ二等辺三角形の半独立峰である。西北西の尾根は幅が広く勾配が緩いが、東北東の尾根は細く急勾配になって山麓まで下る。南東の尾根は急勾配で下ったあと、細い尾根で他の山へと続いている。

林大城の主要な遺構は、おおむね標高790m以上の空間に集中している。ただし、西北西の尾根には標高760mまで「削平地群②」が展開している。また、南東側の谷間にも標高760m付近に数段の大規模な平坦面がみられる。

(2) 基本的構成要素

この城の遺構も、多くの中世城館跡同様、次の三つの基本的要素で構成されている。第1は、切り土や盛土で造成された平坦面（以下、「平場」）、第2は人為的に形成された急な法面（以下、「切岸」）、第3は土石を盛り上げ（または切り残し）た堤のような構造物（以下、「土塁」）である。

さらに、上記を組み合わせた複合的構造物の主要なものに、堀などの溝状構造物（以下で詳述）と、道や出入口状の構造物がある。

これらを、相互に合理的に結びつけて防御や運用に関わる分節構造が形づくられる。林大城には従来から注目されてきた点が三つある。第1は西北西の尾根に集中的に広がる多数の平場群、第2は山腹まで長く落ちる溝状構造物、第3は特に土塁と関連づけて注目された石積の使用である。今回の調査では、これまで林大城の特色とされてきたこれらの点を検証し、いくつか新たな知見が得られた。以下でその視点や方法を簡単に整理した上で具体的な遺構を検討したい。

ア 西北西尾根の平場群について

この平場群は、一見、連続したものに見えるが、その構造上の特色の違いにより、堀切Cを境に二分される。詳細は後述するが、平面図上でも平場一つあたりの面積の違いとしてその差を読み取ることができる。

イ 山腹の溝状構造物について

本稿で「溝状構造物」と表現しているものは、溝のような外観を有する全ての遺構を指す。とりわけ、山腹に走る長い溝状構造物は、これまで多くの論者によって「堅堀」と呼ばれ、林大城のみならず周辺諸城の特色と考えられてきた。

しかし、この遺構を切岸（法面）、土塁などの基本的要素に分解すると、その全てを「堀」の概念で一括するのは適当でないことが見えてきた。林大城の溝状構造物には大きく次の二つがある。第1は、溝が地山を削り込む深さで造成され、両側にある程度均等な法面があるもので、本稿ではこのような構造物に「堀」の語をあてる。第2は、法面の下方（外側）に土塁が併走するもので水平なものから走行方向に相当の勾

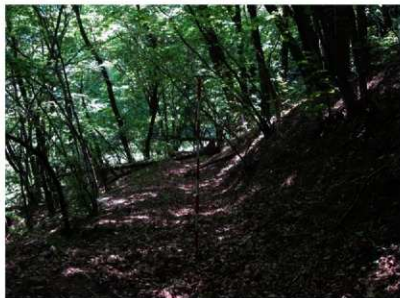
配があるものまで多様である。基本的に地山を深く削り込む構造ではないので、溝のように見えるものの両側の法面は著しく不均等（上位側のみが大きく急な切岸）である。本稿ではこのような構造物をひとまず「罫線」と呼ぶが、これには多様な変化形がある。堀切として造成されているが、その内外に高低差があり、かつ土塁を併設してある遺構は「堀切」と「罫線」の中間型といえるだろう。また、溝状部分の幅が広く水平方向に伸びるものは「土塁を巡らせたテラス」とも理解できる。

さらに、形状だけでなく配置の点からも両者は区分可能である。林大城で竪堀といえるものは、基本的に斜面の最大傾斜線（最大傾斜角の方向を示す線分）方向にのびる。その基本的な機能は竪堀の両側空間を分断し、往来を困難にすることにある。しかし、その両側のいずれを重視しているかは、周辺の遺構を検討材料にしなければ判断できない構造物である。これに対し、罫線には斜面の最大傾斜線方向だけにのびるものではなく、その両側を「上・下」に分断する。「上方（内側）」の法面（切岸）が大きく、その下方（裾）に土塁が併設された形から、囲い込み防御しようとする空間と目的が自明の構造物といえる。

今回の調査では、上記の罫線が多数確認された。このため、それらを「竪堀」としてきた従来の考察に比べ、特に主体部東側の斜面部分に関する遺構の評価が変わっている。



竪堀 K



罫線 I

ウ 土塁の使用について

山辺地区に分布する城館跡には、多くの城に、高い土塁を用いて、より標高が高い「城外」から主体部を遮蔽する構造がみられる。これは、背後の切断と結びつけ「三方向を囲む土塁」などとして注目されてきた。しかし、林大城では、土塁は明確な意図をもってより多様な目的で用いられている。それは、この城が半独立峰であることだけに由来するとは考えられない。その一例が前記の塁線における土塁の使用である。

管見では、少なくとも桐原城にも同様な傾向がみられるので、山辺地区の城館跡全体でどのように土塁が用いられているか再評価すべきかもしれないが、本稿ではひとまず林大城の遺構に限って検討する。

エ 石積の使用について

松本市の山辺地区には顕著に石積が用いられた城が複数あり、これらが小笠原氏と関連づけて検討されてきた流れの中で、林大城の石積も早くから着目されてきた。今回の調査で確認された石積の状況からは、林大城に顕著な特徴と山辺地区の城館跡群にも共通する特徴とが検出された。

(3) 林城の主な遺構

ア 平場について

城館跡内部の平場は、いずれも防御機能に何らかの関連をもち、同時に何らかの目的で利用されたものである。しかし、周辺の遺構を総合的に観察すると、平場は、その空間を利用することを目的に造成されたものと、他の平場を効果的に防御することを目的としたものに大別できる。ここでは、前者を「空間の利用を主な目的とした平場」とし、後者を「防御遺構としての平場」として、概略をまとめた。

(ア) 空間の利用を主な目的とした平場

これに該当するのは、主体部にある平場 1・2・4・6 と、削平地群①の平場 16 である。とりわけ、平場 1・2・4 は、その空間を確保し防御することが林大城跡の他の遺構の造成目的になっている。その観点からみると、平場 16 は、西北西尾根平場群の中核ではあるが、あくまで主体部の前衛的なブロックである。平場 6 も、平場 1・4 とともに広い空間を確保しているが、同時に平場 7・8 と一体となって「化粧井戸」方向への備えを固める空間でもある。

平場 1・2 は、後世に破壊された部分も含め、土塁が全周している。特に平場 2 の東側は土塁というより「槽台」状の幅の広い高まりがみてとれる。この部分を除いても、おおよそ南北の開口部を境に東側の土塁が西側に比して高く築かれている。平場 1 も、東側と北側の土塁が高く、計画的に土塁を使い分けている様子がかがえる。これは、山辺地区の他の城館跡の「三方を囲む土塁」にみられる意図的な土塁の高低に類似する。

(イ) 防御遺構としての平場

防御的な目的が明らかな平場のひとつに、主体部を囲むように配された土塁があるテラス状の平場がある。典型例は、平場 3・7 と平場 2 の北側直下のテラスである。これらに加え、つぶさに観察すると林道で破壊されているものの、かつて主体部南側に土塁を巡らせた平場 9 と 10 があつたことがうかがえる。これらを総合すると、主体部は、連続的な土塁による二重の防御線と囲まれていたことがわかる。

また、西北西尾根の平場群は、とりわけ削平地群①の部分に何段もの高い切岸が展開している。いわば、高い「壁」による防御遺構と評価することができる。上位の平場への導入路が特定できる平場 22・20・19 を観察すると、土塁などの構造物によって巧妙に進入ルートを局限している構造も読み取れる。このあたりの平場は大きなものも多く、非常に平らに整形されているので、その空間自体も利用可能であろうが、西北西の尾根から平場 3 に至る進入路を効果的に遮断することを主目的とした平場群であろう。

(ウ) 平場がない空間

主体部の平場 4・7 より下位の斜面にはほとんど平場が分布しない。西北西尾根と比べて、この偏りは顕著であり、空間全体を貫く防御の論理が異なることがうかがえる。

イ 急勾配の構造物について

林大城の防御施設には、高い切岸が重要な構成要素になっている。このうち、平場の造成と一体となったものについては前の「防御遺構としての平場」で述べた。以下では必ずしも平場の造成とは結びつかない切岸について整理する。

(ア) ライン状に配された切岸

主体部の北方向に派出する小尾根には数段の切岸が設けられ、最下段の平場 12 直下の切岸が最外郭を形成している。平場 12 は地山の地形なりに緩い勾配をもつ平坦面で、平場を確保する目的ではなく、切岸の削り出しそのものがこの部分の造成目的であることがうかがわれる。

この切岸を南東方向に辿るときわめて急な斜面に溶け込むように消滅し、塁線 K にぶつかる。切岸が消えた部分も、林道の上位斜面に別の切岸が存在する。この切岸は、地形なりに南方向に屈曲し「化粧井戸」直下の高い切岸になり、堀切（塁線 K）と一体となって東北東の尾根を断ち切っている。この切岸は遊歩道の南で急斜面に溶け込むが、少し南で再び現れ、塁線 J の頂部付近までほぼ水平が続いている。

(イ) 塁線としての切岸

さきに述べたように、これまで堀と混同されてきた「切岸の裾に土塁が併走する」タイプの塁線は、塁線 K・J・G・I・H が典型である。これらはいずれも、斜面を斜めに横断するように配置され、勾配が緩い南東の谷間からの進入を遮断している。山側の高い切岸は物理的障壁になるが、裾に併走する土塁自体は低いので、物理的障壁とみるよりは、守備側の足がかり（身を守る壁、もしくは柵や塀などの基部）として使用された可能性が高い。

また、堀切や豎堀に土塁が併走するもので、内側の「切岸」が際立つものがみられる。その典型は、塁線 B・D で、これらは尾根の地山を切っているので「堀切」と評価することもできる。しかし、その断面（図版 20 断面図 A と C）をみると、堀の内側法面が大きく急であることがわかる。とりわけ堀切 B の場合、内側に増設された石塁頂部から堀底までの落差が 5 m に達し、この部分を城外側から見ると長大な切岸の壁が行く手を遮っている。

ウ 土塁・石塁について

(ア) 土塁を巡らせたテラス

すでに平場の項で述べたが、林大城の主体部は、土塁を巡らせたテラス状の構造物に囲まれている。これらのテラスは、いずれも背後（内）側に高い切岸があり、見方を変えれば「重要な平場の周囲に水平に巡らされた塁線の一種」ととらえることも可能である。

(イ) 塁線としての土塁と石塁

本稿で「塁線」と表現しているものにはいずれも土塁が含まれる。これまで「豎堀」と評価してきたものに多くに土塁が併走していることになり、林大城の最終段階の防御施設には積極的に土塁が用いられていたことがわかる。

とりわけ、豎堀（塁線）B は、西（外）側の土塁だけでなく、切岸直上に多量の石を骨材にした堤（以下「石塁」）が築かれている。遺構群全体の配置から、西北西尾根の外郭を構成する重要施設として設置された様相がうかがえ、最終段階の林大城で切岸と土塁による大規模な防衛線が設けられたことがわかる。この石

塁は、塁線内側の土石をすき取って築いたものとみられ、石塁の内（東）側に不整形の凹みが列状に残っている。この凹みは平場の内部にも残っていることから、削平地群②の下端にある南側に土塁を巡らせた平場が整備された後に石塁が増築されたものとみられる。

（ウ）櫓台状の土塁

平場の項で述べたが、林大城の主体部では、高さや厚さを意図的に変えた土塁が用いられている。特に、平場2の南東辺に築かれた「5」は櫓台のような機能を備えていたようにみえる。

（エ）鉢巻状の石積

平場1の北側土塁の内側や、平場1の西端外側法面、平場16の南西側法面などには、明らかに組まれた構造の石積が検出される。これらは表面からみる限り、いずれも二段程度の石を布目積みにしてあり、法面の先端に近い部位に鉢巻状に築かれている。他にも土塁のあちこちに石が顔を出している部分があり、少なくとも平場1・2については土塁に石積が積まれていたと考えられる。

石の積み方や、石材の選び方については、山辺地区の他の城館跡との類似性もあるが、他の城館跡のような高い石積は検出できず、二段程度の鉢巻状石積が林大城の特色である。

エ 溝状構造物について

今回の調査に基づき本稿では「堀」と「塁線」を区別して評価した。その違いについては既に述べたので、以下では簡単に城内の遺構を整理しておきたい。堀と塁線の双方の性格を併せ持つ遺構もあるので、その場所より強く出ている特色にもとづいて整理した。

（ア）堀

尾根や斜面を断ち切る役割をもって、地山を切っている堀は、西北西尾根のB・C・Dに加え、東北東尾根のKがそれにあたる。ただし、B・C・Dには土塁や石塁を併設し、内側の法面を高くした塁線の性格もみられる。

Kは土塁を挟んで塁線と併走しているが、最も外側のものを南斜面の豎堀部分で観察すると内外の法面が均等で地山を削り込んでいる様子がわかる（43ページ写真）。また、平場1と2の間を分断しているEも本来の堀の性格を良く表している。

豎堀（塁線）Kは北側斜面部で林道によって分断されているが、よく見ると上下の法面や土塁が整合しない。あるいは林道で破壊された部分でクランク状に屈曲していたのかもしれない。南側斜面下部にわずかではあるがクランク状の部分が見られる。

（イ）塁線

単純でわかりやすい塁線には、G・H・I・J・Lがある。また、堀切Kの一番内側の1本も塁線と評価すべきである。

（ウ）評価が難しいもの

それぞれの尾根の最も外側の離れた位置にある堀（たとえばAなど）は、たしかに堀ではあるが、どの段階に設けられた施設か、また、その目的が何か明確ではない。

また、主体部の南西斜面には、短い縦堀状の遺構も残っているが、これも他の遺構などとあわせて構造的に理解することが難しい。

オ 通路状の構造物について

（ア）虎口（小口）

林大城の土塁には多くの開口部があるが、明瞭な虎口と評価できるものは少ない。しかし、平場22の南

西端にある土塁内側の通路状の空間から20に登り、そこからスロープで平場19に登った場所には堀り込み型の虎口が明瞭に残っている。

(イ) スロープ

「化粧井戸(平場11)」から平場7の北東側直下に登る直線的なスロープが最も明瞭な例である。この通路は主体部の北東側導入路と見られるので、詳細は後で述べる。また、平場15や18、25の南西端を画する構造物は単なる土塁ではなくスロープの可能性がうかがえる。平場25と27の間には切岸に沿ったスロープもみられる。

平場19と20の間のスロープは虎口の存在から、通路とほぼ断定できるが、西北西尾根の平場群は、互いにこのようなスロープによって連結されていたものとみられる。

(ウ) 桁形的空間

平場7には土塁が巡らされているが、それは南端部でクランク状に屈曲する。この空間の評価は難しいが、桁形的な構造に由来するものとみられる。今回の調査で「化粧井戸(平場11)」からのスロープが検出され、一体として検討することが可能になったので詳細は後で述べる。

2 空間構成とその特色

(1) ブロックの構成

林大城は大きく三つのブロックに分かれている。第1は塁線(塹壕)Dより下位の西北西尾根に展開する遺構群(以下「西北西尾根ブロック」)で、平場と切岸を主体とした空間である。第2は塁線Dから平場7・4付近までの遺構群(以下「主体部ブロック」)で、平場1・2を核として、その周辺を取り囲む一体的な防御遺構群である。第3は北尾根から南東尾根にかけての斜面部に展開する遺構群(以下「主体部南東側ブロック」)で、斜面を縦横に走る切岸や塁線で構成されている。

平場の有無のみに着目すると「主体部南東側ブロック」にはほとんど平場がなく、不可解な遺構に見える。しかし、防御遺構としての切岸(壁)を重視すれば、「西北西尾根ブロック」も「主体部南東側ブロック」も、それぞれ地山の形状に合わせた構造物を配置した防御空間であることがわかる。以下では、各ブロックの特色について整理する。

(2) 西北西尾根ブロック

ア 平場群の特色

削平地群①と削平地群②は、堀切Cを挟んで一見連続的に展開する平場群である。この平場群は林大城の特色とされてきたが、これまで、あまり二つの群の差異には注目されてこなかった。しかし、平場群①には②に比べ2倍もしくはそれ以上の面積の平場が多い。地形観察から、この面積の差は立体構造の違いと表裏一体であることが予測されたため、堀Bから堀Dにかけて、二つの平場群の切岸が良く残っている部分で簡便な方法で法面の勾配と長さを計測した。具体的なデータは別項(図版20)に譲り、ここでは結果のみを述べる。

大まかに言えば、削平地群①の方が②に比べ、平場ごとの落差が大きだけでなく、切岸の勾配が急で、結果として一つあたりの平場の面積が大きくなっている。削平地群①で最大の落差があるのは平場17と平場19で、その差は約5mにおよび、勾配も46°である。最も勾配の緩い切岸でも36°で、削平地群①は上位の平場によに登ることは容易ではない。これに対し、削平地群②の切岸は最小で20°、最も急な勾配でも38°にとどまる。平場同士の落差もほとんどが2m以内である。

また、削平地群②の平場の平面形は地山の地形に規定された不定形であるのに対し、削平地群①の平場は、

地山の地形に規定されながらも中央部（稜線部）は方形を基本とした造形が行われている。削平地群①を直線的に抜けている遊歩道のスロープは、筆者もこれまで、歩道整備による地形改変の影響を考慮して遺構として十分検討してこなかった。しかし、丁寧に観察すると、稜線付近に東西方向の土塁や小段差、スロープなどが構築された痕跡が読み取れ、遊歩道はそれらの一部を利用して整備された様相がうかがえる。一方、削平地群②では平場が稜線をまたぐように三日月形に形成されているため、遊歩道が屈曲したり平場を分断している箇所がある。

削平地群の縁に注目すると、削平地群①の平場は南北の地形変換点を有効に活用し、使用可能な平坦面を全て平場にし、勾配が変わる部分に切岸を削り出して一種の外郭線にしている。削平地群②では、一部を除いてそのような関連性が不明瞭である。

以上から、削平地群①と②は似たような平場群でありながら、①の方が普請により多くの労力が必要で、計画的に造成された段切り遺構であると言える。この差は、目的の相違によるものかもしれないが、二つの削平地群が異なる時期に造成された可能性も考えられる。

ただし、削平地群①・②は、ともにその平場のほとんどがかなり水平に整形されており、堀と塁線の項で述べるような急造された様相は必ずしも読み取れない。

イ 堀（塁線）の特色

このブロックの堀切（塁線）は、平場を区画するとともに、尾根伝いの進入を遮断している。塁線（竪堀）Bは内側に石塁を築造したもので、すぐ内側の削平地群②に比べて大規模で不釣り合いである。加えて、石塁内側にみられる土石のすき取り跡（既出）や、石塁外側に残る切断されたようなテラス状平坦面から、この塁線は林大城の西側外郭線として後補（大規模改修）された可能性が高い。土石のすき取り跡が残るのは、削平地群②の平場がすでに機能を停止していたか、塁線Bが急造された直後に林大城自体が廃絶した可能性が考えられる。

堀切Cには土塁が併設され、塁線の性格をもっている。この堀切の東側には小さく端切れのように取り残された段差の小さな平場（29～31）や、わずかな地山部分が残っている。これらの不整合と堀切（塁線）Cが様相の違う削平地群①と②を区画していることを考えると、もともと塁線BからDまでの間に存在した削平地群の一部（削平地群①にあたる部分）を改修する際に、堀切Cが後補もしくは改修された可能性が考えられる。

塁線（堀切）Dは「西北西尾根ブロック」と「主体部ブロック」を区画する施設だが、主体部の項で述べることにする。現状では平場14の北東部から土橋状に堀を渡れる部分があるが、米軍の航空写真を見ると、この部分にも堀が残っていた様子がかっきりした陰影からうかがえる。このため、「西北西尾根ブロック」から「主体部ブロック」への導入路はまだ不明である。ただし、堀の両側を観察する限り、平場3の北東側を回り込むルートが最も可能性が高いように思われる。

ウ 総体としての評価

このブロック全体は、平場と切岸を基本に構成されているが、その構造は堀切Cを境に大きく二分され、削平地群①の方が防御的な合理性が明瞭である。この点から、削平地群①と②に時代差を想定することも可能である。この考え方は、塁線Bの平場を壊して土石をすき取った跡とも整合性があり、もともと存在していた尾根上の削平地群の一部を大規模化し、それに伴って大規模な塁線を後補（もしくは改修）したという見方ができる。林大城が大規模に改修されたとすれば、それは天文19年（1550）の「自落」（高白齋記）から天正10年（1582）の小笠原貞慶による府中奪回とその後の戦乱にかけての期間が想定できる。ただし、

遺構の観察だけでは、その年代や段階は特定できないので、あくまで可能性を指摘するにとどまる。

(3) 主体部ブロック

ア 土塁を巡らせた平場

前述のように主体部には、土塁を巡らせた大きな平場を、これまた土塁を用いたテラス状の平場が取り囲む形で構成されている。平場3の北西側を区画するDは、堀切の内外に大規模な二重の土塁を併設した塁線である。しかし、現在失われている内側の土塁は平場3に沿って東方向に屈曲し平場2の北側テラスの土塁と連続していた様相である。これは、林道建設より前の調査図面にも描かれていることから、縄張図に工事の法面で表現した。この結果、平場3も主体部を囲む土塁を備えたテラスの一つであったと言える。塁線Dは「堀切」「塁線」「テラスを囲む土塁」の機能を兼ね備えた施設であった。

このように、さまざまな場所と目的で土塁を多用していることは、林城大城の特色といえるだろう。

イ 平場と堀の関連性

主体部は「瓢箪形」の地山を使って造成されている。このため、平場2を中心とした一画と、平場1を中心とした一画とは頂部の標高が異なり、それぞれを囲むテラス状の平場のレベルも異なっている。この落差を調整するかのように瓢箪のくびれの部分を断ち切りながら主体部を一体としてまとめているのが堀切(塹堀)Eである。北東側のテラスだけでなく、平場9と10にも落差があったとみられるが、塹堀Eの部分で東西の遺構が接合している。

この堀を越えてどのように行き来したかは未解明だが、地形からは北東側のテラス状平場のいずれかに架橋する方法などが想定可能である。

また、主体部南西側斜面には短い塹堀のような遺構が散在する。位置と形状から山梨の「白山城」を特徴づける「放射状塹堀」に似た遺構の可能性もあるが、残存状態が悪く地表からこれ以上の検討は困難である。

ウ 出入口

平場1への出入口は未解明である。平場2から堀Eを越えて進入するルートは想定しにくく、後世の神社の参道によるものであろう。構造上注目したいのは北東側の土塁開口部である。かき寄せられた深い落ち葉に埋もれているが開口部の外側に小さなテラス状の平場があり、ここからスロープ(あるいは階段か)によって平場6と行き来した可能性がうかがえる。平場6は、東西両方向からの進入路が想定できる施設でもあり、今後の検討材料である。

また、平場7の屈曲した土塁の外側を巡らせた「化粧井戸」からの導入路(後述)は、戦国時代も最終段階の施設とみられ、林大城の特色ある遺構のひとつである。

エ 総体としての評価

主体部を取り巻くように建設された林道により、「主体部を取り巻くテラス」の存在がこれまでさほど注目されなかったが、特に勾配の緩い北東側を中心に二重三重に切岸と土塁で防壁線を構築した構造は、よく工夫された城館跡と言えるであろう。

(4) 主体部南東側ブロック

主体部北に派生する小尾根から「水番所」の呼称が伝わる平場13(南東尾根)にかけては、西北西尾根を除けば林大城を囲む斜面中で最も勾配が緩い空間である。とはいえ、大規模な平場を造成するには勾配が

きついため、この空間には平場の存在を前提としない防御施設が築かれた。それが、一見、粗放的に配置された切岸や塁線である。

ア 合流する塁線

このブロックには、単純な堀切や塹壕はない。堀Kの一番外側の堀は内外の法面が均等で、地山を掘り込んでおり、走行方向も最大傾斜線に沿っているが、併走するものうち最も内側の溝状構造物は切岸と土塁からなる塁線といえる。

前述した平場 12 から連続する切岸のラインの外側を囲むように、塁線Kと塁線J・Gがある。これらは主体部南東側の谷底で合流する。この様相は注目され、「長く、末端で合流する塹壕」が山辺地域の城館跡の特色とされてきた。しかし、今回の調査で明らかになった「塁線」の視点を加えると、これらは「防御線」であるがゆえに、連続させる必要があるのだと理解できる。塁線Gのさらに外側には塁線Hがあり、両者を塁線Iが連結している。これも連続する塁線によって斜面を囲い込む防御線である。

また、塁線はその形状から、通路としても利用できる。特にG・Hは幅も広く、勾配も塹壕のような急なものではない。城内の通路の可能性を検討することで、このブロックのあらたな意味が浮かび上がる可能性もあろう。



塁線G



塁線J

イ 落差の大きい切岸

このブロックには、すでに述べた平場 12 から塁線 J の頂部付近へと続く高い切岸による防壁線がある。また、「水番所（平場 13）」の北東側と東側には急で高い切岸が削り出されている。これらに加え、塁線も切岸を削り出す施設であるから、このブロックは連続する高い切岸を防御の主体にした空間だといえることができる。

ウ 堡壘状の平場

切岸や塁線のライン（線）と連携し、わずかに存在する平場は効果的に配置されている。塁線 H の最上部（南東尾根）には高い切岸を削り出した「水番所（平場 13）」が位置し谷の下方からの進入を抑えている。北東尾根の切断部は「化粧井戸（平場 11）」の平場が高い切岸と塁線・堀切を見下ろしている。完全に削平はされていないが平場 12 と付近の平坦面も高い切岸で小尾根を遮断する足がかりになっている。

エ 総体としての評価

このブロックには切岸や塁線を複合的に用いることで、「平場 12 ～塁線 K～塁線 H～水番所（平場 13）」という多角形の外郭線が構成されている。その内側にも、断続的ではあるが「化粧井戸（平場 11）～塁線 J」や「塁線 G」があり、多重の防壁線が築かれている。

これは「広い平場を造成することは困難だが、やや勾配が緩い斜面」に対し、西北西尾根ブロックとは異なる論理に基づく防壁遺構を配した結果であろう。このような遺構は、むしろ織豊期以降に用いられるものとみられる。

南東の谷の下方には大きな落差の切岸とともに造成された平場がある。現時点では発掘所見もなく、その性格はわからない。しかし、このブロックの防壁構造を重視すれば、この平場は山麓部と関連する施設の遺構かもしれない。これについては今後の課題である。

(5) 城内通路

ア 「化粧井戸」からの導入路

平場 7 を枳形として評価するか否かは、林大城の遺構評価に関する重要な課題であった。平場 7 を枳形と考える場合、二つの問題点がある。一つは「化粧井戸（平場 11）」に続く道を本来の城内通路と考えると、土塁開口部に特段の工夫が見られないことである。もう一つは、クランク状に屈曲させた平場 7 の土塁の目的が説明しにくいことである。

今回の調査で「化粧井戸（平場 11）」から平場 7 の北東直下へと直線的に登る明瞭なスロープが検出された。スロープはそこから平場 7 の土塁の外側下部を南に巡る平坦面に導かれ、やがて平場 8 にいたる。ここは、平場 7 の土塁が内側に屈曲している部分で、いわゆる枳形的な空間と考えられる。このように理解すると平場 7 の土塁屈曲部は、平場 8 を正面と側面から見下ろす構造になるので、平場 7 自体を枳形とする想定より無理がない。

このような構造は、戦国時代の終わり頃に広がるものと考えられ、林大城が機能した時期の下限は、やはり小笠原貞慶による府中支配のころと考えられる。

イ 西北西尾根ブロックの導入路

平場 19 に残る方形の虎口は、直下にスロープがあり、平場 20（正確には平場 20 の南の小さな平場）へのルートがわかる。そこには、下段の平場 22 から、土塁と平場 20 の切岸に挟まれた廊下状の細長い空間

が伸びてきている。平場 22 の土塁は、防衛的機能だけでなく、このルートを限定する役割をも担っているように見える。削平地群①は高い切岸や塁線などで区画されているので、上下の平場を行き来するには、このような通路が必要であつたらう。これほど目的が明瞭ではないが、ブロック内にくつもスロープ状の遺構がみられるので、発掘も含めてさらなる検証が行われれば、城内通路の解明が期待できる。

3 林大城の特色と課題

(1) 防御線が明瞭な城館跡

林大城跡は、高い切岸や塁線などを用いて多重に構築した防御線が読み取れる城館跡である。特に最外郭には意を用いた様相で、工夫された構造物による一連のラインが読み取れる。

B の塁線や、特徴の異なる 2 種類の平場群の存在などから、現存する遺構が、臨時的な使用も含めて複数次にわたって普請された可能性も浮上した。このような林大城の構造は戦国時代末期の松本地域における城づくりの到達点を示していると言えよう。

これまで平場群の存在から、調査や検討が西北西尾根に重きを置かれていた感が否めないが、主体部南東ブロックの構造も歴史資料として重要である。いわゆる「大手」や「城下」についても、西北西尾根を正面と考える見方だけでなく、橋倉集落側の山麓部との結びつきも視野に入れた検討がまたれる。

(2) 土塁（石塁含む）を多用する城跡

上記と関連し、平場 1・2 だけでなく、工夫した構造が見られる部分には必ずといっていいほど土塁が用いられていることがわかった。これは、場内の通路のあり方などとも関連するものとみられる。林大城以外の城館跡でも、丁寧に再評価すれば同様の土塁が検出できる可能性があろう。

(3) 特徴的な遺構と課題

これまで「塹堀」と表現されてきた、互いに連結する塁線は林大城の特徴的な遺構である。これまで山辺地区の城館跡で「合流する長い塹堀」として注目されてきた遺構にも、林大城同様の塁線が混在する可能性は高いだろう。

石積については、用いられている箇所などを細かく検証することができた。その結果、石積の使用自体は林大城の特色の一つと言えるが、桐原城や山家城などとの構造上の違いもはっきりした。

今回の調査成果を足がかりにして、山辺地区の中世城館跡を再評価すれば、より深く松本盆地の城づくりの歴史を解明することができるであろう。

第IV章 井川城址の発掘調査

第1節 調査概要

1 経過

井川城址の調査経過については、第1章に記したとおり、平成25年度に中条保育園建設予定地を対象に包蔵地確認のための試掘調査を実施した。続いて、考古学的に未解明だった小笠原氏居館跡の遺構確認を目的に、同年度中に第1次の範囲・内容確認調査を、続く平成26年度も継続して第2次の調査を実施した。

一連の調査により、結果的には居館跡と推定される長方形土壇状遺構と、その外周を巡る堀状遺構、さらに外側に広がる遺構面を検出することとなり、中条保育園は遺構の全面的な遺構保護策を講じたうえで建設する方針となった。

2 調査地の現況

調査対象範囲は、南北220m・東西136m、面積16,119㎡、標高585～585.5mの範囲で、現地目は水田、畑地、荒地一部住宅地となっている。調査の性格別の内訳は、中条保育園建設予定地は10筆3,737㎡、範囲・内容確認調査対象範囲が19筆12,382㎡である。

対象範囲のうち、南から西側を回り込むように頭無川で囲まれ、周囲より一段高い南北140m・東西88m・標高584.7m～585.1m楕円形の平坦地17筆9,154㎡が字「井川」地籍で、『信府統記』の記述から居館跡主郭跡と想定されている範囲である。総じて西側が若干高く南北方向はほぼ水平である。範囲内の南東には矢倉台と伝わり、市特別史跡指定となっている塚状の高まりがある。

その外側、すなわち東側から北側にかけての字「新切」（一部「井川」）地籍は、主郭跡推定範囲より一段低く帯状に低地が巡り、標高583.5～584.7mで北に向かって漸減している。地形的に見て堀・水路等の遺構の存在が予想された。現況は南半が水田、北半が荒地となっており、後者は旺盛な地下水脈のため湿地化している。ここから用水路を挟んで北側、廣正寺との間の字「落合」地籍においては、再び一段高まり標高585.1～585.5mの地形面となり、田川の堤防に向かって徐々に高まっている。

なお、中条保育園建設予定地は、上記の新切から落合にかけての一带で、主郭推定範囲の外側にあたる。

3 調査課題

本調査の目的は、第一に中世の居館跡の確認にあり、その指標として盛土等を伴う大規模な造成遺構と堀等の外郭施設、かわらけ等武家の儀礼に関わる焼物や威信財、居館を構成する建物等の検出と、関連史料との整合性の確認を掲げた。そのうえで実施した試掘調査において、主郭推定範囲から土壇状の盛土遺構やその外郭となる堀状遺構を確認するに至り、実際に居館跡が存在する可能性が高まった。

そこで、2次にわたる範囲・内容確認調査に移行するにあたっては、2年計画という限られた調査期間の中では、居館跡の全貌、とりわけ御殿、会所、庭園といった守護クラスの武家居館にふさわしい建築遺構や配置を全面的に追及することは困難なため、土壇状盛土遺構の外形や規模、造成に係る土土量の把握、外郭施設の把握等、主に居館の骨格部分の確認に重点を置くこととした。

4 調査計画と調査方法

中条保育園建設に係る試掘調査ならびに遺跡の範囲・内容確認に係る第1・2次調査のいずれも、性格としては遺跡の保存が前提か、あるいは保存の余地を残す調査のため、大規模な面的調査は実施せず、基本的にはトレンチおよび一部分的拡張による遺構面および遺構の確認と、サブトレンチによる造成層の規模・構造の把握、地山面の状況確認を調査方針とした。

調査区は、保育園予定地内については敷地全体にトレンチを配置し、用地買収等の都合により北半部は第2次調査の段階で対応することとした。主郭推定範囲を中心とする範囲内容確認調査は、課題に沿って居館跡推定遺構の規模・構造を効果的に把握できるよう、トレンチの配置計画を立案したが、耕作や地権者の都合上計画どおりに実施ができない箇所もあった。結果的には、試掘8箇所328.3㎡、1次6箇所370㎡、2次10箇所786.3㎡の合計24箇所1,484.6㎡のトレンチを調査した（ただしトレンチ上端での計測値）。

トレンチの掘削は、主郭推定範囲では表土以下基本的に人力のみで行う方針とし、郭外の空間では調査面が深いため重機による表土掘削を採用した。前者は、調査後の埋戻しも原則として人力によったが、各調査次の終盤段階では時間的余裕がなかったため、耕作土の戻しのみ重機作業に頼った。

遺構面は原則として中世最終面（1面）までとしたが、残存状況が著しく悪い調査区や、最終面に帰属する遺構が存在しない調査区では全面的あるいは部分的に2面までの調査を行った。

調査中検出された遺構は、性格究明のために必要な一部のものを以外はプランの確認までに留め、掘り下げが必要なものであっても完掘はせず、土層確認等検証できる余地を残すことにした。ただし、断面確認のため設定した深掘トレンチ内部の遺構についてはその存在を確認できないままに掘り下げてしまったもの、また掘り下げの必要性から記録保存措置を講じたものもある。また、遺物は極力位置の記録に努めたが、本報告書ではその成果を十分に生かすことができなかった。

5 記録の方法

調査に際しては、ドローンによる空中写真測量を実施し、基本図となる500分の1地形図とオルソ画像データを作成し、これに個々の調査区をプロットした。オルソ画像は座標データを含み、GoogleEarth等の地図アプリケーションに投影可能なkmz形式の地理情報ファイルやPDF形式の三次元ファイル等、普及公開にも活用可能なデータも作成した。

各調査区や遺構の測量については、既存の街区多角点に加えて、対象地内に新規設置した基準点から、図1に示す国家座標X24,900,000・Y48,140,000を起点NSO・EW0とする座標系を構築し、これを基に各調査区において測量グリッド設定を行った。

遺構測量及び断面測量は基本的に縮尺20分の1で行い、第2次調査における平面測量では、業者に委託してトータルステーションによる端点計測～素図作成も導入した。

また各調査区の全景は、基本地形図と同様にドローンを活用した座標情報を含むオルソ画像作成を実施し、第2次調査では遺構平面測量にも援用した。

6 その他の調査

本調査では、考古学的な調査の他に、辻 誠一郎氏の指導の下、遺跡の環境復元を目的とした土壌試料採取を行い、外部委託も併用して炭化物年代測定、花粉分析、珪藻分析、プラントオーバー分析、樹種同定等の自然科学分析を実施した。その結果については、第V章にまとめたので参照されたい。

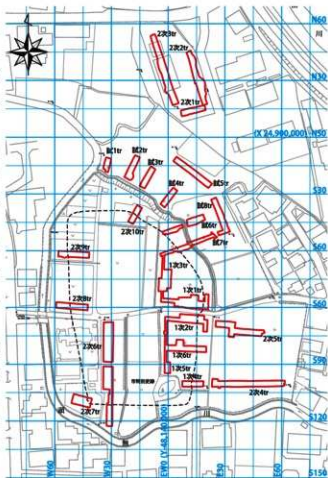


図1 井川城址測量メッシュ設定図

第2節 検出遺構

1 遺構の概要

本調査で検出された遺構は総数で686基を数える。これらを一瞥すると、土壇状盛土遺構や堀状遺構といった遺跡の土台となる地業に関わる遺構と、造成された遺構面上に構築された建物址や土坑等の遺構に大別される。その所属時期は、造成面上に構築された中世のものが圧倒的で9割以上を占め、部分的な確認にとどまった地山直上の遺構や、近世以降の遺構はわずかしかない。また、遺構に伴う遺物も大半が未掘のためもあってごく少数に留まっており、造成面上に分布する中世遺構であっても遺物から詳細な時期差を窺うことは困難である。

以下、検出遺構について報告するが、記述の方針としては大半の遺構が未掘で詳細に触れにくいので、トレンチ毎に個々の遺構を取り上げて詳述することは避け、分布傾向等の要素を絡めながら概観的に取り扱うこととした。また、最初に次項において各調査区で共通する骨格的遺構である土壇状盛土遺構と遺構面、堀状遺構について記述し、3項で平面上の検出遺構の概要に触れたい。

なお、調査段階で命名された遺構の種別について、あらかじめ定義が必要なものについてのみ、ここで触れておきたい。まず、柱としたものは建物址を構成する礎石や掘立柱の柱穴を指し、後者は単独であっても断面確認で明確な柱痕が確認されたピット・土坑に命名している。ピットと土坑は概ね直径50cmを境に区別した穴で、両方に柱穴の可能性があるものを含む。炭化物集中は炭・灰の集中が平面的に範囲として捉えられたもので、明確な掘り方を有するものとそうでないものがある。前者は底面に焼土面を伴う等、炉址と呼ぶべきものを含む。他に調査段階でSXとして積極的に遺構認定をした性格不明の遺構がある。これらは炭化物集中と同様炉址に似るものから、平面的・断面的に明確なまとまりをなさないものまであり、後者は整地盛土層の一部を遺構として認識したものも含まれる。捉えどころのない遺構である。

表1 調査面積一覧

調査次	トレンチ	位置	面積 (m ²)
試掘	1	郭外	17.5
	2	"	37.8
	3	"	30.6
	4	"	27.4
	5	"	61.4
	6	郭内・外	51.5
	7	"	51.0
	8	郭外	51.1
1次	1	郭内	104.2
	2	"	74.9
	3	"	64.8
	4	"	28.0
	5	"	30.3
	6	"	67.8
2次	1	郭外	33.0
	2	"	84.2
	3	"	115.9
	4	"	110.7
	5	"	85.6
	6	郭内	196.9
	7	"	45.5
	8	"	44.9
	9	"	45.0
	10	"	24.6
合計			1,484.6

表2 井川城址検出遺構・遺物一覧

時代	遺構	主な遺物
縄紋	なし	石器・石製品
古墳	なし	土師器・須恵器
奈良・平安及び中世以前	ピット 15基 土坑 11基 集石 1基 溝状遺構 1基	土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器
中世	建物址 5基 柱穴・ピット 327基 土坑 257基 炭化物集中 10基 焼土 2基 集石 5基 溝状遺構 19基 流路 11基 石列 1基 不明遺構 10基 堀状遺構 1基 土塁 1基	焼物：土師質土器（皿・内耳鍋） 瓦質土器 無釉陶器（山茶碗・小皿・片口鉢・甕） 瀬戸・大窯（天目茶碗・平碗・緑釉小皿・盤類・播鉢・茶入・花瓶他） 舶載陶器（天目茶碗）、磁器（青磁碗、白磁皿、青花碗・皿） 石製品：硯・砥石 金属製品：釘・鍋・刀子・刀装具・小札・ 銭他 木製品：串状木製品他
近世	溝状遺構 2基 水路・流路 5基 不明遺構 2基	陶磁器・金属製品

2 骨格となる造成遺構と旧地形（第1・2表・図版25～41、写真図版8～16）

(1) 土壇状盛土遺構（主郭）

ア 外観上の特徴

平面形態・規模 試掘6・7トレンチ、1次1～6トレンチ、2次6～10トレンチ（以下トレンチはtrと略す）で検出された人為的な造成遺構である。その規模は、遺構検出面最上面（括弧内は法尻）で南北101m(108m)以上・東西70m(75m)、面積6,110㎡(6,910㎡)を測り、いずれも中軸線上で最大となる。平面形は2次7trで捉えた隅部の状況から方形を基調とするが、1次6・7tr、2次10trの状況から北東側が斜辺となる不整形方形みられ、その長軸方向はほぼ正確に南北を指す。形態についてより仔細に観察すると、東辺の1次1trと同2trの間で2.5m程の差が認められ、両トレンチ間を通過する農道直下で外形線が屈曲しているようである。これについては、後に触れるとおり、虎口に関わる意図的な構造と考えたい。一方、2次7trと1次4trの関係から、南辺の幅は50～55mと推定されるが、これは西辺が2次8tr以南でやや東に振るか、あるいは未調査範囲で折れを伴っているためかとみられる。

以下、土壇状盛土遺構各部の構造や、平面上から検出された遺構について詳述していくが、第VI章で総括するように本遺構の性格が方形の居館址と推定されることから、以後、本文中の記述では便宜上、「郭」、「主郭」あるいは「郭内空間」と呼んでおきたい。

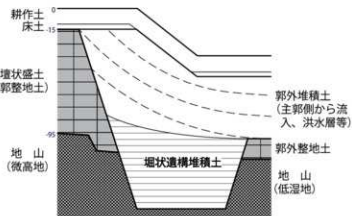
法面の状況と付属施設（石列・テラス・テラス状溝状遺構） 次に主郭外周の法面の状況について。各トレンチで捉えた法面の構造はすべて土坡であり、唯一1次4trから検出された石列1を除き石積等の施設は一切認められない。法面の傾斜角は20～30°を標準に12～60°の間に分布し、試掘1tr・1次1tr・2次6trでは15°以下と非常に緩く、対照的に試掘7trの古段階では60°に達する。

法面上には石列1を含め4箇所付属構造がみられる。1次4trの石列1は長径35～50cm大の花崗岩河床礫5個を長軸横向きで法面の上下方向1列に配置したもので、調査区外に広がる可能性もあるが部分的な存在であり、護岸を目的とした石積や貼石とは性格を異にするものであろう。次に2次6tr・7trでは、法面にテラス状の溝状遺構が設けられていた。大きさは6trが幅70～80cm、深さ10cm、7trが幅64～80cm、深さ10cm程であり特徴的な点はみられない。後述する土塁内法裾の溝状遺構に対応するものとみられよう。2次8trでは法面中位にテラスが設けられていた。トレンチ中ほどから始まり、南側調査区外へとのびている。最大幅90cmを測る。

主郭上面の状況と周囲との比高 主郭の上面は平坦で様に耕作土と床土が薄く覆っている。そのため近世以後の削平や攪乱等の影響を受けている。遺構面最上面では南北方向の高低差はなく、東西方向において西側が30cm前後高まる。ちなみに現地形は南北方向に長い短冊形の地割をなし、境界上の土手で高低差を調整して各区画の水平面を確保している。中世においても石列や塀等の空間分割によって西側が段上がりになっていた可能性もある。

主郭の高さは、堀状遺構の対岸に広がる郭外遺構面との比高で試掘3tr付近が1.9m、南下して1次4tr付近では0.6mを測り、また南辺の2次6trでは法尻との比高1.1m、西辺では2次8trで法尻との比高1.2mを有する。中世においては、周辺が堆積土で覆われた現状よりも際立って高い墳状の姿を呈していたことが想像できよう。

図2 土壇状盛土遺構～堀状遺構周辺の土層模式



イ 旧地形と造成土の状況

旧地形 各トレンチにおいて地山面の把握に努めた結果、主郭の直下には周囲との比高 1.0～1.5m の微高地が広がっていることが確認され、この地形を利用して造成が行われたことが判明した。また、微高地の周囲は低湿地帯であったとみられ、実際に頭無川を挟んだ南側、宇古城地籍一帯は埋め立てによる宅地化以前には湿地が広がっていたという。田川・牛伏川系統の堆積物をベースとする地山の土質からもその状況が窺え、土壇状盛土の法尻付近から外側にはヨシ族やウシクサ属等湿地性植物のプラントオパールを含む粘土層や泥炭層が広がっていた。それに対し、微高地では同質の粘土層ながらも乾燥が進み、表層に陸地性の植物炭化物を含むような状況を呈していた。この微高地上の地山面には平安時代等中世以前の遺構が掘り込まれており、また古墳時代までの遺物が出土することから、古代以来比較的安定した環境の下に生活領域として利用されていたのであろう。

土壇状盛土（土壘） 各トレンチにおける断ち割り調査の結果、微高地を利用した郭の造成過程もある程度読み取ることができた。まず、各トレンチで共通する様相として、造成の初期段階で土壇状の盛土を造成予定範囲の外周に巡らせ、その築造の後に内部の整地盛土を施していることが指摘できる。また、後述するように、遺構面と遺構分布のあり方から土壇状盛土は地上土壘の骨格でもある。つまり、土壘築造→遺構面の形成という工程が読み取られ、造成の計画段階から土壘構築が意図されていたものと理解される。

確認できた 1 次 6tr や 2 次 9tr の状況から、土壇状盛土の規模は東辺や西辺では概ね 7～9.5m 程度の幅員を確保しているとみられるが、2 次 6tr では 15.2m に達し、南辺では 1.5 倍の幅で築造されていることがわかる。いずれの地点でも中央付近で 55～95 cm 程度の残存高を確認でき、その構築方法は、暗色系と黄灰色系の粘土塊を混和して斑状を呈し、礫を含まない粘質シルトを外寄りから版築状に積み上げ、ある程度の高さに達した後はさらに幅員を増しながら内側に重ねていく構築方法を観察できる。また、盛土に先立ち、基底面の外寄りを一段掘り下げテラス状とし、その上に盛土を被せている。これは旧地形との関係でみると微高地から湿地に下降していく縁辺部分に当たり、最初に郭の輪郭決定や根固めを目的にテラスを設けた後、堀状遺構の掘削に伴う発生土を外側から次第に内側へと段階的に積み上げていった工程を反映しているもの考えられる。ただし、築造に際しては、発生土をそのまま用いるのではなく、郭の外縁を固める用土として特に入念な土作りと施工を実施した結果、特徴的な斑状の整地盛土層が形成されたと理解されよう。

ウ 整地盛土と遺構面・土壘

整地土の状況 土壇状盛土で囲まれた内部は、整地土によって旧地形の凹凸を均して平坦面を形成する。整地盛土の状況は、土壇状盛土に顕著だった斑状の混和土は観察されない。河床礫の混じるシルトを主体とするこれらの土層は 1 単位 5～25 cm の厚さを有し、地山面上から耕作土・床土直下まで数層にわたって積み重ねられた結果、全体としては外縁部で 50～60 cm、中央部で 30～40 cm 前後に達する。極めて雑な試算であるが、土壇状盛土を含めた全体土量は 4,000 m³ 前後に達しよう。

遺構面 調査時の観察所見から整地土層上面に 1～9 面が設定された。その根拠は遺構の存在だが、広く面的に確認できたのは 2 面までで、3 面以下は主に断面観察での遺構確認による。このうち、遺構面の重層が最も顕著だった 2 次 6tr において、土壘際で確認された 7～9 面は平面上までは広がらず部分的な存在にとどまるため、土壘盛土に含むべきものと解釈する。また、2 次 9tr では 4・5 面が土壇状盛土直下に設定された。これについては土壇状盛土との前後関係において他のトレンチとは所見を異にしており、他と共通する遺構面なのか、あるいは土壇状盛土の基底層や郭形成以前の整地層なのか、再検証が必要と考える。このように、遺構面の認定については、将来的な調査でさらなる検証が必要となるが、本報告ではひとまず調査時の所見に基づき報告をしている。

地上土壘 土壘状盛土は地上土壘の骨格でもあることを述べたが、各面の整地盛土の実施にあたっては、外縁部周辺は土壘内側法面にも盛土を被せていることを残存する法尻部分で確認した。これにより整地面の上昇に関わらず土壘の幅員を南辺で15m前後、東西辺で6.5～9.5mに保っている（虎口構造に関わると推定される1次1・2trでは5.0～5.5m）。土壘の最大残存高は64cm（2次6tr）、土壘内側の法面は傾斜角13～27°で、付属構造として2次6trでは3面段階の法尻に河床礫を配した集石2が伴う。また1次1・2trの1面、2次8trの1面では法尻に浅い溝状遺構を伴い、2次6trの1面溝1もその可能性がある。土壘外側の法面については先に述べたとおりである。

(2) 堀状遺構と流路

ア 堀状遺構

主郭の外周には堀状遺構が巡らされ、土壘とともに外周区画施設となっていたことが明らかとなった。本調査では東辺において部分的に幅員と深さを確認できたが、南辺～西辺では頭無川を挟んだ対岸の状況はわからない。そもそも頭無川は地形を無視して主郭を迂回するように巡っており、人為的に河道を変更した可能性がある。また、現地形にも見て取れるように、東から北側には帯状の低地帯が巡っており、後に述べるようにこの間には厚く整地盛土が貼られている。また現在でも地下水位が高く耕地の下には暗渠が張り巡らされ、調査次にも多量の水が認められたことから、ここに頭無川の旧河道があった可能性が高い。

こうした点を踏まえて堀状遺構の構造をみると、まず東辺において幅員は郭の法尻からの計測で2次10tr～試掘4tr間で16m、1次2tr～2次5tr間で13m、1次4tr～2次4tr間で12mを計測する。その掘り込みは試掘2trをみると、外側が2段に掘り込まれ底面が平坦な箱堀状を呈し、郭外の中世遺構面からの深さは1段目が1.3m、2段目が2mあり、また1段目の底面幅は1.8mを測る。隣接する試掘3trも法面を確認していないが外側は2段掘りとみられ、2次4trも1段目の底面まで露呈したものと思われる。外側の法肩は先に触れたように人為的な盛土に頼っており、その厚さは試掘2・3trで30～45cm、2次4・5trで80～95cmを測る。いずれの地点も湿地性の地山粘土層を覆っている。

一方、主郭側では底面の追求を行っていないので状況は不鮮明だが、12箇所で上端を捉えており、試掘7trの60°と2次7・8trを例外として概ね30～45°の法面角度で落ち込む状況が窺える。2次7・8trは3～6°と平坦に近いため、外側と同様に2段掘り込みとなる可能性も考えられる。

堀状遺構に対する改修の痕跡は判然としなが、先に触れた2段目の掘り込みは時期差の可能性も内包している。その他、試掘7trでは調査時の所見として、埋土の観察から傾斜角度の大きい古段階から、堆積による埋没がある程度進行した後に、傾斜の緩い法面に改修する新段階への変遷が認められる。

最後に、堀状遺構の覆土について。主に東辺における断ち割り断面観察から、遺構内には灰～青灰色の粘質シルトや粘土が厚く堆積する状況が窺えた。採取試料中の珪藻化石群集の分析結果から、河川の流れ込みやジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境下で形成された堆積との所見を得ており、また試掘2trから採取した試料からは、辻誠一郎氏により自然繁茂が要因とは考えにくい大量のサイカチ花粉が検出され、実際に2次9trでは水際付近から立木株が出土した。サイカチは樹高15m程に達するマメ科の落葉高木で、枝や幹に多数の棘があることを特徴とする。木材として、また豆果に含まれるサポニン等に利用価値がある他、その鋭い棘の存在から防衛の意味合いも有する屋敷囲いの樹木として植栽された可能性を示している。

イ 東～北郭外の流路

試掘2・4tr、2次4・5trでは堀状遺構の外側に並走する複数の流路の輪郭を捉えた。まず、2次4・5trトレンチにおいて堀状遺構から4m前後隔てた東側に幅4.2～6.2mの流路1が、さらに4.5m前後東に幅3.7

～10.2mの流路2が検出された。この2条の流路は、湿地性の地山粘土層に厚く盛土を施して岸を固めながら、同時に築造を行っているように見受けられた。そして、流路2においては南側で大きく幅を増していることから、頭無川からの水を取り入れているのではないかとみられる。こうした点からも、先に推察したように、頭無川の流路変更も含めた土壇状盛土遺構とその外周を巡る堀状遺構の計画性が強く窺える。

東郭外で捉えられた2条の流路の延長が北側でどうなるのか、未調査範囲を隔ててさらに1次7tr以北では低地帯の中央に近世以降の流路が北流するため、その状況を明らかにすることができなかった。しかし流路1・2との関係は不明ながら、試掘2・4trでは、堀状遺構の外側1.7～3.2mの位置から並走する流路が検出された。このうち試掘2trでは堀状遺構の法肩を支持する整地盛土で埋められており、他の流路とは時期を異にしている可能性がある。いずれにしても、頭無川の旧河道の可能性が高い東～北側低地においては、堀状遺構に加えて並走する流路を複数配置し、豊富にもたらされる水流を巧みにコントロールしたことが窺える。「井川」や「小島」、あるいは「深瀬（深志）」といった地名を表す言葉どおりの、水で閉まれた遺跡のイメージを彷彿する。

(3) 郭外の遺構面

ア 郭外遺構面

1次4・5tr付近の堀状遺構から東に広がる区域には、湿地性の地山粘土層を覆って厚く整地盛土が施されていたことを述べた。一方、調査地北部の試掘7・8tr以北、2次1～3trにかけての一带はどうであったか。このうち堀状遺構の周囲については、試掘2・4trにおける厚い整地盛土の存在について触れたが、この整地土はさらに東～北に広く分布し、試掘5・8trや2次2・3tr周辺では濃密な遺構分布域になることが確かめられた。

とりわけ試掘8trでは後述のように礎石建物址他の遺構が密集し、2次2・3trとともに遺構面も複数層に分かれることが判明した。これら郭外の遺構面に共通する特徴は、遺構面のレベルが土壇状盛土より一段低く周囲の地面と変わらないこと、明確な外郭施設が捉えにくいこと、微高地ではなく低湿地に遺構面が形成されていること、整地盛土も地山等と比較して際立った差がなく特徴に乏しいこと等で、これらの点は微高地上に周到な計画の上で地面を大きく嵩上げて築造された主郭とは本質的に異なった傾向といえる。

イ 郭外堆積土

主郭は、既に江戸時代中期には埋没が進み、現況に近くなりつつあったことが『信府統記』の記述からも窺えることを第1節で述べた。また、現況の地割から見ても長方形の遺構輪郭を窺うことは難しく、一回り大きく楕円形の一段高い地形しか窺うことができない。これについては、外郭施設である土塁が遺跡の廃絶後早い段階で人為的あるいは自然的要因によって失われたことによってその構成土が堀状遺構側の埋め立て土となり、それに従って地割が変化していったことを示しているのではないかと考えられる。

そこで各トレンチにおいて、主郭から外側の上層堆積を観察したが、土塁の破壊による人為的な埋め立てを積極的に示唆する兆候は得られなかった。堆積的には各トレンチの土層図に示したように、盛土側からの流入土が徐々に形成されていく一方で、時折洪水性の砂やシルトの堆積層を挟みながらも耕作によると思われる土壌化が進行している状況が窺えた。こうした土層は、土壇状盛土から離れた郭外の空間を広く覆っており、『小島村絵図』から窺える土地利用状況のように、田川・牛伏川系統の氾濫の影響を多少受けつつも、比較的安定した環境下で近世以来耕作域として利用され今日に至っている状況を示しているのではないかと考えられる。

3 郭内空間の遺構 (第1・2表、図版28～38・41、写真図版8～16)

(1) 主郭東部の検出遺構 (試掘7tr、1次1～6tr)

ア 遺構面と遺構群の関係

主郭東部における遺構面は1～4面までを認め、試掘7tr、1次1～3・5・6trにおいて各面に帰属する遺構を捉えた。その多くはサブトレンチ内や調査区壁面での確認を除き、主に1～2面からの検出である。これについて、遺構の多出をみた1次調査各トレンチの状況をもう少し詳しくみると、1次1trは遺構検出面である1面帰属のものが主体で、2面以下はほとんど調査の手が及んでいない。1次2trはE6ラインを境に西は1面帰属、東は1面が削平されているためすべて2面での確認で、その帰属も大半が2面と考えられる。1次3トレンチは、1面および2面で遺構確認を行ったが前者は遺構がほとんどなく、大半が2面の帰属である。1次5trは1面の確認の後南半部を中心に2面の確認を行った結果、前者は非常に少なく、2面に集中する傾向を得た。また、本トレンチでは断面での確認を主体に3面からも遺構の多出をみた。1次6trも1・2面を中心に調査を実施したが、1面の検出遺構は非常に少ない反面、2面に他出する傾向があった。さらに、主郭西部も含めた各トレンチに共通する傾向として、土塁状盛土上面からの遺構検出は極めて稀だった点を指摘し得る。

以上のような状況から、土壇状盛土の東半部では、1面段階は1次1trにおける一部の遺構を除いて遺構がほとんどない状態であり、対照的に2面は遺構が密集する段階ということがいえる。また、断片的な確認ながら1次5tr等を中心に、3面以下においても比較的多くの遺構が存在することが予想される。一方、土塁状盛土上面からの遺構検出は皆無に等しい。後述する1次1trにおける状況等も含め、遺構の分布状況の点からも地上土塁が存在したことを追認できる。こうした状況を踏まえて、次に各遺構面における遺構の概要を述べる。

イ 1面の遺構

建物址2と溝2・3 1面の主たる遺構は、1次1trで検出された柱1～11からなる建物址2とその東側に位置する溝2・3である。これらは正確には、建2が1面整地土上面から土塁状盛土上面にまたがって、溝2・3が土塁状盛土上面に構築されている。いずれの遺構も、土塁との位置関係から出入施設の可能性を有するため、ここでまとめて概要を記す。

建2は、全体を1棟の建物と仮定した場合、東西3間×南北1間以上の構えで、その大きさは東西6.0m(20尺)である。南北方向は農道があるため確認できないが、1次2trまでは達しておらず、調査区壁下で辛うじて輪郭の一部を検出した柱6～8と対応する南北1間・8～9尺程度の規模か、あるいは2間・16～18尺程度と推定される。東西の柱間寸法は、東から柱1－2.4m(8尺)－柱2－1.5m(5尺)－柱3－2.1m(7尺)－柱4で、軸はほぼ正確に東西を向く。

個々の柱穴は楕円形ないし隅丸方形で、柱痕は観察されなかった。大きさは長径70～93cm・深さは柱2・3が30cm前後である。このうち、柱1の底面には68cm×35cmの石英閃緑岩系の河床礫が平置きされていた。礎石として十分な大きさを備えるが、検出面よりやや低い掘り方底面に据えられるため、厳密には礎盤と呼ぶべき構造である。またいずれの柱穴も、仮に遺構面の削平を考慮に入れても大きさに比して浅すぎ、柱4では栗石状の礫が伴うことから、柱1と同様に本来は礎石(礎盤)を据えていた可能性が高い。

本址の性格は、土壇状盛土遺構東辺中央に位置することから門跡の可能性があるが、南側の状況が不明なため断定はできない。門跡とみた場合、これを棟門や薬医門のような本柱と控柱の4本構造の門が建て替えにより新旧2棟重複したとみることや、あるいは6本だけ抽出して本柱の前後に控柱を配置する四脚門を想定することもできるなど、配置と構造も様々な可能性が出てくることになる。

次に溝2・3について。これらは地上土塁の内側法尻に沿う溝と推定されることを先に述べた。位置的には建2の東側にあり溝2は建2と重複する。幅40～60cm・深さ30cm以上で、両者ともに建2の東で2.3mの間隔をもって外向き直角に折れ、土壇外縁から1.1～3m手前で止まる。従ってこの部分では土塁が切れていたことになり、しかも農道下における土壇外形線の屈曲と連動してこの空間を境に土塁も1本分の幅でずれていたことになる。こうした状況から、ここに折れのある構造を有する虎口が設けられたものと見做したい。郭外との関係は道路のためわからないが、おそらく土橋はなく橋が渡されていたと推定される。

なおその場合、虎口と建2との関係が問題となる。すなわち建2は土塁に挟まれた空間やその延長上に位置せず、軸方位も微妙にずれている。またそもそも溝2側の土塁とは前後関係が発生するため、同時存在は考えにくい。仮に折れのある虎口を後出とすれば、建2を門とする虎口から折れ構造の虎口へと変遷したと考えることが妥当であり、さらに想像を膨らませれば溝2～溝3間にある6尺間隔の柱5-P4が新段階の門の控柱等に関わる可能性も出てこよう。

その他 ここでは、1面のその他の遺構として炭化物集中と集石をあげておく。炭化物集中は、1次1trにおいて建2の西隣接して炭1～3の3基、1次3trに接して炭4が検出された。炭3は炭2に先行し、炭1は建2柱4と重複するがサブトレ掘削により新旧は不明である。遺構の形状は不整形を呈し、唯一断面観察を行った炭2は炭塊や焼土粒を含むシルトが15cm程の厚みで堆積するもののダラダラと落ち込み、明確な掘り込みをなさない。炭化物集中に関連して炭2の西脇、さらに5.6m西には狭い範囲に焼土の散布が認められた(焼土1・2)。これらの成因は不明だが、多くは整地土に内包される土層の可能性も考えておきたい。なお、同種の遺構は1次5trでも1基が確認された(炭2)。

集石は1次6tr北拡張区から2基確認された。集石1は検出面上に直径10cm前後の河床礫が長径90cm程の楕円環状に並んでいたため精査したところ、一回り大きく掘り方を認め、礫の下端付近で細かな円礫を伴う平坦な底面を確認した。また、南西2.4mにも同様の遺構である集石2がある。状況的に見て建物礎石の抜き取り痕の可能性もあるが、調査範囲では他に対応する遺構は見当たらなかった。

ウ 2面の遺構

2面では、面的調査を実施した東部を中心に、著しく遺構が密集する状況が窺えた。ここでは、面的に遺構の広がり方が把握できた1次2・3・6トレンチについて調査区毎に記述する。これらのトレンチで共通する傾向としては、比較的小径のピット(柱穴)が密集し、掘立柱建物址や柵等の施設を中心に、少数の礎石建物に伴った可能性を窺わせる。また、付随する遺構として、掘り方を有する炉址が散見される。

1次2トレンチ 1面溝2からE6ラインまでの間で面的に遺構を捉え、ピット15基、土坑7基が密集する状況を捉えた。またサブトレンチ土層断面上での確認も含め計24基の土坑・ピットが確認された。個々の調査は実施していないが、土塁際まで遺構が濃密に分布する状況が窺えるが、隣接する1次1trではあまりその兆候は窺えない。

1次3トレンチ 1次1trの北西に位置する本調査区では、中央拡張区において本面または本面に帰属する可能性が高い遺構115基を確認した。ここでは遺構密度が特に高く、河床礫の散在する整地土面上において土坑・ピットが南北方向に連なって列状に分布する傾向が認められる。大半の遺構を調査していないうえ現場段階で建物址の検討を行っていないが、おそらく複数棟の掘立柱建物址や柵列が存するものとみられる。その傾向は、まず西壁直下、続いてP23からP4までのピット・土坑、P17～P80、土17～25、集石1～3等である。

これらのうち、集石1～3は検出面上において直径10cm前後の栗石状の河床礫の集見が見られたもので、調査では周囲に掘り方が捉えられている。これらは、特に集石1で60cm四方の範囲にまとまっている。集

石2は90cm×1.1mに集中し、北接してやや散在的な同規模の集石3がある。また集石2と3の間には30×50cm大の平石が傾いて存在する。この平石を礎石とみれば集石2・3はむしろそれを支持する一体の栗石とも受け取れる。ちなみに平石から集石1までは2.4m(8尺)あり、礎石建物の存在も考えうる。

その他の遺構として、単独のため判然としないが礎石の可能性のあるP39や、1次1trの1面と同様なあり方を示す炭化物集中3基等がある。

1次6トレンチ 土塁法尻以西にビット・土坑を主体に60基の遺構が高密度で遺構が分布していた。調査範囲が狭いため配列は把握できなかったものの、ビットの多くは建物址を構成すると考えられ、P26～P39、あるいはP23～P38等ほぼ東西方向に直線的な分布の傾向が窺える。土29は直径25cmの平石を据えた遺構で、土坑の名称を与えたが礎石の可能性も高い。当初集石1・2との関係も考えたが配置がずれているうえに遺構面レベルも一致しない。他に特徴的な遺構として炭化物集中がある。炭1は長径1.4mの不整形を呈するが、15cm程の深さの皿状のしっかりした掘り方を有しており、炭・灰が層をなして堆積していた。さらに底面中央に焼土面が伴うことから、本誌については明確な炉址と捉えられる。また、これを取り囲むように周囲には小径のビットが集中しており、何らかの上部構造を有していた可能性もある。

なお、試掘7trから検出された土1も、焼土面は顕著ではないものの本址と同様、方形の掘り方と炭・灰の堆積を認めるため、炉址と考えられよう。

エ 3面以下の遺構

各トレンチともに万遍なく確認を行っていないため傾向を窺いにくい、3面および4面において、ビット・土坑を中心に49基の遺構を確認しており、とりわけ主郭南東部の1次5・6trにおいて3面から多くが検出されている。遺構の内容から、掘立柱建物を中心とした施設の存在が考えられる。

(2) 主郭西部の検出遺構(2次6～9tr)

ア 遺構面と遺構群の関係

主郭西部における遺構面は、調査段階において2次6trを中心に1～9面まで認められ、うち1～4面までが主郭東部の遺構面1～4面に対応するもの、と捉えられている。

なお、先にも述べたように、7面以下は2次6trの土塁内側法面にしか認められない部分的存在のため、本報告ではむしろ土塁盛土に含むべきものと解釈した。ただし、調査段階で遺構と思いき土層を認め、また当初の土塁とは時期差を有する可能性もあるため、6面整地段階に削平を受けた遺構面の名残である可能性も残す。また、6面も土塁に近い2次6tr南部にしか認められないため、この一帯では例えば地盤沈下に対する対応等、頻繁に整地を繰り返す必要性があったのかもしれない。いずれにしても、主郭西部では1面から5面までが安定的に認められる遺構面である。

西部において遺構面を面的に調査できたのは2次6・8・9trだが、8・9trは調査区の大半が土塁から屈状遺構の範囲にあったため、遺構面は1面のわずかな範囲を調査したのみである。そのうえ擾乱も著しいため、平面的な遺構の検出は少ない。従って、以下、広く面的な把握を行いたる6trを中心に遺構の概要を述べる。

イ 1面の遺構

2次6tr 本トレンチでは、1面にあってはやや遺構の多い状況が窺えるが、東部の2面にみられたような土坑・ビット(柱穴)が密集する状況とは明らかに異なり、3基の建物址の他少数のビット・土坑が、土塁法尻を画したとみられる溝1以北に分布する傾向が窺えた。遺構の種別としては、建物址、ビット、土坑、

溝状遺構が認められる。

建物址 調査段階において3基の建物址が認定された。建3は調査区西壁下において柱1～4をもって南北4間の建物址と認定されたもので、西調査区外に本体が存すると想定されている。柱間は1.8m(6尺)で、軸方向はN-2°-Wである。このうち、柱1と柱2は閃緑岩質の河床礫を用いた約50cm大の礎石が1面検出レベルよりやや下がった位置にあるもので、2面の基盤となる集石1の上に乗っている。礎石の周囲に85cm程の大きな掘り方があったとされる。続く柱3・4は柱1・2より一回り小さい礎石が前二者より約20cm、2面上面レベルから5～6cm低い位置で、しかも大きく傾いた状態で検出された。そして、調査段階では1面から3面整地土中まで掘り込まれる55cm大の掘り方が存するものとされた。こうした観察所見から、本址は礎盤を有する建物との解釈がなされた。しかしながら、他の建物址とも共通するが、各礎石(盤)が一様に被熱し、中には剥離が生じているものすらある。これは露出した状態で火災等の火熱を受けたことを示しており、二次転用でなければ地中に存したこと自体に疑問が生じる。また、後述する建4・5とともに、これ程大型の石材を礎盤に用い、しかも古代の建物を剪断する方形大型の掘り方を有する建物が果たして中世に一般的なものであったのか課題を残す。本報告の段階では残念ながら再確認できないが、ちなみに本址周辺は土層解釈が非常に難しく、掘り方や帰属遺構面の認定に誤りがなかったのか、今後の調査で再検証が必要と考える。

建4は建3の東に隣接し、同じくN-2°-Eに軸を向ける柱10・13・14からなる南北2間・3.6m以上の建物で、直交方向から北にやや外れ約1.95m西にある柱9がこれに加わる可能性がある。各柱ともに建3と同様、径40～45cmの石英閃緑岩系の河床礫を2面の集石1を掘りくぼめて水平に据え、その上面レベルは柱9・10が1面検出面と、他は2面と同レベルにある。調査時において長辺80cm前後に達する方形の掘り方が捉えられている。

柱5～8からなる建5は、建3と東辺の位置と軸を揃えて3.4m南に位置し、柱4だけに礎盤が残っていた。その盤面は2面とほぼ同レベルで、周囲に一辺98cmの方形掘り方を有する。一方、柱6～8は石材が残存せず、方形の掘り方のみ検出している。上述のように掘り方の認定如何によっては建物址の成立自体が難しくなる。

上記の他にも、建物に関わる礎石あるいは礎盤とされるものに、柱11・12がある。柱11は柱2-3間にあり、礎石の上面レベルと掘り方の掘り込み面から2面の遺構と捉えられている。柱12は建5と同様に方形の掘り方のみ確認である。

以上が建物址の概要であるが、先の課題に関して、一旦掘り方の認定を白紙に戻してこれらを再構成し、2面を主体に1、2面に帰属する礎石建物址として再解釈すれば、むしろ矛盾はほとんど生じなくなる。本報告では調査時の所見に基づいて図示をしたが、主郭内において礎石建物が最重要な遺構となるだけに、今後の再検証の方向性のひとつとして最後に提示しておきたい。

その他の遺構 建3から建4の間において方形の土坑3基と溝2が検出されている。また、建5の南側周辺からも楕円形基調の土坑が検出されているが、遺物も少なく特徴に乏しい。

2次8・9tr 両調査区ともに1面の遺構はほとんどなく、わずかに8trから土坑1基(土4)を、9trからは不明遺構(SX02)を得たのみである。ただし、9trでは土塁を切る大型の土坑が2基ある(土2・3)。これらの帰属時期はわからないが、状況的には土塁削平以後の築造とみられる。

ウ 2面以下の遺構

2面以下の遺構は、いずれのトレンチにおいてもサブトレンチ内や壁面など、限られた範囲での確認にとどまるが、傾向としては2次6trでは土坑・ピットなどの面においても少なく、一方2次8・9trでは高い

密度で遺構が存在することが、それぞれの断面観察から捉えられた。

これらの中でとりわけ注意すべき遺構としては、2次6trの北部から検出された集石1で、柱1～溝2をより北側において、10cm大前後の河床礫が2条の帯状をなして東西方向に集積していた。南側の帯は幅2.3m前後、北側は1.1m以上あり、その上面は2面整地土上面から層中にかけて、下面は横から観察する限り3面直上から整地土中に達する状況が窺える。礫の中には被熱したものが多数認められる。また、南北間の空白帯は見方によっては幅1.4m程の溝状遺構が集石を切っているようにも受け取れるが、断面観察の結果からは顕著な掘り方は観察されず、2面以下の整地土層が観察されるのみであった。本址の性格は、他の事例等から葺をはじめとする重量の大きい建物を支持するための地業とみられるが、本址では直接的に関わる礎石等の建物遺構は確認されていない。また、1面の建3・4は集石に食い込むように礎石が据えられているが、建物自体は集石とは位置がずれているため直接的な関係は問えない。

その他の遺構は未掘のものが多いため個々の特徴を見出しがたいが、2次8・9trでは2面を中心に比較的大型の土坑がみられる。

(3) 遺物出土状況

以上が主郭内における検出遺構の概要である。調査所見に従えば、総じて1面段階においては1次1trにおける虎口付近の門跡の可能性のある建物址と、西部の2次6trにおいて検出された礎石ないし大型の礎盤を有する建物址以外には非常に乏しい状況が窺え、対照的に2面以下では、とりわけ1次2・3・5・6tr等東部を中心として、掘立柱建物等を構成するであろう柱穴が高密度で分布する傾向を示しているといえよう。

次に、郭内空間における遺物出土状況について触れて簡単におきたい。今回の出土遺物は焼物を主体に当地の中世遺跡としては出土量が極めて多く、その内容も特徴的なものであることを次節で述べる。しかし、それらの出土状況は、完形やそれに近い状態のものが遺構に伴って出土するような顕著なあり方はまれで、むしろ細片化した焼物を中心に整地土内から出土するものが大多数である。しかも、土器観察表(第3表)に所見を記述したが、二次的に被熱した土師質土器や陶磁器が数多くみられる。このことは、建物礎石や集石等遺構を構成する礫においても同様のことが言え、遺構面上では顕著な焼土面を残さないものの、火災の存在を示唆していると受け取れる。

次に遺物の分布状況について、まず遺構数に比例して遺物の出土量も増加する基本的な傾向が窺える。とりわけ2面を中心に遺構が多出し、かつ面的な広く調査が及んだ1次3・5・6trにおいて200点を超す陶磁器が出土している。層的には、1面整地土からの出土が主体的であることから、その多くが2面に由来するものと理解される。また、2次6trに至っては400点を上回る遺物が1面整地土や、1面より上位にある中世以降の堆積土中から出土している。これらは、1面～2面に伴うものが大半を占めているものと受け取れよう。

遺物出土における他の傾向としては、各調査地点の中は唯一2次6trから威信財である青磁形瓶や青花磁、娯楽具である碁石が出土している。貿易陶磁全体をみても他地点より著しく高い比率での出土が認められる。同調査区は既述のように礎石建物址や建物支持地業である集石等の遺構が検出されており、また主郭東辺を出入口と見た場合、最も奥まった高所の一角となることから、これらの遺構・遺物のあり方は場の性格に深く関わるものと理解されよう。

(4) 地山面上の遺構

主郭を構成する土壇状盛土直下には旧地形である微高地が広がっていることについては記述のとおりであ

る。この地山面直上からも遺構が検出されているが、しかし、そのほとんどが断面観察による結果であり、またすべてのトレンチで万遍なく地山面の確認をしていないため、分布傾向を語るには程遠い状況にある。直接遺物が伴う遺構は2次6trのP12だけで、これが唯一帰属時期の判明する平安時代の遺構である。他はピットの大きさや形状、さらには地山周辺から出土する遺物の傾向からみて、多くが平安時代～主郭造成開始以前の中世までのもので、それ以外に古墳時代まで遡るのものも存在する可能性がある。

4 郭外空間の遺構 (第1・2表、図版27～39、写真図版8・9・12・13)

(1) 北郭外空間の遺構

ア 遺構面と遺構の傾向

試掘5tr・8tr周辺に濃密な遺構分布がある。また、2次2・3tr周辺にも遺構の分布が見られた。層的には連続性があるとも考えられるが、2地点の間に未調査範囲を含むため関係は明確にしていない。とりわけ試掘8trでは、湿地性の地山粘土層上に60cm前後の厚さを有する整地盛土層が広がり、調査時の断面観察所見から6面の遺構面が認定され、遺構・遺物も多出する傾向があった。また、北に隣接する5trにおいても8trからの延長として5面が確認された。

以下、試掘5・8trを南部、2次2・3trを北部として、遺構の概要を記す。

イ 南部(試掘5・8tr)

主に試掘8trの1～2面、同5trの5面で平面的な遺構確認を行い、他の面は部分的かあるいはトレンチ壁面での確認にとどまった。遺構の分布傾向は、試掘8trを中心に各遺構面において非常に密集し切り合った状況で検出され、主郭東部の2面にも劣らない密度であった。この2調査区だけで150基以上の遺構が確認されており、種別として1基の礎石建物址を筆頭に、土坑、ピット、炭化物集中、溝状遺構などがみられた。これらの中で遺構の主体となるのはピット・土坑である。

建1 試掘8trの1面において検出された南北4間×東西2間以上、梁・桁とも1間6寸法の礎石建物で、南に2尺の庇状の張り出しを伴う。南北軸方位はN-27°-Wを指す。礎石は5箇所残存し、長径30～50cmの石英閃緑岩や砂岩、礫岩の河床礫を掘り方を穿って平らな面を上に向けて水平に据える。このうち、柱11では、礎石中央に柱痕跡とみられる直径10cm程のシミ状の炭化物付着がみられた。また、柱9は掘り方を覆うように炭・灰を多含する円形の遺構(SX01)が存した。未掘のため性格は不明だが、主郭内で検出された炉址と推定した炭化物集中遺構と傾向が似る。

土坑・ピット 試掘8trでは2面を中心に土坑が主体となり、柱穴様の円形ピットも交えて浅まじい切り合い関係を見せ、ほとんどベースの整地土が見えない状態で遺構の検出がなされた。土坑の多くは長径60cm～1.4m・深さ15～25cmの船底状や平らな底面を有するものである。試掘5trでも楕円形基調の土坑が散在し、とりわけ掘り込みの浅い土7・8は直径1mを超える大きい土坑である。調査区南端部の土4は全形不明であるが、覆土中に3本の杭が打たれていた。ピットは8trに多くみられた。

溝状遺構 試掘8trでは建1と軸方位をほぼ揃える幅18～50cm、断面U字形で深さ20～30cmを有する溝が2面を中心に検出された(溝1～6)。これらは計画性が強く窺え、区画や建物に付随する性格のものとして推定される。一方試掘5trで検出された溝1は近世以降の流路である。

その他 郭外空間は堀状遺構まで広範囲に整地土層が分布しているが、試掘2・3tr等、堀状遺構にごく近い範囲においては流路以外の明確な遺構は確認されず、遺構分布域は一定の距離を置いて離れていたものと考えられる。試掘1～3trの北から北部の2次2・3trの間は今回調査が及んでいない地域のため、遺構の分布状況は判然としなが、2次3trや試掘5trの状況から密度は低いものと推定される。

ウ 北部 (2次2・3tr)

廣正寺に近い郭外空間北部では、2次2・3trにおいて遺構の検出をみたが、試掘8trに比較すればその密度は低い。はじめに2次2trでは中世の遺構面まで調査が及んでいないため断面のみの確認となったが、3面からなる整地遺構面の北を画する土塁その北を並走する流路が検出された。土塁は2面整地面上に築造される。最初に基底部中央に溝ないし土坑状の掘り込みを行った後、流路側を先行させながら土塁特有の黒褐色、黄褐色、灰色の粘土・シルトによる粗大な斑状の混和土をを積み上げている。

当初の大きさは基底幅4.6m・残存高96cmあり、ほぼ東西を向く。その後1面段階において両側の法面に積み増しによる拡幅が行われ、基底幅4.6mまで拡大する。また、平面的には確認していないが、遺構面側の法尻には溝が並走し、築造段階から1面段階まで拡幅後も改築を行って維持されているようである。両法面は膨らみのある曲面を形成し、おそらく上面の削平はさほど受けていないものとみられる。築造当初の法面下半部の傾斜角度は32～37°を測る。

北に並走する流路は1面段階において幅約4mを測り、最終的には洪水によるものか、土塁上面レベルまで一気に砂で埋没している。しかし、これらの土塁と流路は、西に12m離れた2次3trではその延長を全く確認できず、両トレンチ間で止まるか、あるいは北ないし南方向に屈折ないし屈曲する以外に理解できない構造であり、単純な流路ではなく堀のような性格を帯びていた可能性もある。

2次3trでは3面の整地盛土面が確認され、北半部を中心に土坑・ピットが検出された。そのうち、1面では東西に軸を置く細長い土坑や楕円形の土坑が南北に連なるように検出されたが、その性格はわからない。また、同位置の3面にも土坑・ピットの集中が見られた。一方、南半部では遺構が非常に希薄となり、代わって南北方向の幅のせまい流路1～3、東西性の流路4が検出された。これらと2trの流路とは直交する位置関係になるが、両者の関係は不明である。

エ 遺物出土状況

遺物は、南部の試掘5・8trで多出し、特に8trでは1面整地土を主体に200点を超える焼物が得られ、遺構とともに主郭並みの出土量に達した。その内容・構成は次節で述べるが、特に目を引くものに青磁盤、古瀬戸花瓶、朝鮮通宝、硯等があり、これらを含む大型の礎石建物址とともに、この空間の性格を暗示するものと受け止められる。北部は面的な調査の及んだ2次3trで1面整地土を中心に60点近い遺物を得ているが、特に顕著な傾向は見られなかった。

(2) 東郭外空間の遺構

2次4・5trの堀状遺構から東、流路1・2を含む空間である。調査範囲では、さらに流路2の東に整地面が続くことを確認したが、調査範囲が狭いこともあり、遺構は検出されずまた遺物も数点しか出土していないため、状況はよくわからない。

第3節 出土遺物

1 焼物 (第3・4表、図版42～47、写真図版17～19)

(1) 概要

本調査では、試掘～2次調査まで23の地点において、中世の遺構や整地土(盛土)を中心に多量の遺物が出土した。その中核をなすのは焼物である。時代的には古墳時代～近世まで幅広く見られるが、主体となるのは土壇状盛土やその上面に分布する遺構と直接的に関わる中世のもので、破片数にして1,900点近くに達する。本報告ではそこから図化可能なもの322点、加えて先行する古墳～平安時代のもの24点と近世に下るもの6点、合計352点について、実測図と観察表を掲載した。

本項では、先学の研究成果に依拠しながら、主体をなす中世の焼物として山茶碗の出現する12世紀から16世紀までのものについて器種毎に概観した後、郭内外の主要トレンチにおける器種の構成を破片数のカウントによる集計結果から抽出し、本遺跡における焼物の様相について明らかにしてみたい。その際、同じ松本市内の15世紀代を中心とした寺院関連遺跡である殿村遺跡における様相も参考とし、折に触れ比較を行う。

なお、陶磁器については、殿村遺跡調査指導委員の小野正敏・水澤幸一両氏の全般的な指導を受け、また瀬戸・美濃製品については藤澤良祐氏に鑑定を依頼した。

(2) 中世以外の焼物

ア 古墳時代～平安時代の焼物 (18・25・43・80・83・92・106・123・143・150・179・182・185・210・219・220・233・257・260・261・301・302・337・346)

先行する古代の焼物は、古墳時代中期の甕(185)等を除いて概ね平安時代のものに限定される。これらは郭内を中心に中世整地土やそれ以降の堆積土中に含まれていた小破片が多いが、摩滅を受けたものは少ない。中には2次6トレンチ出土の260や261等地山直上あるいは整地土最下層から得られた完形に近いものもある。従って、中世の造成層直下には当該期の生活面が存在することが遺物の面から予想される。

器種は、土師器皿・耳皿・杯・碗・甕、黒色土器杯・碗、灰釉陶器碗・瓶がある。土師器には9世紀前半代まで遡るハケ甕(143)や台付甕(106)から11世紀に下る杯(260)・皿(257)まで見られ、これに伴う灰釉陶器もK-14 窯式の碗(219)から灰釉陶器最終末の丸石2号窯式や百代寺窯式まで下るもの(80・92・346)が認められる。

このように下層に調査がほとんど及んでいないため断片的ではあるが、9～11世紀まで平安時代全般にわたる遺物が認められるうえ、次の中世に含めた山茶碗登場以降の12世紀代の遺物も存在することから、中世の造成開始に至るまでの間、この地が生活域として継続的に利用されていたことを裏付けている。

イ 近世の焼物 (232・278・299・314・317・343)

2次6トレンチをはじめ、17～19世紀に下る陶磁器が得られている。一部を除いて今回は掲載を割愛したが、近世以降のこの地における活動を物語る資料群である。

(3) 中世の焼物の器種分類

ア 土師質土器

焼物の主体をなす。器形は皿・内耳鍋が認められ、数量的には皿が圧倒的である。松本市域における室町時代の土師質土器皿は、胎土と形態を中心にいくつかの種類が認められ、殿村遺跡5次調査報告書において3群4種の分類を試みた。本遺跡出土資料についても、概ねこの分類が適用できるものとみて、3群3

種の分類を実施した。

Ⅲ Ⅲは 1,255 点を確認、ほぼすべてロクロ成形である。手づくね成形と思われるもの(93)は例外的で、時期的にも古いものとみられる。ロクロ成形Ⅲの胎土は 1 群～3 群に分別される。また、器形は A 類～C 類に大別できる。

1 群 砂粒の多い粗い胎土で器面がざらつき、淡褐色～褐色を呈する。殿村遺跡では内耳鍋の胎土と同質のものが多く見られたが、本遺跡ではさほど顕著ではない。また、本遺跡では古代の遺物が一定量あり、土師器の杯・碗との峻別が難しい小破片も多い。

2 群 鮮やかな橙色を呈する密な胎土だが、若干砂粒を含む。特に赤色の粒子を含むことが多い。赤味の弱い発色でも、胎土が似通うものはここに含めた。

3 群 砂粒を含まずきわめて精良な水煎された白土を用い、他の群とは明確に識別できる上質品である。本群のⅢは概して薄手で整形も非常に丁寧である。なお、図示していないが、殿村遺跡で認められた底部内面が白土、外面が 2 群の赤土となる 2 層構造のⅢが 1 点確認された。生産地や工人における 2 群と 3 群の親縁性を窺わせる。

A 類 (48・176・254・308・338 他) 口縁部が直開あるいは外反する杯形を呈するもの。腰の丸いものとそうでないものがある。

B 類 (19・38・112・113・191・193・221 他) 胸部が内湾する碗形を呈するもの。

C 類 (9・33・126・136・234・236・265 他) 口縁部～胸部が大きく開き口径と底径の差が大きいもの。口縁部は外反する場合が多いが、胸部中位で若干くびれ、口縁部が内湾気味となるもの(殿村遺跡で a としたもの)もある。また、杯形に直開するもののうち、特に開きが大きいものも本類に含めた。概して薄手で見込みにナデ調整を行う等整形も非常に丁寧である。

なお、C 類を中心に底部の回転糸切り痕をナデまたはヘラケズリで消す例があり、殿村遺跡では見られなかった特徴として注意される(9・29・56・129・153・221・236・254・266・294 等)。

群と類の組合せ 集計結果を表 1 にまとめた。比較として殿 表 1 土師質土器Ⅲの群・類組合せ

村遺跡の結果も併記した。一見して本遺跡においては各群ともに C 類の比重が高く、殿村遺跡とは対照的である。とりわけ 3 群においては総量の 4 分の 3 に達する。大きく開く器形と白く精良な胎土で底部や見込みの入念な調整が特徴的な 3C 類を筆頭に、C 類は京都系のⅢを在地のロクロ成形技術で模倣したものと考えられることを殿村 5 次報告でも触れたが、本遺跡ではより際立ったその傾向をみることができる。

遺跡	1群	2群	3群	計
井川城址(郭内)	314	436	345	1,095
15c前～中	28.7	39.8	31.5	100.0
林山腰遺跡	19	6	9	34
15c末～16c初	55.9	17.6	26.5	100.0
殿村遺跡	320	287	172	779
15c中～後	41.1	36.8	22.1	100.0

分量 殿村遺跡 5 次報告において、Ⅲのサイズを I～IV の 4 種からなるものと捉え、また口径 17 cm 以上のものを大型Ⅲとして区別した。本調査においては、確実に大型Ⅲといえるものは出土していないが、Ⅲは口径 7.2 cm～16.0 cm、器高 1.4 cm～3.8 cm のものが存在する。口径・器高ともに判明する個体は少ないが、概ね殿村遺跡と整合する次のまとまりに分けられそうである。

I 口径: 7.2～8.4 cm 器高: 1.4～2.2 cm 胎土: 2・3 群 器形: A・B 類

II 口径: 9.0～11.2 cm 器高: 2.4～3.3 cm 胎土: 1・2・3 群 器形: B・C 類

III 口径: 11.6～13.4 cm 器高: 1.8～3.8 cm 胎土: 1・2・3 群 器形: A・B・C 類

IV 口径: 13.6～16.0 cm 器高: 2.1～2.8 cm 胎土: 2・3 群 器形: C 類

上記のうち、Ⅲには浅いものと深いものが見られる。また、IV の器高は殿村遺跡では口径に比例して 3 cm 以上となるが、今回確認できたものはいずれも 3 cm に満たない。器形と胎土との関係は、小径の I には C 類がほとんどなく、反対に大径の IV はほぼ C 類に限られている。

内耳鍋 405 点出土、器形の判明するものについて市川分類に従い、A～Dの器種区分を行った。

A (10・11・66～69・87・104・122・174・175・230・246～253・281) 口縁部がくの字状に屈曲するもの。大きさは口径 25.5～28.0 cm のものが 5 点、34.8 cm と大径のもの 1 点が認められる。全形の窺い知れるものはないが、口縁端部を欠く 252 は口径 30 cm 内外・器高 15 cm 内外のバケツ型を呈すると推定される。

B (42・280・300・323・324・332・340) 口縁部が直立し、内面にナデ調整を顕著に残すもの。340 は全形が窺える個体で、口径 28.4 cm、器高 12.8 cm を測る浅いバケツ型である。口縁部内面のヨコナデは数条の凹線状をなす。

C 口縁部が緩やかに内湾して立ち上がり、内面にあまり顕著な調整痕を残さないもの。

1 (65・70・245) 口縁部上部が肥厚し、屈曲部付近のみが薄くなるもの。

2 いったん内湾した後にそのまま直線的に立ち上がるもの。

3 短く外反するもの

D (2・13・256) 胴部と口縁部の界が不明瞭でほとんど屈曲せずに直立するもの。器形の判明する 2 は口径 24.0 cm・器高 14.4 cm 内外で 340 と比べて深いバケツ型である。

本遺跡において確認できたものの内訳は、A が 21 点、B が 7 点、C1 が 9 点、C2 が 0 点、C3 が 1 点、D が 3 点で、A 類が圧倒的に多く、B・C 類が少ない傾向が窺える。

イ 瓦質土器

わずかに 1 片のみ可能性のあるものがあり、内耳鍋ないしは鉢の胴部片とみられる。なお、松本平における中世の瓦質土器は、殿村遺跡において風炉・火鉢を主体に播鉢等合わせて 20 点以上が出土しており、特に風炉は中世寺院との関係が濃厚な同遺跡を性格付ける遺物のひとつとなっている。

ウ 無釉陶器（瓷器系・須恵器系）

山茶碗、小皿、片口鉢、甕を一括した。東海地方の製品しか認められない。生産地別に見ると山茶碗・小皿は東濃型のみ認められ、片口鉢には尾張型と東濃の中津川製品が認められる。また甕にも中津川製品と尾張の常滑製品の 2 者が見られる。

山茶碗 (5・78・119・216・217・235・259・327・329・334・352) 東濃型 18 点、産地不明 1 点が出土した。底部は 1 点のみで、口縁部がくびれるものや端部に面を有するものと持たないものなど、第 5～11 型式 (12 世紀末～15 世紀中葉) の特徴のものが認められる

小皿 (21・139) 底部回転糸切りで口縁部が短く内湾して立ち上がる薄手の皿がある。東濃型第 10～11 型式に比定される。

片口鉢 (158・240・315・328・331) 中津川製品 4 点 (158・328)、尾張型 9 点 (240・331) がある。尾張型の口縁部片は端部の沈線の有無等から第 5 型式 (331)～第 6 型式 (240) に比定される。

甕 (105・149) 中津川製品 6 点、常滑製品 5 点 (105・149) を数えた。器形のわかるものは少ない。

エ 施釉陶器（古瀬戸・大窯）

中国産を除く施釉陶器はすべて瀬戸製品で、総数 112 点を数える。内訳は古瀬戸が主体で大窯製品はごくわずかに認められるだけである。器種は、天目茶碗・平碗・緑釉小皿・腰折皿・端反皿・卸皿・折縁小皿・折縁中皿・播鉢形小鉢・碗形鉢・折縁深皿・卸目付大皿・直縁大皿・仏花瓶・尊式花瓶・水注・大海茶入・合子・祖母懐茶壺・四耳壺・播鉢・桶がある。そのうち主体をなすものは、天目茶碗・平碗・緑釉小皿・盤類 (折縁深皿・卸目付大皿・直縁大皿) の 4 器種である。

また、これらのうち時期比定の可能な個体は、藤澤編年の前期 2 点・中期 4 点・後 1 期 5 点・後 2 期 8 点、後 3 期 23 点、後 4 期古段階 10 点・後 4 期新段階 1 点・大窯 2 点であり、他に後 1 期か 2 期のもの 17 点、

後Ⅱ期かⅢ期のもの2点、後Ⅲ期かⅣ期古段階のもの7点、Ⅳ期古段階か新段階のもの3点があり、古瀬戸後Ⅲ期を中心に後Ⅰ期～後Ⅳ期古段階のものが8割以上を占める。

天目茶碗(1・16・75・91・99・102・116・117・140・142・157・201・209・215・298・318・319・349) 26点出土した。99・201・215等後Ⅲ期を主体に後Ⅰ～Ⅳ期古段階までのものが認められる。1点を除きすべて口縁部～胴部の破片である。319は唯一底部の形態がわかるもので、削り出し内反高台で後Ⅲ期頃に位置付くが、灰軸を施軸する珍しいものである。

古瀬戸・大窯製品	
古瀬戸編年	破片数
前期Ⅰ	1
前期Ⅱ	1
中期Ⅰ or Ⅱ	1
中期Ⅲ	1
中期Ⅳ	1
後期Ⅰ	5
後期Ⅱ	17
後期Ⅲ	8
後期Ⅳ古	2
後期Ⅳ新	23
大窯Ⅰ	10
大窯Ⅱ	3
	4
	1
	1
	1

東濃型山茶碗・小皿	
型式	破片数
第1型式	
第2型式	
第3型式	
第4型式	
第5型式	1
第6型式	5
第7型式	2
第8型式	1
第9型式	2
第10型式	1
第11型式	1
第12型式	4

平碗(22・101・120・133・160・202～204・342) 17 表2 瀬戸・美濃製品時期別集計

点が出土した。すべて灰軸施軸で、120・160・202・204等口縁部～胴部の器形が判明するが、底部形態のわかるものは1点もない。口縁部がくびれるものとそうでないもの、胴部が直線的なもの内湾気味のもの等さまざま、全体に後Ⅰ～Ⅳ期古段階の特徴が見られる。

縁軸小皿(3・6・15・23・39・57・58・114・151・169・170・199・229・312) 18点出土した。胴部の丸味や立ち上がりの強さ、見込の施軸状況等の特徴から、後Ⅲ期を主体に後Ⅰ～Ⅳ期古段階に比定されるものが見られる。

腰折皿(313) 1点のみ出土。口縁部がやや長めに外反し端部を内湾気味に取る。後Ⅳ期新段階に特有の器形である。

端反皿(40) 1点のみ出土。光沢のある灰軸が施軸される。大窯Ⅰ段階に帰属する。

丸皿(145) 小片1点のみ出土。断面三角形の付高台を有し全面施軸、大窯Ⅱ～Ⅲ段階に位置付く。

卸皿(59・183) 2点出土。いずれも古瀬戸後期で、口縁部片の59は後Ⅰ期に帰属する。

折縁小皿 古瀬戸後期の口縁部片が1点出土した。

折縁中皿(121) 後Ⅳ期古段階のものが1点出土した。口縁部内外のみ灰軸を施軸する。

播鉢形小鉢(144) 口縁端部を内側に折り返し踏軸を施軸する後Ⅰ期の小破片が1点存在する。

碗形鉢(161) 1点ある。161は断面方形の付高台で内面に灰軸を施軸する。後Ⅰ～Ⅱ期に位置付く。

折縁深皿(4・8・200・277) 折縁深皿・卸目付大皿・直縁大皿など盤類は26点出土した。口縁部の折り返しの形態や内面の刷毛塗り施軸の有無等の特徴から、中Ⅳ期～後Ⅳ期古段階のものが認められる。そのうち折縁深皿とわかるものは4点を図示、最も古相の4は中Ⅳ期に遡る。

卸目付大皿(79・255) 口縁部の形態から卸目付大皿と判断されたもの2点がある。79は口縁部の片口接合部で後Ⅲ期、255は口縁部内面に突起を巡らす後Ⅳ期新段階のものである。

直縁大皿(86・184・186) 後Ⅰ期1点、後Ⅲ期2点の合計3点が認められる。内湾気味のもの(186)、直開するもの(184)、口縁端部が玉縁状となるもの(86)などバリエーションがある。

花瓶(64・82・134・172) 134は中Ⅰ～Ⅱ期に位置付く灰軸施軸の仏花瓶で、頸部と肩部に沈線が巡る。64は鉄軸施軸で後期に下る。82・172は尊式花瓶で、底板の82は後Ⅲ～Ⅳ期古段階、頸部の172は後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

水注(146) 注口部が1点出土した。通常のものと比較して直で長い。口縁部は斜めにカットされ鉄軸施軸、古瀬戸中期に遡る。

大海茶入(89) 1点出土した。89は鉄軸を施軸し口縁部と底部を欠き、扁平で肩の張りが明瞭な器体である。古瀬戸後期に位置付く。

合子 (218) 218 は灰軸施軸で球胴に短い口縁部が取り付け。古瀬戸中皿～Ⅳ期に位置付けられる。
祖母懐茶壺 (267・322) 耳の接合部と胴下部の破片が出土。ともに茶色の鉄軸を刷毛塗施軸する。古瀬戸後期に比定される。

四耳壺 (244) 古瀬戸前期に遡る肩部と底部の破片 2 点が出土した、244 は底部でハの字状に開く端部方形の高台を有し、前Ⅰa 期に比定される。

播鉢 (103) 古瀬戸後Ⅳ期～大窯に比定される小片が 4 点出土している。103 は A 類の口縁部片で、後Ⅳ期古段階に帰属する。

桶 図示できないが、古瀬戸後期の把手の一部とみられる棒状の破片が 1 点ある。

オ 貿易陶磁

貿易陶磁は、青磁 35 点、青白磁 1 点、白磁 15 点、青花磁 7 点、舶載陶器 3 点の計 61 点が出土した。その多くは小破片で、器形を復元できるものは少ない。

青磁 青磁は、碗・皿類 32 点、盤 1 点、香炉 1 点、筍形瓶 1 点がある。碗・皿類は大半が碗と思われる。

碗・皿類 (62・63・71・72・100・108・118・171・173・242・289) 11 点が図化できた。そのうち 108 は同安窯系の碗で内外面に櫛目紋や片切彫りによる施紋が見られる。その他はすべて竜泉窯系で、118 は内面に片切彫りの文様を伴う厚手品で大宰府Ⅰ類である。他は上田分類の B2 群 (100・242)、B3 群 (71・170)、B4 群 (171)、C2 群か (72)、E 群 (289) 等で、これらが主体的である。

盤 (61) 威信財である大型の盤底部の破片が 1 点得られている。小片で全形はわからない。

香炉 (321) 小型の香炉底部片である。同一個体片数点があったが接合しない。

筍形瓶 (268) 威信財である。12～13 世紀の南宋時代に生産された頸部から胴部に突帯を巡らせる瓶で、根津美術館所蔵の「筒花生」(重文)等の類例がある。268 は口径 6.4 cm、受口状口縁部と頸部の太く低い突帯部分が残存し、淡緑色の軸が厚く掛かる。器高は 30 cm 前後か。被熱のため器面が荒れている。同一個体片数点があるが、接合できるものはなかった。

青白磁 (73) 碗と思われる口縁部片が 1 点出土している (73)。器内は薄手で青みがかった軸調を呈する。端部は軸を拭きとっている。

白磁 (60・74・81・90・98・138・159・208・241・243・276・296・316・320) 白磁は、碗・皿類が 15 点出土している。12 世紀代に遡る古手のものとして 15 世紀以降のものに二分され、後者が主体となる。74・90 は口縁部が玉縁となる碗で大宰府Ⅱ～Ⅳ類に、241 は内面に櫛目紋を施す碗で大宰府Ⅴ～Ⅵ類とみられる。81 は薄手の皿で、端反気味の口縁部、内面の段、輪花を特徴とする。大宰府Ⅴ類か。276 は 14 世紀以前の口禿碗で森田分類 A 群である。159 は D 群の小坏で外面にわずかな突線が見られる。98・208・243・296・320 は D 群の皿で、口縁部は 296 のように内湾する。いずれも陶器質で胴部下半から底裏は露胎となる。243 は削出高台、98・320 はそれに 4 単位の挟り込みを入れ、見込みに重ね焼き痕が残る。60・138・316 は E 群の端反皿で光沢のある軸を呈する。

青花磁 (269・279・288・297) 2 次 6 トレンチ北区から集中的に出土している。269・288 は小野分類 B 群の碗で被熱する。同一個体の可能性もあるが胴下部の界線が整合しないため分けた。269 は見込みに「福」を、288 は胴部外面に唐草紋を描く。279 は碗の高台であろう。297 は内湾口縁の皿で外面にわずかに呉須が見られる。

舶載陶器 (115・228・326) 中国産と推定される瀬戸産とは胎土の異なる天目茶碗が 4 点出土している。228 は口縁部がくびれ端部にわずかな面を取る。胎土は緻密で灰色を呈し茶褐色の鉄軸を施す。115・326 および他の 1 点は胴部片である。

(4) トレンチ出土中世焼物群の概要

次に、各トレンチや層位における出土資料群の器種構成について、個々の地点・層位における器種毎の点数については第4表にゆずり、ここでは堀状遺構で囲まれ土壇状の盛土が分布する郭内とその外にある郭外から、特に遺物出土量の多いトレンチ4箇所を抽出してその内容を概観、器種構成の観点から郭内・郭外における傾向を把握したい。

ア 試掘8トレンチ（北郭外遺構・整地土、41～72）

郭外において複数の遺構面を伴い礎石建物址をはじめ遺構密度が高いトレンチである。遺物出土点数は、総数で238点を数える。これらは調査の都合上特定の面への帰属ができなかったものの、ほぼすべてが整地土出土品である。一括したその内訳は、土師質土器皿83点・内耳鍋136点、無釉陶器片口鉢1点・甕2点、陶器（瀬戸製品）天目茶碗1点・平碗1点・卸皿1点・緑釉小皿2点・花瓶1点・播鉢1点・その他3点、青磁碗4点・盤1点、白磁皿1点である。また、これらの単位面積当たりの出土数は4.66点/㎡で、細かを見ると在産土師質土器4.29点/㎡、東海産陶器0.25点/㎡、貿易陶磁0.12点/㎡となる。

これを構成比で見ると、土師質土器92.0%（219点）、無釉陶器1.3%（3点）、瀬戸産陶器4.2%（10点）、貿易陶磁5.2%（6点）である。また、全体に占める土師質土器皿の割合は34.9%（83点）である。さらに、土師質土器皿における群の構成は、1群3.6%（3点）、2群38.6%（32点）、3群57.8%（48点）で、6割近くを3群が占める。

これらの中で特筆すべきものは、小破片ながら青磁の盤が出土していることで、他に本調査で唯一の硯や朝鮮通宝等の存在が出土遺物群を特徴づけている。

イ 1次3トレンチ（郭内北東部遺構・整地土、105～147）

郭内北東部のトレンチで、2面において多数の遺構を検出した。遺物は、調査の過程で1面整地土を中心に226点が出土した。各面を一括したその内訳は、土師質土器皿169点・内耳鍋30点、無釉陶器山茶碗1点・小皿1点・甕1点、陶器（瀬戸製品）天目茶碗7点・平碗3点・緑釉小皿3点・盤類3点・水注花瓶類2点、青磁碗・皿類4点、白磁皿1点、舶載陶器天目茶碗1点である。これらの単面積当たりの出土数は3.49点/㎡で、内訳をみると在産土師質土器3.07点/㎡、東海産陶器0.32点/㎡、貿易陶磁は0.09点/㎡である。

これを構成比で見ると、土師質土器88.1%（199点）、無釉陶器1.3%（3点）、瀬戸産陶器8.0%（18点）、貿易陶磁2.7%（6点）である。また、全体に占める土師質土器皿の割合は74.8%（169点）で全体の4分の3に達する。皿の群構成は、1群32.0%（54点）、2群36.7%（62点）、3群31.4%（53点）となり、各群ほぼ等量である。ちなみに層位的に純粋な1面あるいは2面のみを抽出してもこの傾向は変わらない。

ウ 1次6トレンチ（郭内南東部遺構・整地土、181～229）

郭内南東部のトレンチで、1次3トレンチ同様、2面から多数の遺構が検出され、遺物も同遺構面を中心に229点した。各面一括の内訳は、土師質土器皿194点・内耳鍋8点、無釉陶器山茶碗3点・片口鉢1点、陶器（瀬戸製品）天目茶碗4点・平碗6点・卸皿1点・緑釉小皿2点・盤類7点・合子1点、青磁碗・皿類4点、白磁皿1点、舶載陶器天目茶碗1点である。これらの単位面積当たりの出土数は3.38点/㎡で、内訳は在産土師質土器2.98点/㎡、東海産陶器0.37点/㎡、貿易陶磁0.03点/㎡である。

これを構成比で見ると、土師質土器88.2%（202点）、無釉陶器1.7%（4点）、瀬戸産陶器9.2%（21点）、貿易陶磁0.9%（2点）で、1次3トレンチと非常に傾向が似る。また、全体に占める土師質土器皿の割合は84.7%（194点）で、その群構成は、1群30.4%（59点）、2群32.0%（62点）、3群43.2%（73点）となり、3群の比率が高い。この傾向は最も出土量の多い2面に較べても変化は見られない。

エ 2次6トレンチ（郭内南西部遺構・整地土、260～327）

複数の礎石建物址や集石遺構等建築物に関わる遺構が集中するトレンチで、遺物出土量の総数は430点

を数える。これらは1面を中心に出土するが、サブトレンチ掘削中の出土のため、特定の面への帰属ができなかったものや、本トレンチの各所に見られた深掘りによる攪乱や耕作の影響で表土中に混入したものが多数に上る。これら表土中の遺物も状況的に下層からの由来とみなし、一括したその内訳は、土師質土器皿306点・内耳鍋80点、無軸陶器山茶碗1点・片口鉢3点、陶器（瀬戸製品）天目茶碗5点・縁軸小皿2点・盤類2点・祖母懷茶壺2点・その他壺1点・播鉢1点、青磁碗13点・香炉1点・筭形瓶1点、白磁皿4点、青花磁7点、舶載陶器天目茶碗2点である。

単位面積当たりの出土数は2.23点/㎡と、上記3トレンチと比較すると少ない。内訳は在地産土師質土器2.01点/㎡、東海産陶器0.09点/㎡、貿易陶磁0.14点/㎡となる。これを構成比でみると、土師質土器90.0%（395点）、無軸陶器0.9%（4点）、瀬戸産陶器3.0%（13点）、貿易陶磁6.2%（26点）で、同じ郭内の1次3・6トレンチと比較して瀬戸産陶器よりも貿易陶磁が卓越する傾向が窺える。また、全体に占める土師質土器皿の割合は69.7%（83点）である。さらに、土師質土器皿における群の構成は、1群21.6%（66点）、2群48.4%（148点）、3群28.2%（97点）で、半数近くを2群が占める。他トレンチと同様、主体をなす1面出土資料に限ってもこの傾向は同じである。

これらの中で特筆すべき点として、貿易陶磁と瀬戸産陶器の比率が逆転していることに関連して、威信財である青磁の筭形瓶が存在することと、他地点では出土していない青花磁が組成に加わることが挙げられ、礫石等の存在とともに本トレンチ出土遺物群を特徴づけている。

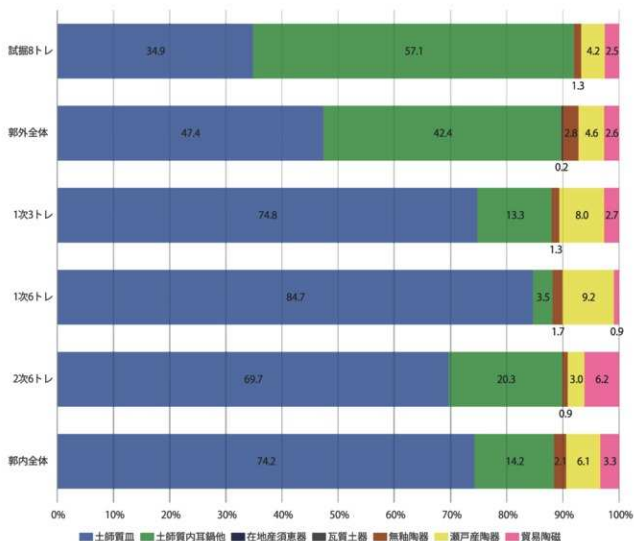


図1 郭内・郭外主要地点における中世の焼物器種組成

オ 各地点における器種構成の様相

以上、4地点における器種構成から、次の傾向を指摘しうる。

- ① 郭内・郭外ともに、在地製品が卓越し、東海製品や貿易陶磁等の搬入陶磁器は10%である。これは、寺院との関係が濃厚な殿村遺跡と傾向を一にしている。
- ② 在地製品の主体は郭内では土師質土器皿が卓越し、構成全体の7～9割を占める。一方、郭外では5割に満たず内耳罐の比重が高い。ちなみに殿村遺跡では6割弱で、郭内に続く高率を示す。
- ③ 土師質土器皿は2・3群がやや優越するものの量的関係において各群で極端な差は認められない。ただし、器種分類において触れたように、大きく外開するC類の器形の比重が高く5割を超える。
- ④ 本調査においては、外来陶磁器は東海製品と中国産陶磁器のみが認められる。その構成は、郭内外を通して概ね東海製品が7割以上を占めるが、2次6トレンチでは中国産陶磁器が6割以上を占め、他地点では見られない青磁筍形瓶や青花磁が存在する。
- ⑤ 中国産陶磁器は、青磁(碗主体)が6割を占め、次いで白磁(皿主体)が2割半、青花磁(碗・皿)は1割弱で、青磁が卓越する。
- ⑥ 東海製品の中核をなす施釉陶器(古瀬戸)は、天目茶碗・平碗・縁軸小皿・折縁深皿他盤類が主要器種で、施釉陶器全体の8割以上を占めている。対して播鉢等の調理具は非常に少ない。
- ⑦ 郭内を中心に天目茶碗、祖母懐茶壺、大海茶入、舶載天目等の茶道具が見られ、天目茶碗は東海産施釉陶器の26.4%を占め最も出土数が多い。一方で殿村遺跡では1.6%程度みられる瓦質風炉・火鉢は、現時点では1点も出土していない。

(5) 小結

本稿のまとめとして、上記の作業から得られた本遺跡出土焼物群の様相についてまとめをしておきたい。

ア 井川城跡出土中世焼物群の年代観について

今回の調査では原則として遺構の掘り下げは行わず、面的な調査も1面ないしは2面までとし、それ以下についてはサブトレンチでの確認を行ったに過ぎない。従って、郭内外を問わず出土遺物の大半は2面以降の検出面や整地土からの出土品である。本来、別表にまとめた集計を踏まえたうえで層位毎に構成器種の型式内容を検討すべきであるが、その場合の資料群のまとまりが必ずしも良好といえないような時間的な制約もあり、いささか乱暴ではあるがここでは便宜上ひとまとまりの資料群と見立ててその年代を確認しておく。なお、在地土師質土器、とりわけロクロ成形皿についてはまだ編年が確立していないため、研究の先行する瀬戸製品や貿易陶磁の編年から焼物群を次の3期に分けた。

第1期 12世紀～14世紀中葉

非ロクロ成形の皿など、在地産の土師質土器がほとんど得られていないが、東海製品や貿易陶磁等少数ながらも時期的に連続する資料が存在することから本時期を仮設したが、郭内空間においては、盛土下層の調査が断片的なため、実態の把握は不十分である。東海製品は東濃型山茶碗や尾張型片口鉢に第5型式(13世紀)以降のものが見られ、施釉陶器では古瀬戸前期～中期までの四耳壺や折縁深皿がある。貿易陶磁は12～13世紀代の白磁碗・皿、青白磁等が断片的に得られている。前述のように、これに先行する平安時代、9～11世紀代の土師器・須恵器・灰釉陶器も広範囲から得られており、その延長として断片的ながらも平安時代末期から南北朝期にかけて連続性を認めることができる。

第2期 14世紀後葉～15世紀中葉

古瀬戸製品が急激に数量を増す古瀬戸後1期～後4期古段階に並行する時期で、特に焼物群のピークは15世紀前半(古瀬戸後Ⅲ期)にある。郭内空間では、遺構面1～2面、とりわけ2面が本期の遺物の主た

る帰属先であろう。これに伴う貿易陶磁は青磁碗 B3 類や C2 類、白磁皿 D 群、青花磁等がみられる。

焼物の主体をなす在地土師質土器は、4 種程度のサイズからなる京都系志向の外開するロク口成形皿が主体的で、殊に郭内での優位性が目立っている。焼物の組成全体に対し土師質皿が 8 割前後を占める状況と相まって、土壇状盛土によって造成された郭内空間の性格を暗示しているといえよう。皿は儀礼をはじめとする食膳具としての使用だけでなく、灯明としても多用された状況が看取される。

郭内では、皿が卓越する組成に加え、特に、2 次 6 トレンチにおいて威信財としての座敷飾りに有用な青磁窠形瓶や青花磁等、他地区では見られない高級陶磁が顕著に見られるなど、広大な域内でも他とは際立ったあり方を呈する。また全般に、天目茶碗を中心に舶載陶器を含む茶道具類の存在が目立つ。

この時期の調理具として内耳鍋があるが、型式的に古段階に位置付けられ 15 世紀中葉前後に位置付くと考えられている外屈口縁の A 類が卓越し、他の類は非常に少ない。内耳鍋以外の調理具については、定期的に無釉陶器の片口鉢から古瀬戸搦鉢へと生産が転換してく時期であるが、後者はまだ皆無に等しい。また、片口鉢・甕の供給地は、常滑・中津川等東海製品に限られようである。

なお、焼物の出土量の多さも注意される。例えば施釉陶器（古瀬戸・大窯）を例にとると 1 次 3・6 トレンチの 0.28～0.36 点/㎡を筆頭に郭内空間のトレンチ全体で 0.11 点/㎡を数える。これは殿村遺跡の 0.06 点/㎡よりも多く、また市川 2009 に示された長野県内の主な中世遺跡と比較しても長野市栗田城跡（0.09 点/㎡）や高森町若森社遺跡（0.14 点/㎡）等、居館あるいはその関連遺跡に匹敵する高い数量である。

第 3 期 15 世紀後葉～16 世紀初頭

井川城跡に搬入された東海製品は、古瀬戸後 IV 期新段階以降、急激に数量を減じる。特に大窯 1 段階すなわち 15 世紀末以降に下る製品は皆無に等しい。第 1 期の焼物が少ないながらも一定量存在する状況とは対照的である。貿易陶磁は青磁碗 B4 群や白磁皿 E 群が本期に伴うであろうが、やはり数量は少ない。在地土師質土器は第 2 期との分離が難しいため実態はわからないが、内耳鍋の口縁部形態に A 類より時期が下り 15 世紀後半～16 世紀初頭に位置付けられている B 類や、さらに新しく 16 世紀初頭～中頃とされる C2 類が極めて少ないことから、皿も本時期に伴うものは少ないものと推察される。

本期の遺物が伴う遺構面は必然的に 1 面以降ということになる。

以上、東海製品の編年や貿易陶磁の年代観に依拠しながら井川城跡出土焼物群の様相を整理してきた。ここで捉えた焼物群が見せる時期的まとまりと器種構成の様相は、まさに堀状遺構で囲まれた長方形の土壇状盛土からなる造成遺構の性格に深く結び付くものと考えて差し支えないであろう。また、井川城址において第 3 期以降に下る焼物が激減することが判明したが、これとは対照的に、前章で触れた林城址の関連遺跡である林山腰遺跡出土焼物群が本期から出現し急激なピークを迎えるという事実は、小笠原氏の本拠の変遷を考えるうえで重要な所見をもたらしたものと見えよう。

参考文献

- 市川隆之 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』9
2009 『考古遺物からみた中世信濃の地域性と共通性』『信濃』61 巻 4 号
上田秀夫 1982 『14～16 世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』2
小野正敏 1982 『15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』2
1985 『出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素描』『MUSEUM』416
筋柄俊夫 1986 『中世信濃における陶磁器の産地構成と流通』『信濃』38 巻 4 号
原 明芳 1995 『各地の土器様相—中部』『概説中世の土器・陶磁器』
藤澤良祐 2002 『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 輯
2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
2015 『上県 2 号窯跡第 9 次発掘調査報告書』愛知学院大学文学部歴史学科
松本市教育委員会 2015 『殿村遺跡第 5 次発掘調査報告書』
森田 勉 1982 『14～16 世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2
水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学』
2014 『戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像—十五世紀中葉—十六世紀中葉を中心に—』『国立歴史民俗博物館研究報告』182
横田賢次郎・森田 勉 1978 『大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—』『九州歴史資料研究論集』4

2 土製品 (第7表、図版48、写真図版22)

本調査では、中世の遺構や整地土などから19点出土している。内訳は瓦2点、土鍾5点、羽口5点、粘土塊7点で、全点を観察表に掲載した。実測図は図化可能な瓦1点と土鍾5点に掲載した。1は須恵質の平瓦破片である。布目痕が認められ、古代に属する可能性が高い。破断面が著しく摩耗している。図化し得なかった1点は燻瓦の小破片で、近世以降に属するものである。軒椼瓦の小包部に連珠紋もしくは巴紋の一部が残存する。中世の整地土と遺構からの出土品だが、いずれも混入品である。

土鍾は土師質の焼成品で、中世に属するものである。点数は少ないが、管状で最大径が中程にある2・3・6とやや細長い球状を呈する4・5の2種に分類できよう。

羽口はいずれも小破片で、全形を伺えるものは無い。1点に溶滓の付着と被熱による多数の気泡が認められる。粘土塊は土師質の焼成品で、球状のものと板状のものがある。いずれも破片で、原形を留めるものは無く、用途は不明である。

3 石器・石製品 (第5表、図版48・49、写真図版20)

今回の調査では、合計30点の石器・石製品が出土した。器種の内訳は、石鉢1点、硯5点、砥石5点、礮石4点、火打石6点、石鎌2点、磨・凹石1点、石核2点、微細剥離ある剥片1点、剥片1点、碎片1点、石筆1点である。中世に帰属する可能性のあるものを中心に14点図示し、概要を記す。それ以外のものは一覧表を参照されたい。石器・石製品の帰属時期は共伴する土器に準ずるものとする。なお、実測図中における砥面は、断面図に矢印を付し表現した。新欠は白抜きとした。

石鉢 (1)

1は、試掘8トレンチ内の土43で出土した。大きく破損しているが、底部近くの器体の一部であるとみられる。内面はあまり磨滅しておらず、搦鉢として使用したとすれば、使用頻度が低かったと考えられる。

硯 (2)

2は、頁岩製で、海部側が欠損した状態で試掘8トレンチ内の土31で出土した。欠損しているものの、内外面における平面形は長方形を呈するとみられ、側面は斜め上方に傾斜する。また、底部裏面は平坦である。水野氏の石硯編年⁽¹⁾によればI Acに分類でき、15世紀代の資料と考えられる。

図示していないが、2以外にも硯と思われる小破片が4点出土している。いずれも硯に使用される石材を用い、整形時にできた線状痕が観察されるため、硯と推定される。

砥石 (3～7)

全点図示した。3は、4面に砥面が観察でき、小口面には、整形痕がみられる。両側面は湾曲した面をもち、表・裏面に比べ摩耗が弱い。石質から中～仕上げ砥が想定される。4は、楕円形の自然礫を素材にし、表・裏面を使用している。粗い砂岩製であることから粗砥に分類できる。5は、長軸に1/2程度欠損している。表面は湾曲が強く、使用頻度が高かったと思われる。側面には、斜めの線状痕が若干観察でき、整形痕の可能性はある。石質から中～仕上げ砥が想定される。6は、表・裏面がわずかに湾曲している。側面に湾曲はみられないが、研ぎ跡と思われる線状痕が観察できる。石質から中～仕上げ砥が想定される。7は、表・裏面が比較的強く湾曲している。側面には整形痕と思われる平行する複数の線状痕がみられる。

礮石 (8～11)

すべて2次6トレンチから出土している。8・9・11は黒色の粘板岩製で、平面形は楕円形を呈す。10は、砂岩製で、色調は灰色に近く、他の出土礮石よりも薄く整形されている。平面形は楕円形を呈す。

火打石 (12～14)

6点出土した内の、使用痕が明瞭に観察できる3点を図示した。12は、チャート製で2縁辺に使用痕跡

が観察される。13は、石英製で、3縁辺に使用した痕跡がみられる。石材の違いによるものであろうか、火打ちに使用した縁辺はチャート製のものに比べ摩耗が強い。14は、チャート製で、使用痕跡である稜線のツブレが顕著に観察できる。重量が67.3gと比較的重く、再加工作の形跡がみられないため、使用当初の形態を留めている可能性がある。近世ではあるが、小林（1993）によると、江戸遺跡の出土の火打石の分析から、購入時は50～60gあったとされる⁽²⁾。

<参考文献>

- 1 水野和雄 2007 「石硯」『季刊 考古学』第99号 株式会社雄山閣
- 2 小林 克 1993 「江戸の火打石 —出土資料の分析から—」『史叢』第50号 日本大学史学会

4 金属製品（第6表、図版50・51、写真図版21）

(1) 概要

金属製品は134点出土し、その内訳は鉄製品110点、銅製品9点、銭貨15点である。その他、鉄滓が306.3g出土している。これらの出土地点・器種・寸法等については一覧表を参照されたい。

器種は、鉄製品が刀・刀子・紡錘車・石突・釘・火箸・鉸具・轡・容器・その他不明品、銅製品が刀装具・小札・煙管・その他不明品、銭貨が鉄銭・銅銭である。その内、比較的残存状態の良好なもの、特徴的なものを中心に35点を図示している。遺物の記載にあたっては図番号を使用しているが、実測図・拓本の掲載ができなかったものについては一覧表の通番を用いて「ID数字」で記載している。また、遺物の形状等については、X線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

なお、一部の遺物については、長野県立歴史館の白沢勝彦専門事に鑑定を依頼した。

(2) 鉄製品

刀 or 小刀 (1)

1点が出土し、図示している。1は刃部と棟部が確認できる。片端部に折り返しがあるようにも見えるが、鎌とするには刃部が比較的厚いことから、刀と判断した。

刀子 (2・3)

5点が出土し、2点を図示している。2は刃部が確認できないことから、茎部の一部と判断した。片端部が残存していることから、茎尻と思われる。3は切先が残存する身部と思われる。幅が減じている片端が破断面なら火打金具の可能性があるが、錆化による膨張が激しく特定は困難である。

紡錘車 (4)

1点が出土し、図示している。4は紡輪の一部と推定される。湾曲して凸状の形状を呈している。

石突 (5・6)

2点が出土し、ともに図示している。5は円錐形を呈し、やや湾曲している。内側は空洞で、先端が欠けている。6は円錐形を呈し、先端が尖る。開口部側の端部が一部破損している。

釘 (7～17)

68点が出土し、11点を図示している。頭部が残存するものは37点ある。頭部の形状は、鑿の使用の有無、基部上端の折り曲げ・折り返しの有無が錆化による膨張で不明瞭な上、X線撮影を行っていないことから、特定が困難である。小松氏により、頭部形状による釘の分類が行われているが、前述の理由から今回は分類を明確には行わないこととした。以下、現状から推定可能な点のみ述べていく。8・15は頭部先端を尖らせていることからⅡ類と推定される。12は、鑿の使用の有無は不明であるが、基部上端を叩きのぼして曲げたことが確認できることから、ⅣまたはⅤa類と推定される。10・14は錆化による膨張で頭部の折り曲げ・

折り返しは確認できないが、片面に膨らみを帯びる形状から Vb または VI 類の可能性が考えられる。このような片面に膨らみを帯びる形状が最も多く確認されている。

火箸 (18)

1 点が出土し、図示している。18 は円形の棒状で、徐々に幅が減じている。紡錘車の紡軸の可能性もあるが、径が太すぎるか。

鉸具 (19・20)

2 点が出土し、ともに図示している。19 はほぼ直角に屈曲している棒状であり、現存短辺は長方形、現存長辺は方形の断面をしている。形状から縁金と推定される。20 は断面が方形の棒状で、片端部が屈曲している。反対側の端部には円形の刺離痕が確認でき、何らかの接続部であった可能性が示唆される。形状から刺金と推定される。

轡 (21)

1 点が出土し、図示している。21 は 2 本の棒状製品を撻り合わせたもので、湾曲している。銜の引手と推定されるが、引手は直線状のため、原形は直線状であった可能性がある。

容器 (22・23)

2 点が出土し、ともに図示している。22 は脚部・口縁部が一部残存する鋳造品である。器高が低く、小型なことから香炉等の可能性が考えられる。23 は同一個体と推定される鋳造破片が多数出土したため、最大破片のみを図示した。口縁部は残存しない。最大破片から径を推定したが、上下が不明な上に変形している可能性もあり、正確さに欠ける。鍋または釜と推定される。

不明(24) 22 点が出土し、1 点を図示している。24 は断面長方形の板状鍛造品で、両端部が残存している。刃部は認められず、先端は丸みを帯びている。先端が丸みを帯びるものには楔があるが、反対側の端部に敲打による変形が確認できないため、断定は困難である。ID59 は先端部が欠損している板状鍛造品で、形状は 24 と類似している。刃部は認められない。片端部には敲打痕が確認できることから、楔の可能性が考えられる。

(3) 銅製品

刀装具 (25・26)

2 点が出土し、ともに図示している。25 は棒状の素材を折り返した製品である。一部変形しているが、楕円形を呈すると推定される。両端部は突出しており、端部同士を接合させて装着したと思われる。26 は J 字形に折れ曲がる薄い板状製品である。欠損が激しいが残存部の様相から、形状は長楕円形と推定される。

小札 (27)

1 点が出土し、図示している。27 は片面の縁に漆が付着し、細かく連続して波打つ。漆は縁にのみ塗られたものなのか、重ねられた何らかの部品に隠れて、露出する縁にのみ付着したのかは不明である。

煙管 (28・29)

3 点が出土し、2 点を図示している。28 は吸口の一部のみが残存する羅宇煙管である。羅宇の木質が残存することから、比較的新しいものの可能性がある。29 は吸口が完形で残存する羅宇煙管である。肩付がないため、古泉氏による分類の IV～VI 類のいずれかにあたる。小口付近に「企火」の刻印がされている。

不明 (30)

3 点が出土し、1 点を図示している。30 は薄い板状製品で、両端の幅が減じている。上下、表裏ともに不明である。ID27 は棒状製品の片端部が残存し、球状を呈している。中山 38 号古墳・カニホリ西遺跡から類似品が出土しており、弓弭付近に取付けた飾り金具の可能性もある。

④ 銭貨

鉄銭 (31)

1点が出土し、図示している。31は中央の穴が錆化により塞がるが、方形の痕跡が見られる。錆化による膨張が激しく、表裏の文字等の有無は不明である。

銅銭 (32～35)

14点が出土し、4点を図示している。朝鮮銭の朝鮮通宝1点、宋銭の皇宋通宝3点、治平元宝1点、熙寧元宝1点、聖宋元宝1点、唐銭の開元通宝2点、不明5点の内訳である。

<参考文献>

小松 望 1989 「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2— 吉田川西遺跡』長野県教育委員会

古泉 弘 2001 「煙管」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

宮島義和 2003 「金属製品」『松本市文化財調査報告No.168 中山古墳群・鎌形原遺跡・鎌形原砦址—中山霊園拡張に伴う第1～IV次発掘調査報告書—』松本市教育委員会

三村竜一 2008 「金属製品」『松本市文化財調査報告No.196 中山古墳群 14・15 カニホリ東・西遺跡』松本市教育委員会

5 木製品 (第8表、図版52・53、写真図版22)

本調査で出土した木質遺物は80点ほどあるが、欠損の激しいものがほとんどである。中には削りくずや端材も見受けられ木材加工が行われた痕跡が見受けられる。しかしそれに見合う製品がほとんどないのが特徴である。よって本項においてはある程度形を成している木製品を抽出してその概要を述べることにする。

杭 (1)

広葉樹の丸木をみかん割ておよそ8分割したものである。先端を尖らせていることから杭と判断した。上部は欠損しているが、焼けているのは腐食防止のための可能性がある。

板 (2・3・5～7)

全体的に粗い加工で木表・木裏ともに割りっぱなしのものがほとんどである。その中で2は一部欠損しているが完形品に近く厚手で、「板材」と呼ぶのにふさわしいものである。

有頭状木製品 (4)

小型の角材の上端を一方からの削り込みによって頭部を作り出している。木口・木端ともに削りが行われており、完形品と思われる。

短冊状板 (8・9)

長さ10cm未満の小型で薄手の板である。8は両木口が欠損しているが木表に黒漆と思われるものが塗られている。9は木口に側面削りが施され整形もていねいである。

串状木製品 (10～15)

主に削り出しによって整形され、先端を尖らせた小型の木製品である。殿村遺跡では類似した形状のものが多量に出土しており、形代を伴うことから串状木製品としている。12は柁目板の木端を先細りに削り込んだもので、串状木製品としたものの中ではやや整形法が異なる。

建築部材 (16)

下部が欠損しているため長さは把握できないが、大きさから梁材などの建築部材であったものと推定される。木裏以外にはノミあるいは手斧によると思われる加工痕が認められる。特に木口の部分は建築部材の加工としては非常に細かい。下部が欠損した後の2次転用の可能性もある。

参考文献

※第Ⅱ章第1・2節、第Ⅲ章第1・2節、第Ⅵ章第1節の参考文献を取録

- 内堀信雄ほか 2006 『守護所と戦国城下町』高志書院
- 小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』第46巻3号
1997 「城下町、館・屋敷の空間と権力表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集
- 河西克造 2001 「長野県内の武田系城郭調査」『武田系城郭研究の最新線』資料集 山梨県考古学会
2004 「信濃国の守護所—政治動向と守護所比定地—」『守護所・戦国城下町を考える』資料
- 唐澤貞次郎 1926 「林本城址」『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯
- 木下 守 2010 「古峯信仰の流行について」『長野県民俗の会通信』第216号
- 後藤芳孝 1996 「小笠原氏のもとで」『松本市史』第2巻歴史編1
- 齋藤慎一 2006 『中世武士の城』吉川弘文館
- 笹本正治 1996 「戦国争乱のなかで」『松本市史』第2巻歴史編1
- 関沢 聡 2013 「林城」「桐原城」「山家城」『長野の山城ベスト50を歩く』
- 中川治雄 1988a 「林城—信濃小笠原氏の居城—」『信濃の山城』郷土出版社
1988b 「歴史編」「中信地区の中世城館」『定本国宝松本城』郷土出版社
- 中川治雄他 2008 『鎌田地区の歴史と文化』
- 中野市教育委員会 1993 『高梨氏館跡発掘調査報告書』
- 長野県教育委員会 1983 『長野県の中世城館跡分布調査報告書』
- 長野県町村誌刊行会 1936 『長野県町村誌』南信篇
- 長野市教育委員会 1991 『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
- 花岡康隆 2015 「総論信濃小笠原氏研究の軌跡と成果」『信濃小笠原氏』戎光祥出版
- 浜野安則 2008 「物くさ太郎のモデル像について—帰ってきた小笠原氏—(上・下)」『信濃』第60巻10・11号
- 原 明芳 1990 「南方遺跡出土資料からみた松本平の中世前半の生活用具の様相」『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡緊急発掘調査報告書』
- 福原圭一 2013 「埴原城」『長野の山城ベスト50を歩く』
- 前川 要 1995 「当該期の平地方形館の位置付けと「方形館体制論」の提唱」『江馬氏城館跡—下館跡発掘調査報告書I—』
- 松本市 1996 『松本市史』第2巻歴史編1
- 松本市教育委員会 2010 『長野県松本市桐原城址・海岸寺遺跡発掘調査報告書』
1988 『松本市林山腰遺跡 県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書』
2004 『長野県松本市林山腰遺跡Ⅱ発掘調査報告書』
1990 『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡緊急発掘調査報告書』
1998 『新編松本のたから』
2014 『長野県松本市県町遺跡第15次発掘調査報告書』
- 宮坂武男 2008 『図解山城探訪』第5集
- 三島正之 1988 「小笠原領域の山城と武田氏」『中世城郭研究』2
1989 「丹生子城をめぐる—安曇・筑摩郡域の山城に関する一試論」『信濃』第41巻11号
1989 「武居城をめぐる」『中世城郭研究』3
1993 「塩尻市南部の山城—削平地遺構をめぐる—」『中世城郭研究』7
1996 「筑摩・安曇郡の山城」『信濃』第48巻10号
2000 「戦国期城郭の石垣—長野県の山城の石垣—」『第17回全国城郭研究者セミナー テーマ「戦国城郭の石垣」』資料
- 水澤幸一 2014 「平地の方形館」『中世城館の考古学』高志書院
- 村石正行 2010 「十四世紀内乱期の守護所と善光寺周辺—小笠原氏更級郡進出を素材にして—」『善光寺の中世』高志書院

第V章 自然科学分析

第1節 井川城址試掘・第1次調査出土試料の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

本報告では、井川城址で実施された試掘調査および発掘調査により採取された木質資料や土壌を対象に、資料の年代、堆積（水城）環境、木質資料の樹種等の検討を目的として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、樹種同定を実施した。

2 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、試掘調査および1次調査の際に出土した木質資料4点（試料番号1～4）である。これらの木質資料の観察では、試料番号1（試掘7tr西 板材1A-北）が乾燥・収縮が認められる（柾目）板状の木片、試料番号2（試掘7tr西 42層 木）が輪切り状の芯持丸木であり、横断面（木口）は約6cm×約4.5cmを測る。また、試料番号3（試掘8tr 土9 木片№3）が削出棒状を呈し、一部に炭化が認められる資料、試料番号4（1次1tr柱4№2木）が乾燥・収縮が認められる（柾目）板状の木片が確認された。

(2) 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセットや超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正

プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	δ^{13C} (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果						相対比	測定機関 CodeNo.
				σ	cal AD 1,322 - cal AD 1,348	cal AD 1,392 - cal AD 1,406	cal BP 628 - 602	cal BP 558 - 544	2σ		
試料番号1 井川城試掘 7tr 西 板材1A-北	580 ± 20	21.68 ± 0.38	577 ± 20	σ	cal AD 1,322 - cal AD 1,348	cal AD 1,392 - cal AD 1,406	cal BP 628 - 602	cal BP 558 - 544	0.672	IAAA- 133099	
				2σ	cal AD 1,310 - cal AD 1,360	cal AD 1,387 - cal AD 1,413	cal BP 640 - 590	cal BP 563 - 537	0.660		
試料番号2 井川城試掘 7tr 西 42 層木	420 ± 20	27.42 ± 0.43	420 ± 21	σ	cal AD 1,442 - cal AD 1,464	cal AD 1,464 - cal AD 1,488	cal BP 508 - 486	cal BP 515 - 462	1.000	IAAA- 133100	
				2σ	cal AD 1,435 - cal AD 1,488	cal AD 1,604 - cal AD 1,606	cal BP 515 - 462	cal BP 346 - 344	0.994		
試料番号3 井川城試掘 8tr 上 9 木片No.3	960 ± 20	22.95 ± 0.35	962 ± 20	σ	cal AD 1,025 - cal AD 1,046	cal AD 1,092 - cal AD 1,120	cal BP 925 - 904	cal BP 858 - 830	0.410	IAAA- 133101	
				2σ	cal AD 1,042 - cal AD 1,147	cal AD 1,140 - cal AD 1,147	cal BP 929 - 896	cal BP 810 - 803	0.498		
試料番号4 井川城1次 1tr 柱4No.2木	640 ± 20	-18.96 ± 0.30	636 ± 20	σ	cal AD 1,296 - cal AD 1,312	cal AD 1,359 - cal AD 1,387	cal BP 654 - 638	cal BP 591 - 563	0.344	IAAA- 133102	
				2σ	cal AD 1,288 - cal AD 1,323	cal AD 1,346 - cal AD 1,393	cal BP 662 - 627	cal BP 604 - 557	0.403		

(3) 結果および考察

木質資料の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、試料番号1(試掘7tr 西 板材1A-北)が580 ± 20yrBP、試料番号2(試掘7tr 西 42 層木)が420 ± 20yrBP、試料番号3(試掘8tr 上 9 木片No.3)が960 ± 20yrBP、試料番号4(1次1tr 柱4No.2木)が640 ± 20yrBPである。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果(1 σ)は、試料番号1(7tr 西 板材1A-北)がcalAD 1,322 - calAD 1,406、試料番号2(7tr 西 3f-2層木)がcalAD 1,442 - calAD 1,464、試料番号3(8tr 上 9 木片No.3)がcalAD 1,025 - calAD 1,147、試料番号4(1次1tr 柱4No.2木)がcalAD 1,296 - calAD 1,387を示す(表1)。

以上の暦年較正結果(1 σ)を参考とすると、試料番号3(8tr 上 9 木片No.3)は他の3試料と比較してやや古く11世紀前半から12世紀中頃に相当する。一方の3試料は、13世紀末頃から14世紀後半頃(試料番号4)、14世紀前半から15世紀初頭頃(試料番号1)、15世紀中頃(試料番号2)にそれぞれ相当し、試料番号3を含めおよそ中世前半～後半までの年代観が推定される。

3 珪藻分析

(1) 試料

試料は、試掘調査4trに認められた堆積層(1～24層)より採取された土壌11点(試料番号1～11)である。試料の観察では、1～2層(試料番号1)が現生の植物根が認められ、管状酸化鉄が発達する褐色灰色シルト質(極細粒)砂、3層(試料番号2)が管状酸化鉄が発達する褐色灰色シルト質(細粒～極細粒)砂、9～10層(試料番号3)が植物根が混じる灰色シルト、11～13層(試料番号4)が灰色(極細粒)砂質シルト、14～16層(試料番号5)が灰色(極細粒)砂、17層(試料番号6)が灰色極細粒砂の偽塊(ブロック)が混じる有機質暗褐色灰色シルト、18層上(試料番号7)が植物遺体が混じる暗(褐)灰色シルト、18層下(試料番号8)および19層(試料番号9)が暗褐色灰色シルト、24層上(試料番号10)が微細な炭化物が微量混じる暗褐色灰色シルト～粘土、24層下(試料番号11)が暗褐色灰色シルト～粘土からなる。

(2) 分析方法

土壌（湿重約 5g）をピーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満ちし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行う。その後検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリューラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したのものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、標準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachary (1987) 等を参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類する。結果は、生態分類も含め、同定・計数結果の一覧表、及び主要珪藻化石群集の分布図として表示する。

(3) 結果

結果を表 2、図 1 に示す。井川城試掘の 4tr（以下、試掘 4tr）の各層位より採取された試料は、すべてにある程度の珪藻化石が含まれており、ほとんどの層位から 100 個体以上が検出された。化石の保存状態は、いずれの試料も半壊した殻は認められるものの、溶解の痕跡は顕著には認められないことから、状態としては、平均してみると不良である。

検出された分類群は、淡水生種を主として、極低率に海水～汽水生種、汽水生種および淡水生種が認められた。試料毎の産状をみると、試料番号 11～6 は、淡水生種の流水不定性種を主とするが、流水性種および止水性種もそれぞれ 10～20% を含む群集が認められた。次に試料番号 5 では、産出率が低く、100 個体には満たないものの、流水性種あるいは流水不定性種（陸生珪藻含む）が検出された。さらに試料番号 4.3 には、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、淡水生種の流水不定性種を主とするが、流水性種あるいは止水性種をそれぞれ 10% 含む群集が認められた。続く試料番号 2 は、淡水生種主体の群集であるが、流水性種が卓越した群集が産出している。最後に試料番号 1 は、産出率が低く、1 プレパラートから 31 個体が検出されたのみである。認められた種群は、前述の試料番号 5 に近似しており、淡水生種の流水性種あるいは流水不定性種（陸生珪藻含む）が検出された。

(4) 考察

試掘 4tr の各層位の珪藻化石群集は、その産状から、5 つの化石帯（下位から I～V 帯）が設定される。以下に、化石帯毎に下位から順に珪藻化石の産状と推定される堆積環境について述べる。

ア 1 帯（24 層下～17 層；試料番号 11～6）

淡水生種の流水不定性種を主として、流水性種、止水性種あるいは陸生珪藻をそれぞれ 10～20% 含む群集が認められた。特徴的に認められた種は、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*（試料番号 8）、淡水生種で流水性種の *Caloneis bacillum*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Encyonema silesiacum*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Fragilaria ulna*、*Gomphonema parvulum*、止水性種の *Diploneis finnica*（試料番号 8）、*Sellaphora americana*、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

淡水～汽水生種の *Ropalodia gibberula* は、好塩性種であり、*Amphora ovalis* var. *affinis* とともに海成層から検出された例も多く認められる(安藤・南雲,1983; etc.)。また、田中(1987)によると、群馬県で発掘された古代水田からも本種が多産しており、当時の水田土壌に、多量に出現したことは、水田の水が塩類を豊富に含んでいたことを示しているとしている。さらに、奥平温泉(田中・中島,1985)、四万温泉(福島,1950)等の塩類を多く含んだ温泉からの報告も多い。また、Cholnoky(1968)によれば、本種は高 pH の水域を好むとしている。本種は、基本的には淡水生種と考えられるため、海域には生育できないと思われるが、前述のように塩分に対しては、他の種群にくらべて耐性が高いため、沿岸部の海水の影響がおよんで、塩分濃度が高くなる後背湿地をはじめ、湿地や河岸などで比較的、水が停滞することの多い場所(淀み)等の水中の塩類濃度が高い水域に特徴的に認められる。このような水域は、他の淡水生種群は生育しにくいいため、相対的に生育率(生産力)が高くなり、必然的に群集中で占める割合が高くなることが多い。次に、淡水生種で流水性種の *Caloneis bacillum* は、流水中のコケ上でしばしば優占するとされる(Krammer & Lange-B.,1986)ほか、アルカリ性の止水域でも多く見られるとされる(Patrick and Reimer,1966)。他方、淡水生種で流水不定性種の、*Amphora ovalis* var. *affinis* は、環境に対する適応能力が高い種であり、基本的に淡水生であるが、汽水～淡水のさまざまな環境の水域から認められる。また、殻のシリカに沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい種である。同じく、流水不定性種の *Encyonema silesiacum* は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。*Eunotia pectinalis* var. *minor* は、普通の水域にも認められるが湿地に多産する種とされる(埼玉県教育委員会,1962)。*Fragilaria ulna* は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一つで広範のさまざまな水域から比較的、高率に見出される。同じく、流水不定性種の *Gomphonema parvulum* は、流水に対して不定だけでなく、塩分濃度や pH に対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe(1995)は、広域適応種としている。ただし、経験的には、流水域に多産することが多いことから、以前は流水性種に含まれていた種である。さらに、止水性種の *Diploneis finnica* が貧塩不定、好酸性、止水性であり、湿地等で多産する場合が多い種である。止水性種の *Sellaphora americana* は、池沼の周縁部の浅瀬や河川の淀み等の止水域で爆発的に生育することがある種である。同じく、止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky(1968)は最適 pH を 6.8 に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。最後に、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉,1986)である。特に、本種は、離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる群集とされる(伊藤・堀内,1989;1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占(70～80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

本帯は、産出種数が比較的多く、極端に多産または卓越した種(20%以上)は認められない。そのため、それぞれの種の産出率は分散した感がある。このような群集は、概ね混合群集と考えられる。したがって、以上のように、卓越した種群が河川性の種群と止水性あるいは湿地性の種群の混合群集であることを考え合わせると、本帯の堆積時の環境は、河川水の流れ込みの影響が強い低地などの湿地化した場所のような環境下にあったものと推定される。

イ II帯(14～16層;試料番号5)

II帯は、珪藻化石が検出されたものの、堆積物中の絶対量としては少なく、1プレパラートから検出された個体数は33個体である。認められた化石の保存状態は、半壊した殻が多く、一部の殻には溶解の痕跡が認められることから、状態としては極々不良である。検出された群集は、ほとんどが淡水生種であり、淡水

生種以外は淡水～汽水生種を極低率に伴う程度である。珪藻化石の検出個体数が少ないために、堆積環境の推定を行うのは危険であるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。

少ないながら検出された種群は、湿地性および沼沢地性の種群である。一方、総個体数が少ない割に産出種数は多い感があり、混合群集の様相を呈している。このことから、本試料の堆積時の環境は、基本的には概ね周辺からの流れ込みも多い湿地様の環境にあったと思われるが、水の供給は不安定であるだけでなく、地下水位の低下等により、好気的な環境下にあったことも多かった可能性がある。

ウ III帯 (9～13層試料番号9～10)

III帯は、淡水生種の流水不定性種を主として、流水性種および止水性種をそれぞれ10～20%含む群集が認められた。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水性種の *Fragilaria vaucheriae*、*Navicula elginensis* var. *neglecta*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Encyonema silesiacum*、*Fragilaria ulna*、止水性種の *Cyrosigma spencerii*、*Neidium iridis*、*Stauroneis phoenicenteron*、*Staurosira construens* 等である。

以上の特徴種の生態性あるいは生育環境(前述していない種)について述べると、まず、流水性種の *Fragilaria vaucheriae* は、安藤(1990)によれば、河川の中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘、扇状地、自然堤防および後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現する種群とされ、中～下流河川指標種群と呼ばれる。同じく、流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* は、河川や溝等の定常的な水の流れがある水域の基物(礫、水草、大型の藻類)に付着生育する種である。一方、止水性種の *Cyrosigma spencerii* は、貧塩不定、好アルカリ性、好止水性種であり、池沼の縁辺部や沼沢地あるいは湿地等の水の流れに影響されにくい水域に生育している。同じく、止水性種の *Neidium iridis* は、嫌塩性、好酸性、止水性とされ、水質が弱酸性の湿原や湖等に特徴的に生育することが知られている。また、安藤(1990)によれば、水深が1m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地に特徴的に生育することから、沼沢湿地付着性種とされる。*Staurosira construens* は池沼等の止水域に広く認められ、比較的広域に生育する種である。群集全体の特徴としては、陸域の中で様々な環境に生育する種群が認められたことから、混合群集である。

以上のような特徴的に認められた種群とその他の混合群集を構成する種群の産状から、本帯の堆積時は、河川水の影響が強い低地部の湿地のような環境下にあったものと推定される。

エ IV帯 (3層; 試料番号2)

IV帯は、淡水生の流水性種と流水不定性種を主として、止水性種あるいは陸生珪藻を伴う種群が認められた。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水性種の *Cymbella turgidula*、*Navicula elginensis* var. *neglecta*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Gomphonema parvulum*、*Sellaphora pupula*、止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

以上の特徴種の生態性あるいは生育環境(前述していない種)について述べると、流水性種の *Cymbella turgidula* は、河川等の流水域に生育する種であり、中～下流河川指標種群と呼ばれる(安藤,1990)。中～下流河川指標種群は、河川の中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘、扇状地、自然堤防および後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現する種群とされる。他方、流水不定性種の *Sellaphora pupula* は、塩分に対する適応性、pHに対する適応性、流水に対する適応性はいずれも不定性であり、かなり広範な水域に認められることから広域頒布種と呼ばれる。また、汚濁した水域に特徴的に認められることから好汚濁性種にも位置付けられている(Asai and Watanabe,1995)。群集全体の特徴としては、本帯も共存しえない種群が共産したことから、混合群集である。

以上のような多産種の生態性と他の希産種の産状を考え合わせると、本帯の堆積時も、基本的には沼沢湿地のような環境下にあったと思われるが、この時期は河川水の影響が強まったものと推定される。

オ V帯 (1～2層; 試料番号1)

V帯は、珪藻化石が検出されたものの、堆積物中の絶対量としては少なく、1 プレバートから31 個体検出されたのみである。化石殻の保存状態は、半壊した殻が多いことから、状態としては不良である。認められた分類群は、淡水生種を主として、極々低率に淡水～汽水生種を伴う群種で構成される。本帯については、産出率(産出種数)が低いことから、堆積時に生育した群集の大半が検出されたとは考えにくく、データとしては歪曲している可能性が高い。そのため、検出された種群から無理に堆積時の環境を推定することは困難であるが、検出された種群とその産状等から若干の考察を試みると、以下のように考えられる。

少ないながら検出された種群は、流水性種と陸生珪藻である。また、産出率は低いものの、生育時に共存しえない種群が共産したことから、群集としては混合群集である。以上のことを考え合わせると、本試料の堆積時の環境は、基本的には好気的環境下にあったと思われるが、少なからず河川水の影響を受けた可能性示唆される。ただし、化石が全く検出されないわけではなく、産出率が低い堆積物は、静穏環境下にあったとは考えにくい。このような堆積物は、概して堆積速度が速い場合が多い。したがって、珪藻化石の産状に着目して考えた場合、本帯が採取された堆積層は、河川の氾濫等の一過性の堆積によってもたらされた可能性がある。

4 樹種同定

(1) 試料

試料は、井川城試堀および1次調査で出土した木質資料6点(試料番号1～6)である。試料の詳細は結果とともに表3に示す。なお、これらの資料には1章の放射性炭素年代測定と同一名称のものが含まれるが、いずれも樹種同定用として別途供されている。

(2) 分析方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバートとする。プレバートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にす。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にす。

(3) 結果

同定結果を表3に示す。木材は、針葉樹3分類群(マツ属複雑管束亜属、ヒノキ、ヒノキ科)と、広葉樹1分類群(エノキ属)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属(Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセルウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ(Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・エノキ属 (Celtis) ニレ科

環孔材であるが、いずれの試料も晩材部が不明瞭である。孔圍部は1-3列、孔圍外でやや急激に径を減ずる。晩材部の道管が観察できる部分では、小径の道管が塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる様子がみられる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。晩材部が不明瞭な組織の特徴から、いずれも根材の可能性がある。

表3 樹種同定結果

試料番号	遺跡名・次数	地点	遺構・層位・試料名	形状等	種類 (分類群)
1	井川城試堀	7tr 西	板材 1C	板状(板目)	ヒノキ科
2	井川城試堀	7tr 西	42層 木	芯持材(径約8.5cm)	エノキ属
3	井川城試堀	8tr	土9 木片 №3	削出棒状-板状(板目)	ヒノキ
4	井川城1次	1tr	柱4 №1 木	板状(板目)	マツ属複雑管束亜属
5	井川城試堀	7tr 西	42層 サンプル1	芯持丸木(径約2.5cm)	エノキ属
6	井川城試堀	7tr 西	42層 サンプル2	芯持丸木(径約1cm)	エノキ属

(4) 考察

樹種同定に供された木質資料6点(試料番号1～6)には、針葉樹のマツ属複雑管束亜属、ヒノキ、ヒノキ科と、広葉樹のエノキ属の、計4分類群が認められた。マツ属複雑管束亜属は、いわゆるニヨウマツ類であり、本州ではアカマツとクロマツとが分布し、アカマツは二次林等に生育する常緑高木、クロマツは海岸砂丘等に生育する常緑高木である。ヒノキは、山地や丘陵の尾根等に生育する常緑高木である。エノキ属は、沖積地の河畔や自然堤防上、後背湿地等に生育する落葉高木である。また、これらの分類群の材質は、マツ属複雑管束亜属の木材は軽軟であるが、強度や保存性が比較的高い。ヒノキは木理が通直で割裂性・耐水性が高い。ヒノキ科は、ヒノキの他にサワラ、アスナロ、クロベ等の有用材を含み、いずれも木理が通直で割裂性や耐水性が比較的高い。エノキ属の木材はやや重硬な部類に入るとされる。

試料別にみると、試堀7tr西の板材(試料番号1)はヒノキ科、試堀8trの木片(試料№3)にはヒノキが認められた。本地域では、周辺に自生地があることからヒノキ属のサワラの利用が多い傾向があるものの、ヒノキも自生している。用途の詳細は不明であるが、いずれも板材を呈することから、加工性や耐水性等を考慮した木材利用が推定される。また、1次調査の1tr柱4(試料番号4)はマツ属複雑管束亜属であった。柱とされることから、強度や保存性等が意識した木材の利用が考えられる。

試堀7tr西から出土した資料3点(試料番号2,5,6)は、芯持材あるいは芯持丸木であり、径は1～8.5cmと異なるものの、いずれもエノキ属に同定された。これらのエノキ属は、一般的な幹材に比べて晩材部が不明瞭であったことから、根材の可能性がある。遺跡の立地および根材の可能性のあることを考慮すると、調査地周辺にはエノキ属が生育していたことが推定される。

引用文献

- Asai,K.& Watanabe,T.1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa,Diatom, 10,35-47.
- 安藤一男.1990.淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用東北地理 42 (1990) .73-88.aN.N.Tohoku Geogr.Assoc.
- 安藤一男・南雲 保.1983.埼玉県, 荒川低地沖積層のケイソウ. 日本歯科大学紀要,1983 (12),241-249.
- Cholnoky,B.J.1968.Die Ökologie der Diatomeen in Binnen Gewässern.Lehre.Desikachary,T.V.1987. Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation,Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited,328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras 600044.1-10,Plates:22-400A.
- Desikachary,T.V.1987,Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited,328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras-600044. 1-13,Plates:401-621.
- Foged,N.1957,Diatoms from Rennell Island.The Natural History of Rennell Islands, British Solomon Islands,Copenhagen,37-97.
- Foged,N.1964,Freshwater Diatoms from Spitsbergen.Toromos Museums Skrifter1,1,204.
- 福島 博.1950.四方温泉の藻類植生. 植物誌.25(8),173-178.
- 林 昭三.1991.日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- Horst Lange-Bertalot.2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA,Annotated diatom micrographs,Witkowski, A.,Horst Lange-Bertalot,Dittmer Metzkein:Diatom Flora of Marine Coasts Volume1 219 pls.4504figs,925pgs.
- Hustedt,F..1930.Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part1,920p.
- Hustedt,F.1937-1938.Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java,Bali und Sumatra. I ~ III Arch.Hydrobiol. Suppl.15,131-809p 1-155p,274-349p.
- Hustedt,F.1959.Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part2,845p.
- Hustedt,F.1961-1966.Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeres-gebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part3,816p.
- 伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料.31, 京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料.32, 京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料.33, 京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料.34, 京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料.35, 京都大学木質科学研究所.47-216.
- 伊藤良永・堀内誠示.1989.古環境解析から見た陸生珪藻の検討 一陸生珪藻の羅分一. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集.17.
- 伊藤良永・堀内誠示.1991.陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌.6,23-44.
- 小杉正人.1986.陸生珪藻による古環境の解析とその意義一わが国への導入とその展望一. 植生史研究.1,9-44.
- 小杉正人.1988.珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究.27,(1),1-20.
- Krammer,Kand H.Lange-Bertalot.1985.Navicularaceae.Bibliotheca Diatomologica,vol.9,p.250.
- Krammer,Kand H.Lange-Bertalot.1986.Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa,2(1):876p.
- Krammer,Kand H.Lange-Bertalot.1988.Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2):596p.
- Krammer,Kand H.Lange-Bertalot.1990.Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3):576p.
- Krammer,Kand H.Lange-Bertalot.1991.Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4):437p.
- Lowe,R.L.1974.Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms.In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005.Nat. Environmental Res.Center office of Res.Develop.U.S. Environ.Protect. Agency.cincinnati.1-344.
- Patrick,R. and Reimer,C.W.1966.The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii.Vol.1.688p Monographs of Acad.Nat.Sci.Philadelphia 13.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) .2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修). 海青社.70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.2004JAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- Round, F. E. 1961. The diatom of a core from Esthwait Water. The Phytologist, 60, 43-59.
- 埼玉県教育委員会.1962.埼玉県植物誌. 埼玉県教育科学振興会.289-313.
- 高地 謙・伊東隆夫.1982.因説木材組織. 地球社.176p.
- Stoermer,E.Fand Yang,J.J.1968.A preliminary report on the fossil diatom flora from Lake Huron sediments.Proc. 11th Conf. Great Lake Res.Internat. Assoc.Great Lakes Res.257-267.
- 田中宏之.1987.群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻. 群馬県立歴史博物館紀要.8, 1-20.
- 田中宏之・中島啓治.1985.群馬県老神・奥平・梨木・窟・赤久湯温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ.群馬県立博物館紀要.1985(6),1-22.
- Van Landingham,S.L.1970.Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad Water County,Montana, U.S.A.Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31,449-473.
- Wheeler E.A.,Bass Pand Gasson P.E. (編) .1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修). 海青社.122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.1989JAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

表2 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種	月川域試群 4tr										
	塩分	pH	流水		1~2	3群	9~10	11~13	14~16	17群	18群上	18群下	19群	24群上	24群下
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
<i>Navicula rhychocephala</i> Koestz	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
<i>Navicula viridula</i> (Koetz.) Koestz	Ogh-ind	al-il	r-ph	KU	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nedidium alginum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nedidium amplatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-
<i>Nedidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-h	O	-	-	5	5	1	3	-	-	-	-	1
<i>Nedidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	-	4	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia sigmoides</i> (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	OU	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia sinuata</i> (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	6	-	2	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia acrosphaera</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N.O.U	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>rectangularis</i> Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevistriata</i> (Koetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	4	-	-	2	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	3	-	1	-	-	-	3	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-	1	-	1	1	-	-	-
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	3	6	4	2	-	1	9	2	1	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	4	-	-	-	1	3	-	-	-
<i>Pinnularia schroederi</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	1	-	1	4	2	-	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	OP	3	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-
<i>Pinnularia sudetica</i> (Pflue) M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph	OP	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	N.O.U	-	-	1	-	1	1	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	5	16	17	6	-	5	8	13	16	7
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	OU	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Platohidium lanceolatum</i> (Breb. ex Koetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	KT	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Reimeria sinuata</i> (Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	KT	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	OU	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	2
<i>Rhopalodia quaternaria</i> Skovtsov	Ogh-ind	al-il	ind	OU	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Sellophora americana</i> (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12
<i>Sellophora bacillum</i> (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Sellophora laevissima</i> (Koetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	3	1	3	1	1	-	-	-	-	-
<i>Sellophora papula</i> (Koetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S.U	-	8	4	2	-	-	-	-	-	2	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis laueburgiana</i> fo. <i>angulata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N.O.U	1	7	3	12	1	3	4	1	-	1	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meibster	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	3	-	-	-	2	-
<i>Stauroneis thermicola</i> (Petersen) Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	3	2	2	-	-	-	2	-	1	3
<i>Stauroneis constrictus</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	8	7	-	2	2	-	-	-	-
<i>Sarirella linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sarirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Sarirella robusta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-h	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sarirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
<i>Tabellaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水~汽水生種					0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
汽水生種					0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0

凡例

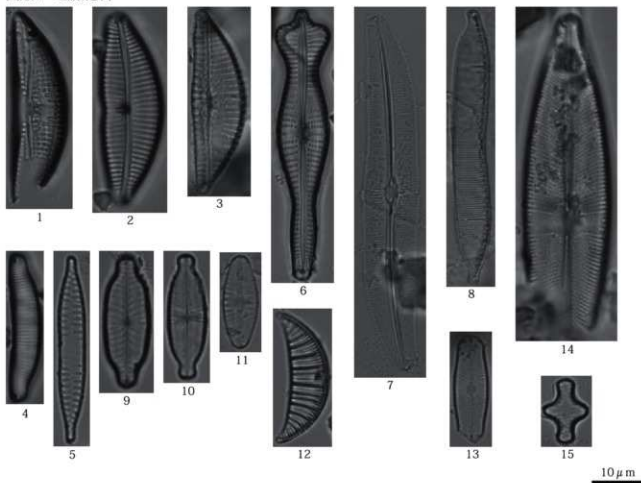
[適応性]

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh: 海水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種
Euh-Meh: 海水生種・汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種
Meh: 汽水生種	ind: pH不定性種	ind: 流水不定性種
Ogh-Meh: 淡水生種・汽水生種	ac-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-lal: 貧塩好塩性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	unk: pH不明種	unk: 流水不明種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk: 貧塩不明種		

[環境指標種]

A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, C1: 海水藻場指標種, C2: 汽水藻場指標種, D1: 海水砂質干潟指標種, D2: 汽水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種, F: 淡水底生種群(以上、小杉,1988), G: 淡水浮遊性種群, H: 河口浮遊性種群, J: 上流性河川指標種, K: 中~下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種群, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢地指標種, O: 沼沢地付着性種, P: 高層沼原指標種群, Q: 陸域指標種群(以上、安藤,1990), S: 好汚濁性種, U: 広適応性種, T: 好清水性種(以上、Asai and Watanabe,1995), R: 陸生珪藻(RA.A群, RB.B群, RE.未区分,伊藤・堀内,1991)

図版1 珪藻化石



1. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (試掘4tr 3層;2)
2. *Cymbella turgidula* Grunow (試掘4tr 3層;2)
3. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G. Mann (試掘4tr 11~13層;4)
4. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (試掘4tr 11~13層;4)
5. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetzing) Petersen (試掘4tr 9~10層;3)
6. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (試掘4tr 11~13層;4)
7. *Gyrosigma scalproides* (Rabenh.) Cleve (試掘4tr 9~10層;3)
8. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試掘4tr 11~13層;4)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試掘4tr 3層;2)
10. *Navicula kotschyi* Grunow (試掘4tr 3層;2)
11. *Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot (試掘4tr 9~10層;3)
12. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (試掘4tr 1~2層;1)
13. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (試掘4tr 3層;2)
14. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (試掘4tr 3層;2)
15. *Stausira construens* Ehrenberg (試掘4tr 11~13層;4)

図版2 木材



1a



1b



1c



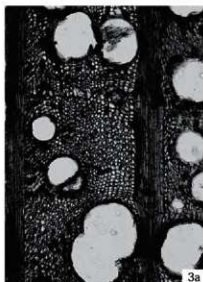
2a



2b



2c



3a



3b



3c

1.マツ属複雑管束亜属(1次1tr 柱4 Na1 木:4)

2.ヒノキ(試番8tr 土9 木片 No3:3)

3.エノキ属(試番7tr西 42種 木:2)

a:木口,b:柎目,c:板目

100 μm:3a

100 μm:1-2a,3b,c

100 μm:1-2b,c

第2節 井川城址第2次調査出土試料の自然科学分析(1)

株式会社イビソク

1 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

井川城址から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。また年代測定にあたって、株式会社パレオ・ラボの協力を得た。なお、一部の試料を除いて、樹種同定が行われている（樹種同定の項参照）。

(2) 試料と方法

試料は、用地B（北郭外）の2次2trから出土した炭化材（試料No.1：PLD-28470）、用地B（北郭外）の2次3tr深掘2から出土した生材（試料No.2：PLD-28471）、用地E2（郭内）の2次6tr北区溝2から出土した生材（試料No.4：PLD-28472）、用地E2（郭内）の2次6tr中区から出土した炭化材（試料No.5：PLD-28473）、用地D2（郭外）の2次5tr深掘北壁から出土した炭化材（試料No.6：PLD-28474）の計5点である。試料No.1,2,4,5は最終形成年輪が残っており、6は樹皮であった。樹種同定の結果では、試料No.2はヤナギ属、試料No.4はブナ属、試料No.5はコナラ属コナラ節、試料No.6は広葉樹の樹皮であった。発掘調査所見では、いずれも中世頃であると考えられている。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-28470	試料No.1 調査区：用地B 位置：2tr 層位：96層 遺物No.18	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-28471	試料No.2 調査区：用地B 位置：3tr深掘2 層位：77層	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-28472	試料No.4 調査区：用地E2 位置：6tr北区溝2 遺物No.20	種類：炭化材（ブナ属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-28473	試料No.5 調査区：用地E2 位置：6tr中区4面整地 遺物No.55	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-28474	試料No.6 調査区：用地D2 位置：5tr深掘北壁 層位：27層	種類：生材（広葉樹） 試料の性状：樹皮 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

(3) 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-28470 用地 B 2tr 96 層 試料 No.1	-25.16 \pm 0.28	406 \pm 19	405 \pm 20	1445-1475 cal AD (68.2%)	1440-1495 cal AD (90.4%) 1601-1614 cal AD (5.0%)
PLD-28471 用地 B 3tr 深掘 2 77 層 試料 No.2	-29.70 \pm 0.23	398 \pm 19	400 \pm 20	1448-1481 cal AD (68.2%)	1442-1511 cal AD (86.5%) 1601-1616 cal AD (8.9%)
PLD-28472 用地 E2 6tr 北区溝 2 試料 No.4	-26.36 \pm 0.28	414 \pm 19	415 \pm 20	1444-1467 cal AD (68.2%)	1437-1489 cal AD (94.4%) 1604-1607 cal AD (1.0%)
PLD-28473 用地 E2 6tr 中区 4 面整地土 試料 No.55	-25.51 \pm 0.20	467 \pm 18	465 \pm 20	1429-1444 cal AD (68.2%)	1420-1450 cal AD (95.4%)
PLD-28474 用地 D2 5tr 深掘北壁 27 層 試料 No.6	-28.13 \pm 0.19	494 \pm 18	495 \pm 20	1420-1436 cal AD (68.2%)	1413-1442 cal AD (95.4%)

(4) 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。

用地 B (北郭外) の 2 次 2tr 96 層から出土した試料 No.1 (PLD-28470) は、1440-1495 cal AD(90.4%) および 1601-1614 cal AD(5.0%) であり、15 世紀中頃～末および 17 世紀前半の暦年代を示した。

用地 B (北郭外) の 2 次 3tr 深掘 2 77 層の試料 No.2 (PLD-28471) は、1442-1511 cal AD(86.5%) および 1601-1616 cal AD(8.9%) であり、15 世紀中頃～16 世紀前半および 17 世紀前半の暦年代を示した。

用地 E2 (郭内) の 2 次 6tr 北区溝 2 から出土した試料 No.4 (PLD-28472) は、1437-1489 cal AD(94.4%) および 1604-1607 cal AD(1.0%) であり、15 世紀前半～後半および 17 世紀初頭の暦年代を示した。

これらは、室町時代および江戸時代初頭に相当する。3 点とも特に室町時代の確率が高い。時期については、発掘調査所見ではいずれも中世頃と考えられており、測定結果と整合的である。なお、いずれの試料も最終形成年輪が残っており、測定結果は試料の枯死もしくは伐採年代となる。

用地 E2 (郭内) の 2 次 6tr 中区の 4 面整地土層から出土した試料 No.55 (PLD-28473) は、1420-1450 cal AD(95.4%) であり、15 世紀前半の暦年代を示した。

用地 D2 (郭外) の 2 次 5tr 深掘北壁 27 層から出土した試料 No.6 (PLD-28474) は、1413-1442 cal AD(95.4%) であり、15 世紀前半の暦年代を示した。

これは、室町時代に相当する。時期については、発掘調査所見ではいずれも中世頃と考えられており、測

定結果と整合的である。なお、試料は最終形成年輪あるいは樹皮が残っており、測定結果は試料の枯死もしくは伐採年代となる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

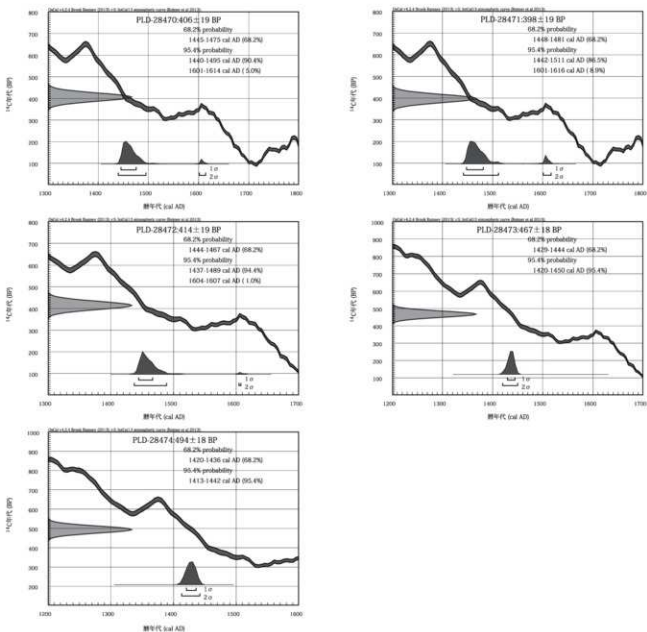


図1 暦年較正結果

図版1 放射性炭素年代測定試料



1. PLD-28470、2. PLD-28471、3. PLD-28472、4. PLD-28473、5. PLD-28474

2 井川城址の堀堆積物中の珪藻化石群集

(1) はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻群集が設定されている（小杉, 1988；安藤, 1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。また、製塩土器付着物中の珪藻化石から藻塩法の証拠についても検討されている（森, 1991）。

ここでは、井川城址の堀の堆積物中の珪藻化石を調べ、堀の堆積環境について検討した。

(2) 試料と方法

試料は、中世の堀の堆積物 1 点 (9f 層) である (表 1)。

試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

表 1 分析試料とその特徴

分析 No.	地区	採取地点	層位	時期	特徴
1	用地 D2	5 トレンチ北壁、深堀 1	27 層	中世	オリブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト質粘土

① 湿潤重量約 1g をトールピーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。② 反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 7 回ほど繰り返した。③ 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 倍および 1500 倍で観察し、珪藻化石について同定・計数した。いずれの試料も珪藻殻数が少ないため、プレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。

(3) 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定し、千葉・澤井 (2014) により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種 (W) として、海水～汽水種は不明種 (?) としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明 (?) として扱った。以下に、安藤 (1990) が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔上流性河川指標種群 (J)〕: 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

〔中～下流性河川指標種群 (K)〕: 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中にのぼして生活する種が多い。

〔最下流性河川指標種群 (L)〕: 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)] : 水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である (陸生珪藻と呼ばれている)。

[陸生珪藻 A 群 (Qa)] : 耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻 B 群 (Qb)] : A 群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

(4) 結果および考察

検出された珪藻化石は、淡水種が 51 分類群 20 属 42 種 1 変種であった。これらの珪藻化石は、淡水域における 4 環境指標種群 (K、O、Qa、Qb) に分類された (表 2)。以下では、各試料の珪藻化石群集の特徴について述べる。

検出された珪藻化石は、すべて淡水種である。指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群 (O) が多く、中～下流性河川指標種群 (K) や陸生珪藻 A 群 (Qa)、陸生珪藻 B 群 (Qb) が検出された。指標種群の特徴から、河川の流れ込みやジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。

(5) おわりに

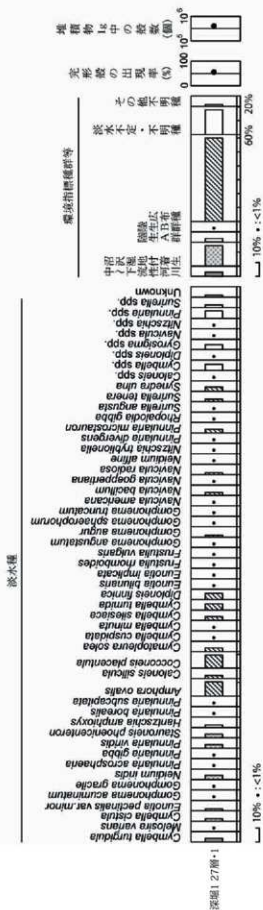
井川城址の中世の堀堆積物中の珪藻化石群集について検討した。その結果、河川の流れ込みや、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定された。

引用文献

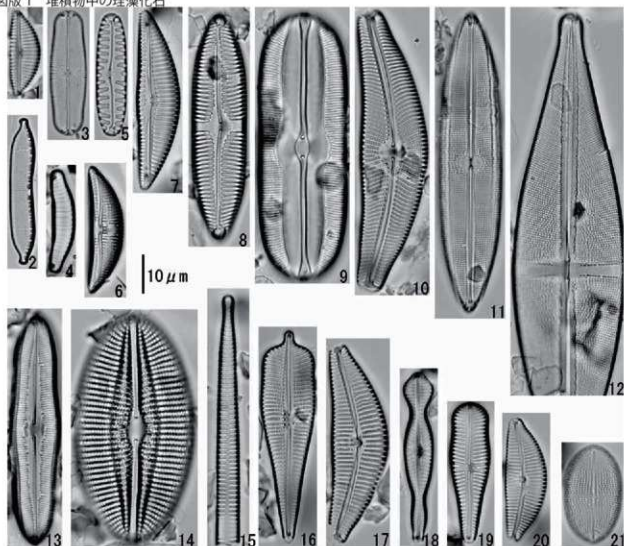
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標種群の再検討と更新, Diatom, 30, 7-30.
小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 第四紀研究, 27, 1-20.

表2 堆積物中の珪藻化石産出表 (種群は、千葉・澤井による)

No.	分類群	種群	1	
1	Amphora	ovalis	W	23
2	Caloneis	silicula	W	5
3	C.	spp.	?	1
4	Cocconeis	placentula	W	21
5	Cymatopleura	solea	W	6
6	Cymbella	cistula	O	4
7	C.	cuspidata	W	2
8	C.	minuta	W	2
9	C.	silesiaca	W	6
10	C.	tumida	W	10
11	C.	turgidula	K	6
12	C.	spp.	?	10
13	Diploneis	finnica	W	10
14	D.	spp.	?	1
15	Eunotia	bilunaris	W	2
16	E.	implicata	W	1
17	E.	pectinalis var. minor	O	3
18	Frustulia	rhomboides	W	1
19	F.	vulgaris	W	1
20	Gomphonema	acuminatum	O	2
21	G.	angustatum	W	2
22	G.	augur	W	3
23	G.	gracile	O	2
24	G.	sphaerophorum	W	2
25	G.	truncatum	W	2
26	Gyrosigma	spp.	?	8
27	Hantzschia	amphioxys	Qa	4
28	Melosira	varians	K	1
29	Navicula	americana	W	2
30	N.	bacillum	W	5
31	N.	goepertiana	W	1
32	N.	radiosa	W	3
33	N.	spp.	?	2
34	Neidium	affine	W	1
35	N.	iridis	O	7
36	Nitzschia	tryblionella	W	1
37	N.	spp.	?	2
38	Pinnularia	acrosphaeria	O	2
39	P.	borealis	Qa	2
40	P.	divergens	W	2
41	P.	gibba	O	1
42	P.	microstauron	W	6
43	P.	subcapitata	Qa	1
44	P.	viridis	O	9
45	P.	spp.	?	12
46	Rhopalodia	gibba	W	2
47	Stauroneis	phoenicenteron	O	6
48	Surirella	angusta	W	2
49	S.	tenera	W	4
50	S.	spp.	?	4
51	Synedra	ulna	W	7
52		Unknown	?	3
1	中～下流性河川	K	7	
2	沼沢湿地付着生	O	33	
3	陸生A群	Qa	6	
4	陸生B群	Qa	1	
5	広布種	W	135	
6	淡水不定・不明種	?	40	
7	その他不明種	?	3	
合計			225	
完形殻の出現率 (%)			53.3	
堆積物 1g 中の殻数 (個)			5.8E+5	



図版1 堆積物中の珪藻化石



1. *Cymbella minuta* 2. *Hantzschia amphioxys* 3. *Navicula bacillum*
4. *Eunotia pectinalis* var. *minor* 5. *Pinnularia borealis*
6. *Amphora ovalis* 7. *Cymbella silesiaca* 8. *Pinnularia microstauron*
9. *Navicula Americana* 10. *Cymbella tumida* 11. *Neidium iridis*
12. *Stauroneis phoenicenteron* 13. *Caloneis silicula* 14. *Diploneis finnica*
15. *Synedra ulna* 16. *Gomphonema augur* 17. *Cymbella cistula*
18. *Gomphonema acuminatum* 19. *Gomphonema truncatum*
20. *Cymbella turgidula* 21. *Cocconeis placentula*

3 井川城址のプラント・オパール分析

(1) はじめに

井川城址において、古環境を復元するために土壌試料が採取された。以下では、土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺のイネ科植物について検討した。

(2) 試料と方法

分析試料は、用地 D2 (郭外) の 2 次 5tr 南壁 深堀 1 から採取された計 6 点で、地山②が

表 1 分析試料一覧

地区	地点	層位	時期	土相
用地 D2	5tr 南壁 深堀 1	9 層②	近世	灰オリブ色 (5Y4/2) 植物片混じりシルト
		16 層②		黒褐色 (2.5Y3/1) 泥炭質シルト
		19 層②		オリブ黒色 (5Y3/2) 植物片混じりシルト
		22 層②	中世 (堀)	オリブ黒色 (7.5Y3/2) シルト
		27 層②		オリブ黒色 (5Y2/2) シルト
		地山②		中世以前

中世以前、27 層②と 22 層②が中世 (堀)、19 層②と 16 層②、9 層②が近世の堆積と考えられている (表 1)。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g (秤量) をトルビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ~ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパレートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良い植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版 1 に載せた。

(3) 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め (表 2)、分布図に示した (図 1)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

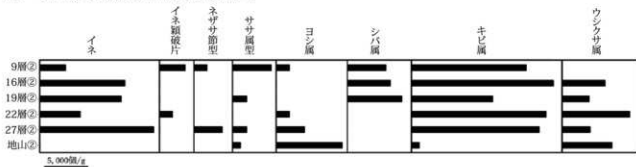
表 2 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	棒状珪酸体 (個/g)	ポイント型珪酸体 (個/g)
9 層②	2,900	2,900	1,500	4,400	1,500	4,400	13,100	0	4,400	0
16 層②	9,700	0	0	0	0	4,900	16,200	4,900	0	0
19 層②	9,300	0	0	1,600	0	6,200	9,300	3,100	4,700	0
22 層②	4,600	1,500	0	0	1,500	0	15,400	7,700	3,100	1,500
27 層②	13,000	0	3,200	1,600	3,200	0	14,600	3,200	4,900	0
地山②	0	0	0	900	7,500	0	900	5,700	2,800	0

検鏡の結果、6 試料からイネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 7 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。その他では、イネの初稔に形成される植物珪酸体 (イネ類破片) や棒状珪酸体、ポイント型珪酸体なども産出している。

主だった分類群の産出傾向を以下に記す。まず、イネ機動細胞珪酸体は地山②では産出していないが、その他の試料では産出が見られ、2,900 ~ 13,000 個である。また、9 層②や 22 層②ではイネ機動細胞珪酸体と共にイネ類破片の産出も見られる。ヨシ属機動細胞珪酸体は地山②で 7,500 個の産出を示しているが、それ以降は産出量が減り、0 ~ 3,200 個である。シバ属機動細胞珪酸体は近世の堆積物 (9 層②、16 層②、19 層②) のみで産出が見られ、4,400 ~ 6,200 個である。キビ族機動細胞珪酸体は地山②では 900 個と少ないが、中世以降の堆積物では 9,300 ~ 16,200 個となり、産出量が増加する。ウシクサ族機動細胞珪酸体は 9 層②では産出が見られないが、それ以外の試料では産出しており、3,100 ~ 7,700 個である。

図1 井川城址における植物珪酸体分布図



(4) 考察

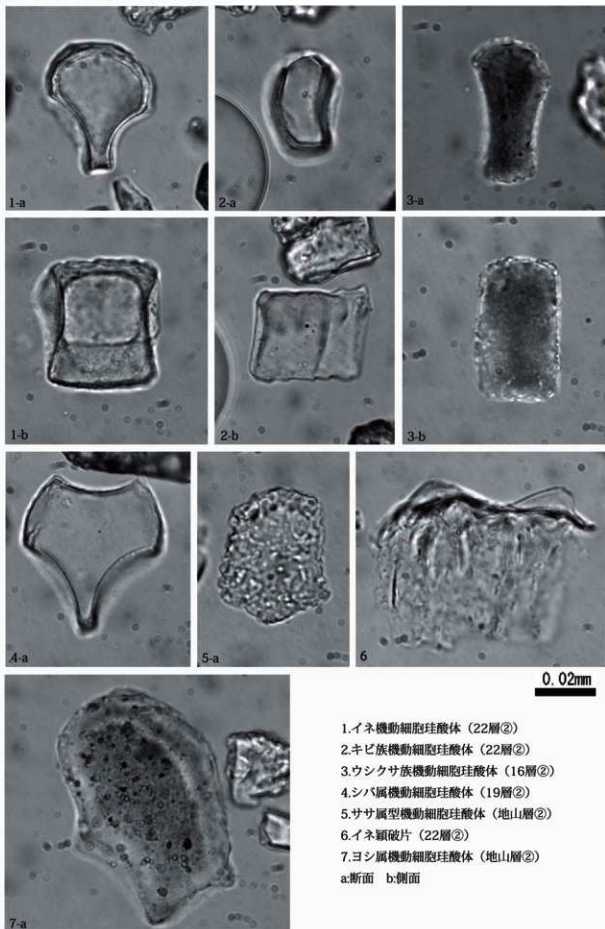
検鏡の結果、時期ごとに機動細胞珪酸体の産出量の変化が見られたため、時期ごとにイネ科植物相について検討した。

まず中世以前であるが、この試料（地山②）で産出が目立つのが抽水植物のヨシ属である。よって、中世の井川城が築城される以前には、ヨシ属が生育するような湿地的環境が周辺に広がっていたと考えられる。また、この試料ではウシクサ族機動細胞珪酸体の産出も多い。ウシクサ族という分類階級には湿地的環境に生育するオギや、乾燥的環境に生育するススキやチガヤなどが含まれるが、機動細胞珪酸体の形態で種を区分するのは難しい。しかし、ヨシ属の産出から湿地的環境が推測されるため、この試料で産出するウシクサ族機動細胞珪酸体には、オギなどの湿地的環境に生育する種由来の機動細胞珪酸体が多く含まれていると考えられる。

次に中世の堀（22層②、27層②）であるが、この時期においてもヨシ属機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が見られ、周辺に湿地的環境が広がっていたと考えられる。しかし、ヨシ属機動細胞珪酸体の産出は中世からその上位層の近世にかけて減少傾向を示しているため、ヨシ属が分布できるような湿地的環境は時期を経るに従って狭まっていた可能性がある。また、この時期に増加しているのがキビ族機動細胞珪酸体である。キビ族という分類階級にはアワやヒエ、キビといった栽培種やエノコログサやタイヌエといった野生種が含まれるが、機動細胞珪酸体の形態で種を区別するのは難しい。いずれかのキビ族が堀周辺に生育していたと思われる。さらに、中世の堀ではイネ機動細胞珪酸体やイネ類破片の産出も確認できた。堀周辺において稲作が行われていたか、人の手によってイネの葉や籾殻が井川城に運び込まれていたなどの状況が推測できる。

近世（9層②、16層②、19層②）においてもイネ機動細胞珪酸体やイネ類破片の産出が確認でき、遺跡周辺にイネが存在していたと思われる。また、キビ族やウシクサ族の産出も確認でき、中世と同様に遺跡周辺にはキビ族やウシクサ族も生育していたであろう。ただし、ウシクサ族については9層②では産出が確認できず、9層②の堆積時には分布を狭めていたのかもしれない。さらに、近世において特徴的なのが、シバ属機動細胞珪酸体の産出である。シバ属機動細胞珪酸体は近世以外の時期には産出していないため、近世になって遺跡周辺に分布を広げたと考えられる。あるいは、植栽されていた可能性も考えられるであろう。

図版 1 井川城址から産出した植物珪酸体



4 井川城址出土木材の樹種同定

(1) はじめに

井川城址から出土した木材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

(2) 試料と方法

試料は、用地 B（北郭外）の 2 次 3tr 深堀 2 の 77 層から出土した生材 1 点、用地 B（北郭外）の 2 次 6tr 北区溝 2 の整地層から出土した炭化材 1 点、用地 E2（郭内）の 2 次 6tr 中区の整地層から出土した炭化材 1 点、用地 D2（郭外）の 2 次 5tr 深堀北壁の 27 層から出土した生材 1 点の、計 4 点である。発掘調査所見では、いずれの試料も中世頃の木材と考えられている。各試料について、同定前に木取りの確認を行った。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、広葉樹であるヤナギ属とブナ属、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、広葉樹樹皮の 4 分類群がみられた。生材は試料 No.3 がヤナギ属、試料 No.7 が広葉樹樹皮で、炭化材は試料 No.4 がブナ属、試料 No.5 がコナラ節であった。同定結果を表 1 に示す。

表 1 井川城址出土木材の樹種同定結果一覧

試料 No.	地区	出土地点	層位等	器種	樹種	木取り	種類	年代測定番号
3	用地 B	3tr 深堀 2	77 層	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-28471
4	用地 B	6tr 北区溝 2	No.20 (整地層)	炭化材	ブナ属	割れ	炭化材	PLD-28472
5	用地 E2	6tr 中区	No.55 (整地層)	炭化材	コナラ属コナラ節	芯持丸木	炭化材	PLD-28473
7	用地 D2	5tr 深堀北壁	27 層	自然木	広葉樹樹皮	樹皮	生材	PLD-28474

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学・走査型電子顕微鏡写真を示す。

①ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版 1 1a-1c(No.3)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、単列となる。

ヤナギ属にはタチヤナギやハッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

②ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版 1 2a-2c(No.4)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅 1～10 列となる。

ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材

は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

③コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版1 3a-3c(No.5)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が、火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同形で、単列のもと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

④広葉樹樹皮 *Broadleaf-wood Bark* 図版1 4a-4c(No.7)

篩管要素と放射組織で構成される広葉樹の樹皮である。放射組織は単列である。樹皮は対象標本が少ないため、同定には至っていない。

(4) 考察

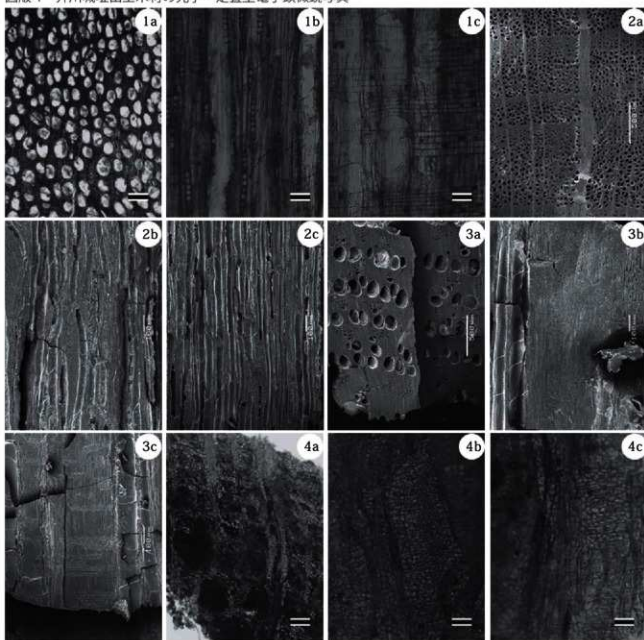
用地B（北郭外）の2次3tr深堀2の77層から出土した自然木はヤナギ属、用地D2（郭外）の2次5tr深堀北壁の27層から出土した自然木は広葉樹樹皮であった。いずれも堀跡に堆積した自然木と考えられている。ヤナギ属は水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む樹木であり（伊東ほか，2011）、堀跡近辺に生育していたと考えられる。広葉樹樹皮については科以下の同定が行えなかったが、堀跡近辺に広葉樹が生育していたと考えられる。

用地B（北郭外）の2次6tr北区溝2の整地層から出土した炭化材はブナ属、用地E2（郭内）の6tr中区の整地層から出土した炭化材はコナラ節であった。用途は不明であるが、肉眼観察等では硬質に焼しめられており、炭窯で焼成された木炭である可能性が考えられる。ブナ属とコナラ節は、薪炭材として現在でも多く利用されている（伊東ほか，2011）。

参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

図版1 井川城址出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真



1a-1c.ヤナギ属(No.3)、2a-2c.ブナ属(No.4)、3a-3c.コナラ属コナラ節(No.5)、4a-4c.広葉樹樹皮(No.7)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

第3節 井川城址第2次調査出土試料の自然科学分析(2)

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

本報告では、井川城址（長野県松本市井川城址内）の第2次調査で確認された遺構や遺構確認面の年代、中世以前の堆積層の年代の検討を目的として放射性炭素年代測定を実施した。また、測定に供された試料のうち、木片については樹種同定も合わせて行った。

なお、分析方法および引用文献については、前掲の井川城址試掘・第1次調査出土資料の自然科学分析に掲載しているので本報告では省略する。

2 試料

試料は、井川城址の第2次調査において確認された遺構（土塁、集石遺構、礎石建物、堀）や遺構面、中世以前の堆積層より採取された、木片、炭化材および炭質物が混じる土壌など計6点（試料No.1～6）である。試料の詳細（ラベル記載事項など）および目的等は表1に示したので参照されたい。

測定に供した試料は、試料No.1が薄板（桎目板）状を呈する木片、試料No.2が径約5mm程度の炭質物塊、試料No.3,4が炭化材（環孔材）の細片、試料No.6が径約3cm程度の芯持材である。なお、試料No.5の土壌（暗灰色～暗褐色灰色泥）試料は、肉眼観察では炭化材等が認められなかったため、水洗選別により抽出した炭質物を測定に供している。

また、上記した6点の試料のうち、試料No.1,6の2点は樹種同定も合わせて実施した。さらに、本分析では、肉眼観察により炭化材（環孔材）と判断された試料No.3,4についても試料の履歴（樹種など）の情報を得るため、樹種の確認を行った。

表1 分析試料一覧

試料No.	調査回数	出土地点	層位等	回収日	性状	分析項目*		目的
						14C(AMS)	W	
1	2次	3tr	No.20溝1	14.05.19	木	●	●	土器外遺構面最終面の時期確定
2	2次	6tr	中区土21①	15.03.23	土壌試料	●		土器中層(面)の時期特定
3	2次	6tr	北区No.89集石上面(2面整地土中)	15.03.02	炭化物	●		礎石建物と集石遺構の時期差抽出
4	2次	6tr	北区柱2(建1)	15.03.18	炭化物	●		礎石建物の時期特定
5	2次	6tr	地山C(炭)上①	15.03.23	土壌試料	●		中世以前の地形形成時期特定(縄文末～弥生か)
6	2次	9tr	堀-地山年代用	15.03.05	木	●	●	堀の年代、立木の樹種特定

* 14C(AMS):放射性炭素年代測定(加速器質量分析法)、W:樹種同定

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

各試料の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、試料No.1(2次3tr No.20溝1)が $540 \pm 20BP$ 、試料No.2(2次6tr 中区土21①)が $680 \pm 20BP$ 、試料No.3(2次6tr 北区No.89集石上面(2面整地土中))が $540 \pm 20BP$ 、試料No.4(2次6tr 北区柱2(建1))が $640 \pm 20BP$ 、試料No.5(2次6tr 地山C(炭)上①)が $2,180 \pm 30BP$ 、試料No.6(2次9tr 堀-地山年代用)が $450 \pm 20BP$ である(表2)。

また、これらの測定結果に基づく暦年較正結果(2σ)は、試料No.1がcalAD 1,322 - calAD 1,434、試料No.2がcalAD 1,275 - calAD 1,386、試料No.3がcalAD 1,321 - calAD 1,431、試料No.4がcalAD 1,287 - calAD 1,395、試料No.5がcalBC 359 - calBC 173、試料No.6がcalAD 1,420 - calAD 1,462を示す(表2, 図1)。

(2) 樹種同定

木片の樹種同定の結果、薄板状の木片(試料No.1:2次3tr No.20溝1)は針葉樹のサワラ、芯持材の木片(試料No.6:2次9tr 堀-地山年代用)は広葉樹のサイカチ近似種に同定された。以下に、各分類群の解剖学的

特徴等を記す。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・サイカチ近似種 (cf. *Gleditsia japonica* Miq.) マメ科サイカチ属

道管は散在しているが、部分的に小型の道管が認められることなどから、本来は環孔材と考えられる。道管は厚壁で、単独または2-3個が放射方向に複合して配列する。小型の道管は、櫛状に複合している。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。小型の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-12細胞幅、1-100細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状。

観察された特徴から、マメ科と考えられ、マメ科の中ではサイカチに近い組織を持っている。試料は節近くであり、また立木で根に近い部分と考えられ、本来の幹材で見られる道管配列とは異なった配列をしている。そのため、サイカチと断定するには至らず、サイカチ近似種としている。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果				相対比	測定機関 CodeNo.
				0	2 σ	cal AD	cal BP		
試料No.1 2次3tr No.20溝1 木片(ヒノキ科)	540 ± 20	-26.46 ± 0.41	538 ± 24	0	cal AD 1,333 - cal AD 1,336	cal BP 617 - 614	0.053	IAAA-150795	
				2 σ	cal AD 1,398 - cal AD 1,426	cal BP 552 - 524	0.947		
				0	cal AD 1,322 - cal AD 1,348	cal BP 628 - 602	0.213		
				2 σ	cal AD 1,392 - cal AD 1,434	cal BP 558 - 516	0.787		
試料No.2 2次6tr中区 土21① 炭質物	680 ± 20	-27.33 ± 0.55	679 ± 23	0	cal AD 1,280 - cal AD 1,299	cal BP 670 - 651	0.757	IAAA-150796	
				2 σ	cal AD 1,370 - cal AD 1,379	cal BP 580 - 571	0.243		
				0	cal AD 1,275 - cal AD 1,309	cal BP 675 - 641	0.676		
				2 σ	cal AD 1,360 - cal AD 1,386	cal BP 590 - 564	0.324		
試料No.3 2次6tr北区 No.89集石上面 (前期地山中) 炭化材(コナラ類)	540 ± 20	-24.36 ± 0.32	542 ± 23	0	cal AD 1,332 - cal AD 1,337	cal BP 618 - 613	0.148	IAAA-150797	
				2 σ	cal AD 1,398 - cal AD 1,423	cal BP 552 - 527	0.882		
				0	cal AD 1,321 - cal AD 1,438	cal BP 629 - 602	0.251		
				2 σ	cal AD 1,392 - cal AD 1,431	cal BP 558 - 519	0.749		
試料No.4 2次6tr北区 柱2(建1) 炭化材(コナラ類)	640 ± 20	-22.96 ± 0.65	635 ± 24	0	cal AD 1,296 - cal AD 1,314	cal BP 654 - 636	0.360	IAAA-150798	
				2 σ	cal AD 1,357 - cal AD 1,388	cal BP 593 - 562	0.640		
				0	cal AD 1,287 - cal AD 1,327	cal BP 663 - 623	0.408		
				2 σ	cal AD 1,342 - cal AD 1,395	cal BP 608 - 555	0.592		
試料No.5 2次6tr 地山(C炭)上・① 炭質物	2,180 ± 30	-30.15 ± 0.67	2,183 ± 27	0	cal BC 354 - cal BC 292	cal BP 2,303 - 2,241	0.691	IAAA-150799	
				2 σ	cal BC 231 - cal BC 217	cal BP 2,180 - 2,168	0.121		
				0	cal BC 215 - cal BC 197	cal BP 2,164 - 2,146	0.188		
				2 σ	cal BC 359 - cal BC 271	cal BP 2,308 - 2,220	0.582		
試料No.6 2次9tr 堀・地山年代用 木片(サイカチ近似種)	450 ± 20	-26.71 ± 0.46	425 ± 24	0	cal AD 1,432 - cal AD 1,449	cal BP 518 - 501	1.000	IAAA-150800	
				2 σ	cal AD 1,420 - cal AD 1,462	cal BP 530 - 488	1.000		
				0					
				2 σ					

4 考察

各試料の放射性炭素年代測定結果より得られた暦年較正結果(2 σ)を参考とすると、中世以前とされる堆積層(試料No.5)は紀元前4世紀から紀元前2世紀頃に相当する年代を示した。調査所見では、縄文時代末頃～弥生時代と推測されており、上記した暦年較正年代はこの所見を支持する。

一方、井川城址の遺構や遺構面などに関わる試料では、土塁中層(面)・礎石建物(試料No.2; 2次6tr中区土21①、試料No.4; 2次6tr北区柱2(建1))が13世紀後半から14世紀後半頃、主郭外遺構面最終面・集石遺構(試料No.1; 2次3tr No.20溝1、試料No.3; 2次6tr北区No.89集石上面)が14世紀前半から15世紀前半頃、立木(試料No.6; 2次9tr堀・地山年代用)が15世紀前半から中頃の年代を示した。立木を除く試料は、試料の由来や年輪の部位が明らかでないなどの履歴の検討を要することや、較正曲線の特性により示される年代範囲が広いことなどから詳細な検討には至らないが、およそ14世紀代とその前後にまとまる傾向にある。また、集石遺構と礎石建物については、礎石建物がより古い年代を示す傾向が指摘できる。なお、立木については15世紀代の年代が得られており、調査所見では15世紀代の遺構・遺物が

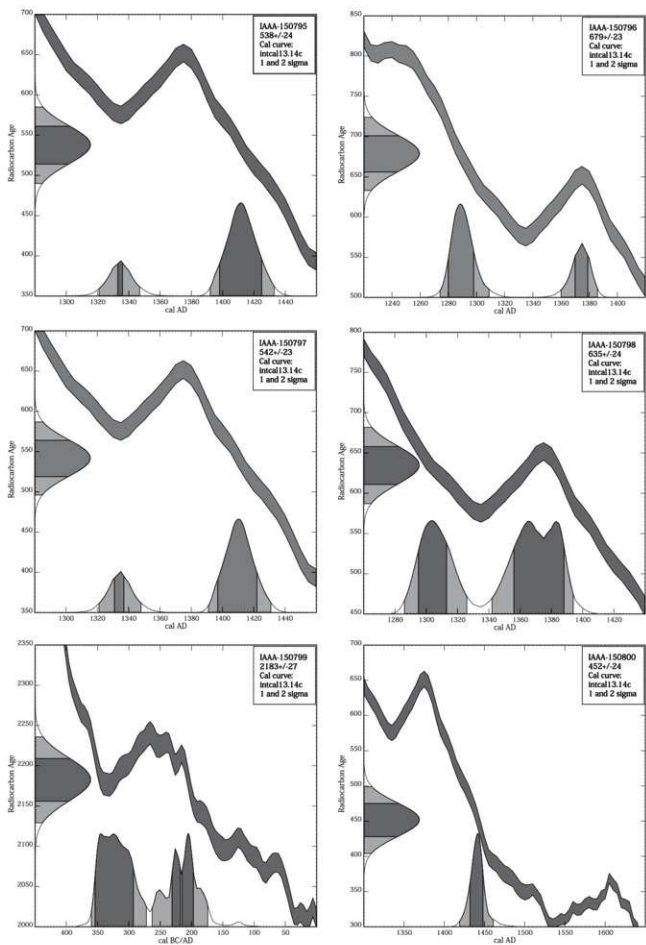


圖1 曆年較正結果

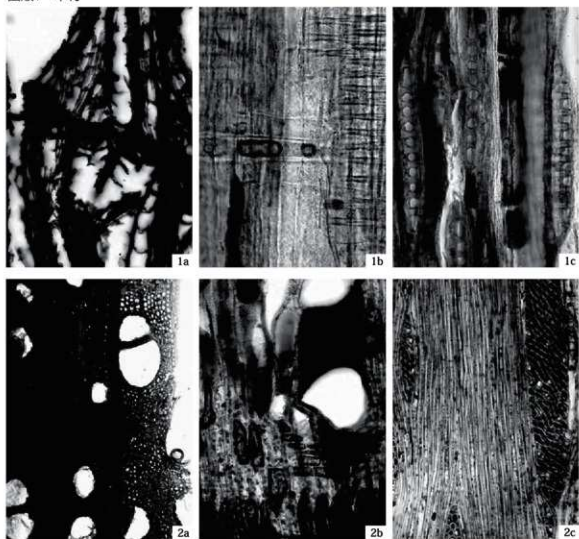
確認されていることから、これらとの関連が推定される。

また、木片の樹種同定の結果、薄板（柾目板）状の木片（試料№1；2次3tr №20 溝1）はヒノキ科に同定された。ヒノキ科は、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材を含み、いずれも木理が通直で割裂性・耐水性が高いという材質の特徴を有する。試料は、形状などを考慮すると、木製品の板状加工された部材の一部あるいは加工時に生じた木端等に由来する可能性がある。

一方の立木とされる芯持材（試料№6；2次9tr 堀-地山 年代用）は、マメ科であり、その中ではサイカチに近い組織を有することからサイカチ近似種とした。サイカチは、本州（中南部）・四国・九州の山野や河原などに自生し、また植栽される落葉高木である。本試料は出土状況などの詳細は不明であるが、立木とされることから、自生あるいは植栽された樹木に由来する可能性がある。

この他、試料№3.4の炭化材は、いずれも落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）に同定された。コナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの4種があり、本地域ではコナラが二次林の構成種として広く分布するほか、山地の落葉広葉樹林にミズナラも生育する。なお、コナラ節は、重硬で強度が高い材質を有するほか、薪炭材として国産材の中でも特に優良とされる種類の一つとされる。今回の試料は、いずれも細片であり形状等による用途の推定には至らないが、出土地点などを参考とすると燃料材や建築部材などに由来する可能性がある。

図版1 木材



1.ヒノキ科(試料№1)
2.サイカチ近似種(試料№6)
a.木口b.柾目c.板目

100 μm:2a
100 μm:1a,2b,2c
100 μm:1b,1c

第4節 井川城址の自然科学分析と景観復原

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

1 はじめに

本章の第1節から第3節ですでに記載されたように井川城址における自然科学分析は、放射性炭素年代測定、木材・木炭の樹種同定、珪藻分析、植物珪酸体（プラント・オパール）分析にまで及んでいる。放射性炭素年代測定は遺跡に残された炭素化合物としての生物遺体に対して加速器質量分析法すなわち AMS 法による年代測定を行うことで、陶磁器などの遺物による編年を検証し、遺物による編年が困難な場合に年代値を得る手段として行ってきた。木材・木炭の樹種同定は、年代測定に供する試料の多くが木材・木炭であるため、その試料の性格を把握すると同時に木材資源としての植物の種類を明らかにすることを目的としている。珪藻分析は、水域で生息する多様な珪藻類が水質や水流によって生息域が異なる性質にもとづいて、過去の水域環境を明らかにすることを目的にしている。植物珪酸体分析は、主にイネ科植物が細胞内に形成する植物珪酸体の形態が種類によって異なることから、水田稲作農耕や雑穀畑作農耕のほか草原や萱原の存在を明らかにすることを目的にしている。総合すればこれらの諸分析は、年代を明らかにするとともに過去の景観を明らかにするためのものであるといえる。

本節では、まず、3回に分けて実施されてきた放射性炭素年代測定の結果を総合し、年代測定値の捉え方と検討課題を整理しておきたい。つづいて花粉分析という手法を用いて、井川城址と周辺の景観をより高い精度で復原し、植生や植栽の実態を明らかにすることを試みる。その上で、これまでの景観復原のための検討結果を総合して井川城址の景観復原を行う。

2 放射性炭素年代と暦年代

井川城址についてはこれまでに実施されたものだけでも15点の放射性炭素年代測定の結果が得られている。第1節では試掘調査と1次調査で得られた4点の測定結果が、第2節では2次調査で得られた5点の測定結果が、さらに第3節では2次調査で得られた6点の測定結果が記載されている。測定された試料と測定結果について、現時点でどのようにまとめることができるか、また、問題点と課題についても言及しておきたい。年代の表記は、放射性炭素年代については測定値にBPを付け、暦年較正曲線によって構成された暦年代についてはcal AD、cal BCを付ける。暦年代は2σ暦年代範囲（確率95.4%）で示し、便宜的に相対比で60%以上の方の範囲を示すが、60%に満たないときは二つの範囲を示すことにしたい。測定コード番号は検索の際にもっとも重要なので併記する。

試料として注目すべきものとして埋没立株あるいはその可能性の高い木材・木炭がある。それらは確実にその個体の生育場所と生育年代を知ることができるからである。これに該当するのは2次調査9トレンチの主郭西辺の堀状遺構内で検出されたサイカチ近似種、2次調査5トレンチ深堀の堀状遺構堆積物に埋没した広葉樹（樹皮のため種の同定にいたっていない）、2次調査3トレンチ深堀の地山直上に根を張っていたヤナギ属、試掘7トレンチ西の堀状遺構堆積物に埋没していたエノキ属の4点である。2次調査の9トレンチの堀状遺構斜面において検出されたサイカチ近似種立株は450±20BP(IAAA-150800)と測定され、calAD1420-1462と較正された。サイカチは水辺に好んで生育し、大木にもなるので、試料の部位によっては測定値が変動することも考えなければならないが、中心部であっても上記の年代より古くならないと考えてよい。5トレンチ深堀の広葉樹は堀状遺構斜面に寄り添うような産状を示しており、495±20BP(PLD-28474)、calAD1413-1442であった。試掘7トレンチのエノキ属も堀状遺構斜面に寄り添うような産状を示しており、420±20BP(IAAA-133099)、calAD1435-1488であった。以上の3点はいずれも

15世紀前葉から後葉まで堀状遺構斜面に生育していたものと考えられる。2次調査3トレンチのヤナギ属は、 $400 \pm 20\text{BP}$ (PLD-28471)、calAD1442-1511であった。産状からは地山に根を張っていたとみられ、河川の影響を受ける低地の環境であったと考えられる。前3者とはわずかに年代が新しいが大きく違わない。

柱材についても2点の測定結果が得られている。1次調査1トレンチにおける柱材はマツ属複雑管束亜属に同定され、 $640 \pm 20\text{BP}$ (IAAA-133102)と測定され、calAD1288-1323、calAD1346-1393と校正された。樹種は生態的にみてアカマツであろう。13世紀末から14世紀前葉の年代であるが、中世の早い時期にアカマツが建築材として利用されていたことは注目すべきである。2次調査6トレンチ北で検出された柱材はコナラ属コナラ亜属に同定され、その年代は $640 \pm 20\text{BP}$ (IAAA-150799)、calAD1287-1327、calAD1342-1395であった。2例だけではあるが年代がほぼ一致するのは何を意味するのであろうか。埋没立株と同様に、柱の外側か内側か、どの部位を測定試料としたかが大きな問題となる。柱材には比較的樹齢のある木材を使用したことが予想されるので、試料がまだ残存しているか写真記録があれば確認すべきであろう。それによって上記の年代の確実性を高めることができる。

土層断面図から知れる産状から年代の扱いに注意しなければならない試料がいくつかある。試掘7トレンチ西における24層と29層の間の板材については、木取りと板のどの部分を測定試料としたかが問題となる。たとえば柾目板であれば、ヒノキ科に同定されているので、相当な年輪数があるものと想定することができる。200年の樹齢をもつものと仮定すれば、外側と内側ではそれだけの年代の違いが生じる。 $580 \pm 20\text{BP}$ (IAAA-133099)、calAD1310-1360の年代が得られているが、最外年輪に近い中心部は確かめる必要がある。試掘8トレンチの土坑5のヒノキと同定された木材は、 $960 \pm 20\text{BP}$ (IAAA-133101)、calAD1078-1153であった。産状から掘り込まれた土坑の下底は地山であり、地山直上の木材であったとみられる。試料が地山に由来する可能性がないか検討が求められる。

一方、第2節で記載されている放射性炭素年代の測定結果は確実性の高いものと判断される。なぜなら試料を木材に限定したうえで最終形成年輪が確認されていることである。暦年較正曲線は年輪年代との対応から成り立っているため、較正暦年代の確実性を高めるためには1本の木材のどの部位(どの年輪)であるかを明らかにしておく必要があるからである。2次調査6トレンチ中区における整地盛土層中の炭化材は、直径は3.5cmしかない細い木炭でありながら芯持ちの丸木で最終形成年輪が確認できる試料である。光沢があり硬質の木炭であることから炭窯で焼かれたものと考えられる。得られた年代は $465 \pm 20\text{BP}$ (PLD-28473)、calAD1420-1450であった。較正暦年代は15世紀前半の狭い範囲を示しているが、年輪数が約24年あるため中心部を含めさらに複数の年輪を測定することによって暦年範囲をさらに狭められる可能性がある。

以上のような注意を踏まえてこれまで得られた放射性炭素年代を総合してみると、井川城址に直接関係する年代は15世紀に集中する。2本の柱については、柱材が完全に残ることは珍しいことで、中心部がかわらうじて残存し、かつ年代測定が可能な状態を考えると、柱に使用された木材の伐採年よりも相当古い年代(中心部の年代)が得られている可能性は考えられるであろう。いずれにしても、遺物との対応関係を明確にさせるには、年輪を読み取ることができる木材・木炭、あるいは種子や果実のような単年の産物を試料とすることが望まれる。

3 景観復原のための花粉分析

(1) 花粉分析と堆積物特性

花粉分析という手法は、対象とする地点や周辺域の植生を復原し、時間軸のなかでどのように変化していくかを明らかにする方法であるが、対象とする地域・地点や解明したい目的によって調査方法は大きく異なる。井川城址における場合、井川城址における局所的な植生と周辺域の植生とのかかわりが問題となり、ま

た、井川城址における築城やその後の変化がどのようなものであったかを明らかにすることが井川城址の歴史を解明するのに不可欠なため、築城や改築に伴う地層・土層の形成とその性格を捉えることも大きな課題となってくる。すなわち、堆積物の花粉組成を明らかにするだけでなく、分析対象とする試料の堆積物特性もあわせて捉えておく必要がある。

井川城址において確認された堆積物は、自然堆積物だけでなく、堀状遺構を形成するために掘削された堆積物とそれが積み上げられた盛土堆積物や整地堆積物（整地土）といった人為堆積物が多様なかたちで存在する。井川城址で注目すべき堆積物は、まず堀状遺構内の堆積物である。それは堀状遺構の構築とそれに伴う盛土や整地堆積物との対応関係が明らかになる可能性が高いからである。

花粉分析の対象としたのは、試掘 2 トレンチ、試掘 8 トレンチ、2 次 5 トレンチの 3 つのトレンチである。試掘 2 トレンチでは、盛土・整地層、堀状遺構内堆積物とその後の近世低湿地堆積物の性格と花粉組成の把握を行った。試掘 8 トレンチは地山とその上に形成された整地土の性格と花粉分析を行った。2 次調査の 5 トレンチについては試掘 2 トレンチと同様に、試掘 2 トレンチでの結果が井川城址において一般性の高いものかどうかを確認するために行った。本来このような目的で分析を行うには灼熱消費量（灼熱減量、あるいは灰分）を捉えておく必要があるが、今回は有機物である微粒炭の含有が盛土・整地層、堀状遺構内堆積物の性格を捉えるのに有効と判断したので、光学顕微鏡像でそれらの産状を把握することにした。

堆積物特性として微粒炭と花粉の産状を表 1 に示した。花粉の産状としてはこれまでふつうだった百分率での表示ではなく個数の表示にした。これは井川城址の内部か近接の植栽が強く反映されると判断されたためである。花粉ではないが寄生虫卵も特異に産したのでその存否のみを示した。

(2) 堆積物特性と花粉組成の概要

試掘 2 トレンチでは、上位から 4 層上、6 層上、9 層、14 層上、17 層上、17 層下、21 層上、22 層、29 層から採取した 9 試料を対象とした。4 層上は近世、6 層から 17 層までが中世から近世にかけての堀状遺構堆積物、21 層は整地土、22 層以下は地山と区分されている。整地土である 21 層は地山である 22 層以下の堆積物と同様に大量の微粒炭からなっていたが、地山の堆積物がほとんど花粉を含まないのに対して、サイカチ花粉を多産し、多種類の花粉が産出した。このことから整地土である 21 層は地山の人為堆積物である可能性が高いといえる。

試掘 8 トレンチでは、上位から 34 層、43 層、52 層、59 層の 4 試料を対象とした。59 層が地山の堆積物で、それ以上は整地土と区分されている。整地土の堆積物は大量の微粒炭からなっており、限られた分類群の花粉がわずかに検出されただけである。一方、地山の 59 層の堆積物は大量の未炭化植物遺体からなっており、微粒炭もわずかであった。花粉もほとんど検出されなかった。

2 次 5 トレンチでは、近世の 11 層、堀状遺構堆積物の 27 層から 1, 2, 3 の 3 層準、土塁・盛土の 47 層の 5 試料を対象とした。土塁・盛土の堆積物は他のトレンチと同様に多量の微粒炭からなっていたが、堀状遺構堆積物やそれに続く近世の堆積物にも多量の微粒炭が確認できた。ただし、前者からは堀状遺構堆積物と同様の花粉が検出でき、サイカチ花粉こそ検出できなかったがツリフネソウ属やシダ植物のオオアカウキクサの球状体（マスラ）が共通して検出されたので、堀の堆積物を掘り上げた可能性は高い。

以上のことを総合すると、堀状遺構堆積物の基盤となっている地山の堆積物は微粒炭からなっていることがわかる。また、堀状遺構周辺の整地土や盛土は堀状遺構の掘削土からなっている可能性がある。試掘 2 トレンチにおける整地土の 21 層からは多量の微粒炭からなるものの、花粉粒数も堀状遺構堆積物と大差なく、何よりも後述するような堀状遺構にめぐらされたサイカチの花粉を多産することがそのことを裏付ける。

(3) 花粉の産状と井川城址および周辺の植生・植栽

表1は、花粉組成と寄生虫卵、微粒炭および未炭化植物遺体の産状を示したものである。多量の微粒炭からなる地山の堆積物は限られたわずかな花粉しか検出できなかったが、それでも堀状遺構堆積物でふつうに検出される花粉が確認される。このことは地山の堆積物が形成された時期においても周辺域に一般的な植物であったことを示している。それはモミ属、コナラ属コナラ亜属、カヤツリグサ科、ヨモギ属などである。

堀状遺構堆積物の花粉組成は特異である。もっとも注目をひくのはマメ科のサイカチ花粉の産出である。試掘2トレンチの堀状遺構堆積物である17層からは、木本花粉656個のうち504個、698個のうち552個が産出した。整地土とされる21層からも木本花粉177個のうち111個を占めている。2次5トレンチでも堀状遺構堆積物の27層からは最大で木本花粉123個のうち85個を占めている。サイカチ花粉は風によって運ばれることはほとんどないので、堀状遺構が周辺に生育していたと考えてよいであろう。さらに試掘2トレンチと2次5トレンチは離れており、また、第3節で記載されたように2次9トレンチの堀状遺構でもサイカチ近似種の立株が検出されていることから、堀状遺構に沿ってかなりの密度で植栽されていた可能性が高い。

その他の花粉で注目すべきものは針葉樹の数種と花粉が虫媒である広葉樹である。針葉樹のうちモミ属、トウヒ属、ツガ属はいずれの層準からも産出するが、これらは遠方へ風送されることは少ない。とくにトウヒ属は希少な針葉樹であり、現在では絶滅が危惧されるヒメバラモミやヒメマツハダ、ヤツガタケトウヒ以外には考えられない。これらは長野県のハケ岳など限られた場所で見られる。それゆえ、トウヒ属をはじめとしてモミ属、ツガ属が井川城内に植栽されていた可能性が高いといえる。花粉が虫媒である広葉樹にクリ、トチノキ、イボタノキ属、ニシキギ属、スイカズラ属などをあげることができる。とくにクリ、トチノキの産出はサイカチが多産する堀状遺構堆積物の下部で目立ち、井川城内か周囲に植栽されていたと考えられる。その他の広葉樹も庭木にされることが多いので、植栽植物といえよう。

中世では、草本花粉数がサイカチを除く木本花粉数を圧倒しているので、平野部に森林があったとは考えられない。風媒の花粉の大半は周辺の山地から風送されたか河川によって運ばれたものであろう。草本植物に目を転じると、オモダカ属、ヒルムシロ属、ミズアオイ属、ガマ属、ホシクサ属といった水生植物が産出しており、堀状遺構内に生育していたものと考えられる。これらは現在では水田雑草と呼ばれているもので、周辺の水田からもたらされたものであろう。多産するカヤツリグサ科とイネ科も同様に考えることができる。ただしイネ科には周辺の水田からもたらされたイネが多少とも含まれる可能性が高い。産出が比較的珍しいものにツリフネソウ属、オオアカウキクサ、サンショウモがある。ツリフネソウ属は日陰の湿り気のある場所に好んで生育し、堀状遺構の斜面に生育していたであろう。とくにオオアカウキクサは水田で旺盛に繁殖する水生のシダ植物で、おそらく水田から周辺の水田からもたらされたものであろう。サンショウモも水生シダ植物である。以上のような水生植物の産出は堀状遺構内が緩い流れを伴うものの沼沢地のような水域であったことを示している。その他、キンボウゲ科、ナデシコ科、ヒユ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、セリ科も井川城内外の草地にふつうな植物であったといえる。ソバ属はもちろん周辺域で栽培されていたものであろう。

周辺の山地・丘陵から飛来したと考えられるものにマツ属複雑管束亜属、ヒノキ科イチイ科、ブナ、イヌブナ、カバノキ属、シデ属がある。現在見ることができるアカマツ、コナラ、サワラを主要素とする森林の原型が中世においてすでに形成されていたと考えられる。

堀状遺構堆積物を整合で覆う近世の堆積物の花粉組成は中世の溝堆積物と異なる点はいくつかある。表の左の2試料がそれである。マツ属複雑管束亜属花粉が多産し、アカマツが周辺域に多くなったことを示している。花粉の生産量は多く遠距離散布されるので場所は特定できないが、2試料とも木本花粉数の20%

に満たないので、周辺の山地・丘陵には広がっていたであろう。一方、多産するハンノキ属花粉は、堀状遺構が河川の氾濫湿地と化した場所に拡大したハンノキ湿地林の存在を示唆する。

4 井川城址と周辺の景観復原

試掘2トレンチ、試掘8トレンチ、および2次5トレンチの堆積物特性を観察した結果、井川城址を取り巻く堀状遺構の構築以前にも流路があったと考えることができる。流路内に堆積した堆積物は大量の微粒炭からなるもので、井川城址の主郭部の地山とは異相関係にあるのではなく、層位的には上位の新しいものと考えられる。大量の微粒炭は、周辺域あるいは上流域から水流によって運搬されたもので、短期間に流域を埋め立てていったものと考えられる。堀状遺構はこのような微粒炭からなる堆積物を掘削して作られたであろう。堀状遺構周辺の整地土や盛土には多量の微粒炭が含まれているからである。整地土や盛土そのものを放射性炭素年代測定すれば、暗黒色の堆積物の年代が明らかになるはずである。

堀状遺構堆積物の花粉分析の結果から、堀状遺構に沿ってサイカチを植栽し、トウヒ属などさまざまな木本類を植栽していた時期は、試掘2トレンチの17層および2次5トレンチの27層の形成期までと考えることができる。サイカチ近似種の立株の放射性炭素年代から暦年代はcalAD1420-1462と較正されており、この暦年範囲に加えこれよりさかのぼった年代が想定される。

第1節と第2節に記載された珪藻分析および植物珪酸体分析の結果を総合して、サイカチが堀状遺構に沿って茂っていた当時の景観を復原すると以下ようになる。両分析および花粉分析の試料層位は表2のとおりである。堀状遺構は緩やかな水流を伴う沼沢地で、周辺の水田からもたらされたと考えられる水生植物が繁茂していた。植物珪酸体からはヨシの繁茂も示唆される。堀状遺構の内側には著しく発達した刺をつけるサイカチが植えられていた。花粉の産状からするとおそらく柵のように密植していたであろう。周辺域は水田が広がっていた。山地・丘陵にはアカマツ、コナラ、サワラを主要素とする森林が作られていた。

これまでに樹種同定された中世の木材は放射性炭素年代測定に供されたものだけであるが、埋没立株かそれと判断される樹種以外では、マツ属複雑管束亜属、サワラ、ヒノキ、コナラ属コナラ節、ブナ属の5分類群である。ブナ属も花粉では検出されているので、いずれも周辺の山地・丘陵の森林を構成していた要素であったことがわかる。

近世に向けてこのような景観は大きく変化した。堀状遺構は河川環境となり、上流からの粗粒碎屑物が堆積するようになった。サイカチは無くなり、水生植物相も貧相になった。周辺の山地・丘陵にはアカマツやコナラがさらに拡大し、現代に見るような里山が形成された。

表1 花粉組成と寄生虫卵、微粒炭および未炭化植物遺体の産状(数字は個数)

産出遺体と花粉分類群	トレンチ名(上段)と試料層位(下段)																		
	試掘2 4上	2次5 11	試掘2 6上	試掘2 9	試掘2 14上	試掘2 17上	試掘2 17下	試掘2 21上	2次5 27-1	2次5 27-2	2次5 27-3	2次5 47	試掘2 22	試掘2 29	試掘8 34	試掘8 43	試掘8 52	試掘8 59	
寄生虫卵: 回虫卵	○																		
寄生虫卵: 鞭虫卵	○																		
寄生虫卵: 有、無鉤糸虫卵	○																		
不明寄生虫卵	○																		
微粒炭	少	多	少	少	多	多	少	少	極多	多	多	少	多	極多	極多	極多	極多	極多	少
未炭化植物遺体	少	多	少	少	多	多	少	少	極多	多	多	少	多	極多	極多	極多	極多	極多	少
木本花粉																			
モミ属																			
トウヒ属	1	1	1	1	1	1	5	5	1	2			1	4	1			1	1
マツ属	29	46	8	8	2	11	14	8	11	4	4	3		1					
ツガ属	8	11	1	1	2	3	6	3	1		3			1					
イヌマキ属							1					1							
コウヤマキ																			
スギ	1	2					2	1	2										
ヒノキ科—イチイ科	23	28	2	35	13	14	47	18	14	1	14	10							
フササカ属	1						1												
サイカチ	1		2	1	9	504	552	111	5	1	85	3		1					1
ケヤキ属—ニレ属	8	4	2		3	11	2	6	2	1									
ムクノキ属—エノキ属	4	1				13	9	1						1					1
クリ	8	4	7	2	2	1	4	4						1					
フナ	2						5	1											
イヌブナ					2	1	3							1					
コナラ属	29	27	16	10	11	16	13	9	12	6	6	7	1	5	1			1	2
コナラ属—カシ属	3				2	2	2	2	2	4									
クルミ属—サワグルミ	5	5		1	1	6	2	2	2	1									
ハンノキ属	29	89	1	3	3	4	3	2	2	1	1			1					
カバノキ属	13	6	4	6	1	7	8	3	2	2	1								
ハシバミ属		1																	
シデ属	2	1	3	4	1	5	4	2						3					
ニシキギ属						3													
ヤナギ属	8	8		1	2	21	12	5	1										
ヌルデ属																			
カエデ属				2															
トチノキ		3	1	4	2	3	3	1		1									
サンシユ属	1					1								1					
アオキ属	1																		
トネリコ属		1			1	6	3												
イボタノキ属						3	2	1											
モチノキ属							1												
スイカズラ属								1											
ウコギ科			1			2								1					
草本花粉																			
サジオモダカ属	2	1		1			1												
オモダカ属			7	1	1	4	2		1						1				
ヒルムシロ属	5	5				3	1												
ミスアオイ属	3	1	2	1		6	6	13	2	5	2	1							
ガマ属	1					1													
ミクリ属	1																		
ホシクサ属							1			1									
カヤツリグサ科	505	55	33	72	22	63	42	51	40	9	28	28		26	4			12	
イネ科	233	303	58	78	34	77	83	46	33	17	42	25		18	1			1	
キンボウグサ科	1					2	1		2					1					
フウロソウ属																			
キカシクサ属		1					1				1								
マメ科						4													
ワレモコウ属	1						1		1										
バラ科	1	1					1		1										
アサ科—クワ科	8	1				13	2		1										
アブラナ科	8	9	1	2	2	2	2				1	1							
ソバ属	3	1			1	1	2												
ソバカズラ属							1												
イヌタデ属							2		2										
キシキシ属	1	6			1	2													
ナデシコ科	5	2	1	2	4	2	4	6			4	1		2					
ヒユ科	6	1	4	8	5	11	2	11	5	2	2	7		8					1
ツリバナソウ属									3		1	1							
ヤエムグサ属	1					3													
オオバコ属							1												
シソ科		1																	
ヨモギ属	33	11	8	32	21	51	41	18	16	9	19	8		3	1	1			
キク科	2	1	2	1	1	3			2	1	1	3		1					
タンポポ科	2	5	3	1	2	4	2	1	1	1	3	2							
オミナエシ属						1		3											
セリ科	11	1	2		2	3	4	3	5	1	3	4		2	1				
シダ植物球状体																			
オオアカウケクサ(球状)	1	1					1	1				1							
サンショウモ(球状体)																			
木本花粉数	171	242	46	80	53	656	698	177	61	21	123	27	3	20	4	0	8	3	
草本花粉数	833	401	123	201	123	254	202	166	118	48	108	86	0	66	8	1	14	0	
胎子数	21	11	19	9	12	45	30	26	17	8	14	12	0	4	1	0	0	0	

表2 景観復原のために行った花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体(プラント・オパール)分析の試料層位

(■ 花粉、○ 珪藻、△ 植物珪酸体)

	トレンチ名			
	試掘2トレ	試掘4トレ	試掘8トレ	2次5トレ
近世堆積物	■ 4上	○ 1~2 ○ 3		■ 9 △ 9 △ 16 △ 19
近世~中世 堀状遺構堆積物	■ 6上	○ 9~10		■ 27-1 △ 22
	■ 9-1	○ 11~13		■ 27-2 ○△ 27
	■ 14上	○ 14~16		■ 27-3
	■ 17上	○ 17		
	■ 17下	○ 18上 ○ 18下 ○ 19		
中世 整地土 盛土	■ 21上		■ 34 ■ 43 ■ 52	■ 47
中世以前 地山	■ 22 ■ 29	○ 24上 ○ 24下	■ 59	△ 地山

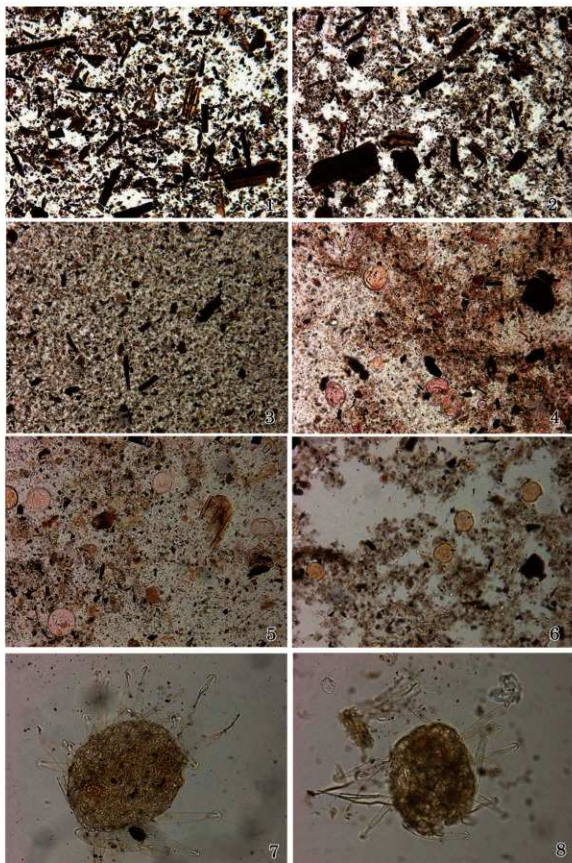


図1 微粒炭および花粉の産状とオオアカウキクサ球状体の光学顕微鏡写真

1.試掘8トレンチの52-53層. 2.試掘2トレンチの29層. 3.2次5トレンチの47層. 4.試掘2トレンチの4層上. 5. 試掘2トレンチの17層上. 6.試掘2トレンチの17層下. 7.オオアカウキクサの球状体(2次5トレンチの47層). 8.オオアカウキクサの球状体(2次5トレンチの27層1).

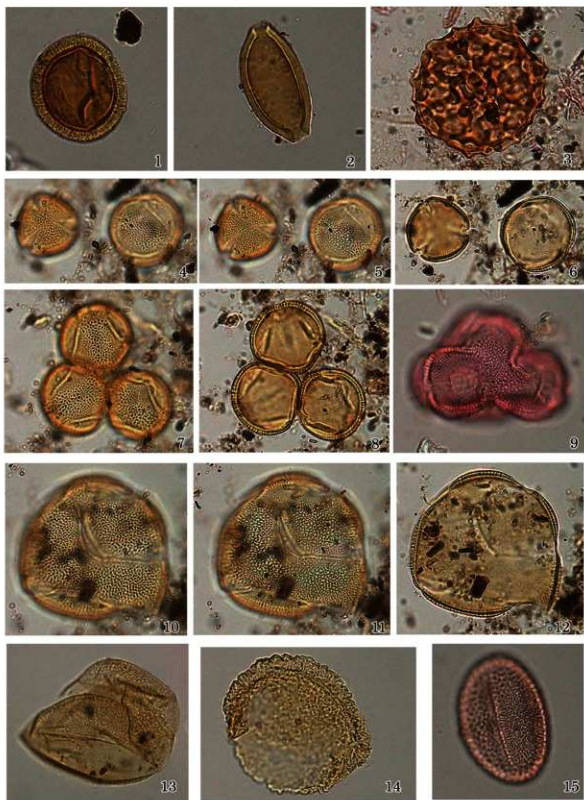


図2 寄生虫卵と特徴的な花粉の光学的顕微鏡写真

1.有・無鉤糸虫卵(試掘2トレンチ9-1層,長軸径 $48\mu\text{m}$), 2.鞭虫卵(試掘2トレンチ17層下,長軸径 $57\mu\text{m}$), 3.回虫受精卵(試掘2トレンチ4層上,径 $61\mu\text{m}$), 4-6.サイカチ花粉の極観像(左)と赤道観像(試掘2トレンチ17層下,左の径 $30\mu\text{m}$,右の径 $32\mu\text{m}$), 7・8.サイカチ花粉の3集粒の赤道観像(試掘2トレンチ17層下,極軸径平均 $32\mu\text{m}$), 9.サイカチ花粉の4集粒(試掘2トレンチ17層上,最大径 $73\mu\text{m}$), 10-12.サイカチ花粉の4集粒(試掘2トレンチ17層下,最大径 $73\mu\text{m}$), 13.トウヒ属花粉の斜赤道観像(試掘2トレンチ9-1層,最大径 $157\mu\text{m}$), 14.ツガ属花粉の極観像(試掘2トレンチ9-1層,最大径 $97\mu\text{m}$), 15.ツバ属花粉の赤道観像(試掘2トレンチ6層上,極軸径 $59\mu\text{m}$).

第Ⅵ章 総括

第1節 調査のまとめ

1 はじめに

本調査の最大の目的は、室町時代の信濃守護小笠原氏の本拠の変遷を物語る小笠原氏城館群の保存と活用を目指すため、各城館跡の歴史遺産としての価値付けを行うことにあった。そのため、井川城址では、従来わずかな文献と地名・伝承から想像するしかなかった居館の姿を、考古学的に確かめることが求められた。また、林城址については、先学の研究成果に依りながら改めて縄張調査を実施するとともに、山麓施設を含めた小笠原氏本拠の構成や広がりについての手掛かりを得ることが求められた。とはいえ、2年間という限られた時間の中ですべてを解明することは現実的に不可能であり、井川城址については居館の土台となる土木事業の確認と遺構・遺物から手掛かりを得ることを第一目的とし、林城址については縄張調査の対象を大城に絞り、小城については本報告の次年度に継続実施することとした。

本章では、こうした目的のもとに実施した調査の結果について考察し、次節以降に論考を加えるが、本節では特に井川城址の調査結果と文献上の「井河館」「井河ノ城」との関係、さらに井川から林への本拠移転について考察を行い、調査のまとめとしておきたい。

2 井川城址の調査結果と考察

まず、今回の調査結果から、居館を考察するうえで特に鍵となる事項について抽出する。

- ① 田川・牛伏川由来の堆積物による低湿地帯中の微高地に、大規模な土壇状盛土の造成が行われた。
- ② 土壇状盛土は外周に土塁を巡らせ、さらに周囲を堀状遺構や流路、川で囲んでいた。
- ③ その規模は、南北100m×東西70m、面積6,110㎡に及んだ。
- ④ 推定で4,000㎡に達する盛土を伴う土壇の築造は、一定の築造技法に基づいて計画的に実施された。
- ⑤ 土壇上の遺構面は4面以上あり、存続期間中に繰り返し改修が行われた。
- ⑥ 建物遺構に礎石建物が複数存在した。また掘立柱建物等の遺構が密集する状況が捉えられた。
- ⑦ 折れを有する虎口や門の可能性のある建物等、出入施設が検出された。
- ⑧ 土壇上からの遺物出土量は1㎡当たり0.11点と、県内の他の居館跡に比肩する量であった。
- ⑨ 遺物の主体をなす焼物はその4分の3を土師質皿が占め、灯明に使用したのも多数あった。
- ⑩ 土師質皿は在地の技法ながら京都系の器形・胎土を志向、一括廃棄は未確認ながら儀礼的様相が強い。
- ⑪ 礎石建物周辺から威信財の青磁笥形瓶が出土した。また、土壇上においては貿易陶磁の保有率が高い。
- ⑫ 天目茶碗・茶入・茶壺等の茶道具が存在し、舶載天目を伴っていた。
- ⑬ 碁石や香炉等の娯楽道具、青銅製刀装具や漆塗小札等の武器・武具が出土した。
- ⑭ 土壇状盛土北東の一段低い低地上には整地遺構面が広がり、礎石建物を伴う空間が存在した。
- ⑮ 焼物は14世紀後半～16世紀初頭までの時間幅を有するが、15世紀前半に偏在する傾向が大きい。

以上の結果から、検出された土壇状盛土遺構は、15世紀前半を中心に14世紀後半から16世紀初頭までを最大の存続期間とし、堀状遺構と土塁からなる外郭施設と折れを伴う虎口を有する単郭と推定され、武家の方形居館跡であろうと考察される。しかも、儀礼に伴う大量の土師質皿や威信財等を伴う1町規模の方形館であることから、国人領主あるいは守護居館に匹敵するものと考察される（前川1995）。

ちなみに信濃における国人クラスの1町規模の方形居館の例として、中野市の高梨氏館跡や須坂市井上

氏館跡、長野市栗田城跡、上田市真田氏館跡、佐久市野沢館跡等があり、中でも高梨氏館跡は、庭園を伴う典型的な京都志向の方形居館として建物配置や堀・土塁等全体構造のよくなるもので、築地堀から土塁へと外郭施設改修が捉えられている（中野市教委 1993）。また、栗田城跡は平芝守護所であった可能性も指摘され、平成2年の発掘調査では密集する遺構群から14世紀～15世紀前半の4,400点を超える焼物が出土している（長野市教委 1991）。一方、小笠原氏支配領域である安曇・筑摩郡下には、大町市仁科氏館跡（館ノ内館および天正寺館）、安曇野市法蔵寺館跡・鳥羽館跡・等々力氏館跡、松本市大妻氏館跡等比較的規模の大きい居館址があり、多くは安曇郡下の平地に分布するが、発掘調査及んだ例が少なく詳細がわからないものが多い（中川 1988b、長野県教委 1993 ほか）。

さて、方形居館と結論付けたくうえで、課題もいくつか発生する。一つは今回確認した土塁を伴う郭の造成開始時期である。確実に時期が押さえられるのは2面で、古瀬戸後Ⅲ期を主体とする遺物群の大半はこの面に帰属する可能性が高く、従って2面＝古瀬戸後Ⅲ期主体＝15世紀第2四半期中心という結論が下され、次の後Ⅳ期古段階も若干含まれることから下限は15世紀中葉までとなる。問題は下層の遺構面の評価で、1次6トレンチにおいて3面整地土から後Ⅲ期の直縁大皿が得られている。また、2次6トレンチの4面整地土中の炭化材 AMS 年代が1,429年～1,444年の値を示した。従って現状では15世紀第2四半期の造成は確実、5面以下の面に遡ってもせいぜい15世紀初頭までと考えられる。従って、遺物の出土のみで造成遺構を明らかにできない14世紀代の様相については、今後の解明課題としておきたい。

次に、居館の終焉はいつか。遺物の面では古瀬戸後Ⅳ期古段階以降遺物保有量は急速に減少して大窯製品は皆無に等しくなり、この時期に増加する内耳鍋の型式も極めて少ない。さらに、郭の法尻を埋める堆積土下層に大窯1段階の端反皿があったことから、16世紀初頭までにはほとんど足跡が途絶えてしまう。従って、16世紀前後を一つの区切りみておきたい。なお、虎口構造に折れを認めたが、新潟県江上館では15世紀第3四半期に出現するという（水澤幸一 2014）。本遺跡では遺構面最終面となる1面段階とみているが、その時期は先の2面の時期から推し計れば遡っても古瀬戸後Ⅳ期古段階＝15世紀中葉までであり、中心はおそらく15世紀後半となるので、概ね整合するものとみられる。

水澤幸一氏は、前川要氏の「方形居館体制論」（前川 1995）を前提とした上で、①途切れない水堀、②土塁、③土器を用いた儀礼が伴う武家居館を、国人領主階級の「方形城館」と定義し、東国武士が室町幕府將軍を頂点とする身分秩序の中に組み込まれていく過程においてその標識として顕現したものであるとした（水澤 2014）。井川城址では、極めて限定的な調査にとどまるため堀の全周を証することはまだできないものの、状況的には頭無川を利用した流路の機能を兼ねていたことは明らかであり、道路直下で確認はできなかったものの虎口部分の土橋による分断もなかった可能性が高い。削平を受ける土塁の存在は確実であり、土器を用いた儀礼の存在も濃厚である。従って、「方形城館」の要件を満たす可能性が高いと考えられよう。

では、居館内における空間利用はどうであったか。これに関しては、今回の調査目的から外れ、建物構造やその配置、庭園の検出等、様相の把握には程遠いため言及できない。わずかに今言えることは、東の虎口に対して西が地形的にもやや高い奥になり、礎石建物や威信財、貿易陶磁に対する比重がより高い傾向があるということで、小野正敏氏が示すような室町將軍邸をモデルとした空間構成（小野 1994）等の検証は今後の大きな課題である。

井川城址について、他に特記すべき結果として、土壌中の花粉分析結果から、堀状遺構の内側つまり居館の法面には、サイカチが密に植栽されていた可能性が高く、実際株も出土したことがあげられる。サイカチは材や果実が有用であるだけでなく、棘の発達した枝は防御機能を担ったことも考え得る。他に検出された植物とともに、居館やその周辺に植えられた樹木を考察するうえで非常に興味深い結果を得た。

なお、居館の帰属時期の検討の結果、礎石建物が15世紀中葉以前に遡る可能性が示された。東日本各地

における城館への礎石建物の導入時期には地域差があったことが知られているが、この点については、信濃の城館における導入時期を考えるうえで一つの示唆を与えたものとみたい。ただし、前章で報告したとおり、今回は礎石の扱いについての調査所見を検証する必要がある。

3 井川城址と「井河館」「井河ノ城」

本調査で捉えられた居館址は、果たして「井河館」あるいは「井河ノ城」といえるのか、小笠原氏城館群を構成する城館として見通しを示さなければならない。この点については、『諏訪御符礼古書』の「井河堀」以外、一次史料から証明することはできないため、二次史料である『信府統記』との整合性から検証する。

まず、「四方に流れ」があり「井」の字のような形であること、「四方沼にて流れもあり」「沼城」という表現は、まさに川が流れ低湿地が広がる中に居館があったことを表しており、今回の調査所見や数十年前まで周囲に低湿地が広がっていた事実と矛盾はない。次に「本城少し高し」とあり、主郭が周囲より高かったことを示しており、これも調査地の現況地形と整合する。さらに「広さ東西四十間南北四十六、七間」という規模は、これが伝承に基づくのか当時の地形から計測されたものなのか不明だが、南北は短いものの東西は一致する。また、「東の方に虎口の跡一所」とある点は検出された虎口跡とそこからまっすぐ東にのびる道があることから整合性が高いし、「土手形矢倉台の跡と見ゆる所塚の如く」とあるのは現在も残る塚状の高まりであることは明らかなので、同書が推定する館の範囲と居館址の確認範囲は完全に重なる。当時既に土塁は消失していたとみられるので、楕円形の地割もこのころには形成されていたのではないだろうか。

従って、今回検出された居館跡は、300年前に比定された「井河ノ城」推定地に存在するものであり、「井川ノ城」そのものの遺構である蓋然性は極めて高いものと考えられる。また、地名上の「井川」が『信府統記』で「本城」とされ、また今回居館跡が検出された範囲にほぼ限られていることもその傍証といえよう。

では、居館と小笠原氏の動きはどのように関わるのか。まず遺物から導かれる14世紀後半から16世紀初頭までの小笠原氏の動きは、貞宗から長棟あたりまでの代に相当する。第Ⅱ章で触れたように、この中で特に守護としての小笠原氏の力が一国規模に及んだのは政康の代で、守護就任の応永32年(1425)から没年の嘉吉2年(1442)は古瀬戸後Ⅲ期にあたり、まさに遺物量がピークを迎える第2面の時期である。従って、先の推定時期と重ねると、政康の代に造成が本格化し活動が隆盛期を迎えたことになり、奇しくも小笠原氏の動きと波長が重なる。続く政康以降の府中小笠原氏は持長—清宗—長朝—貞朝—長棟—長時と続く。清宗の代は政康の跡目を巡って小笠原家内での対立が激化する時期であり、この動揺の中で清宗が宝徳3年(1451)に林館を、また長禄3年(1459)に林城を築いたと伝わる。清宗の時期、応仁元年(1467)には鈴岡の政秀が乱入し、続く長朝の代である延徳元年(1489)頃には一時政秀が府中を掌握していた。この年政秀は棒荘として諏訪社五月会右頭を務めているので井川にいたと考えられ、翌年頃長朝を養子にして鈴岡に帰ることから、林への移転は、長朝が府中に戻った延徳3年(1491)以降ではないかと中川治雄氏はみている(中川1998a)。従って15世紀末までは井川館が存在していたとみられるので、『信府統記』に「併せ持てり」とあるように、一時期林と井川は併存していたと推定される。15世紀第4四半期に遺物が皆無に等しくなる現象はこうした情勢の反映と解されよう。さらに16世紀以降に下る遺物が皆無に等しいことから、島立氏による永正元年(1504)の移転以降は事実上廃れたことを示唆しているようにみえる。

4 井川から林への本拠移転

では、井川から林への本拠の移転時期について、林城址の側からはどのように見えるのか。この点については、考古学的調査がほとんどなされていない山上の城郭から語ることはできない。そこで、2つの城に囲まれ、「林館」も含む小笠原氏拠点の中核空間と推定した大嵩崎谷、とりわけ大規模な発掘調査が実施され

た林山腰遺跡の調査結果から確認してみよう。

斜面造成による平場が棚田状に連続する同遺跡から出土した焼物は、古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯3段階までみられた。このうち、大窯2・3段階のものはわずか2、3点のみであり、皆無に等しいと言ってよい。主体となる時期は、E区出土品を中心とする大窯1段階であった。これを古瀬戸編年に基づいて時期比定をすれば、15世紀後半～16世紀初頭、とりわけ大窯1段階の帰属時期である1480年頃から1530年頃までがピークであったといえる。

この年代観を井川城址と重ねると、両遺跡のピークは15世紀の前半と後半で入れ替わる状況となり、古瀬戸後Ⅳ期新段階が重複することとなる。このことから、15世紀後半において林山腰遺跡が出現し、それとともに井川城址の活動が縮小し、16世紀前後には井川城がほぼ完全に廃れるもの捉えられ、従って、この間に井川から林への本拠の移転が行われたものとみたい。また、林山腰遺跡の終焉は不透明な部分が多いが、現状では大窯2段階以降すなわち1530年頃以降の足跡はほとんど辿れない。この点は課題である。

こうした考古学的所見について、上に述べた文献・伝承に基づく小笠原氏の動きと重ねてみると、林山腰遺跡の出現は清宗～長朝の代となり、伝承上の林築城年とほぼ整合することとなる。また、遺跡がピークを迎える16世紀前後は長朝から貞朝の時期にあたるということになろう。

齋藤慎一氏は、武士の本拠に関して、戦国時代初頭の15世紀後半にあつては、従前の集落の存続の上に新たに軍事的な要害が付加され、両者が一体で成り立っていたとする(齋藤2006)。また、水澤幸一氏は、15世紀代の東日本において国人領主以上のクラスが方形城館を構え、15世紀後半に土塁・堀の構築が発達し、16世紀初頭にかけて塁線に折れを伴う構造を有するに至るとし、また15世紀中葉から併行して山城の維持が始まり、16世紀前半までには守護クラスの公的な館を除く方形城館の多くが廃絶し、山城に本拠を移動したと説く(水澤2014)。要するに15世紀後半～16世紀における山城の登場と本拠の移動は列島規模の動向であり、信濃にあつては、小笠原政康の死を契機とする一族の内訌と小笠原氏の守護権力の低下、それに伴う地域の不安定化が固有の事情となり、守護権力の本拠移動を招いたということができよう。

以上、15世紀後半から16世紀初頭にかけての井川城址の縮小・消滅と林山腰の出現・盛行が小笠原氏の動きや歴史上の事件と整合することが考古学的に確かめられた。

5 小笠原氏本拠の姿

では、室町、戦国期それぞれの時代における本拠の姿はどのようなものであったのであろうか。特に小笠原氏は守護家としての側面を有していた。しかし、15世紀初頭までの守護所は断片的ながらも船山や平芝等北信に所在したことが窺えるものの、15～16世紀代の守護所の記述は知られていない。これまで述べたように、井川城址は小笠原政康の時代に盛行期を迎え、また武田氏進攻前の15世紀末～16世紀初頭には林城址の麓にある林山腰遺跡が盛行した。それぞれの拠点には城館を中心に町や宗教施設を伴った城下町が広がっていたとみられ、あるいはそれが守護所と守護城下町であった可能性も考えられる。そこで、最後にそれぞれの本拠をとりまく景観に少し触れておきたい。

まず、井川城址においては、居館の周囲にも遺構を伴う整地された空間があり、本調査では北東部を中心にその一端を捉えることができた。特に試掘8トレンチでは大型の礎石建物を伴っていることから、有力家臣屋敷や寺院の存在が予想され、とりわけ居館址の鬼門に位置し近接して廣正寺(阿弥陀堂)や社が存在することから宗教施設の可能性も考えておきたい。また、こうした周辺施設を低湿地上に広範に構えるにあつては、水のコントロールが不可欠であり、居館をとりまく流路や2次2トレンチで検出された土塁を伴う流路等がそうした営みを表しているものとも受け取れる。自然科学分析の結果からも、居館が営まれた時期において周辺の乾燥が徐々に進んだことが指摘されており、松本盆地最低位の湿地帯に進出を果たした

背景には治水技術の発展によるがあったものとも受け取れよう。

こうした居館をとりまく周辺施設の広がりについては、屋敷や社寺に関わる地名が井川城址の周囲に多く分布する状況や『信府統記』の記述等から、鎌田や征矢野も含む広範囲に家臣屋敷や宗教施設を伴う町が広がっていたと推測される。さらに鎌田地区を南北に走る古道や頭無川を通じて南松本方面との関係も窺え、広い範囲にネットワークが出来あがっていたものと考えられよう。

次に、居館を中心に形成された各種機能を備えた町は、林移転後どのように展開したのだろうか。その点については第三章でも触れたが、居館をとりまく城下の景観を語るには材料が少なすぎることを承知で、山上の大城・小城と山麓の林山腰遺跡等との関係を明確にするため、あえて推論を提示しておきたい。

まず、おそらく大嵩崎谷には、領主の山麓居館や武家屋敷、寺からなる中枢が置かれたと考えられ、林山腰遺跡の発掘調査からその一端が見えたものと理解しておきたい。地名から推して、林館は現在の集落付近に想定されるであろう。この谷は松本盆地の平野部からは死角になり直接覗くことはできない。反対に、狭い谷奥の大嵩崎集落付近からは、麓の林集落越しに深志城や城山丘陵の犬甘城を見通し、はるか後方には北アルプスの峰々を望む。この限られた視界にある2城はいずれも小笠原氏の支城として、天文17年(1550)の武田進攻に際して本城とともに自落している(イヌイの城=犬甘城と仮定して)。

この中枢城の防御の要として狭長な谷を挟む尾根上に大城と小城が築かれる。殊に大城は大規模で、薄川畔まで広範囲をカバーする。この2城が現在に伝える姿は、戦国末期の改修により大きく変貌しているのであろうが、当時から要害であったことに間違いはないであろう。武田氏以前の古い縄張の特徴ともいわれる不整形削平地群から後出といわれる築城手法まで、今後考古学的調査を取り入れた検証が必要となる。

大嵩崎谷の眼下には鍵の手に道が配される林の町が形成されていた。その北は西流する薄川が画し、また町の入口である大城の麓には元々尾根上にあった慈眼寺が移り、小城の西麓にも小笠原氏の菩提所として本拠移転に先立ち開かれた竜雲寺(廣澤寺)や浄林寺等の寺院が開かれた。小城の西に対峙する尾根には古社千鹿頭神社があり、さらに井川から林に向かう途中の中林には国府八幡宮である筑摩神社が古くから鎮座し、大城から見下ろす薄川対岸には水分神を祀る須々岐水神社も鎮座していた。このように、小笠原氏の本拠移転以前の林周辺は聖地性も帯びていたとみられ、本拠移転後も新たな宗教施設が配されていた。

以上が現在イメージされる戦国期の小笠原氏本拠の姿である。こうした景観は、一乗谷朝倉氏遺跡をはじめとする戦国城下町の景観によく似ており、今後城郭と合わせた周辺部の調査を進めることにより、小野正敏氏が描いた同心円構造の戦国城下町の姿(小野1994)や、内堀信雄・鈴木正貴氏らを中心に取り組みされている守護所と守護城下町の空間構造のモデル(内堀ほか2006)等を描くことも可能となろう。

なお、本報告では大城と水番城の間に広がる橋倉谷との関係にも注意を向けてみた。ここは谷口の南方集落において鎌倉時代に遡る古い集落跡が検出されており、市の存在を想起させる地名もあった。さらに、直線的な地割をとどめる橋倉・南方両集落にも周囲に鎮守社や堂宇等の信仰施設が配されていた。大嵩崎谷との時間的な関係は不明だが、今回、橋倉から林大城に至る登城路もより鮮明に捉えられることとなり、谷を隔てた水番城を含む3者の関係は決して無視できない。従って、2つの谷空間と3つの城からなる領域の形成についても、今後の課題として解明に取り組みなくてはならない。

今回の調査によって、文献や伝承上の井川城の存在と、山麓の拠点遺跡を通じて井川から林への小笠原氏の本拠移転について、大づかみながら考古学的な手掛かりを得ることができた。この成果により、冒頭で確認した調査の目的は概ね達成できたものと考えたい。しかし小笠原氏城館群の調査はまだ緒についたばかりであり、解明しなければならぬ課題は山積している。今後、遺跡の保護を早急に図るとともに、点としての城館遺跡から始まり、それを核とする町や生産域等面としての広がりまで、息の長い調査研究に取り組んでいく必要があり、またそれが私たちの責務ともいえよう。

第2節 信濃の山城の再検討—特に石垣を中心として—

中井 均(滋賀県立大学教授)

はじめに

信濃守護小笠原氏の居城林城をはじめ、その支城と考えられる林小城、さらには関連する埴原城、桐原城、山家城などの諸城の特徴として石垣がある。戦国時代の山城は基本的に山を切り盛りして築いた、土の城である。ところが松本周辺の山城には石垣が導入されている。この松本周辺の山城の石垣については、小笠原氏によるものではなく、天正10年(1582)の武田氏滅亡後に草刈り場と化した信濃に入った徳川氏によるものではないかといった説もあり、その評価について述べたものはない。そこで拙稿では、全国的な事例を検討することによって、松本周辺の山城に用いられた石垣の構築年代と、築造者について検討してみたい。

さて、日本において城郭に石垣が導入されたのは、天正4年(1576)に織田信長によって築かれた安土城を嚆矢とする。安土城では石垣だけではなく、天主という高層建築が造営され、金箔瓦が葺かれた。こうした石垣(高石垣)、礎石建物(天守)、瓦(金箔瓦)という3つの要素を兼ね備えた城郭は以後の織田信長、豊臣秀吉とその家臣団の築城に貫徹されていく。こうした城郭を織豊系城郭と呼び、日本城郭の革命的变化であった。

もちろん安土城以前にも石垣の導入された城郭は存在する。例えば近江守護佐々木六角氏の居城である観音寺城はほぼ城域のすべてを石垣によって築かれている。この石垣は「下倉米銭下用帳」(金剛輪寺文書)によれば弘治2年(1556)に築かれたものであることが確認できる。全城の石垣が1年で築かれたとは考えられず、さらに構築年代がさかのぼる可能性もある。また、同じ近江の事例であるが、水基岡山城では発掘調査の結果、石垣が検出された。この水基岡山城は室町幕府12代將軍足利義澄を迎えるために永正5年(1508)に九里信隆によって築かれたものである。大永5年(1525)に六角定頼に攻められ落城した後は廃城となっており、検出された石垣も永正5年に築かれたものと考えてよい。自然石をほぼ垂直に積み上げ、隅部は算木積とならず、稜線もまったく通らない。こうした石垣が安土築城50年前に構築されていたのである。

さらに近年は各地で発掘調査によって安土城をさかのぼる石垣が検出されている。まずはこうした安土築城以前の石垣についてみておきたい。

1 安土築城以前の各地の石垣

15世紀後半から16世紀前半にかけて日本列島のいくつかの地域で山城に石垣が導入される。それは信濃の松本周辺、美濃、北近江、南近江、西播磨から東備前にかけて、安芸、北部九州に顕著に認められる。松本周辺については後に述べるとして、ここでは他地域の状況を概観しておきたい。

(1) 美濃

美濃守護土岐氏の本城となった大桑城では、北部の谷筋に階段状に削平地が構えられているが、その前面は石垣によって築かれている。最大のものは高さ4mを測る大規模なものである。自然石を垂直に近い角度で積み上げている。

斎藤道三が居城とした稲葉山城についても、岐阜城山麓の信長居館の発掘で検出されている。ここでも自然石を垂直に近い傾斜面を積み上げている。

伊木山城(各務ヶ原市)でも発掘調査によって石垣が検出されている。

(2) 北近江

近江では北近江、南近江のいずれからも安土城に先行する石垣が確認できる。北近江は浅井氏、南近江は六角氏によって導入されたものと考えられることより、ここでは近江一国で扱えるものではなく、北近江、南近江と違う技術によって築かれた石垣として扱う。

北近江の戦国大名である浅井氏の居城は小谷城（長浜市）である。破城によってかなり破壊されてしまっているが、黒鉄門、山王丸、清水谷（大野木屋敷）などで巨石を用いた石垣が残されている。山王丸東面の通称大石垣は高さ約4mを測る。自然石を垂直に近い角度に積み上げている。出隅ではないが、石垣の端部が構えられており、そこには石材の長辺と短辺を交互に組み合わせて積む、算木積が萌芽している（写真1）。

鎌刈城（米原市）では発掘調査の結果、ほぼ城域のすべてが石垣によって構築されていたことが明らかとなっている。特に注目されるのはその構築技法である。石垣の石材は主として石灰岩を用いている。その接合面は安定しておらず、隙間がかなり空いている。そこに間詰石を充填するのではなく、粘土を詰め込んで接着剤としていたのである。主郭正面ではこうした技法によって高さ4mにおよぶ石垣を築いている（写真2）。

（3）南近江

近江守護佐々木六角氏の居城である観音寺城（東近江市・近江八幡市）は従来、安土城に先行する唯一の本格的な石垣と評価されてきた。近年の研究では北原治氏によって観音寺城の石垣の石材が矢穴技法によって割られたものであることが明らかにされている。割りたい母岩に鑿によって溝を列点状に掘り込み、その溝に楔を入れ、玄能で打ち込むと、列点に沿って亀裂が生じて母岩が割れ、割れた石材には列点の溝の半分が歯型のようにつくわけである。切手のミシン目と同じ原理である。城郭の石垣にこうした矢穴技法によって割られた石材が用いられるのは天正年間頃からであるが、もっとも盛行するのは慶長5年（1600）の関ヶ原合戦直後に築かれた石垣からである。

そうした矢穴が観音寺城で用いられているのである。観音寺城の石垣については、『下倉米銭下用帳』（『金剛輪寺文書』）の弘治2年（1556）の記録に、「御屋形様惣人所下石垣打」、「御屋形様御石垣打」と記されていることより、少なくとも弘治2年には築かれていた石垣であることが判明するとともに、その構築技術が金剛輪寺という寺院の技術であったことがわかる。南近江の城郭に石垣が導入された背景には寺院の技術が援用されていたのである。本格的な石垣は寺院の技術によって築かれたのである。その特徴は巨石を垂直に近い角度で積むことである。平井丸正面の門跡両脇の石垣は観音寺城中でもっとも有名な石垣であるが、基底部に注目すると、築石より一石分前面に出されている（写真3）。東国の石垣として著名な後北条氏の石垣に共通する顎止め技法と呼ばれるものである。無論、東国の技術が導入されたものでも、観音寺城の技法が関東に伝わったものでもない。石垣を安定して積むための技法として観音寺城でも、後北条氏の城にも用いられたものであろう。

この観音寺城の石垣と同様の石垣が、小堤城山城（野洲市）、三雲城（湖南市）など六角氏関連の城郭にのみ用いられている点は注目できる。

また、水笠岡山城（近江八幡市）では前述したように、永正5年（1508）に九里信隆によって築かれたと見られる石垣が発掘調査で検出されている。検出された石垣は高さ3mにおよび、自然石の巨石を用いて積み上げられている。隅は算木とならず、稜線もまったく通らない。積み上げ角度はほぼ垂直に近い。周辺状況より大永5年（1525）の落城以後再利用されたとは考えられず、石垣は永正5年のものと見てよい。これまでほとんど注目されていなかったが、本格的な城郭石垣としては観音寺城よりも古く、安土築城68年も前の最古級の石垣として評価しなければならない。

（4）西播磨・東備前

感状山城（相生市）はほぼ城域全体を石垣によって築いている。なかでも谷部に構えられた大手門と、南曲輪群の石垣は高さ2m近く積まれている（写真4）。いずれも自然石を垂直に近い角度に積んでいる。注目されるのは南曲輪群2段目腰曲輪の石垣で、出隅部を直角に折り曲げず、円形に収めている点であろう。城の歴史はほとんど不明である。ただ、天正14年（1586）頃には宇喜多氏の家臣である岡豊前守光顕が城の付近を領しており、その段階のものと考えられる。すでにこの段階では織田・豊臣は城郭に石垣を導入しているが、隅丸く収めるなど織田・豊臣の石垣とは明らかに相違することより、宇喜多氏の技術による石垣と考えられる。

置塩城(姫路市)では山頂部に屋敷割をおこない、その屋敷地が石垣によって築かれている(写真5)。また、屋敷地だけに石垣を構えるのではなく、山頂の主郭部にも用いられている。また、一部には巨石を用いた箇所もあり、石垣を権威として見せるものでもあったことを物語っている。

東備前では三石城(備前市)、天神山城(和気町)をはじめ多くの城郭に石垣が用いられている。

宇喜多氏と浦上氏が戦う段階でこの地域の城に石垣が導入されたようである。

(5) 安芸

吉川氏領では戦国時代後半に極めて特異な石垣が築かれる。木村信幸氏によると、それは①石の最も広い面を表面に出して立てた石を、適当な間隔をあけて配置していること。②立石の奥行きはあまりないこと。③立石と立石の間には、石の広い面が上下に重なり、最も狭い面が隣合うように、石を横積みしていることである。万徳院(北広島町)、吉川元春館跡(北広島町)などの平地居館や中世寺院に見られるが、小早川氏の居城である新高山城の石垣にも認められる。

年欠 12月5日付け吉川広家書状に、

「堀川普請無緩中付、過半相調之由肝要候、弥肝煎専一候、各辛勞之通可申間候、一、畿島石垣事、年内御分別候様、奉行衆へ可申分候、寒中と申、打続候て成間敷存候間、石つき之もの共可下之由申付候へ共、先々相延候、能々可申分事專要迄候、渡飛(渡辺 長)、児若(児玉元兼)へ如此申遣候、謹言、

十二月五日

(花押)

祖九(祖式長好)

森四兵(森脇春貞)

二神左(二宮)

とあり、畿島の石垣について、「石つき之もの共」を畿島に下るよう命じていたものを延期したことがわかる。この「石つき之もの共」が吉川氏(広くは毛利氏)が抱えていた石工集団であった可能性が高い。書状の年代は広島築城と合わせて考えると、天正19年(1591)のものとしてよい。天正19年であればすでに毛利氏は豊臣大名となっており、豊臣秀吉の築城した城郭にも多く接しているはずであり、安土城に先行する石垣ではない。ところが同じ積み方の万徳院の石垣が天正3年(1575)に完成していることより、少なくとも「石つき之もの共」という石工集団の存在は、天正3年までは遡らせることが可能であり、それは毛利氏独自の石工として捉えることができる。

(6) 北部九州

高祖城(福岡県)では発掘調査によって石垣が検出されている。上ノ城と呼ばれる主郭は3段の削平地から構成されるが、そのいずれもが石垣によって築かれていた。石垣は破壊されており、本来の高さは不明であるが、もっとも残りのよい箇所では1.7mを測る。いずれのトレンチで検出された石垣も地山を削り出し、その前面に自然石をほぼ垂直に積み上げており、裏込めの栗石は用いていない。

なお、高祖城からは瓦も大量に出土している。なかでも唐花菱文袖瓦は注目される。唐花菱は周防の大内氏の家紋であり、大内氏が糸島に怡土部代として烏田氏を派遣した段階で築かれた石垣の可能性を示唆している。

北部九州では花尾城(福岡県・写真6)や、筑紫氏の居城である勝尾城(佐賀県)などでも石垣が導入されている。

2 安土築城以前の戦国大名の石垣

ところでこうした地域の特徴とは別に築城者個人が積極的に石垣を導入した事例がある。それは三好長慶による芥川山城(高槻市)と、飯盛城(大東市・四条畷市)である。天文22年(1553)に長慶が入城した芥川山城では大手と考えられる谷筋に巨大な石垣を築いて遮断線としている。長慶は永禄3年(1560)に河内飯盛城に移る。飯盛城では従来より石垣は確認されていたが、近年の分布調査によって、ほぼ全域全面、

特に東側に面した諸曲輪が石垣によって築かれていたことが明らかとなった(写真7)。場所によっては2段、3段の段築によって築かれている。隅の残る部分では算木積みは未発達である。いずれの石垣もほぼ垂直に積み上げられている。

一方、織田信長の築城については、天正6年(1576)の安土築城によって石垣が導入されたと考えられていたが、近年の発掘調査によって永禄10年(1567)築城の岐阜城、さらに永禄6年(1563)築城の小牧山城でも石垣を用いていたことが明らかにされた。信長は自らが築いた城郭には当初から石垣による築城を意図していたわけである。小牧山城では主郭の周囲を2段、もしくは3段の段築による石垣を巡らしていた。その特徴のひとつに巨石を2～3段積み上げるものがある(写真8)。

こうした巨石を配列する石垣は岐阜城でも用いられており、岐阜城の山麓に構えられた信長居館正面の喰違虎口や、信長居館の一部分で巨石列やその抜き取りが検出されている。岐阜城の山城部分では分布調査によって井戸曲輪の周囲に自然石を用いた石垣が2段の段築によって築かれていることも明らかとなった。その積み上げ角度は垂直に近い(写真9)。

このように小牧山城段階から巨石列と、小石材を用いた垂直に積むという2種の石垣が存在し、用途によって使い分けられていたようである。

しかし、安土城では巨石列が用いられなくなる。ただし、黒金門や二の丸には鏡石として巨石が配置されている。こうした巨石利用は小牧山城や岐阜城の巨石列の系譜を引き継ぐものであるのかもしれない。しかし、大部分の石垣は巨石を用いなくなり、小石材による石垣となる。さらに注目されるのは積み上げの角度である。それまでほぼ垂直に積み上げられていた石垣に勾配が誕生したのである。その角度は60°程度であるが、それまでの石垣とはこの勾配の出現により一線を画するものとなった。おそらく石垣直上に分厚い壁と瓦を葺く建物を配置するために、垂直に積まれた石垣では対応できないために勾配が出現したのと考えられる(写真10)。

ところで、安土城の石垣については近江の技術が導入されたものと考えられていたが、六角氏の諸城の石垣では石材に矢穴が認められるが、安土城ではまったく認められない。さらに近年の調査で信長の居城である岐阜城や小牧山城で先行する石垣が検出されていることより、安土城の石垣は近江の技術ではなく、むしろ信長が尾張時代より使っていた工人が動員されたものと考えられる。

なお、信長の岐阜城に見られる巨石列であるが、これに類似する石垣が越前一乗谷朝倉氏遺跡(福井市)で認められる。一乗谷の詰城である一乗谷城は畝状堅堀群を有する典型的な戦国期山城で、石垣はまったく用いられていない。ところが一乗谷を限る上城戸では腰巻石垣のように巨石を立て並べていたことが明らかにされている。また、下城戸でも虎口部分に巨石を積んで石垣としていたことが明らかとなっている。こうした巨石を配置する石垣は越前では白山平泉寺に残存しており、こうした寺院の技術が一乗谷に援用されたのと考えられる。

3 信濃の石垣

安土築城以前の石垣分布のなかに信濃がある。とりわけ松本周辺の山城で石垣が顕著に用いられている。

(1) 林城(松本市)

林城は筑摩山地の最北端に位置している。築城に関する詳らかな史料はないが、15世紀中頃に守護小笠原氏が井川城より林に移ったと考えられている。『信府統記』には「小笠原家ノ要害」と記されている。

林城は大きく東方の山頂に築かれた林大城と西方の山頂に築かれた林小城から構成され、両城に挟まれた谷筋の林山腰遺跡からは16世紀の礎石建物が検出されており、小笠原氏の居館の可能性も考えられる。大城では主郭を巡る土塁の内外に石積みがあり、築城当初は石塁であったと見られる。

林小城は主郭を巡る土塁の外側には鉢巻石垣が構えられている(写真11)。高さは約1.5m程度だが、石材は自

然石を用いた野面積みで、その傾斜はほぼ垂直となるのを特徴としている。

(2) 桐原城（松本市）

桐原城は林城の北東約2kmに所在する大蔵山に築かれている。『信府統記』には、桐原大内蔵真智によって寛正元年（1460）に築かれたと記されている。『高白斎記』によると、天文19年（1550）の武田晴信による筑摩郡侵攻により林城とともに自落したと記されている。主郭を巡る土塁の内外面に石垣が築かれていた（写真12）。一部では鉢巻石垣とその下部にも石垣が築かれる、2段の石垣も認められる。桐原城では主郭だけではなく、各曲輪の斜面に石垣の痕跡が認められ、城域の大半が石垣によって築かれていた可能性が高い。

なお、この石垣は扁平の石材を垂直に近く積み上げているという特徴がある。

(3) 山家城（松本市）

山家城は林城の東部に所在する秋葉山に築かれている。『信府統記』には「中入山ノ古城」と記されている。『守矢満實書留』に文明12年（1480）に小笠原長朝が山家城を攻め、山家孫三郎が討死したとあるのが初見である。『高白斎記』には天文19年（1550）の武田晴信の筑摩郡侵攻によって林城、桐原城とともに自落したと記されている。

主郭の周囲に巡らされた石垣は、最も高いところで3mにもおよんでいる（写真13）。この石垣も扁平の石材を用いているが、これだけの高さであるにもかかわらずほぼ垂直に積み上げている。

なお、山家城は主郭の背後に5本もの堀切を設けているのであるが、その背後にもさらに曲輪を構えており、広大な城域を構えている。しかし、石垣が認められるのは主郭の周囲だけであり、極めて象徴的に石垣を用いたのではないかと考えられる。

(4) 埴原城（松本市）

埴原城は林城の南部に所在する鉢伏山地に築かれている。東西約850m、南北約650mという広大な城域を有する山城であるが、この城に関する史料は一切知られていない。主郭の周囲には高さ1.5mの石垣が築かれているが、一部では2段積みとなり、その高さは3mにおよんでいる（写真14）。ここでも石垣には扁平の石材が用いられ、垂直に近く積み上げられている。また、埴原城も広大な城域のなかで主郭周囲のみ石垣が用いられている。

(5) 青柳城（筑北村・麻績村）

青柳城は虚空蔵山を越えた筑摩郡の北部に所在する城山に築かれている。天正10年（1582）の武田氏滅亡後、筑摩郡北部は小笠原貞慶と上杉景勝との争奪の場となった。青柳城もこの両氏の争いに巻き込まれ、最終的には天正18年（1590）頃までは存続していたものと考えられる。

主郭の北辺には石垣が築かれ、最も高いところでは高さ4m強を測る。主郭では他の面にも部分的に石垣が認められ、築城当初は主郭はすべて石垣によって築かれていたものと思われる。この石垣も扁平の石材が用いられ、やはり垂直に積み上げられている。また、石垣は主郭にのみ用いられているのも共通している。

これらの城以外にも長野県では、鞍骨城（千曲市・長野市）で、扁平の石材を積む石垣や、塩崎城（長野市）、松尾城（上田市）、志賀城（佐久市）などでも石垣が認められる。

4 信濃の石垣の年代をめぐって

では、こうした松本周辺の山城の石垣はいつ頃築かれたものなのであろうか。天正10年（1582）に信濃を支配していた武田氏が滅ぶと、徳川家康を背後に小笠原貞慶が深志城を奪還する。以後、信濃では木曾義昌、徳川家康をバックにした小笠原貞慶、上杉景勝をバックとした小笠原貞種の三つ巴の抗争の場となった。石垣はこの段階で築かれたものと考えられていた。

おそらくそうした説には、石垣は高度な技術であり、武田氏の信濃支配以前のものとは考えられないとい

う前提に起因する。しかし、そもそも石垣が高度な軍事施設として評価できるのであるか。安土築城以前にも列島の各地で石垣は萌芽している。安土以前の石垣は決して軍事的に発達した防壁施設などではないのである。軍事的に発達した石垣とは直線的であり、かつ随所に折をつけて横矢をかけている。さらに主郭周囲というよりも、虎口部分に導入されるものが軍事的に発達した石垣であり、それは信長の安土城を嚆矢とするものである。

つまり信濃の石垣は決して高度に発達した石垣、つまり天正 10 年以後の石垣ではないのである。おそらく天正 10 年以後に導入された石垣であれば、いわゆる織豊系城郭の石垣に類似するような石垣となっていたはずである。

さらに徳川家康がバックについたので石垣が築かれたという説も成り立つようであるが、家康は天正 10 年段階では石垣を築く技術は持ち得ない。家康が自らの築城に石垣を導入するのは江戸城からである。それも天正 18 年（1590）に江戸に入城した段階ではなく、慶長 8 年（1603）の改修以後である。つまり天正 10 年直後に家康には石垣を築く工人集団を掌握していたとは考え難いのである。

ここで改めて松本周辺の山城の石垣の特徴を列記しておきたい。

- ①扁平の石材を用いる
- ②高さは 1～4m 程度で、垂直に積む
- ③鉢巻状に土塁の上部に積む
- ④主郭周辺にのみ用いる

では、松本周辺の石垣の構築をどう考えればよいのだろうか。その答えを導き出す重要な資料が殿村遺跡である。殿村遺跡からは 15 世紀後半と考えられる石垣が検出された（写真 15）。その性格は当初会田氏の居館と考えられていたが、その後の調査成果より寺院などの宗教施設と考えられるようになった。その正面に石垣が構えられていたのである。その中心となるのは長方形の石材を横位に積む工法であった。

さらに殿村遺跡の背後に聳える虚空蔵山に築かれた虚空蔵山城も石垣によって築かれていたことが明らかになった。特に中ノ陣と、秋吉城と呼ばれる尾根上に築かれた部分には扁平の石材によって垂直に積まれた石垣が認められる。しかも、この中ノ陣と秋吉城に挟まれた谷筋に築かれたテラスで実施された発掘調査でも扁平に積み上げられた石垣が検出されたのである（写真 16）。その構築年代は出土した遺物から 15 世紀末から 16 世紀初頭と見られている。

このように虚空蔵山麓では、まず 15 世紀後半に殿村遺跡が石垣によって造営され、そうした寺院側の技術によって 15 世紀末から 16 世紀初頭に虚空蔵山城に石垣が築かれたものと考えられる。そしてそうした石垣構築技術が 16 世紀中～後半頃に守護小笠原氏や、その関連する山城に導入されたものと考えられる。家康や貞徳よりも、こうした石垣構築の系譜の延長線上に林城や桐原城、埴原城、山家城の石垣は位置付けできるものと考えられる。

おわりに

日本列島では 15 世紀後半から 16 世紀初頭頃に山城に石垣が導入されるようになった。さらに織田信長も自らの居城を石垣によって築くようになる。各地の石垣は 15 世紀末からのうねりとして出現したものであった。そして信長の石垣による築城は日本築城史上の革命的变化であった。以後の日本の城は石垣、天守、瓦を用いるようになる。

松本周辺の山城の石垣はそうした 15 世紀末からのうねりのなかで出現したのとして位置付けできよう。

追記 なお、石垣とは本来、その背後に栗石と呼ばれる裏込め石を充填する構造のものをいう。栗石を充填しない場合は石積みと呼び、明確に区別しなければならない。しかし、発掘調査によらない場合は背後の構造を明らかにすることはできない。従って総稱ではすべて石垣として用いた。



写真1 小谷城石垣



写真2 鎌刃城石垣



写真3 観音寺城石垣



写真4 感状山城石垣



写真5 置塩城石垣



写真6 花尾城石垣



写真7 飯盛城石垣



写真8 小牧山城石垣



写真 9 岐阜城山城石垣



写真 10 安土城石垣



写真 11 林小城石垣



写真 12 桐原城石垣



写真 13 山家城石垣



写真 14 埴原城石垣



写真 15 殿村遺跡石垣

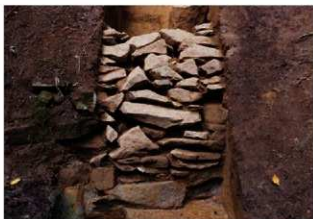


写真 16 虚空蔵山城石垣

第3節 信濃の中世・戦国史と小笠原氏城館群

笹本 正治（信州大学人文学部教授）

1 小笠原氏と井川館

小笠原氏の系図である「笠系大成」によれば、甲斐源氏の祖とされる源義光（1045～1127）の孫清光（1110～1168）の三男である加賀美遠光（1143～1230）は、文治元年（1185）8月に信濃守に任じられ、信州に移った（ただし系図なので必ずしも確実とはいえない）。小笠原氏の祖の長清（1162～1242）は遠光次男として甲州小笠原館に生まれ、父の所領を相続して小笠原氏を称した。名称のもとになった「小笠原」の地名は甲斐国巨摩郡にあり、現在の山梨県南アルプス市の法善寺（写真1）が居館跡だとされる。長清は父が信濃守に任ぜられた時に従って、信濃に移ったという。仁治3年（1242）7月15日に長清が亡くなると、その跡は京都六波羅（京都市東山区）の館で長清の嫡男として生まれた長経（1179～1247）、長経の嫡男で信州伊那郡松尾館（飯田市）生まれの長忠（1202～1264）、松尾館で生まれた長政（1222～1294）、松尾館で生まれた長氏（1246～1310）、同じく松尾館で生まれた宗長（1273～1330）と続いた。このような状況からして、小笠原氏は松尾に根拠を置いたものといえる。

宗長の嫡男貞宗は永仁2年（1294）に松尾（飯田市）で生まれ、北条貞時から偏諱（貞の字）を受け、鎌倉幕府に仕えた。元弘の乱（1331～1333）では新田義貞に従い、足利尊氏らとともに後醍醐天皇の討幕運動を鎮圧するため楠木正成の赤坂城（大阪府千早赤阪村）を攻めたが、尊氏が後醍醐天皇に味方するとこれに従い、鎌倉攻めに参加した。この功績により貞宗は建武2年（1335）8月14日に、改めて信濃国の守護に任ぜられた。建武2年9月27日に貞宗は安曇郡住吉荘（安曇野市）を、貞和3年（正平2・1347）4月26日には近府春近領（塩尻市から松本市島立）を与えられ、信濃府中へ進出する足掛かりを得た。そして、館を松尾から信濃府中（松本市）の水が豊富で一帯が井川と呼ばれていた井川に移した（本報告書の小笠原氏城館群において構成の中心をなす要素）。ちなみに、本書の報告の通り井川城址（写真2）の発掘調査から、大規模な造成があったことが明らかになっており、人工的に土を盛り、建物などが造られた地で、井川城の跡に間違いのないといえる。

上田から現代の松本に移った古代の信濃国府は、地名などからして惣社近辺にあったと考えられている。貞宗は信府に新たな居館を築こうとしたが、旧来の勢力が握る地域に入り込むことができず、新開発地の井川に居館を構えたのであろう。いずれにしろ、新たな勢力が地域に入っていく場合、どのような場所を基盤にしたか、またどのようにして館を造ったか、守護の館の規模がどのくらいであったか、そこで営まれた生活がどのようなものであったかなどを認識し、考察する際、井川城址は大きな価値を持つ遺跡だといえる。

貞宗は建武3年（延元元・1336）に後醍醐天皇が比叡山へ逃れた際、近江坂本（滋賀県大津市）に滞陣し、後醍醐方の兵糧を絶つため琵琶湖の湖上封鎖を行った。その後も北朝側の武将として金ヶ崎の戦い（福井県敦賀市）、青野原の戦い（岐阜県大垣市）など各地を転戦し、暦応3年（興国元・1340）7月には、遠江から信濃南朝方の拠点である伊那谷に入った北条時行を大徳王寺城（伊那市長谷）に破った。貞宗は正平2年（貞和3・1347）5月26日、京都において56歳で死去し、嫡男の政長が家督を相続した。

元応元年（1319）に井川館で生まれた政長は父とともに尊氏に従い、北朝方の武将として各地を転戦した。観応の擾乱（1349～1352）では尊氏・高師直方についたが、正平6年（観応2・1351）1月、京の自邸を焼き払って足利直義方に降り、打出浜の戦い（兵庫県芦屋市）に参戦した。正平7年（文和元・1352）10月、尊氏が鎌倉に拠った直義を討つために出陣すると、政長は尊氏軍の先鋒として遠江に出兵し、12月に信濃へ戻り、諏訪直頼・祐津貞貞の軍を小県郡夜山中尾（上田市）に破った。翌年、家督を井川館で生まれた長男の長基に譲った。正平10年（1355）、信濃に拠っていた後醍醐天皇の皇子、信濃宮宗良親王が諏訪氏・

仁科氏ら官方勢力を結集して挙兵すると、政長や長基らは甲斐の武田氏らとともに鎮圧に当たった（桔梗ヶ原の戦い、塩尻市）。政長は正平20年（貞治4・1365）3月21日に没した。

正平11年（1366）、幕府は信濃守護を長基から上杉朝房（犬懸上杉家）に交代させた。しかし、長基は朝房や国人衆とともに活動を行っており、信濃における軍事指揮権を維持していたようである。井川館で生まれた次男の長秀は、長基から所領の譲りを受け家督を継いだ。長秀は応永7年（1400）の信濃守護就任に際し、有力国人領主の連合軍（大文字一揆）と大塔合戦を戦い、敗北して京都に逃げ帰った。その結果、幕府は応永8年に守護職を斯波義将に与え、翌年信濃を幕府直轄領とした。長基は応永14年（1407）10月6日に亡くなった。

長秀の弟で井川館に生まれた政康は、応永23年（1416）の上杉禪秀の乱や応永30年の足利義持の乱などで戦功をあげ、応永32年12月15日に信濃国守護に補任された。こうして小笠原氏は再び信濃を領することになった。彼は嘉吉2年（1442）8月9日に小県郡海野（東御市）で亡くなり、その跡は長男の宗康が継いだ。

2 清宗と林城

小笠原長持の子として応永3年（1396）6月22日に京都四条の館に生まれた持長は、相続に不満を抱き、畠山持国の後盾で家督相続権を主張して、文安3年（1446）に漆田原（長野市）の戦いで宗康を討ち取った。しかし、宗康が事前に弟の光康に家督を譲り、松尾城（館・写真3）に住ませ、父祖伝来の伊賀良庄全体を支配させており（この一族を松尾小笠原氏と呼ぶ）、畠山持国と対立していた細川持賢と細川勝元が光康を支援したため、持長は小笠原宗家の家督を奪取できなかった。一方、幼少だった宗康の子政秀は伊那に逃れて叔父の光康を頼り、後に鈴岡城（飯田市駄科・写真4）に住んで伊賀良庄の一部を領した（この系統を鈴岡小笠原氏と呼ぶ）。持長は宝徳3年（1451）頃までに信濃守護に任じられ、政康の居た井川（松本市井川城）に住むようになった。

持長の子清宗（1427～1478）は、井川より東約4キロに位置する林（松本市里山辺）に居館を移し、山城の林城（本報告書の小笠原氏城館群を構成する要素）を築いた（この一族を深志小笠原氏あるいは府中小笠原氏と呼ぶ）。戦乱が激しくなったため、清宗は平地に立地し、周囲を水が取り巻いている井川城では、いざという時の対応が難しいので、防御の堅い山城を用意した方がよいと考えたのであろう。同時に小笠原氏の地域への権力浸透が進み、盆地の東部にまで勢力を持つことができるようになったともいえる。林城には大城（写真5）と小城（写真6）があり、中心は大城であるが双方は密接な関係を持ち連動していたと考えられる。

林城は小笠原清宗が井川城がたびたび洪水の被害を受けたため、長祿3年（1489）に築いたとの伝承もあるが、実際の築城年代など不明である。「笠系大成」や「小笠原系図」によれば、長朝は嘉吉3年（1443）信府林館に生まれているので、この頃にはできていた可能性が高い。井川城址の発掘結果からすると、ここで用いられていた瀬戸産陶磁器の年代から、遺物群のピークが15世紀前半にあった。これに対して林山腰遺跡（写真7）などの遺跡群のピークは15世紀末になり、宗清の時期に井川城から林城へと移ったことは間違いないだろう。

大城は松本市の東部、金華山という標高846メートルの山全体に構築され、小城は大城の南側の大岩崎の集落を挟むようにして存在し、共に長野県史跡に指定されている。林城の麓には館が設けられていたはずであるが、その場所は確定できていない。可能性としては礎石建ての建物跡と、輸入陶磁などが発掘された林山腰遺跡の場所が考えられる。

なお、この頃山城は数多く造られており、それぞれが連動していた。したがって、林城も単独であったわ

けでなく、同時期周囲に多くの山城が築かれたことが考えられる。

応仁元年（1467）7月15日、清宗は小笠原政秀（政貞）が府中に乱入したため打撃を受けた。そのうえ、深志を根拠とする同族の坂西光雅が急に政秀に味方したので、小笠原勢は混乱に陥って若干の死者を出した。清宗は翌年11月に信府で没した。

その後、信府にいた清宗の子長朝は小笠原政秀と諏訪氏に攻められ、防ぐことができずに家に伝わった文書などを携えて、牧之島城（長野市・写真8）に難を避けた。府中を占拠した政秀は自分こそが小笠原の宗家であると主張したが、周囲はもちろん信濃の国人たちも認めなかったため、和睦する方が有利だと判断して長朝を養子にし、改めて府中を長朝に渡して鈴岡に帰城した。

年未詳の11月3日、政秀は將軍の足利義政より信濃国守護に補任されており、鈴岡小笠原氏の方が、深志小笠原氏よりも優勢だった。鈴岡小笠原家の養子となった清宗の子長朝は、その後林に帰還した。

3 深志小笠原氏の隆盛

政秀は信濃守護としての地位を保ちながら鈴岡城に住んで活動を続け、松尾小笠原氏と対立した。松尾小笠原氏の当主だった光康の子の家長は父の死後わずか4年後の延徳2年（1490）10月15日に没し、子の定基が跡を継いだ。明応2年（1493）正月4日、定基および知久七郎らは政秀を急襲して討ち取った。これによって鈴岡小笠原氏は滅亡し、支配力も失われた。下条氏の出であった政秀の妻から支援を要請された深志の長朝は下条氏とともに定基を攻めた。定基はいったん田中城（飯田市）に逃れたが、甲斐に走り、武田氏の元に身を寄せ、程なく再び松尾へ復帰した。

文亀元年（1501）8月12日、深志の長朝が59歳で没し、家督は寛正2年（1461）に林館で生まれた貞朝が継いだ。一方、小笠原定基は信濃の守護として隣国の大名から協力を求められるほどになったが、永正8年（1511）に亡くなり、その跡は貞忠が嗣いだ。

貞朝は永正12年6月3日に死亡し、永正元年に生まれた嫡男の長棟がその跡を継いだ。長棟は天文2年（1533）7月23日に伊那に着陣して、28日に知久頼元や高遠頼継の軍勢と戦い勝利した。その後、長棟の軍はいったん府中に戻ったが、8月16日に再び伊那に出兵した。天文3年、長棟の軍はついに松尾小笠原氏を圧倒した。そして松尾城に長棟の次男信定を入れ、府中を中心に安曇郡と筑摩郡、それに伊那谷を押えた。一方、敗れた貞忠は甲斐の武田氏を頼った。

天文6年2月2日、諏訪頼重の軍が塩尻に攻め寄せ、赤木・吉田の辺まで放火し、10月13日には塩尻の城を落とした。天文7年10月13日に長棟は、府内での戦争が思うに任せないからと、諏訪社上社に神鷹2羽を奉納した。翌天文8年の6月26日に小笠原長棟と諏訪頼重との和談がなった。

長棟は天文11年2月15日に出家し、同18年10月8日に没した。長棟の跡を継いだのが永正11年に信府林の館で生まれた長時で、信濃の守護にも任せられたものであろう。

4 長時と信玄

天文14年（1545）4月11日、武田信玄（晴信、信玄を名乗るのは永禄2年・1559からであるが本稿では信玄で統一する）は高遠（伊那市高遠町）攻略のため甲府を出発して、15日に杖突峠に陣を張った。高遠頼継は17日に高遠城（写真9）を捨てて逃亡した。18日に信玄は高遠へ入り、20日に福与城（箕輪町・写真10）の藤沢頼親を攻撃した。頼親の親戚だった長時は竜ヶ崎城（辰野町）に入って救援したが、6月1日に福与城が板垣信方軍によって落城させられた。13日に勢いに乗った信玄軍は長時の領内の塩尻に陣を置き、翌日林城の近辺まで放火した。

その後、佐久を勢力下に置いた信玄は北信から東信地方にかけて勢力を有する村上義清と争うことになっ

た。天文17年正月18日、信玄は信州が自分の思う通りになったら働きに応じて所領を与える内容の朱印状を武士たちに与え、士気を鼓舞して2月1日に村上氏の根拠地の坂木(埴科郡坂城町)に向けて出馬し、上田原(上田市)に陣を張った。対する義清も千曲川を挟んで武田軍と対峙した。武田軍は14日、上田原で村上軍と戦って有力武將が次々に戦死して、信玄までが負傷する惨敗を喫した。

長時は武田軍が上田原の戦いで敗れると、信玄を破り諏訪に勢力を扶植する絶好の機会だと判断し、4月5日に村上氏や仁科氏、長時の妹婿で一度信玄に降参した藤沢頼親などとともに諏訪下社に討ち入り、近辺に放火した。6月10日にも再び下社に攻め入ったが、下社の地下人が共同して迎え撃ったため、長時の身辺に仕える馬回りの17騎と雑兵100人余が討ち取られ、長時も2ヶ所に傷を負った。

7月10日、小笠原氏と通じた西方衆や諏訪氏一族の矢島・花岡氏らが、信玄の領する諏訪に乱入した。翌日この知らせを聞いた信玄は即日出馬したが、18日にやっと大井ヶ森(山梨県北杜市)から諏訪に入った。小笠原長時も5000人余の軍勢をそろえ、塩尻峠(写真11・この塩尻峠は現在国道20号線が走る塩尻峠ではなく、南側の勝弦峠とされている)に陣を張った。19日早朝6時頃、小笠原軍は武田軍に急襲された。長時は昨日までゆっくりしていた武田軍が、まさかこれほど迅速に攻めてくると思っておらず、兵も不意をつかれて武具をしっかりと着ける暇もなく、一方的な敗北を喫し、将兵1000人余を討ち取られ、ほうほうの体で逃げ帰った。信玄は残った小笠原勢を掃討し、諏訪を安定させて、25日に馬を上原城(茅野市)に納めた。

信玄は9月に諏訪から佐久に入り、前山城(佐久市)を攻めて失地を回復し、背後の憂いを取り除いてから、松本平に攻め込んだ。信玄による小笠原氏攻撃の基地として整備されたのが村井城(松本市芳川村井・写真12)で、10月2日夕方6時頃、高白斎が南南東の方向に向かって鎌立(地鎮祭)を行い、4日に普請を開始した。村井は小笠原氏の本拠林城の南、約8キロメートルの地点なので、長時にとってこの城は喉元に刃を突き付けられたようなものだった。

5 信玄の松本平定

信玄は天文19年閏5月23日、甲斐一宮の浅間神社(山梨県笛吹市)に、信府が支配下に入りますようにとの願文を捧げたが、6月2日に姉の今川義元夫人が病死したため出陣が遅れ、7月3日に甲府を出て10日に村井に着城した。

一方、長時は7月5日に將軍の代替わりを祝って太刀や馬などを足利義輝に贈った。將軍と結びつくことで立場を良くしたいと考えたのであろう。しかし、信玄の動きを止めることはできなかった。15日の夕方6時頃に武田軍は林城の出城の一つのイヌイ城を攻め破り、勝どきを挙げて午後8時頃に村井の城へ馬を納めた。これを聞いて小笠原方の「子ノ刻大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所ノ城自落。島立・浅間降」(『高白斎記』)という事態になった。五箇所の城の兵は、深夜零時頃みな戦わずして逃亡し(自落)、島立と浅間の城は降参した。ここに見える「大城」こそ林の大城で、筆頭に書かれていることから小笠原氏側にとって最も重要な城であったことがわかる。この間に山家・洗馬(塩尻市)の三村入道・赤沢・深志の坂西・島立・西牧氏などの小笠原氏のおもだった侍衆が続々と武田方に寝返った。武田信玄はほとんど兵力を費やさずして府中を手にしたのである。一方、敗れた小笠原長時は平瀬城(松本市)に落ちのび、やがて村上義清を頼った。

『高白斎記』の記載から、大城・深志(写真13)・岡田(写真14)・桐原(写真15)・山家(写真16)の五箇所の城が連動しながら、武田軍の進撃に備えていたことがわかる。しかし、いずれも戦わないで自落しており、当時山城に逃げ込んでも徹底抗戦することはほとんどなかったことを示している。したがって、当時の山城は現状に残るほど規模が大きくなく、防御制も弱かった可能性がある。

この時落ちた城の中に深志城があり、降参した中に島立氏がいる。島立貞永は林城ができて廃城になって

いた井川館を修築し、深志城と名を改めて入城していたという。しかし、戦乱が厳しくなる中で永正元年(1504)に城を現在の松本城の位置に移し、城を自落させると信玄に味方したのである。深志城はここに出ている城の中では唯一平地の城であった。府中を領した信玄は、新たな信濃経略の基地、および松本平を支配する拠点として深志城を修築することにした。7月19日夕方6時頃に高白斎が北西に向かって鎌立式を行い、信玄も深志にやって来た。その後、23日になって総普請を開始した。

林城は松本平の東の端で、小笠原氏の領地の中では東の端に当たる。また、山城で地域支配のために設けたものでなく、逃げ込むための要素が大きかった。武田氏は松本平全体の支配の拠点となる城を造る必要があった。その点、深志は奈良井川と田川の合流点に近く、後の善光寺街道につながる道路の拠点にもなりえる絶好の場所だった。地域統治のための城と、防御のための城と一つにあわせて武田氏は深志に城を築いたのである。これが後の松本城の前身になり、その城下町がそのまま現在の松本の町につながる。

一方、小笠原氏の本拠であった林城は前の領主の根拠地ということで、破城された可能性が高い。他の城も前の領主との関係を切るために、城割(破城)がなされ、場合によるとその上で修築が加えられたであろう。

6 長時の没落と川中島合戦

信玄は9月9日、村上義清の軍を小県郡戸石城(砥石城、上田市)に攻めて大敗を喫した。これを長時は絶好の機会だと判断し、義清の援助を受けて平瀬城に戻り、深志城を攻め落とそうとした。10月21日に甲府で情報を得ると、信玄は23日に中下条(山梨県甲斐市)まで出陣した。この頃、義清が3000の兵を率いて塔ノ原城(安曇野市・写真17)に陣を張り、長時は氷室(松本市)に陣取った。両人の動きに応じた小笠原氏の旧家臣は、武田方に寝返った島立・山家・洗馬・三村氏などの城を陥れた。長時はこの勢いに乗って、翌日深志城に総攻撃を加えることにしたが、信玄の出馬を聞いた義清が長時に無断でその夜のうちに兵を納め、川中島に帰ってしまった。義清は矛先を転じて11月1日に小諸(小諸市)へ移り、13日に野沢・桜井山(共に佐久市)などに放火したので、信玄も翌日若神子(山梨県北杜市)へ向かった。

長時は旧家臣たちを集めて深志城を回復しようとしたが、義清が引き上げたため、従う者は800から1000人ぐらいに減った。小笠原軍が野々宮(松本市)で武田軍を撃退した後、長時は二木氏の山城である中塔城(同)に籠城した。

翌天文20年(1551)2月5日、信玄は信府が手に入った礼として、甲斐一宮浅間神社(山梨県笛吹市)に社領を寄進し、社殿も修復した。5月には先に攻撃して手痛い敗北を喫した戸石城を武田方の真田幸隆(幸綱)が攻略した。10月14日、義清の軍が丹生子(大町市)を陥れたとの情報が甲府に届いたので、信玄は翌日出馬して20日に深志城に入った。武田軍は24日に平瀬城を攻撃して城兵200人余を討ち取り陥落させた。10月27日に武田軍は必死に抵抗する小岩岳城(安曇野市・写真18)を攻めて放火し、翌日、平瀬城の城割を行い、鎌立てをした。信玄は11月17日に諏訪高島城(諏訪市)に馬を納め、21日に甲府に戻った。

天文21年7月27日、信玄は再び小岩岳城攻略のために甲府を出発し、8月1日に至って攻撃を開始した。城兵はよく戦ったが支え切れず、12日に城主が自害し、500人余が討ち取られて落城した。これによって、信濃の中心部である安曇・筑摩の両郡も、ほぼ武田氏の支配下に入った。

小笠原長時は小岩岳城が落城し、日岐大城(生坂村)も落ちると、同年の大晦日に夜陰に乗じて息子の貞慶などととも草間(中野市)へ向かった。家臣の二木重高・重吉も翌年正月16日に草間へ着き、一行は越後と深い関係にある高梨氏の手引きによって、長尾景虎(上杉謙信。以下、上杉謙信とする)のもとにおもむいて保護を受けた。

長時は天文23年に息子の貞慶などを景虎に託し、弟の信貞がいた下伊那の鈴岡城に入ったが、鈴岡城も

武田軍によって8月7日に落城した。長時は下條（下伊那郡下條村）から新野（阿南町）に出た。ここから駿河（静岡県）を経て、伊勢（三重県）に行き、下宮御師の榎倉武国の元に身を寄せることにした。

翌年の弘治元年（1555）、長時は京都に上って同族の三好長慶を頼った。長時は長慶より摂津芥川（大阪府高槻市）に招かれて厚遇を受けた。後に長時は將軍足利義輝の弓矢の師範となり、河内の高安郡（大阪府中河内郡）において100貫文を給された。この後、永禄6年（1563）7月13日に家臣23人の射手を率いて百手の的を興業するなど、弓矢の家として活躍した。

永禄7年7月に長慶が死に、松永久秀が政権を握ると三好氏は衰えた。永禄11年に織田信長が將軍義昭を奉じて上洛すると、長時が身を寄せていた芥川城が9月末に落城したので、長時と貞慶は上杉謙信を頼った。長時は天正6年（1578）に謙信が亡くなると会津若松（福島県会津若松市）に行き、黒川城主の三浦（蘆名）盛氏のもとに身を寄せた。盛氏も長時を厚遇して、弓矢の師範とした。天正11年2月25日、長時は家臣の坂西彈左衛門によって殺され、故郷に帰ることができないまま生涯を終えた

天文22年（1553）3月29日、信玄は深志城を発って菊屋原（松本市）に着いた。翌日、武田軍は菊屋原城の近辺を放火し、4月2日に城を攻め落し、城主太田長門守を捕虜にした。武田軍の勢いに圧倒されて、この日の夕方には塔ノ原城（安曇野市）も開城した。4月3日、武田軍は会田虚空蔵山（松本市・写真19）へ放火し、菊屋原城を破却して鎌立を行った。

4月6日、武田勢の先陣が村上義清の本拠地である葛尾城の攻略に向かった。武田軍に抗しきれないと判断した義清は4月9日午前8時頃、葛尾城を自落させた。

葛尾城を失った義清は高梨政頼を介して上杉謙信に助勢を求めた。これに応じて、上杉謙信が信濃に兵を進めてきた。この結果、いわゆる川中島合戦がはじまった。謙信軍は4月22日に村上軍とともに、武田軍と八幡（千曲市）で戦った。これが武田軍と上杉軍の最初の接触であった。その後、上杉軍は布施郷（長野市篠ノ井）で武田軍と戦い、9月1日に武田軍を八幡（千曲市）などで攻め破った。

天文24年（弘治元・1555）7月、上杉謙信が村上義清や高梨政頼などの求めによって、信玄を討つために善光寺に兵を進めた。信玄も大塚（長野市青木島町）に陣を置き、19日に両軍が戦った。以後長年にわたって川中島合戦が展開されるが、とりわけ永禄4年（1651）9月10日の第4回川中島合戦は有名である。

7 武田家滅亡と木曾義昌

天正3年（1575）5月11日、信玄の子勝頼は三河国長篠（愛知県新城市・写真20）で織田・徳川の連合軍の前に敗北を喫した。勝頼は体勢を建て直すために、天正5年正月22日に北条氏政の妹を妻に迎え、相模と甲斐の同盟を成立させ、長篠合戦以後の孤立無援の状況から抜け出すことができた。

勝頼の立場が強くなったのは、天正6年から翌年にかけて起きた3月13日の上杉謙信の死後における上杉家内部の家督争い（御館の乱）を契機としてであった。この時上杉家には家督相続候補者として、上田郷坂戸（新潟県南魚沼市）の城主長尾政景の次男で、母が謙信の姉に当たる景勝と、北条氏康の七男で元亀元年（1570）に養子となっていた景虎がいた。景勝と景虎では血筋において景勝のほうが謙信に近いものの、景虎には北条氏政という強力な後盾があったために、両人が熾烈な戦いを始めたのである。

景虎の兄である北条氏政は、相・甲同盟もあって、すぐさま越後の隣の信濃を領する勝頼に支援を求めた。これに応じた勝頼が自ら出陣したので、窮地に陥った景勝は窮余の一策として、武田軍先陣の武田信豊に講和の斡旋を頼んだ。結局、勝頼が講和に応じたことあって次第に景勝が有利になり、天正7年3月17日、景虎の籠もる御館（上越市）を攻め落し、景虎は24日に自害した。

当然のことながら景虎が亡くなると、勝頼と北条氏政との関係は悪くなった。氏政は9月5日に徳川家康と勝頼を挟撃することを約束した。一方、天正7年10月20日に勝頼の妹のお菊が春日山城（上越市）に

奥入れをして、勝頼と景勝の盟役はさらに強まった。勝頼と景勝の講和条件には、上杉領の信濃と上野を勝頼へ割譲が入っていたようで、これらの地域を渡した。

『信長公記』によれば、天正10年2月1日に、木曾義昌が織田信長の味方になることを表明し、勝頼を攻め滅ぼすため軍勢を出すよう、苗木（岐阜県中津川市）の遠山久兵衛を通じて申し出た。勝頼親子と信豊は義昌が謀反を起こしたと聞いて、移ったばかりの新府城（山梨県韮崎市）から馬を出し、15000人ばかりの兵で諏訪の上原（茅野市）に陣を敷いて、武田領国への諸口の警備強化を命じた。

信長は武田攻撃のために軍勢を出すよう命じたので、2月3日に織田信忠・森長可・団景春が先陣として、尾張・美濃の軍勢を率いて、木曾口・岩村口に出撃した。武田方では峠や山道などの要害の場所を抱え、滝之沢（平谷村）に要害を構え、下条信氏を入れておいたが、彼の家老の下条九兵衛が逆心を企て、2月6日に信氏を追い出して、岩村口から河尻秀隆の率いる軍勢を入れてしまった。

2月14日、伊那郡松尾（飯田市）の小笠原信嶺が織田信忠に降った。武田勢はことごとく破れ、北へ北へと逃げ、伊那を北上する織田勢の本隊に追い詰められた。武田軍は2月16日、木曾から松本への入口に当たる鳥居峠（塩尻市と木祖村の間にある峠）で木曾軍と戦い敗北した。武田方では馬場信春が深志の城に立て籠もり、鳥居峠に向かって対陣した。織田信忠は16日に大鳥城（松川町）の日向宗栄（玄徳齋）などを攻めて敗走させた。

伊那谷で唯一大きな抵抗をみせたのは仁科盛信の籠もった高遠城であった。21日、これを攻めるために信長は滝川一益・河尻秀隆などに、城への道筋に付城を築かせた。29日に信忠が仁科盛信に降参を促したが、籠城衆は受け入れなかった。3月2日、織田軍は高遠城を攻めて遂にこれを陥れ、盛信も戦死させた。高遠城が落ちたことで、武田勢の衰弱はさらに加速された。敗戦を重ね、逃げる場所を失った勝頼と子供の信勝などは11日、織田軍に敗れて甲斐田野（山梨県甲州市）において自殺した。こうして信濃国全域をも支配下に置いていた戦国大名の武田氏はあっけなく滅亡した。

なお、安曇・筑摩両部の支配の中心であった深志の城は天正10年2月に、木曾義昌と信長の弟の織田長益の両人が受け取ったという。

8 小笠原貞慶の府中回復

信長は3月23日に上野および佐久・小県の二郡を滝川一益に与えた。そして翌24日、深志城の城米を在陣の諸將士に分け与えた。武田氏の安曇・筑摩両部の支配の中心地であった深志城には多くの米が蓄えられていたのである。

信長は3月27日に筑摩郡・安曇郡を木曾義昌に領知させ、義昌が松本平を支配することになった。29日、信長はこれまで武田氏が領していた地域の知行割をした。甲斐国は河尻秀隆、ただし穴山信君が知行してきた分（河内領）を除く。駿河国は徳川家康。上野国は滝川一益。信濃国高井・水内・更級・埴科の四郡は森長可。木曾谷二郡は木曾の本地、安曇・筑摩二郡は新たに木曾義昌。伊那郡は毛利秀頼。諏訪郡は河尻秀隆に甲斐の穴山分の替地として与える。小県・佐久の二郡は滝川一益。それぞれこのように与えられた。この結果、義昌は本領の木曾郡とともに、新たに安曇・筑摩の二郡を領したのである。

ところが、6月2日に本能寺の変が起き織田信長が亡くなると、旧武田領国は混乱に陥った。長時の子供の貞慶は6月12日に家康の支援を受けて信濃に帰り、後序勘兵衛尉に忠節を促した。

小笠原の旧臣たちは景勝の保護を受けていた貞慶の叔父の洞雪（貞種、長時の弟）を迎えて城主にしようとし、二木宗久が使いとなって洞雪を説得した。洞雪は景勝に相談し、景勝が賛同して梶田・八代の両將に2000騎を率いて洞雪に従わせた。この結果、洞雪は木曾義昌を深志城から追い出して入城した。

洞雪は深志に入ると、越後・川中島の人々を使って万事の政策を取り仕切った。景勝の家臣は自分たちの

力で洞雪が深志城に入ったとして洞雪を軽んじ、小笠原氏の旧臣たちは自分たちが洞雪を招いたのだから重んじられるだろうと考えたのに結果が逆だったので反発した。そこで小笠原氏旧臣たちは洞雪に替えて、貞慶を城主に迎えることにした。求めに応じた貞慶は7月2日、深志城を奪取しようとして河辺三左衛門に忠勤を促した。貞慶の背後には徳川家康がおり、榊原康政は7月5日、深志の調略について後序勘兵衛尉の忠功を賞した。

木曾義昌は貞慶が松本城を回復したと聞き、即座に松本を攻めたが成功せず、木曾に敗走した。貞慶はこれを追撃して木曾氏の領していた本山（塩尻市）に至った。木曾の兵がここを守っていたが、貞慶勢の小笠原孫次郎と犬甘治右衛門が大將となり本山から、まっすぐ義昌の居城である福島口に至った。この時義昌の兵が抵抗したために、押し止められた小笠原軍は夕暮れにもなり、険しい道だったので攻めることができず、かがり火を焼き捨てて退いた。小笠原軍を急に本山に隠れていた兵が襲ったために、孫次郎と治右衛門は戦死した。

7月6日、上杉景勝は西片房家に本領を安堵するとともに、安曇郡飯田（安曇野市）などの地をあてがった。

こうして安曇・筑摩の両郡は、織田信長から正式にこの地を与えられた木曾義昌、徳川家康を背景として旧領だという由緒と意識をもつ小笠原貞慶、上杉景勝を背景とする小笠原貞種、三者の争う場所となった。

7月8日に小笠原貞種は二本重吉に所領を宛がい、また小林采女正にも筑摩郡栗林郷を安堵し、深志城主としての支配を開始した。一方、貞慶は10日に深志城を取り戻そうと恩賞をもって百瀬石見守を誘った。貞慶は16日に貞種を攻め、深志城を回復し、貞種を越後に走らせて、深志を松本と改めた。そして19日に三村勘兵衛等に洗馬の地を与えた。

19日、20日に二本氏の一族が妻子を松本城に籠め、戦の構えをなした。これを見て昔小笠原氏に従っていた者たちが妻や子供を城中に入れた。20日に貞慶は犬甘治右衛門の弟の久知に、本山で討ち死にした治右衛門の名跡を継がせた。こうして、小笠原の軍は次第に形が整ってきたのである。

一方、正統な支配者を自認する義昌は、7月27日に小野内記助に桐原（松本市）の地を宛がい、同郡林郷（同）を預けた。

貞慶は8月4日、犬甘久知に安曇郡犬甘等の所領を安堵し、10日には日岐城（生坂村）攻めに当たっている犬甘久知に、日岐城主仁科盛武の降参を許さないことなどを知らせ、12日に日岐城を攻めた。

8月9日、徳川家康は木曾義昌に佐久・小県両郡の人質を返すことを求め、あわせて信長が義昌に与えた知行に関してはそれをそのまま認めると申し出た。その上で家康は8月30日に義昌に安曇・筑摩両郡を安堵した。また、9月5日に水上利光等に本領筑摩郡小松（松本市）の地等を安堵した。

9月6日、貞慶は明日日岐へ出馬すると犬甘久知に知らせ、19日に安曇郡の沢渡盛忠に沢渡を安堵した。家康はこれに対抗するように同日、岩間正明に野溝・平田・村井之庄（すべて松本市）などを安堵した。24日に貞慶は下条頼安へ誓紙を送り、後序久親に不屈きの行為があったら召し放つことを約束し、百瀬雅楽助等には埴原等を与え、貞慶の家臣の犬甘貞知が岩垂忠助に筑摩郡埴原郷（松本市）の地を安堵した。貞慶は10月10日に倉科朝軌等に曾山和泉遺跡等を、27日には倉科朝軌に安曇郡内の地を与えた。

上杉景勝も引き続き安曇・筑摩両郡をねらっていた。会田衆などが景勝の支援を受けて久欠城（松本市）に立て籠もったので、貞慶は11月5日に軍を派遣して攻めさせた。結局、堀内越前守を討ち取り城を落とすことができた。9日に北沢孫左衛門尉等に安曇郡内の地等を、また21日には武内縫左衛門に安曇郡内飯田の内等の地を宛がった。

翌天正11年（1583）も貞慶の安曇郡・筑摩郡支配は進展した。正月29日、貞慶は小山佐渡守等の戦功を賞し、閏正月24日には満願寺（安曇野市）に寺領を安堵した。けれども、家臣赤沢式部少輔・古飯因幡守・塔原三河守等が謀反を企てたので、2月12日に式部少輔を攻撃して自殺させ、次いで因幡守・三河守をも

誘殺した。

木曾義昌は2月18日に酒井彦右衛門尉へ北和田（松本市）の地を与え忠節を賞した。

貞慶は2月22日に日岐落着直次第知行の割替えや自ら城普請を行おうとした。そして3月3日、安曇郡千国十人衆に千国跡職を与え、同郡小谷筋を警戒させた。こうして彼は国境近くまで勢力をのびしたのである。

9 貞慶と上杉景勝・木曾義昌

4月27日に上杉景勝が麻績城（麻績村）を攻め落とした。5月12日、景勝に属した小田切四郎太郎は、仁科（大町市）において貞慶の兵を破った。貞慶は6月16日に三河岡崎城（愛知県岡崎市）主の石川数正の臣江戸衛門七に書を送り、川中島辺の景勝押領地を取り返すことを約束し、佐久・奥両郡への新道開墾の命令に応じ難いことを申し出た。こうして貞慶は上杉に対抗するために徳川との連携を密にしたのである。

7月23日、義昌は三村勝親等に両郡回復後知行を宛がうと約束した。貞慶は日岐盛武・穂高内膳佐が異心なき旨を誓ったので、8月7日に身上を保証し、盛武に押野（安曇野市）の地を与えた。11日に日岐盛武の戦功を賞し日岐遺跡をあてがい、また当所務不作により米を給した。

貞慶の子供の貞政（秀政）は永禄12年3月21日に宇治田原（京都府宇治田原町）で生まれたが、三河の家康の元で人質になっていた。天正12年（1584）正月、父に音信を送り年賀を祝した。3月も貞慶の兵が景勝の属城青柳城（筑北村・写真21）を攻め、籠もっていた兵を追い払ったので、景勝は18日に海津城（長野市）の上条宜順、大日向佐渡守等に青柳城を支援させた。小笠原軍は28日に麻績・青柳両城を攻め、4月3日に貞慶は家康から戦功を賞された。

木曾義昌も松本平を得ようと積極的に動き、豊臣秀吉と結び付いた。3月27日、義昌は尾張在陣の豊臣秀吉のもとに書状を送り、徳川方が木曾谷にいたって軍事行動をしたけれども大したことはないと伝えた。義昌は家康から旧領安堵の約束を取り付けたものの、家康が支援する小笠原貞慶がおり、所領を回復することができなかった。そこで立場を有利にするためには、徳川家康についているよりも、より有力と目される秀吉と結び付いたほうが有利だと判断したのであろう。

4月1日、貞慶は木曾の入口にあたる費川（塩尻市）に住む費川又兵衛の忠節を賞し、奈良井治部少輔の欠所地等をあてがった。鳥居峠の以北まで貞慶の勢力が及び、木曾氏を圧迫するようになったといえる。次いで倉沢久兵衛にも筑摩郡比奈倉（松本市稲倉）の地をあてがった。19日に上杉景勝が海津城へ出陣するとの情報が入ったので、貞慶は景勝方の麻績城を攻めようとして、仁科衆を更級郡篠木尾へ、犬廿久知を筑摩郡睡峠（眠峠、生坂村）へそれぞれ出陣させた。その後、貞慶軍は景勝軍に麻績城で迎撃されて敗れた。4月21日、景勝は検使島津泰忠に書を送り、泰忠および侍衆の戦功を賞した。間もなく景勝の軍が海津城に兵を引いたので、25日に貞慶は更級郡境に兵を派遣して敵情を監視させた。そうした中で27日、貞慶家臣の溝口貞秀は日岐盛武・宇留賀与兵衛を犬廿久知の陣に派遣し、協力して敵に備えることを申し出た。

その後しばらくの間、両者は均衡状態を保ったが8月に入ると再び関係が緊張し、景勝が信濃に入り、8月3日に景勝は小田切左馬助が貞慶の兵を稲荷山口（千曲市）・青木島（長野市）に迎撃して破ったことを賞した。

10 混乱の終結

8月5日に徳川家康は保科正直を菅沼定利の指揮に従わせ、木曾義昌を討つよう命じた。10日、義昌は奈良井十郎に府中の地等を宛てがい、和田小三郎に諸役を免許した。義昌は依然として府中を支配する気があったのである。

8月18日、貞慶は日岐盛武等に川中島進撃の後詰をさせ、宇留賀と兵衛等に牧之島筋(長野市)を略奪させた。10月5日に至り、家康は貞慶が木曾に攻め入った戦功を賞した。貞慶は11月2日に賈川又兵衛に所領を宛がった。こうして天正12年末になると、貞慶の松本平支配は安定するようになった。

天正13年(1585)11月15日、石川数正は徳川家康に背き、小笠原貞慶の人質を拉致して岡崎城より豊田秀吉のもとに走った。秀吉は家康が難反したため来春を期して攻めることにして、10月17日、真田昌幸に小笠原貞慶・木曾義昌等と甲斐・信濃を計略するように命じた。これに応ずるように貞慶は12月13日、溝口貞秀を上洛させようとして針尾(朝日村)の地を宛がった。さらに14日、貞慶は家康と絶交し、高遠城の保科正直を攻めた。

天正14年(1586)2月4日、貞慶から大坂の豊田秀吉へ派遣された倉科朝軌は木曾馬籠峠(南木曾町と中津川市の間にある峠)で土豪に襲われ死去した。一方、3月3日、徳川方の保科正直は三村親勝に信府が思うようになったら本領を安堵すると約束した。秀吉は10月末までに関東を徳川家康に委ね、上杉景勝に真田昌幸・小笠原貞慶・木曾義昌の所領を家康へ渡すように命じた。11月4日に秀吉は景勝の尽力を嘉し、また昌幸の罪を免じて、知行を安堵した。貞慶は12月24日に家臣の溝口貞秀へ、先に諏訪上社神長の守矢信真から訴えられていた上社社領を明春落着させると約束した。

天正15年(1587)3月18日、小笠原貞慶や真田昌幸等は豊田秀吉の命令により駿府(静岡市)の徳川家康と会った。これにより貞慶と家康の関係も修正され、一応戦乱状態には終止符が打たれた。

天正17年(1589)正月7日、家康は小笠原の家督を継いだ貞慶の子秀政に所領を安堵した。明らかに小笠原氏は家康の配下として位置付けられたのである。この年の11月24日、秀吉は五箇条からなる宣戦布告状を北条氏につきつけた。天正18年(1590)正月9日、秀吉は上杉景勝へ援軍派遣を報じ、あわせて小笠原貞慶との争いをやめさせた。小田原征伐の一環として景勝と共に武蔵八王子城(東京都八王子市)を陥落させた貞慶は、6月28日に家臣の沢渡盛忠等へ戦況を知らせた。小田原攻撃に参加した秀政は相模大磯(神奈川県大磯町)に北條氏直の兵と戦い戦功をあげた。7月6日に小田原城が陥落すると7月13日、秀吉は北条氏の遺領を家康に与え、また諏訪頼忠等の家康の麾下の信濃の諸將を関東に移し、その跡に仙石秀康(秀久)・石川康正(数正)などを信濃に封じた。こうして、信濃の戦乱の時代も幕を閉じた。

天正18年、家康の配下であった秀政は下総古河3万石に移り、さらに信州飯田へと移封された。その後、石川康長の改易によって、慶長18年(1612)に松本へ戻ることになり、城の名称を深志から松本へと変えたのである。

11 小笠原氏城館群について

松本市内には多数の館や山城などが存在している。このうち県史跡に指定されているのは「小笠原氏城跡」(入山辺字日影7350ほか)で、林大城・林小城・埴原城・山家城・桐原城からなっている。天文19年の武田信玄侵攻に際して自落したという『高白齋記』に見える「大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所ノ城」の内、大城と桐原・山家の三城にあたる。同書では最初に武田氏が攻め落とした城を「イヌイ城」としているが、この城は埴原城ではないかといわれている。さらに深志城は後に松本城となり、昭和5年(1930)に国の史跡に指定された。さらに昭和11年には天守・乾小天守・渡橋・辰巳附櫓・月見櫓の五棟が国宝保存法により国宝に指定され、昭和27年に文化財保護法により改めて国宝に指定されている。つまり、『高白齋記』の天文19年条に記載された城は岡田を除いて国や県の史跡指定を受けており、その評価は極めて高い。

『高白齋記』の記載で残るのは「岡田」であるが、岡田にある大規模な城ということで伊深城に比定される。伊深城跡(岡田伊深1518・ほか)は昭和42年2月1日に市の特別史跡に指定された。また、同じ時に

井川城址（井川城 1-4552-口）も指定された。

このほか市特別史跡として、昭和 57 年 12 月 20 日に指定された稲倉城跡（稲倉 1510 ほか）、平成 23 年（2011）3 月 22 日に指定された波多山城跡（波田 8649）、平成 26 年 3 月 5 日に指定された平瀬城跡（島内 9627 イ号ほか・写真 22）がある。このうち稲倉城と平瀬城は前述の林大城・小城、埴原城、山家城、埴原城、伊深城と形態などで類似点が多く、同時期に造られたか大きく修築の手が加えられたものと考えられる。県史跡に指定されている林大城・林小城・埴原城・山家城・埴原城は、それぞれ全国的に見ても規模が大きく、縄張りも見事で、防御制が高く、遺跡の残り方も良い。他県の国の指定を受けている山城と比較しても同等もしくはそれ以上の価値があるように思う。全体として見ると、県史跡は松本市の東側の山麓、特に山辺谷に沿ったところに埴原城を除いて存在しており、小笠原氏の基盤と重なる。

さて、松本平全体、あるいは長野県全体の歴史からすると、古代の信濃において最初に国府が置かれたのは現在の上田市であるが、後に現在の松本市に移された。そして中世信濃の府中（信府）はそのまま松本に置かれた。中世の信濃守護として名高い小笠原氏が府中に入り込み、根拠地として造ったのが井川の館（井川城）であった。その後、戦乱が激しくなる中で館は林に移され、これと連動して林城（大城・小城）が設けられた。この歴史的な流れの向こうに現在国宝となっている松本城が建設された。したがって、長野県の歴史を知るためには井川城・林大城・小城の三城の理解が欠かせない。それは同時に日本における守護館の成立、その後の展開、戦国の争乱の実態を知る大きな素材ともなる。それ故、本報告書では信濃守護であった小笠原氏が造ったこの三城を特別に「小笠原氏城館群」として、地域の歴史の中から取り上げたのである。

社会変化の中で城や館の跡は開発の危機にある。三城の一つ井川城は平地で松本市街地の中心部に近いこともあって、開発の波に飲み込まれようとしている。歴史的に極めて価値の高いこうした城をきちんと保護し、その実態解明をしていくことは緊急の課題だといえよう。本報告書作成の背後にある社会の変化にも留意する必要がある。

この他に松本市内には史跡として指定されていない山城などがそれぞれ無数にある。それらは市特別史跡に指定されているものに劣らず素晴らしい。たとえば早落城（松本市洞・写真 23）は規模が小さいが、山城とは何かを理解するにはコンパクトでわかりやすい。しかも簡単に登ることができる。『高白斎記』に出ている平瀬城跡かとも思われる川合館宮神社は何ら研究もされていない。一方で史跡などの指定は地域の研究蓄積の有無ともつながり、地域差が大きい。松本市は平成 17 年 4 月 1 日に東筑摩郡四賀村・南安曇郡安曇村・奈川村・梓川村を、平成 22 年 3 月 30 日に東筑摩郡波田町を編入した。このうち旧四賀村には虚空蔵山城をはじめとして多くの山城があるが、しっかり評価をされておらず、文化財指定にも至っていない。新たに編入した地域の山城研究が進展すれば、松本市の山城全体の評価が変わってくる可能性もある。

ところで、これだけ大規模な山城がたくさんあるにもかかわらず、その築造や修理に関する記録や古文書は残っていない。多くの城の名前が見えるのは本稿で挙げた『高白斎記』の、天文 19 年の条だけである。したがって、古文書や記録を中心とした研究からは、本稿にも明らかなように山城や館の姿が見えてこない。だからこそ、山城や館は史料に記されていない、歴史実態を遺構として提示してくれる大変重要な資料・教材であることを、もう一度確認しておきたい。

史料に姿を見せるのが『高白斎記』であることもあって、これまで松本平の山城は武田氏が攻めてくる前の山城の様子をよく伝えていると解され、県史跡指定もそうした理由によって説明されてきた。

山城は戦争用の武器であり、逃げ込みの場所であり、地域を押さえたり、他を攻撃したりする際の拠点であった。このため戦争が厳しい時代には常に改修が加えられ、武器や戦法の変化に伴って時代に合ったものに造り替えられていった。史料が存在しないことは、史料に見える時代のみ造られ、使用されたことを意味するのではないのである。むしろ、史料を作ったり、残したりする暇もないほど戦争の厳しい時代にこそ、

大きな修築などがなされた。一般に武器の進歩などもあって、戦争は時代が下がるほど大きなものになっていくといえる。

そうすると中世における戦乱の時代として、時代名称として戦国時代といわれるように、中世末、すなわち戦国時代を想起せねばならない。とりわけ信州の戦国時代で考えなければならないのは、①地域の領主同士が互いに争っていた時期、②武田信玄が侵攻してきた時期、③武田氏滅亡の時期、④本能寺変後の混乱から全国統一がされる時期、の4つであろう。

山城の規模はこれを造ったり修築したりするに際して、動員をかける築造者の権力の大小によっても決まる。①の時期には地域の領主が造るものであって、数多くの城を大規模に造ることは難しい。②の時期には戦争対処のために必死で山城を造ったり修築したことが考えられるが、基本的には信州の地域領主の規模は大きくなく、一気に大規模化することはできなかったであろう。③の時期に信濃を押さえた武田家では、城の主体が松本城や海津城のような地域統治の基盤となる平城に置かれ、対織田信長ということで大規模に山城を修築したとは考えがたい。④の時期、信州は全国的に見ても権力者が争った戦乱の厳しい地であった。本稿は松本平を中心に記したので、触れていないが東信地方には北条氏、北信地方には上杉氏、南信地方には徳川氏、さらに豊臣氏が手をのびそうとしていた。信濃の中心である松本平では、上杉景勝を背後に置く小笠原貞慶の叔父の洞雪（貞種）、徳川家康を背後に置く貞慶、豊臣秀吉を背後に置く木曾義昌が争った。それだけに山城の修築も背後にいる強大な権力者を前提にすべきで、戦乱の厳しさと権力規模からして、この時期に大規模に手が増えられたと解される。松本平で繰り広げられた戦争は日本の縮図でもあり、それがもっとも凝縮されたものであったといえる。

前述のように松本市内に残存する山城は、山家城の高い垂直な石積、桐原城の石積で区画された連続する郭、林大城の大規模な郭、林小城のコンパクトさ、埴原城の堀切の大規模さなど、それぞれ特徴を持つが、石の積み方や全体の構成、背後の堀切などはよく似ており、同時期に築造されたか大規模に改修された可能性が高い。それは松本市内に限らず、安曇野市の塔ノ原城、筑北村の青柳城などもつながる。しかも、それらは武田氏が造ったとされる山城より防御に気を遣っており、残存状況もよい。これだけ大規模な山城が多数築造・修築された時期としては、天正10年（1582）の本能寺の変後、とりわけ天正13年までの期間である可能性が高いと私は考える。この時期信府をねらった大名たちが互いに取り合ったのは武田氏の地域支配の拠点だった深志城だったが、これを奪取し、周辺にらみをきかせるためにも、陣地として山城を築く必要があった。それが松本市及びその周辺に残る縄張りの優れ、遺構の残りのよい山城であろう。そしてそれらは必ずしも埴原城や山辺城のような形態だけでなく、広い視野からすると特徴にまとまりがある。

こうした山城は全国的に見ても、その規模の大きさ、縄張りの複雑さ、堀切や切岸、石積などのパーツの見事さ、狭い地域にこれだけ多く残存することなど、注目に値することが極めて多い。とりわけ、山家城や桐原城、埴原城等に見られる石積（写真24）は松本城の石垣技術が伝わる前の段階、この地域での技術の到達点が残されている。逆にこうした山城の特徴や分布状況、数から見ても、いかに激しい戦争が戦国時代最末期の松本平で繰り広げられたかが伝わってくる。

急激に転換する社会の中で多くの山城が存続の危機に瀕している。多数残存する山城のすべてに保護の網をかけることは難しいが、全体の中でどの山城はどのような意義を持ち、どこに価値があるかを見極めた上で、今後これらの山城のうち埴原城や山家城、桐原城、伊深城など、これまで「小笠原系城郭」として高い評価を受けてきた重要なものだけでもきちんと保護していかねばならない。

ともかく、日本の歴史を古文書や記録だけでなく、城跡という視点から連続的に捉えるためにも、本報告書で扱ってきた井川城、林大城、林小城からなる小笠原氏城館群の保存と活用は緊急の課題である。



写真1 法善寺（南アルプス市）



写真2 井川城址（松本市）



写真3 松尾城（飯田市）



写真4 鈴岡城跡（飯田市）



写真5 林大城遠望



写真6 林小城の石積（松本市）



写真7 林山腰遺跡の発掘（松本市）



写真8 牧之島城の枡形（長野市）



写真 9 高遠城跡 (伊那市)



写真 10 福与城跡 (箕輪町)



写真 11 塩尻峠合戦の首塚 (塩尻市)



写真 12 村井城跡 (小屋城、松本市)



写真 13 深志城の後身である松本城



写真 14 伊深城跡背後の堀切 (松本市)



写真 15 桐原城の石積 (松本市)



写真 16 山家城の石積 (松本市)



写真 17 塔ノ原城跡の主郭部分 (安曇野市)



写真 18 小岩岳城跡 (安曇野市)



写真 19 虚空蔵山 (松本市)



写真 20 長祿古戦場 (愛知県新城市)



写真 21 青柳城の石積 (筑北村)



写真 22 平瀬城跡 (松本市)



写真 23 早落城 (松本市)



写真 24 埴原城の石積 (松本市)

表



第1表 井川城址遺構一覧

トレンチ	検出面	遺構
試験1トレンチ	郭外	中世 配状遺構(未掘)
試験2トレンチ	郭外	中世 配状遺構・流路
試験3トレンチ	郭外	近世 流路
		中世 配状遺構
試験4トレンチ	郭外	近世 流路
		中世 配状遺構・流路
		近世 溝1
試験5トレンチ	郭外	1～3面 炭化物集中1
		3面 P8・炭化物集中2
		4面 土1・土13
		5面 土2・土3・土4・土5・土6・土7・土8・土9・土10・土11・土12・P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・溝2
試験6トレンチ	郭外	近世 流路
		中世 配状遺構
	郭内	近世 土塁状盛土下
		土1・土2
		地山面 土3・土4
試験7トレンチ	郭外	近世 流路
		中世 配状遺構
	郭内	1面 土2
		2面 土1
		3面 P1
		4面 土3
		近世 水路
試験8トレンチ	郭外	1面 建物址1(柱1・柱2・柱3・柱4・柱5・柱6・柱7・柱8・柱9・柱10・柱11)・土2・SX01
		1面以前 土6・P47
		1～2面 土12・土13・土14・土15・土16・土17・土23・P24・P25・P27・P29・P31・P32・P33・P34・P35・P50
		1～3面 土9
		2面 土3・土18・土19・土20・土21・土22・土24・土26・土27・土28・土29・土30・土31・P8・P11・P12・P13・P15・P17・P20・P28・P30・P36・P37・P39・P48・P49・溝1・溝2・溝3・溝4・SX02
		2面以前 土35・土36・土37・土38・土39・土40・土41・土42・土43・土44・土45・土46・土47・土48・土49・土50・土51・土52・土53・土54・土55・土56・土57・土58・P16・P51・P52・P53・P54・P55・P56・P57・溝6
		3面 土7・土8・土10・土11・P5・P10・P18・P19・P22・P23・溝5
		2～3面 土25・P21・P43
		3面以前 土57・P26
		4面 土1・土32・土33・土34・P1・P2・P6・P7・P9・P44・P45・P46・P59
		3～4面 P38・P40・P41・P42
		5面 土59・P4・P14・P58
		6面 土4・P3
1次1トレンチ	郭外	中世 配状遺構
	郭内	1面～土塁状盛土 建物址2(柱1・柱2・柱3・柱4・柱6・柱7・柱8)・柱5・土1・P1・P2・P3・P4・P5・溝1・溝2・溝3・炭化物集中1・炭化物集中2・炭化物集中3・炭化物集中4・焼土1・焼土2
		地山面 P6・P7・溝4
1次2トレンチ	郭外	中世 配状遺構
	郭内	1面 P1・P3・溝2
		1面以前 土12
		2面 土11
		1～2面 土4・土5・土6・土7・土8・土9・土10・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P13・P14・P15・P16・P17・P18・P19・P20
		3面 土1・土2・土3・P2・P4
1次3トレンチ	郭内	1面 P1
		1面以前 P76・P82・集石2・集石3
		2面 土1・土2・土3・土5・土7・土10・土11・土12・土13・土14・土15・土16・土17・土18・土19・土20・土21・土22・土23・土24・土25・土26・土27・土28・土29・土30・土31・土32・P2・P3・P4・P6・P7・P8・P9・P11・P13・P15・P16・P17・P18・P19・P20・P21・P22・P23・P24・P25・P26・P27・P28・P29・P30・P31・P32・P33・P34・P35・P36・P37・P38・P39・P40・P41・P42・P43・P44・P45・P46・P47・P48・P49・P50・P51・P52・P53・P54・P55・P56・P57・P58・P59・P60・P61・P62・P63・P64・P65・P66・P67・P68・P69・P70・P71・P72・P73・P74・P75・P77・P78・P79・P80・P81・P83・P84・P85・P86・P87・P88・柱1・炭化物集中1・炭化物集中2・炭化物集中3・集石1
		2面以前 土20
		3面 土4・土8・P10・P14
		4面 土6・P12
		地山面 土9・土33・P5
1次4トレンチ	郭外	中世 配状遺構
	郭内	土塁状盛土 石列
1次5トレンチ	郭内	1面 P6・P8・P10・P15・P36・炭化物集中2
		1～2面 P13・P14・P16
		2面 土1・土2・土3・土8・土12・土13・土14・土15・土16・土17・P5・P7・P9・P12・P17・P18・P19・P20・P21・P22・P23・P24・P25・P26・P27・P28・P29・炭化物集中1
		2面以前 P35
		3面 土4・土5・土6・土7・土9・土10・土11・土18・土19・土31・P4・P11・P30・P31・P32・P33・P34
		4面 P1・P2
		地山面 P3

トレンチ	検出面	遺構	
1次6トレンチ	郭内	中世 1面	壇状遺構 P22・集石1
		2面	上1・上3・上6・上7・上10・上12・上13・上14・上15・上16・上17・上18・上19・上20・上22・上23・上24・上25・上26・上27・上28・上30・上31・上32・P2・P8・P9・P11・P12・P17・P18・P21・P23・P26・P27・P29・P30・P31・P32・P33・P34・P35・P36・P37・P38・P39・P43・P44・P45・P46・P47・P48・P49・P50・P51・P52・P53・P54・P56・炭化物集申1
		1～2面	上21・上29・P55・集石2
		3面	上5・上9・P1・P10・P14・P19・P24・P25
		4面	上2・上4・上11・P3・P4・P7・P15・P20
		3～4面	P6
2次2トレンチ	郭外	地山面	上8・P13・P16・P40・P41・P42・集石3
		近世以降	溝1・SX01・SX02
		1面	土器・流路
		土塁跡上内	P1
		2面	上7・SX03・SX04・SX05・SX06
		2～3面	上1
2次3トレンチ	郭外	1面	上2・上3・上4・上5・上6・P2・P3
		1面	上2・上4・上5・上6・上7・上8・上9・上10・上11・上12・上17・上18・上19・上20・上21・P1・P2・P4・溝1・流路1・流路2
		1面	P12・P18・P19
		1面以降	流路3・流路4
		1面以前	上3・上13・上14・上15・上16・P13・P24・P25
		1～2面	P26
		2面	上34・上37・P3・P5・P6・P22・P23
		2面	上36・P21・P29
		2～3面	P7・P8
		3面	上1・上22・上23・上24・上25・上27・上28・上33・上34・上35・上36・上37・P6・P9・P10・P11・P14・P15・P16・P17・P20・P27・P28
2次4トレンチ	郭外	整地面	流路1・流路2・壇状遺構
		整地面	溝1・流路1・流路2・壇状遺構
2次5トレンチ	郭外	中世	壇状遺構
		1面	建物址3(柱1・柱2・柱3・柱4)・建物址4(柱9・柱10・柱13・柱14)・建物址5(柱5・柱6・柱7・柱8)・上6・上7・上10・上11・上13・上14・上16・P1・P14・P15・P16・溝1・溝2
		1面以前(2面)	集石1
		2面	上8・上9・上12・P2・柱11・柱12
		3面	上15・P3・P7・溝3・溝4・集石2
		2～3面	P3
		4面	上1・上2・上3・上4・P4・P5・P6
		4面以前	上23
		5面	上5・上22
		6面	P8・P9・P10・P11・P13
		7面	上19
		8面	上20
		9面	上21
		土塁状跡上上面	溝(テラス)
2次7トレンチ	郭外	地山面	上17・上18・P12・P17・P18・P19
		中世	壇状遺構
2次8トレンチ	郭外	土塁状跡上上面	溝(テラス)
		中世	壇状遺構
		1面	溝2・SX01
		1面以降	上4
		1面以前	上1・上2・上3・P1・溝1
		2面	上5・上6・柱1・SX02
2次9トレンチ	郭内	3面	上7
		4面以前	上8
		土塁状跡上上面	P2
		中世	壇状遺構
		1面	SX02
		1～2面	溝1
2次10トレンチ	郭外	2面	P1・P2
		土塁状跡上上面	上1・上2・上3・上11
		3面	上4・上5・上10・P3・SX01
		3面以前	上6・P8
		4面	P4・P7
		4面以前	上7・P9
2次10トレンチ	郭外	地山	上8・上9・上12・上13・P5・P6
		中世	壇状遺構

※ 明朝体は断面で確認した遺構、ゴシック体は平面図に明示した遺構を示す。

第2表 井川城址土層一覽

＜試掘調査＞

No.	土層	性質	土層厚	形状	遺物	層	性格	備考
試掘1トレンチ 壁面土層								
1	10785/0	泥炭	シルト	あり	あり	炭分15%・マンガン15%・鉄灰土20～25%・灰口砂1%・炭屑物土層1%・炭灰土	近世1層	近世外堀土層
2	10786/1	泥炭	シルト	あり	あり	炭分30%・マンガン30%・鉄灰土1%・灰口砂1%・炭屑物土層1%・ ϕ 5mm粒を含有	近世1層	近世外堀土層
3	2353/3	泥炭	シルト	あり	あり	炭分10%・マンガン10%・灰土1%・灰口砂1%・炭屑物土層1%・炭灰土	近世1層	近世外堀土層
4	2354/4	泥炭	砂質シルト	ややあり	なし	炭分5%・マンガン5%・オリブ質物10%・炭屑物1%	近世1層	近世外堀土層
5	535/1	泥炭	シルト	あり	なし	炭分2%・マンガン2%・炭屑物土層1%・炭屑物土層2%・炭灰土1%・灰口砂1%・炭屑物土層2%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
6	7514/2	泥炭	粘質シルト	あり	あり	炭分3%・マンガン3%・7%・炭灰土2%・灰口砂1%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
7	84/0	泥炭	粘質シルト	あり	あり	炭分2%・マンガン2%・炭屑物土層3%・オリブ質物1%・炭屑物土層7%	近世1層	近世外堀土層
8	10783/3	粘質	粘質土	あり	新	炭分2%・マンガン2%・炭屑物土層3%・オリブ質物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
9	514/1	泥	粘土	あり	あり	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層2%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世1層	近世外堀土層
10	2353/2	泥炭	粘土	あり	新	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世1層	近世外堀土層
11	535/3	泥	粘土	あり	中～薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層10%・灰口砂1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層20%・炭屑物土層2%	近世1層	近世外堀土層
12	534/1	泥	粘土	あり	新	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層10%・灰口砂1%・炭屑物土層10%・炭屑物土層3%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
13	84/0	泥	粘土	ややあり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層5%・灰口砂1%・炭屑物土層3%	近世1層	近世外堀土層
14	85/0	泥	粘土	あり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層5%・灰口砂1%・炭屑物土層3%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
15	85/0	泥	粘土	ややあり	薄	炭分1%・炭屑物土層1%	近世1層	近世外堀土層
16	2353/1	泥炭	粘土	なし	なし	炭分5%・炭屑物土層3%	近世1層	近世外堀土層
17	2353/1	泥炭	粘砂	なし	なし	炭分25～30%・炭屑物土層5%	近世1層	近世外堀土層
18	335/1	泥	粘土	あり	薄	炭分3%・灰口砂1%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
19	10786/1	泥炭	粘土	あり	薄	炭分3%・灰口砂1%・炭屑物土層1%	近世1層	近世外堀土層
試掘2トレンチ 壁面土層								
1	10785/1	泥	粘質シルト	なし	なし	炭分30%・マンガン30%・炭屑物土層2%・炭屑物土層2%	近世1層	近世外堀土層
2	7518/2	泥炭	シルト	あり	あり	炭分2～5%・マンガン2～5%・炭屑物土層10%・炭屑物土層5%・炭屑物土層多量	近世1層	近世外堀土層
3	2353/1	泥炭	シルト	粘質	あり	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層3%	近世1層	近世外堀土層
4	7518/3	泥炭	シルト	あり	あり	炭分15～20%・マンガン15～20%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世1層	近世外堀土層
5	53/3	オリブ質	粘土	あり	あり	炭分10～20%・マンガン10～20%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
6	53/4	粘質	粘土	あり	新	炭分10%・マンガン10%・炭屑物土層7%・炭屑物土層7%・炭屑物土層2%	中世1層	近世外堀土層
7	585/1	粘質	粘土	あり	薄	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層7%・炭屑物土層20%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
8	516/2	灰オリブ	粘土	あり	薄	炭分20%・マンガン20%・炭屑物土層10%	中世1層	近世外堀土層
9	84/1	泥	粘土	あり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層2%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
10	53/4	泥	粘土	ややあり	薄	炭分1%・マンガン1%	中世1層	近世外堀土層
11	53/4	泥	粘土	ややあり	薄	炭屑物土層20%	中世1層	近世外堀土層
12	2353/2	泥炭	粘土	あり	薄	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層3%	中世1層	近世外堀土層
13	85/0	泥	粘土	あり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層3%	中世1層	近世外堀土層
14	2354/4	泥炭	粘土	あり	薄	炭分2%・マンガン2%・炭屑物土層1%	中世1層	近世外堀土層
15	2353/3	泥炭	粘土	あり	薄	炭分7%・マンガン7%・炭屑物土層7%・炭屑物土層3%	中世1層	近世外堀土層
16	2354/4	泥炭	粘土	あり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層1%	中世1層	近世外堀土層
17	53/3	オリブ質	粘土	ややあり	薄	炭屑物土層5%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
18	2354/4	泥炭	粘土	あり	薄	炭屑物土層2%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
19	85/0	泥炭	粘土	ややあり	薄	炭屑物土層10%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
20	10784/1	泥炭	シルト	あり	あり	炭分15%・マンガン15%・炭屑物土層1%・オリブ質土層2%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世1層	惣土層 証 3-23に付
21	53/3	粘質	粘土	あり	あり	炭分1%・炭屑物土層10%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世1層	惣土層 証 3-24・証 3-2に付
22	53/4	泥	粘土	あり	中～薄	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世2層	近世外堀土層
23	53/3	オリブ質	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世2層	近世外堀土層
24	53/3	オリブ質	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世2層	近世外堀土層
25	53/4	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世2層	近世外堀土層
26	53/3	オリブ質	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世2層	近世外堀土層
27	53/3	オリブ質	粘土	あり	薄	炭屑物土層2%・炭屑物土層	近世2層	近世外堀土層
28	53/4	泥	シルト	粘質	なし	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	地山	中世以前の土層
29	53/3	オリブ質	粘土	ややあり	薄	炭分1%・マンガン1%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	地山	中世以前の土層
30	2354/4	泥炭	粘土	ややあり	薄	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層10～20%・炭屑物土層2%・炭屑物土層3%	地山	中世以前の土層
31	84/0	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	地山	中世以前の土層
32	84/0	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	地山	中世以前の土層
33	85/0	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	地山	中世以前の土層
34	85/0	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層1%・炭屑物土層	地山	中世以前の土層
35	砂礫	なし	なし	なし	なし	ϕ 2mm粒	地山	中世以前の土層
試掘3トレンチ 壁面土層								
1	535/1	泥炭	中～粘	あり	中～薄	炭分10～15%・マンガン10～15%・炭屑物1%	近世	近世外堀土層
2	2353/2	泥炭	中～粘	なし	なし	炭分7%・マンガン7%・炭屑物土層5～15%・炭屑物土層15%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
3	53/4	泥	粘質土	あり	中～薄	炭分20%・マンガン20%・炭屑物土層10%・炭屑物土層2%・オリブ質土層2%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
4	2353/3	泥炭	粘質土	ややあり	新	炭分15%・マンガン15%・炭屑物土層5%・炭屑物土層1%	近世	近世外堀土層
5	7518/2	泥炭	粘質土	あり	あり	炭分2～10%・マンガン2～10%・炭屑物土層10%・炭屑物土層10%・炭屑物土層1%・炭屑物土層5%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
6	2353/3	泥炭	粘質土	あり	新	炭分7%・マンガン7%・炭屑物土層1%・炭屑物土層5%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
7	535/1	泥炭	中～粘	なし	なし	炭分5%・マンガン5%・炭屑物土層2%・炭屑物土層3%・炭屑物土層多量	近世	近世外堀土層
8	2353/2	泥炭	中～粘	なし	なし	炭屑物土層7%・炭屑物土層5%・マンガン5%・10%・炭屑物土層3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
9	7518/2	泥炭	粘質土	ややあり	新	炭分3%・マンガン3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世	近世外堀土層
10	10785/2	泥炭	粘質土	ややあり	あり	炭分5%・マンガン5%・炭屑物土層を含有	近世	近世外堀土層
11	535/1	泥炭	粘質土	なし	なし	炭分7%・マンガン7%・炭屑物土層7%・炭屑物土層多量	近世	近世外堀土層
12	53/4	泥	粘土	あり	中～薄	炭屑物土層7%・マンガン7%・炭屑物土層2%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世	近世外堀土層
13	53/4	泥	粘土	あり	中～薄	炭屑物土層2%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
14	53/3	オリブ質	粘土	あり	薄	炭屑物土層3%・マンガン3%・炭屑物土層多量	近世	近世外堀土層
15	2354/4	泥炭	粘土	あり	薄	炭屑物土層2%・マンガン2%・オリブ質土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
16	10785/2	泥炭	粘土	あり	新	炭分10%・マンガン10%・炭屑物土層10%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	近世	近世外堀土層
17	2353/3	泥炭	粘質土	あり	新	炭分10～15%・マンガン10～15%・炭屑物土層1%・炭屑物土層1%	近世	近世外堀土層
18	2353/3	泥炭	粘質土	あり	あり	炭分5%・マンガン5%・炭屑物土層10%・炭屑物土層1%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層
19	53/4	泥	粘土	あり	薄	炭屑物土層3%・炭屑物土層3%・炭屑物土層1%・炭屑物土層5%・炭屑物土層	中世1層	近世外堀土層

No.	土質	土質	しり	あり	なし	有物	備考	調査	作業	備考
20	2.25/2.2	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 10%、マンガン 10%、灰 1%、灰化土 2%、砂 1%		中野1課	昭和4年竣工	
21	2.25/2.2	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 7%、マンガン 7%、灰化土 3%、比色 炭化土		中野1課	昭和4年竣工	
22	5/6/1	灰	粘土	あり	中-重	炭灰 3%、マンガン 3%、黄褐色土 5%、灰 1%		中野1課	昭和4年竣工	
23	5/4/1	灰	粘土	あり	重	炭灰 2%、マンガン 2%、灰化土 3%、砂 3%、黒褐色土 2%、腐食動物多量		中野1課	昭和4年竣工	
24	2/4/1	灰	シルト-軽質土	あり	ややあり	炭灰 10%、マンガン 10%、灰化土 2%、黒褐色土 3%、灰化砂 1%、砂 2%、比色 炭化土		北部外1課	暫定土	試 2-21 に対応
25	2/5/1/2	細粒質	軽質土	あり	重	炭灰 10%、マンガン 10%、黒褐色土 5%、緑褐色土 1%、灰化土 1%		北部外1課	暫定土	試 2-22 に対応
26	2.25/2.2	細粒質	軽質土	あり	重	炭灰 7%、マンガン 7%、黒褐色土 2%、灰化土 1%、砂 1%、φ=0.075		北部外1課	暫定土	*
27	2.25/2.2	細粒質	軽質土	あり	重	炭灰 5%、マンガン 5%、黒褐色土 1%、灰 1%		北部外1課	暫定土	*
28	5/4/1	灰色	軽質土	あり	中-重	炭灰 20%、マンガン 20%、比色 褐色土 5%、灰化砂 1%、黒褐色土 20%、灰化土 1%		地山	中野1課の調査土	試 2-28 に対応
29	2.25/4/1	細粒質	粘土	中-ややあり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、黒褐色土 3%、灰化土 1%		地山	中野1課の調査土	
30	5/4/1	オレンジ質	粘土	あり	重	炭灰 7%、マンガン 7%、砂 5%、灰化土 1%、比色 土 1%		地山	中野1課の調査土	試 2-29 に対応
31	N4/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 3%、マンガン 3%、砂 10%、灰 1%、灰化土 1%、黒褐色土 2%		地山	中野1課の調査土	*
32	N4/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 2%、灰 1%		地山	中野1課の調査土	試 2-30 に対応
33	N3/0	細粒質	粘土	中-やや重	重	炭灰 1%、マンガン 1%、黄褐色土 3%、灰化土 10%、砂 5%、灰化砂 2%、黒褐色土 1%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	試 2-30 に対応
34	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、黒褐色土 1%、砂 2%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
35	5/4/1	オレンジ質	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、砂 3%、灰化土 15%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
36	N5/0	灰	細粒質-軽質土	なし	なし	オレンジ質土 15~20%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
37	5/4/1	灰	粘土	あり	重	砂 7~10%、黒褐色土 2%、灰化土 1%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
38	5/4/1	オレンジ質	粘土	あり	重	砂 2%、灰 1%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
39	5/4/1	オレンジ質	粘土	あり	重	腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
40	5/4/1	オレンジ質	粘土	あり	重	灰化土 10%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
試験 4 トレンチ 壁面土層										
1	3/5/1	灰	シルト	あり	あり	炭灰 15%、マンガン 15%、黒褐色土 2%、灰化土 10%、灰化砂 1%		道新	北部外課土	洪水調査含む
2	2.25/3/1	細粒質	砂質土	中-ややなし	なし	炭灰 10%、マンガン 10%、砂 1%、黒褐色土 5%、灰化土 7%、灰化オレンジ質 1%、腐食動物多量		道新	北部外課土	
3	3/5/1	灰	シルト	あり	あり	炭灰 5%、マンガン 5%、灰 3%、比色 土 1%		道新	北部外課土	
4	5/4/1	灰	シルト	あり	あり	炭灰 10%、マンガン 10%、灰化土 1%、灰化砂 1%、灰化土 1%、比色 褐色土 1%、腐食動物多量		道新	北部外課土	
5	5/6/1	灰	シルト	あり	あり	炭灰 5%、マンガン 5%、灰 2%、灰化土 5%、灰化土 2%、腐食動物 10%、灰化砂 1%		道新	北部外課土	
6	2.25/3/1	細粒質	砂質土	なし	なし	炭灰 5%、マンガン 5%、灰化砂 10%		道新	北部外課土	
7	2.25/3/2	細粒質	砂質土	なし	なし	炭灰 5%、マンガン 5%、15%、黒褐色土 3%、灰化土 2%、腐食動物多量		道新	濃縮土 4	土民のくばり
8	2.25/4/1	細粒質	砂質土	中-ややなし	なし	炭灰 5%、マンガン 5%、灰化土 5%、灰 1%、黒褐色土 1%		道新	濃縮土 5	吉井水路
9	5/4/1	灰	シルト	あり	あり	炭灰 5%、マンガン 5%、灰化土 7%、黒褐色土 1%、灰化土 1%、比色 土 1%、腐食動物 10%、灰化土 10%、灰化土 1%、灰化土 1%		道新	濃縮土 5	
10	10/5/1	灰	粘土	中-重	あり	炭灰 3%、マンガン 3%、灰化土 3%、灰化土 10%、腐食動物多量		道新	濃縮土 5	
11	5/4/1	灰	軽質土	あり	あり	炭灰 3%、マンガン 3%、黒褐色土 1%、灰化土 1%、灰化土 3%、砂 1~15%		道新	濃縮土 5	
12	N5/0	灰	軽質土	中-やや重	中-重	炭灰 2%、マンガン 2%、黒褐色土 1%、黄褐色土 2%、黄褐色土 3%、黒褐色土 1%		道新	濃縮土 5	
13	5/4/1	灰	軽質土	あり	重	炭灰 2%、マンガン 2%、灰化土 3%、灰化土 1%、灰化土 5%		道新	濃縮土 5	
14	10/6/5/1	灰	細粒質	なし	なし	炭灰 50%、マンガン 50%		道新	濃縮土 5	
15	5/6/1	灰	粘土	あり	あり	炭灰 30%、マンガン 30%、灰化土 40%、灰化土 1%、灰化土 2%		道新	濃縮土 5	
16	2.25/7/2	細粒質	砂質土	なし	なし	炭灰 10~50%、マンガン 10~50%、灰化土 10%、腐食動物多量		道新	濃縮土 5	
17	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 2%、マンガン 2%、黄褐色土 3%、黒褐色土 1%、腐食動物多量		道新	濃縮土 5	
18	5/4/1	灰	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、砂 2%、黒褐色土 3%、黒褐色土 1%、灰化土 5%、灰化土 3%、灰化土 1%		道新	濃縮土 5	
19	5/4/1	灰	粘土	あり	重	炭灰 5%、マンガン 5%、灰化土 20%、灰化土 5%、灰化土 2%、灰化土 10%、灰化土 1%、腐食動物多量		道新	濃縮土 5	
20	N5/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、黄褐色土 1%、灰化土 1%、灰化土 1%		道新	濃縮土 5	
21	3/7/2	灰白	細粒砂	なし	なし	炭灰 20%、マンガン 20%、灰 1%		中野1課	昭和4年竣工	
22	1.73/0/2	細粒質	軽質土	あり	あり	炭灰 5%、マンガン 5%、灰化土 15%、黄褐色土、灰化土、腐食動物多量、灰化土が豊富に入る		中野1課	昭和4年竣工	
23	5/4/1	灰	粘土	中-重	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、灰 1%、灰化土 7%、灰化土 3%、灰化土 3%、灰化土 3%、灰化土 3%		中野1課	昭和4年竣工	
24	N4/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、灰化土 1%、灰化土 1%、灰化土 1%		地山	中野1課の調査土	
試験 5 トレンチ 壁面土層										
1	2.25/4/1	細粒質	細粒砂	あり	なし	炭灰 1~15%、マンガン 1~15%、灰化土 1%、φ=2mm 腐食動物		道新	北部外課土	
2	2.25/3/1	細粒質	細粒砂	なし	なし	炭灰 5%、マンガン 5%、腐食動物		道新	北部外課土	
3	10/6/2/1	細粒質	細粒砂-シルト	なし	なし	炭灰 7~10%、マンガン 7~10%、灰化土 2%、灰 1%		道新	北部外課土	
4	2.25/4/2	細粒質	細粒砂	なし	なし	炭灰 2%、マンガン 2%、灰化土 10%、腐食動物 2%、黒褐色土 3%		道新	北部外課土	
5	2.25/7/2	細粒質	細粒砂	なし	なし	炭灰 3%、マンガン 3%、灰化土 2%、灰化土 2%、灰化土 7%		道新	北部外課土	
6	10/6/3/2	細粒質	シルト-軽質土	なし	やや中-重	炭灰 7~10%、マンガン 7~10%、灰化土 2%、灰化土 3%		道新	北部外課土	
7	10/6/3/3	細粒質	粘土	あり	中-重	炭灰 3~5%、マンガン 3~5%、灰 1%、比色 褐色土 1%、黒褐色土 3%		道新	北部外課土	
8	2.25/3/2	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 10~15%、マンガン 10~15%、灰化土 3%		道新	北部外課土	
9	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 10~15%、マンガン 10~15%、灰化土 1%、灰化土 1%、比色 褐色土 1%		道新	第1課土	
10	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 5~7%、マンガン 5~7%、灰 3%、灰化土 1%、腐食動物 2%		道新	第1課土	
11	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 3~5%、マンガン 3~5%、灰 1%、比色 褐色土 1%、灰化土 3%		道新	第1課土	
12	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 2~3%、マンガン 2~3%、比色 褐色土 3%、灰化土 1%、灰化土 1%、砂 2%、φ=0.075の礫入り		道新	第1課土	
13	2.25/4/2	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 5%、マンガン 5%、灰 1%、黒褐色土 1%、灰化土 1%、灰化土 1%、比色 褐色土 1%		道新	第1課土	
14	10/6/3/2 + 2.25/4/1	細粒質-灰質	軽質土-粘土	中-ややなし	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、灰 5%、腐食動物 3% (埋入体) 1%、黄褐色土 1%、黒褐色土 2%、灰化土 1%、灰化土 1%		道新	第1課土	
15	10/6/4/1	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 3%、マンガン 3%、比色 褐色土 1%、灰 1%		北部外2課	暫定土	試 8-17または試 8-33 に対応
16	10/6/4/1	細粒質	粘土	あり	中-重	炭灰 5%、マンガン 5%、灰 7%、灰 1%		北部外3課	暫定土	
17	2.25/3/2	細粒質	シルト	あり	あり	炭灰 10%、マンガン 10%、灰 1%、灰化土 1%、黒褐色土 1%		北部外4課	第1課土	
18	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	重	炭灰 1~3%、マンガン 1~3%、比色 褐色土 1%		北部外5課	暫定土	
19	2.25/4/2	細粒質	粘土	中-ややあり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、灰化土 2%、灰化土 5%		北部外5課	暫定土	
20	N4/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、黄褐色土 3%、灰 2%、黒褐色土 10~15%		北部外5課	暫定土	試 8-51 ~ 試 8-56 に対応
21	5/6/1	黄褐色	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、灰化土 2%、灰 1%、腐食動物		北部外5課	暫定土	
22	10/6/5/1 + 2.25/4/1	灰色+黄褐色	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、比色 褐色土 1%、灰 10% (埋入体 何れもなし)		地山	中野1課の調査土	ラニナ等、埋入体あり
23	2.25/2.2	細粒質	粘土	中-ややあり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、灰化土 2%、灰 3%		地山	中野1課の調査土	
24	N5/0	灰	粘土	あり	重	炭灰 1%、マンガン 1%、灰 1%		地山	中野1課の調査土	
25	2.25/3/1	細粒質	オレンジ質	あり	重	腐食動物 2%、灰 1%、腐食動物多量		地山	中野1課の調査土	
26	5/5/1	細粒質	粘土	中-ややあり	中-重	炭灰 3~5%、マンガン 3~5%、灰 2%、灰化土 1%		道新	第1課土	試 5-8、試 5-9、試 5-10
27	2.25/3/2	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、比色 褐色土 1%、灰 1%		道新	第1課土	*
28	10/6/2/2 + 2.25/3/2	細粒質+黄褐色	粘土	中-ややあり	あり	比色 褐色土 3%、灰化土 3%		道新	第1課土	*
29	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 3~5%、マンガン 3~5%、灰 1%、比色 褐色土 2%、灰化土 3%、灰化土 7%		道新	第1課土	*
30	2.25/4/1	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、黒褐色土 1%		北部外5課	第1課土	
31	N3/0	灰	粘土	あり	あり	炭灰 2%、マンガン 2%、灰化土 7~10%、灰 1%、腐食動物多量		北部外5課	第1課土	
32	2.25/3/1	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 1%、マンガン 1%、腐食動物 1%、砂 2%、灰化土 1%、灰化土 1%		北部外5課	第1課土	
33	2.25/3/1	細粒質	粘土	あり	あり	炭灰 2~3%、マンガン 2~3%、灰化土 3%、砂 2%、灰 1%、灰化土 1%		北部外5課	第1課土	

No.	土質	土層	しきり	地質	含有物	量	性状	備考
73	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン3%・炭1%・砂2%	2	2層土	
74	2.5V4/1	細砂	粘土	なし	粘土1%・マンガン3%・炭1%	2	2層土	
75	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土2%・マンガン2%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	試7-100・試7-82・試7-86と併記
76	2.5V4/1	細砂	粘土	なし	粘土2%・マンガン2%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	
77	2.5V3/1	細砂	粘土	なし	粘土5%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	
78	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	試7-101・試7-84と併記
79	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	
80	2.5V3/1	細砂	粘土	なし	粘土2%・マンガン2%・炭1%・炭化土類2%・炭類1%	2	2層土	試7-103・試7-83・試7-89と併記
81	2.5V2/1	泥	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	試7-103・試7-83・試7-89と併記
82	100V6/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%	2	2層土	試7-103・試7-83・試7-89と併記
83	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン3%・炭1%・砂1%	2	2層土	
84	100V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン3%・炭1%・砂1%	2	2層土	
85	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	試7-81と併記
86	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	試7-85と併記
87	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	
88	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	試7-104・試7-80・試7-81と併記
89	2.5V1/1	泥	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	
90	100V6/1	細砂	粘土	あり	粘土1%・マンガン1%・炭1%・砂1%・粘土類1%	2	2層土	

< 1次調査 >

1次1トレンチ	土質	土層	しきり	地質	含有物	量	性状	備考
1	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土20%・マンガン20%・炭1%・炭化土類1%・砂2%の混在	1	1層土	断面土層
2	2.5V3/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・炭化土類1%	1	1層土	
3	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・炭化土類1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	
4	84	細砂	粘土	粘土	粘土10%・マンガン10%・炭1%・炭化土類2%	1	1層土	試7-77・試7-121に併記
5	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	炭化土類2層土
6	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	粘土層土
7	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	粘土層土
8	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	粘土層土
9	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	粘土層土
10	7.5V4/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	粘土層土
11	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	1層土
12	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	1層土
13	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	1層土
14	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	1層土	1層土
15	7.5V4/1	泥	シルト	あり	粘土40%・マンガン40%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	1	1層土	1層土
16	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土7%・マンガン7%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	2	2層土	2層土
17	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	3	3層土	3層土
18	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	4	4層土	4層土
19	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土2%・マンガン2%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	5	5層土	5層土
20	100V6/1	明礬砂	粘土	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	6	6層土	6層土
21	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	7	7層土	7層土
22	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	8	8層土	8層土
23	10V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	9	9層土	9層土
24	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	10	10層土	10層土
25	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	11	11層土	11層土
26	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土7%・マンガン7%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	12	12層土	12層土
27	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	13	13層土	13層土
28	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土20%・マンガン20%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	14	14層土	14層土
29	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土20%・マンガン20%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	15	15層土	15層土
30	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	16	16層土	16層土
31	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	17	17層土	17層土
32	100V6/1	明礬砂	粘土	あり	粘土3%・マンガン3%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	18	18層土	18層土
33	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	19	19層土	19層土
34	N5	泥	粘土	あり	粘土・マンガン10%・炭1%	20	20層土	20層土
35	100V4/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	21	21層土	21層土
36	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	22	22層土	22層土
37	7.5V1/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	23	23層土	23層土
38	7.5V1/1	泥	シルト	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	24	24層土	24層土
39	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	25	25層土	25層土
40	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土5%・マンガン5%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	26	26層土	26層土
41	5V3/1	泥	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	27	27層土	27層土
42	5V3/1	泥	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	28	28層土	28層土
43	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	29	29層土	29層土
44	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土20%・マンガン20%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	30	30層土	30層土
45	5V4/1	泥	シルト	あり	粘土20%・マンガン20%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	31	31層土	31層土
46	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	32	32層土	32層土
47	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土40%・マンガン40%・炭1%・砂1%・粘土類2%・炭類2%	33	33層土	33層土
48	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土7%・マンガン7%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	34	34層土	34層土
49	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	35	35層土	35層土
50	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土30%・マンガン30%・炭1%・砂1%・粘土類3%・炭類3%	36	36層土	36層土
51	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	37	37層土	37層土
52	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	38	38層土	38層土
53	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	39	39層土	39層土
54	5V3/1	泥	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	40	40層土	40層土

1次1トレンチ 溝3

A	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	溝3層土	
---	-------	---	-----	----	----------------------------------	---	------	--

1次1トレンチ 柱5

B	2.5V4/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	柱5土	柱5層土
C	2.5V3/1	細砂	粘土	あり	粘土15%・マンガン15%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	柱5土	

1次1トレンチ 柱1

D	5V3/1	泥	シルト	あり	粘土7%・マンガン7%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	柱1土	
---	-------	---	-----	----	--------------------------------	---	-----	--

1次1トレンチ P2

E	7.5V3/1	泥	シルト	あり	粘土10%・マンガン10%・炭1%・砂1%・粘土類1%・炭類1%	1	P2層土	
---	---------	---	-----	----	----------------------------------	---	------	--

No.	土質	1層	しりり	軟弱	名称	割合	備考	1層	名称	備考
1	2.5/4.1 1級土	砂質土	中やや	あり	新-中	成分20%・マンガン20%・炭素5%・灰分7%・土質1%・ $\phi=5$ mmの礫1%		1層	P2層土	
1次1トレンチ P3										
6	2.5/4.1 2級土	シルト	あり	なし	新	成分7%・マンガン1%・炭素1%・灰分7%・土質2%・砂1%・ $\phi=10$ mmの礫1%		1層	P3層土	
1次1トレンチ P4										
8	5/1/1 1級土	シルト-粘質土	あり	なし	新-弱	成分15%・マンガン15%・炭素7%・炭素1%・土質1%・炭化土1%		1層	P4層土	
1次2トレンチ 断面土層										
1	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土2%		3層	表層土層	
2	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土2%		3層	表層土層	
3	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	表層土層	1層以下は測定できない
4	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	表層土層	1,2に付
5	5/1/1 1級土	シルト-粘質土	あり	あり	新	成分30%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	表層土層	
6	5/1/1 1級土	シルト-粘質土	あり	なし	新-弱	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%		3層	表層土層	
7	2.5/4.1 2級土	シルト	中やや	あり	新	成分2%・マンガン2%		3層	表層土層	試77-試77-15に付
7	2.5/4.1 2級土	シルト	中やや	なし	新-中	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭化土3%		3層	表層土層	
8	2.5/4.1 2級土	シルト	中やや	なし	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土2%・ $\phi=2$ mmの礫含む		3層	表層土層	
9	2.5/4.1 2級土	シルト	中やや	なし	新-中	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	表層土層	
10	2.5/4.1 2級土	シルト	中やや	なし	新	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	表層土層	
11	5/1/1 1級土	粘質土	あり	あり	新	成分50%・マンガン50%・炭素10%・炭素1%・炭化土1%		1層	溝2層土	1,10-試77-31に付 1,11に付。加わす て、土質調査の 実施
12	2.5/3.1 2級土	シルト	あり	なし	新	成分7%・マンガン7%・炭素2%・炭素2%・炭化土3%・ $\phi=5$ mmの礫1%・灰分1%・炭化土2%		1層	1層土層	1,5,7-1,5,7-1,5,7- 1,5,7-1,6,8-1,6,11
13	2.5/3.1 2級土	シルト	あり	なし	新	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%		1層	1層土層	1,12に付
14	5/1/2 1級土	シルト	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		1層	1層土層	
15	1.0/1/4.1 3級土	シルト	あり	あり	新	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		1層	1層土層	
16	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		1-2層	11層土	
17	2.5/4.1 2級土	粘質土	あり	あり	新	成分7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	試77-40-試77-53に付
18	2.5/1/1 2級土	砂質土-粘質土	あり	新-中	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%・ $\phi=10$ mmの礫含む		2層	2層土層	1,5,13-1,5,13-1,5,13- 1,6,12に付
19	2.5/4.1 2級土	粘質土	中やや	なし	新-中	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	1,5,22-1,5,25-1,5,28- 1,5,34-1,6,11-1,6,12- 1,6,18-1,6,18-1,6,18に付
20	5/1/1 1級土	粘質土	あり	あり	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
21	5/1/1 1級土	粘質土	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
22	5/1/1 1級土	粘質土	あり	あり	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
23	5/1/1 1級土	粘質土	あり	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%		3層	3層土層	
24	5/1/1 1級土	粘質土	あり	中やや	新-中	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
25	1.0/1/1 3級土	シルト	あり	中やや	新-中	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
26	2.5/4.1 2級土	粘質土	中やや	あり	新	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
27	1.0/1/1 3級土	シルト	あり	あり	新	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
28	2.5/4.1 2級土	粘質土	中やや	中やや	新-中	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
29	5/1/1 1級土	粘質土	中やや	あり	新	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
30	5/1/1 1級土	粘質土	中やや	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
31	2.5/4.1 2級土	粘質土-粘質土	あり	新	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
1次3トレンチ 断面土層										
1	1.2/4.1 1級土	粘質土	あり	なし	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・ $\phi=5$ mmの礫含む		1層	1層土層	1,145に付
2	1.2/4.1 1級土	粘質土	あり	なし	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
3	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
4	2.5/4.1 2級土	シルト	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
5	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
6	2.5/4.1 2級土	シルト	あり	あり	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
7	5/1/1 1級土	シルト	あり	あり	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
8	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%		2層	2層土層	1,146に付
9	2.5/4.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
10	5/1/1 1級土	砂質土-シルト	あり	なし	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		1層	1層土層	1,145-1,131に付
11	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%		2層	2層土層	
12	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
13	2.5/4.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
14	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
15	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
16	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
17	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト-粘質土	あり	新-弱	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%		2層	2層土層	1,146-1,139に付
18	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
19	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新-中	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
20	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	1,119-1,139に付
21	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
22	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
23	1.0/1/1 3級土	粘質土	シルト	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
24	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
25	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
26	1.0/1/1 3級土	粘質土	シルト	あり	新-中	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
27	1.0/1/1 3級土	粘質土-粘質土	あり	新-中	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%・炭化土1%		4層	4層土層	
28	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	あり	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
29	2.5/4.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
30	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
31	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	あり	新	成分3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
32	1.0/1/4.1 3級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
33	2.5/4.1 2級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
34	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
35	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
36	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
37	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
38	1.0/1/1 3級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
39	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		2層	2層土層	
40	2.5/4.1 2級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
41	5/1/1 1級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
42	2.5/3.1 2級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分1%・マンガン1%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
43	1.0/1/1 3級土	粘質土	シルト	中やや	新	成分10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		4層	4層土層	
1次4トレンチ 断面土層										
1	2.5/3.1 2級土	シルト	あり	あり	新	成分30%・マンガン30%・炭素7%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	
2	2.5/3.1 2級土	シルト	あり	あり	新	成分40-50%・マンガン40-50%・炭素1%・炭素1%・炭化土1%		3層	3層土層	

No.	名称	業種	所在地	業種	資本金	業種	業種	業種
47	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立5-7%・マンガン5-7%・炭素1%・鉄1%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	3	業	P03業士
48	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立15%・マンガン15%・炭素1%	3	業	P03業士
49	2,535/3	建設業	建設士	あり	積立5-7%・マンガン5-7%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	3	業	P02業士
50	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立7-10%・マンガン7-10%・炭素3%・炭素1%	3	業	±19業士
51	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素5%・炭素1%・炭素1%	3	業	P01業士
52	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素10%・炭素1%・炭素1%	3	業	P01業士
53	2,534/3	建設業	建設士	あり	積立5%・マンガン5%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	P04業士
1次60トン車 新断面中盤								
1	2,536/1	建設業	建設士	あり	積立40%・マンガン40%・炭素1%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
2	2,536/2	建設業	建設士	あり	積立20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
3	2,536/3	建設業	建設士	あり	積立20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
4	2,536/4	建設業	建設士	あり	積立3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
5	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立5-7%・マンガン5-7%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
6	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
7	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
8	2,536/1	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
9	2,536/2	建設業	建設士	あり	積立5%・マンガン5%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
10	2,536/3	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
11	2,536/4	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	1	業	建設業
12	2,536/5	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	1	業	建設業
13	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	P11業士
14	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	P11業士
15	2,534/3	建設業	建設士	あり	積立2%・炭素1%	2	業	P09業士
16	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	P09業士
17	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素1%・炭素1%	2	業	±3業士
18	2,535/3	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	±2業士
19	2,535/4	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	±1業士
20	2,535/5	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	±2業士
21	2,535/6	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
22	2,535/7	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
23	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立40-50%・炭素5%・炭素1%	3	業	P10業士
24	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	P10業士
25	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	P07業士
26	2,534/3	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	P07業士
27	2,534/4	建設業	建設士	あり	積立5%・マンガン5%・炭素1%	3-4	業	P09業士
28	2,534/5	建設業	建設士	あり	積立20-25%・マンガン20-25%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	建設業
29	2,534/6	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	3	業	建設業
30	2,534/7	建設業	建設士	あり	積立7-10%・マンガン7-10%・炭素1%	4	業	建設業
31	2,534/8	建設業	建設士	あり	積立7%・マンガン7%・炭素3%・炭素1%	4	業	建設業
32	2,534/9	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素1%	4	業	建設業
33	2,534/10	建設業	建設士	あり	積立5%・マンガン5%・炭素1%	4	業	±4業士
34	2,534/11	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素1%・炭素1%	4	業	±2業士
35	2,534/12	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	4	業	建設業
36	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
37	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
38	2,535/3	建設業	建設士	あり	積立20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
39	2,535/4	建設業	建設士	あり	積立20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
40	2,535/5	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
41	2,535/6	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
42	2,535/7	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
43	2,535/8	建設業	建設士	あり	積立25%・マンガン25%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
44	2,535/9	建設業	建設士	あり	積立30%・マンガン30%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
45	2,535/10	建設業	建設士	あり	積立20%・マンガン20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
46	2,535/11	建設業	建設士	あり	積立40-50%・マンガン40-50%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
47	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立30-40%・マンガン30-40%・炭素1%・炭素1%	4	業	建設業
48	N3-00	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
49	N3-01	建設業	建設士	あり	積立2%・マンガン2%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
50	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
51	N3-02	建設業	建設士	あり	積立7-10%・マンガン7-10%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
52	N4-00	建設業	建設士	なし	積立7%・マンガン7%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
53	N3-03	建設業	建設士	なし	積立3%・マンガン3%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
54	109/0	建設業	建設士	あり	積立30%・マンガン30%・炭素1%・炭素1%	地山	建設業	建設業
55	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立7-10%・マンガン7-10%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	±6業士
56	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立5%・マンガン5%・炭素3%・炭素1%	2	業	±7業士
57	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立5-7%・マンガン5-7%・炭素2%・炭素1%・炭素1%	2	業	±7業士
58	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	2	業	P17業士
59	2,535/3	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	2	業	P18業士
60	2,535/4	建設業	建設士	あり	積立7%・マンガン7%・炭素3%・炭素1%	2	業	±10業士
61	2,535/5	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素50%以上・炭素30%・炭素1%	2	業	建設業
62	2,535/6	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素3%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業
63	2,535/7	建設業	建設士	あり	積立15%・マンガン15%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	P14業士
64	2,535/8	建設業	建設士	あり	積立7%・マンガン7%・炭素2%・炭素1%・炭素1%	3	業	±9業士
65	2,535/9	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	3	業	P19業士
66	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	3	業	建設業
67	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	3	業	建設業
68	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	4	業	P15業士
69	2,534/3	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	4	業	P20業士
70	2,534/4	建設業	建設士	あり	積立20-25%・マンガン20-25%・炭素1%	4	業	±11業士
71	2,535/1	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素2%・炭素2%・炭素2%	4	業	建設業
72	2,535/2	建設業	建設士	あり	積立15%・マンガン15%・炭素20%・炭素5%	地山	建設業	建設業
73	2,535/3	建設業	建設士	あり	積立15%・マンガン15%・炭素20%・炭素5%	地山	建設業	建設業
74	2,535/4	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
75	2,535/5	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
76	2,535/6	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
77	2,535/7	建設業	建設士	あり	積立10-15%・マンガン10-15%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	1	業	建設業
78	2,534/1	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	±13業士
79	2,534/2	建設業	建設士	あり	積立10%・マンガン10%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	±13業士
80	2,534/3	建設業	建設士	あり	積立15-20%・マンガン15-20%・炭素1%・炭素1%・炭素1%	2	業	建設業

№	土質	工種	しりり	新法	資材物	要	特徴	備考	
61	2.35/1	泥質	粘土	あり	中-強	液1%		第1工区	軟弱土
62	84/0	泥	粘土	あり	強	液0%		第1工区	軟弱土
63	N5/0	泥+黄砂	細砂・粘土	あり	あり	灰白色無機物2%		第1工区	軟弱土
64	4.3/1	砂	砂	あり	あり	液5%・マンガン5%・灰1%・鉄黄色土質5%・黄褐色土質1~5%		第1工区	軟弱土
65	100/0	泥	中細砂	なし	なし	液3%・マンガン3%・鉄黄色土質15~20%・灰1%・マンガン1%		第1工区	軟弱土
66	5/4/1	泥	粘土	あり	強	液4%・マンガン10%		第1工区	軟弱土
67	2.35/2	泥質	粘土	あり	あり	液10%・マンガン10%・灰2%・鉄黄色土質10~15%		第1工区	軟弱土
68	3/4/1	泥	粘質シルト	あり	あり	液3%・マンガン3%・灰1%・鉄黄色土質5~7%・灰白色無機物3%		第1工区	P1層土
69	7.5/3/1	泥	砂	あり	あり	液3%・マンガン3%・灰1%・鉄黄色土質1%		第1工区	P1層土
70	2.35/1	泥質	粘土	あり	強	液4%・マンガン20%		第1工区	軟弱土
71	3/5/1	泥	粘土	あり	強	液10%・マンガン10%・灰1%・鉄黄色土質5~7%・灰白色無機物2%		第1工区	軟弱土
72	5/6/1	泥	粘土	あり	強	液3~5%・マンガン5%・鉄黄色土質10~15%		第1工区	軟弱土
73	5/4/1	泥	粘土	あり	強	液3%・鉄黄色土質5%		第1工区	軟弱土
74	3/8/1	砂質	砂	なし	なし	液5%		第1工区	土質下層土(土)の遷移
75	10/8/1	泥質	粘土	あり	あり	液1%・マンガン1%・灰5%・鉄黄色土質5%・灰白色土質		第1工区	土質下層土(土)の遷移
76	2.35/4/1	泥質	粘土	あり	中-強	液2%・マンガン10%		第1工区	土質下層土(土)の遷移
77	5/2/1	泥	粘土	あり	あり	灰白色無機物1~液5%・灰1%		第1工区	土質下層土(土)の遷移
78	2.35/1	泥質	粘土	あり	中-強	液3%・マンガン3%・灰2%・鉄黄色土質10%		第1工区	土質下層土(土)の遷移
79	8/2	泥	粘土	あり	強	液1%		第1工区	2.3.90土層
80	2.35/1	泥	粘土	あり	強	液3%・鉄黄色土質5%		第1工区	軟弱土
81	84/0	泥	粘土	あり	強	液2%・鉄黄色土質10~13%・下に灰白色物がある		第1工区	4層土
82	84/0	泥	粘土	あり	強	液2%・鉄黄色土質5%・マンガン5%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質		第1工区	3層土
83	N5/0	泥	粘土	あり	強	液20%・マンガン2%・灰1%・鉄黄色土質2%・灰白色土質		第1工区	P2層土
84	84/0	泥	粘土	あり	強	液10~15%・マンガン10%・灰1%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質3%		第1工区	2層土
85	82/0	泥	粘土	あり	強	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質2%		第1工区	軟弱土
86	7.5/3/1	泥	粘土	あり	強	液15~20%・鉄黄色土質1%・灰白色土質		第1工区	軟弱土
87	5/3/1	砂質	砂	あり	強	液10~15%・鉄黄色土質1%・灰白色土質1%・0~5mmの砂1%・灰白色土質		第1工区	軟弱土
88	5/3/1	砂質	砂	あり	強	液3%・鉄黄色土質1%		第1工区	軟弱土
89	3/5/1	泥	粘土	あり	強	液10%・マンガン10%・灰1%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質		第1工区	2.2.101土層
90	5/3/1	泥	粘土	あり	強	液10%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質		第1工区	2.2.101土層
91	100/0	砂	砂	あり	強	液1%・鉄黄色土質		第1工区	2.2.101土層
92	2.35/4/1	泥質	粘質シルト	あり	なし	液5%・マンガン5%・灰1%・鉄黄色土質10~15%・鉄黄色土質1%		第1工区	S03層土
93	2.35/2	泥質	粘質シルト	あり	なし	液5~7%・マンガン5%・灰1%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	S04層土
94	5/3/1	泥	粘質シルト	あり	なし	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質2%		第1工区	S06層土
95	3/2/0	泥質	粘質シルト	あり	なし	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質5~7%・鉄黄色土質1%		第1工区	S05層土
96	3/2/0	泥	粘質シルト	あり	なし	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質10~15%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質1%		第1工区	軟弱土
97	3/3/1	砂質	砂	あり	あり	液3%・マンガン3%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	土層土
98	2/2/1	泥	粘土	あり	中-強	液1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質		第1工区	土層土
99	2.35/1	泥質	粘土	あり	あり	液10%~15%・鉄黄色土質3%・灰1%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質2%		第1工区	P3層土
100	2.35/2/1	泥	粘土	あり	あり	液2%・マンガン2%・鉄黄色土質3%・灰1%・鉄黄色土質5~7%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	2.2.84~2.2.87土層
101	7.5/3/1	泥	粘土	あり	中-強	液1%・鉄黄色土質5%・明鉄黄色土質1%		第1工区	軟弱土
102	5/2/1	泥+灰+緑泥	粘土	あり	強	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質		第1工区	2.2.88~2.2.90土層
103	10/8/2	泥質	粘質シルト	あり	強	液7%・マンガン7%・鉄黄色土質5%・灰1%		第1工区	2.2.91土層
104	2.35/2	泥質	粘質シルト	あり	強	液3~3%・マンガン3%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	2.2.12土層
105	10/8/1	泥	粘土	あり	強	液15~20%・マンガン15~20%・灰1%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質7%		第1工区	2.2.14土層
106	2.35/4/1	泥質	粘質シルト	なし	なし	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質2%		第1工区	2.2.17土層
107	2.35/3/1	泥質	粘質シルト	あり	なし	液3%・マンガン3%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	2.2.18土層
108	2.35/3/1	泥質	粘質シルト	あり	なし	液2%・マンガン2%・灰1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質2%		第1工区	2.2.19土層
109	5/4/1	泥	粘土	あり	あり	液10~15%・マンガン10~15%・灰1%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質3%・明鉄黄色土質20%		第1工区	軟弱土
110	84/0	泥	粘土	あり	あり	液10%・マンガン10%・灰1%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		第1工区	軟弱土
111								第1工区	軟弱土

2次3トレンチ 壁面土層

1	5/8/0	泥	細砂	なし	なし	液20~25%・マンガン20~25%・灰1%・鉄黄色土質1%・灰白色無機物2%・鉄黄色土質		直取	第1工区	2.1.3~2.2.3に対応	
2	10/8/0	明礬	細砂	あり	なし	液30%・マンガン30%・灰1%・鉄黄色土質3%・灰白色土質1%・灰白色無機物7~10%		直取	第1工区		
3	2.35/1	山	中細砂	なし	なし	液3%・マンガン3%・灰1%・鉄黄色土質40~50%・マンガン10~15%・マンガン1%・鉄黄色土質1%・0~5mmの砂含む		直取	第1工区	2.3.53に対応	
4	2.35/2	泥質	細砂	なし	なし			直取	第1工区		
5	2.35/2	泥質	細砂	なし	なし			直取	第1工区		
6	2.35/4	泥	粘土	あり	中-強	液10~15%・マンガン10~15%・灰1%・鉄黄色土質20~30%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質2%		直取	第1工区		
7	5/3/1	泥	粘質シルト	あり	あり	液15~20%・マンガン15~20%・灰1%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区		
8	10/8/4/1	泥	粘質シルト	あり	あり	液10~15%・マンガン10~15%・灰1%・鉄黄色土質10~15%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区		
9	5/8/0	泥	中細砂	なし	なし	液3%・マンガン3%・鉄黄色土質10%・灰1%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質10%		直取	第1工区		
10	10/7/4	泥	粘質シルト	あり	あり	液10~15%・マンガン10~15%・灰1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区		
11	2.35/3/1	泥質	粘質シルト	なし	中-強	液7~10%・マンガン7~10%・灰1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質2%		直取	第1工区		
12	5/8/1	泥+灰+黄砂+明礬	細砂	なし	なし	液5~15%・マンガン5~15%・鉄黄色土質10~20%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区		
13	N5/0	泥	粘土	あり	あり	液3%・マンガン3%・灰1%・鉄黄色土質10~15%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	緑黄色土層	
14	N5/0	泥	粘土	あり	あり	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質20~30%・鉄黄色土質10%		直取	第1工区	軟弱土	
15	2.35/2	泥質	細砂	なし	なし	液15%・マンガン15%・鉄黄色土質3%・鉄黄色土質10%		直取	第1工区	軟弱土	
16	N5/0	泥	細砂	粘土	あり	あり	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質10~15%		直取	第1工区	軟弱土
17	N4/0	泥	細砂	粘土	なし	なし	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質10~15%		直取	第1工区	軟弱土
18	N4/0	泥	細砂	粘土	なし	なし	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質10~15%		直取	第1工区	軟弱土
19	10/7/4	泥	粘質シルト	あり	あり	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質15~20%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	軟弱土	
20	N4/0	泥	粘土	あり	強	液1%・鉄黄色土質5%・鉄黄色土質3%		直取	第1工区	軟弱土	
21	N4/0	泥	粘土	あり	強	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	軟弱土	
22	5/3/1	砂質	砂	あり	中-強	液5%・マンガン5%・灰1%・鉄黄色土質10%・灰1%・鉄黄色土質含む		直取	第1工区	P19層土	
23	2.35/4/1	泥質	粘質シルト	あり	あり	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質2%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	P18層土	
24	5/4/1	泥	粘土	あり	あり	液1%・マンガン1%・鉄黄色土質1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	P12層土	
25	5/4/1	泥	粘土	あり	あり	液3%・マンガン3%・灰1%・鉄黄色土質10%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	軟弱土	
26	N45~9/3/1	泥+砂質	粘質シルト	あり	あり	液1%・鉄黄色土質2%		直取	第1工区	軟弱土	
27	N2/0	泥	粘土	あり	強	液4%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	軟弱土	
28	5/3/1	砂質	粘質シルト	あり	なし	液1%・マンガン1%・灰1%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	P17層土	
29	N3/0	泥質	粘土	あり	強	液2%・鉄黄色土質1%		直取	第1工区	P12層土	

№	土質	土質	しきり	地質	特徴物	調査	特徴	備考
4	107R4/3	圧入・液状	粘土	あり	液状化17%・液状化10%	中圧試験	液状化係数	土留位置17°
5	107R4/2	圧入液状	砂質シルト	あり	液状化10%・液状化20%	中圧試験	液状化係数	
6	107R4/1	液状	粘土	あり	液状化10%（本家の土色か）	中圧試験	液状化係数	
7	107R4/4	液状	粘土	あり	液状化約3%・液状化少量	中圧試験	液状化係数	
8	107R5/1	液状・液状液状	粘土・粘りシルト	あり	液状化約5%	土質試験	液土	
9	NS2・2.53/4	液・粘り液状	粘土・砂質シルト	あり	あり	土質試験	液土	液状の粘土
10	59/1	液	粘土	あり	あり			
11	58/1	粘り液状	粘土	あり	あり	地山	中圧以上の液状土	液状がアイ化か、液状あり
12	56/1	液	粘土	あり	あり	地山	圧入・液状液状の液状土	液状土留位置
2次8トレンチ 壁面土層								
1	液状					圧入試験	液状土層	
2	2.53/4	液状	砂質シルト	中々あり	前	液状化約少量		液状土層
3	2.53/5	液状	砂質シルト	あり	中々液			下部に異物色の液状あり
4	2.53/7/1	圧入液状	砂質シルト	あり	中々液			
5	107R7/1	液状	砂質シルト	あり	あり			
6	107R3/4	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約10%程度		
7	2.53/7/1	液状	砂質シルト	あり	前			
8	2.53/7/1	液状	砂質シルト	あり	前			
9	2.53/7/1	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約5%		
10	2.53/7/1	液状	砂質シルト	あり	あり			
11	107R5/3	圧入・液状	砂質シルト	中々あり	あり	液状化約5%		
12	2.53/4/3	液状	砂質シルト	前	前	液状化約少量・粘土粘り少量		
13	2.53/5/4	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約3%・液状化約5%		
14	2.53/4/1	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約15%程度		
15	NS2/1	液状	砂質シルト	あり	あり			液状化により、液状に陥り
16	59/2/1	液状	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る		
17	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る		
18	59/1/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る		
19	NS2	液	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る		
20	NS2	液	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る・オリーブ灰色粘土層がある箇所あり		
21	NS2	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化・中砂粘り入る		液状土留位置
22	2.53/2/2	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約5%		
23	2.53/2/3	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約5%		
24	2.53/4/2	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり			
25	2.53/2/3	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約3%・粘土粘り少量		
26	2.53/4/3	オリーブ層	砂質シルト	あり	あり	液状化約5%・粘土粘り少量		
27	2.53/2/1	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約少量		
28	107R4/1	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約25%		
29	107R5/1	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約3%・粘土粘り少量		
30	107R4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約5%		
31	107R3/4	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約5%・粘土粘り少量		
32	2.53/4/1	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量		
33	2.53/4/2	液状	砂質シルト	あり	あり			全体が液状の液状
34	107R5/2	圧入液状	砂質シルト	前	前	液状化約少量		
35	2.53/4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約3%・粘土粘り約3%		
36	2.53/4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り約3%・液状化約5%		
37	2.53/5/1	液状	砂質シルト	あり	あり			土留位置
38	NS2・2.53/3/4	液・粘り液状	中砂粘り粘土	あり	あり			土質試験
39	NS2	液	粘土	あり	あり	液状7%		土質試験
40	107R4/4	液	中砂粘り粘土	あり	あり			土質試験
41	107R5/1	液状	砂質シルト	前	中々あり			土質試験
42	2.53/4/2	液状	砂質シルト	前	あり			土質試験
43	59/1	液	砂質シルト	中砂あり		φ0.5～4cmの礫混入		土質試験
44	2.53/4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約3%・液状化約1層～液状含む		土留位置
45	59/1+54	粘り液状	粘土	あり	あり	液状5%		土留位置
46	58/1+54	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり			土質試験
47	58/1+54	液状	砂質シルト	あり	あり	液状10%		土質試験
48	NS2+2.53/2/3	液状	砂質シルト	あり	あり			土質試験
49	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状7%・青灰色約1層		土質試験
50	59/1+59/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状10%		土質試験
51	2.53/3/3	液状	砂質シルト	あり	あり			土留位置
2次8トレンチ P1								
A	107R4/2	液状	砂質シルト	前	前	液状5%		1層以上
2次8トレンチ 溝1								
B	107R5/1	圧入・液状	砂質シルト	前	前			1層以上
2次8トレンチ 土3								
C	2.53/3/3	液状	砂質シルト	前	前			1層以上
2次8トレンチ 土1								
D	107R4/2	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約少量		1層以上
2次9トレンチ 壁面土層								
1	107R5/2	圧入液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約少量・圧入・液状化約10%		圧入試験
2	107R5/2	圧入液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	圧入・液状化約20%程度		圧入試験
3	107R4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・異物色約1層7%		圧入試験
4	2.53/4/3	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り少量		圧入試験
5	2.53/5/5	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
6	2.53/4/2	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り少量		圧入試験
7	2.53/4/3	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り少量		圧入試験
8	NS2	液	粘土	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
9	107R5/3	圧入・液状	砂質シルト	前	前	液状化約約5%・異物色約1層約7%・液状化約約3%・液状化約約少量・粘土粘り少量		圧入試験
10	7.03/7.0+107R4/4	液・粘り液状	粘り砂質シルト	前	中々あり			圧入試験
11	NS2	液	粘土	あり	あり	液状5%		圧入試験
12	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状3%		圧入試験
13	NS2	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
14	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
15	NS2	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化約少量・液状化約少量		圧入試験
16	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
17	59/2/1	粘り液状	粘土	あり	あり	液状化約少量		圧入試験
18	2.53/3/3	液状	砂質シルト	中々あり	前	液状化約少量・粘土粘り少量・2cm程度の礫混入・中砂粘り・液状化約少量		1層
19	107R4/4	液状	砂質シルト	中々あり	前	液状化約3%・液状化約少量・粘土粘り少量		2層
20	107R3/3	液状	砂質シルト	中々あり	中々あり	液状化約約4%・異物色約約1層約3%・液状化約3%		1～2層
21	107R4/4	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り少量・φ0.5～1cm程度の礫を含む		1層
22	107R5/6	液状	砂質シルト	あり	あり	液状化約少量・粘土粘り少量・液状化約約3%・φ0.2～2cm程度の礫を含む		2層

第3表 井川城址中世焼物観察表

調査区	面	出土地点		部種		法製 (cm)			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴
		遺構	種類	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎	釉土		
1 試5	北郭外6面	土7	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(12.4)			1/12					ロクロナデ、口縁部ヨコナデ。内外面灰緑釉、断面被り、後Ⅱ
2 試5	北郭外6面	土4	土師瓦土器	内耳罎D	(24.0)	(18.2)	(14.4)	1/16	1/10				ナデ、口縁部ヨコナデ、底部砂目、外面タール付着
3 試5	北郭外5面	土13	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿			(5.9)			僅か	灰緑・暗茶緑	暗灰～黒	ロクロナデ、底部回転系切り、内外面灰緑、内面被り、断面被り、後Ⅰ～Ⅱ
4 試5	北郭外5面	整地土	陶器(古瀬戸)	折縁深皿	(24.0)					僅か	灰緑・灰白～白	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面灰緑釉、断面被り、後Ⅰ
5 試5	北郭外2面	整地土	無釉陶器	山形碗	(15.2)			1/12					ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、断面被り
6 試5	北郭外2面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿			(7.2)			僅か	暗灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転系切り、内外面灰緑、内面タール付着、後Ⅰ新
7 試5	北郭外2面	整地土	土師瓦土器	皿2			5.5			完		暗茶緑	ロクロナデ、底部回転系切り、内面被り着
8 試5	北郭外2面	整地土	陶器(古瀬戸)	折縁深皿								淡黄灰	口縁部ヨコナデ、口縁部灰緑釉、口縁部外面被り着、後Ⅱ
9 試5	近世以降	溝1	土師瓦土器	皿3C	(14.0)	(7.8)	2.6	1/4	1/3			淡粉～淡黄	ロクロナデ、底部切離し後ヘラケズリ、口縁部内外面被り着
10 試5	近世以降	溝1	土師瓦土器	内耳罎A						僅か		黒	口縁部ヨコナデ、内外面タール付着
11 試5	近世以降	溝1	土師瓦土器	内耳罎A						僅か		淡粉	口縁部ヨコナデ、外面タール付着
12 試5	その他		土師瓦土器	皿3C	(14.5)			1/10				黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
13 試5	その他		土師瓦土器	内耳罎D						僅か		黒～暗茶緑	ナデ、口縁部ヨコナデ、外面タール付着
14 試6	地山		土師瓦土器	皿2						僅か		淡粉～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部内外面被り着
15 試6	近世以降	郭外埋積土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(11.4)			1/9			灰緑・黄緑	淡灰～暗茶緑	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面灰緑釉、断面被り、後Ⅰ
16 試6	近世以降	郭外埋積土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(13.4)					僅か	灰緑・暗茶緑	灰白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面灰緑釉、内面被り、後Ⅰ
17 試6	その他	崩落土	土師瓦土器	皿1A						僅か		暗茶緑～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部内外面被り着
18 試7	土塁状遺土		土師器	杯	(9.8)	(5.4)	2.1			僅か		暗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、内面被り着
19 試7	土塁状遺土		土師瓦土器	皿2B	(10.4)	(5.8)	3.3			僅か		暗粉～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内面タール付着
20 試7	土塁状遺土～1面	整地土	土師瓦土器	皿3C						僅か		淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ
21 試7	土塁状遺土		無釉陶器	小皿	(7.9)	(4.5)	(0.9)			僅か		灰白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、断面被り
22 試7	土塁状遺土～1面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗	(14.4)					僅か	灰緑・淡黄緑	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部内外面灰緑釉、断面被り、後Ⅱ
23 試7	土塁状遺土～1面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿						僅か	灰緑・暗茶緑	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面灰緑釉、後Ⅱ
24 試7	4面	整地土	土師瓦土器	皿1			(6.6)			僅か		暗	ロクロナデ、底部回転系切り
25 試7	3面	整地土	土師器	杯や輪						僅か		暗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
26 試7	3面	整地土	土師瓦土器	皿1C						僅か		黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ
27 試7	3面	整地土	土師瓦土器	皿2B				3.1		僅か		暗粉～淡灰	内外面被り、ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
28 試7	2面	土1	土師瓦土器	皿3B			(6.4)			1/3		灰	ロクロナデ、底部回転系切り、底部被り着
29 試7	2面	土1	土師瓦土器	皿3C			(8.8)			1/4		淡灰	ロクロナデ、底部切離し後ヘラケズリ、底部被り着
30 試7	2面	整地土	土師瓦土器	皿2B	(12.3)					僅か		淡粉～暗	内面被り、ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
31 試7	2面	整地土	土師瓦土器	皿2B						僅か		暗茶緑	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
32 試7	1面	整地土	土師瓦土器	皿2C	(14.1)					1/8		暗粉～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面被り着
33 試7	1面	整地土	土師瓦土器	皿3C	(14.2)	(7.6)	2.1			僅か		淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、内面～口縁部外面被り着
34 試7	2～3面	整地土	土師瓦土器	皿2						僅か		淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
35 試7	2～3面	整地土	土師瓦土器	皿1C						僅か		淡粉	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
36 試7	2～3面	整地土	土師瓦土器	皿1C						僅か		淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
37 試7	1～3面	整地土	土師瓦土器	皿2B						僅か		暗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
38 試7	1～2面	整地土	土師瓦土器	皿2B	(11.6)	(7.7)	(3.2)	1/5	1/3			暗粉～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、内面被り、口縁部ヨコナデ、内外面灰緑釉、断面被り
39 試7	近世以降	郭外埋積土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿						僅か	灰緑・暗茶緑	暗灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、断面下部回転系ヘラケズリ、内外面灰緑釉、大Ⅱ
40 試7	近世以降	郭外埋積土	陶器(大濠)	碗足	(10.2)			1/8				灰白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、断面下部回転系ヘラケズリ、内外面灰緑釉、大Ⅱ
41 試8	北郭外3面	土13	土師瓦土器	皿2C	(13.8)			1/32				暗粉～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内面被り着
42 試8	北郭外2面	溝1	土師瓦土器	内耳罎B						僅か		暗粉～黒	ナデ、口縁部ヨコナデ
43 試8	北郭外2面(以前)	整地土	土師器	杯	(5.4)					1/4		黒	ロクロナデ、底部回転系切り、付高台
44 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿3C						僅か		淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、外面タール付着
45 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿2A						僅か		黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
46 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿2A						僅か		淡粉～淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
47 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿2C				2.9		僅か		淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ
48 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿3A	(8.4)	(5.8)	1.7			僅か		淡灰～暗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、口縁部～内面タール付着、外面被り着
49 試8	北郭外2面(以前)	溝5	土師瓦土器	皿3B	(9.0)			1/6				淡粉～淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
50 試8	北郭外1面(以前)	遺構・整地土	土師瓦土器	皿2A	(11.8)			1/12				淡	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ

No.	調査区	出土地点		部種		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調整・形態の特徴
		面	遺構	種類	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎	
51	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	皿 2C	(11.9)		1/4			褐～暗褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面復付着
52	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	皿 2C	(12.0)		1/12			褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ
53	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	溝 5	土師質土器	皿 2B	(13.3)		1/15			暗褐～ 灰褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ
54	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	皿 2C	(14.5)		1/12			褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ、底部～内面復付着
55	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	土師質土器	皿 3	(7.0)		1/12			淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り
56	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	土師質土器	皿 2	(9.4)		1/7			褐	ロクロナデ、底部回転糸後ナデ
57	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(4.6)		1/3			淡黄灰 淡黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、口縁部内外面胎輪 塗、微熱あり、後黒
58	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	溝 5	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿						淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ココナデ、口縁部内外面胎輪 塗、微熱あり、胎面あり、後黒
59	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	陶器(古瀬戸)	脚盤	(10.8)		1/10			淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、口縁部内外面胎輪 塗、微熱あり、後1
60	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	磁器(青磁)	皿 E	(12.8)		1/16			白	ロクロナデ、口縁部ココナデ、腹部沈線(台条)、 内外面胎輪
61	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	土 44	磁器(青磁)	盤						灰	ロクロナデ、割出高台、内外面胎輪、骨付欠損
62	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	土 50	磁器(青磁)	碗						灰	ロクロナデ、割下部外面回転ヘラケズリ、内外面 胎輪、微熱あり、後黒
63	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	磁器(青磁)	碗 E	(11.6)		1/12			灰	ロクロナデ、口縁部ココナデ、腹部外面回転ヘラ ケズリか、内外面胎輪、断面に薄層茶色あり、微 熱あり
64	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	陶器(古瀬戸)	花瓶						灰	ロクロナデ、外面胎輪塗、内面・割下部外面胎 輪、微熱あり、後黒
65	Ⅷ-8	北郊外2面 以前	整地土	土師質土器	内耳罎 C1						黒褐～ 暗褐	口縁部ココナデ
66	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	内耳罎 A						ナデ、口縁部ココナデ	ナデ、口縁部ココナデ
67	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	内耳罎 A						暗褐～ 暗灰	口縁部ココナデ
68	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	内耳罎 A						淡黄～ 淡灰	口縁部ココナデ
69	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	内耳罎 A						暗褐～ 茶黒	ナデ、口縁部ココナデ
70	Ⅷ-8	北郊外1面 以前	遺構・整地土	土師質土器	内耳罎 C1						暗褐～ 茶黒	口縁部ココナデ
71	Ⅷ-8	その他	排土	磁器(青磁)	碗 B3						灰	ロクロナデ、外面胎輪(丸足)、内外面胎輪
72	Ⅷ-8	その他	排土	磁器(青磁)	碗 C2 4						淡黄	ロクロナデ、外面下部回転ヘラケズリ、外面胎輪 (片形)、内外面胎輪
73	Ⅰ-1	3面	整地土	磁器(青白磁)	碗						白	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面胎輪、口縁 部胎輪力半取り
74	Ⅰ-1	3面	整地土	磁器(白磁)	碗						灰白	内面ロクロナデ、口縁部ココナデ、腹部外面胎輪 ヘラケズリ、内外面胎輪、口縁部玉縁状、II 区 Ⅷ類
75	Ⅰ-1	1面	柱 4	陶器(古瀬戸)	天目茶碗						淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面胎輪塗、 茶色あり、後黒
76	Ⅰ-1	1～2面	整地土	土師質土器	皿 3B	(10.6)	8.8	2.8	1/5		淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、底部回転糸切り
77	Ⅰ-1	1～2面	整地土	土師質土器	皿 2						褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ
78	Ⅰ-1	2～3面	整地土	無胎土器	山形鉢						淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、重畳型 6
79	Ⅰ-1	2～3面	整地土	陶器(古瀬戸)	即目付大甕						灰	ロクロナデ、口縁部内外取り後片工磨付、内外 面胎輪塗、後黒
80	Ⅰ-1	近世以降	部外埋積土	瓦輪陶器	碗	(8.8)		1/4			淡黄	ロクロナデ、底部回転糸後ナデ、付高台、足込 用あり、丸石 2
81	Ⅰ-1	近現代	甕瓦	磁器(白磁)	皿	(14.8)		1/8			白	ロクロナデ、口縁部ココナデ、外面下部回転ヘラ ケズリ、内外面胎輪、丸足 1
82	Ⅰ-1	近現代	甕瓦	陶器(古瀬戸)	尊式花瓶	(8.5)		2/5			淡黄	ロクロナデ、外面ココナデ、底部回転糸切り、 腹部外面～底部胎輪、外面胎輪付、内面足込胎 輪付着、外面復付着、後黒～古赤
83	Ⅰ-1	その他	排土	土師質土器	鉢	(4.8)		1/4			暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切り
84	Ⅰ-2	2面	整地土	土師質土器	皿 3C	(15.0)		1/10			淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ
85	Ⅰ-2	2面	整地土	土師質土器	皿 2	(6.7)		1/6			暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切り
86	Ⅰ-2	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	直縁大皿	(35.3)		1/24			灰～ 淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面胎輪塗、 後1
87	Ⅰ-2	1面	溝 2	土師質土器	内耳罎 A	(26.8)		1/12			暗褐～ 暗黄	ナデ、口縁部ココナデ
88	Ⅰ-2	1～2面	土 9	土師質土器	皿 2B	(13.0)		1/8			暗褐	ロクロナデ、口縁部ココナデ
89	Ⅰ-2	1～2面	整地土	陶器(古瀬戸)	大海茶入						灰白～ 暗灰	ロクロナデ、口縁部ココナデ、口縁部内面～外面 胎輪塗、後黒
90	Ⅰ-2	1～2面	整地土	磁器(白磁)	茶入						灰白	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面胎輪、微熱 あり、胎輪
91	Ⅰ-2	近世以降	部外埋積土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(11.5)		1/12			淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内外面胎輪塗、 口縁部胎面に横方向の磨痕、後黒
92	Ⅰ-2	近現代	甕瓦	瓦輪陶器	碗	(7.1)		1/5			淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、底部回転糸後回転 ヘラケズリ、付高台、内外面胎輪、割下部外面～ 底部胎輪、丸石 2
93	Ⅰ-2	近現代	甕瓦	土師質土器	皿	(6.2)		1/8			淡黄	手づくね成形か、ナデ、口縁部ココナデ
94	Ⅰ-2	近現代	床土	土師質土器	皿 2B	(10.0)					暗	ロクロナデ、口縁部ココナデ
95	Ⅰ-2	近現代	甕瓦	土師質土器	皿 3B	(10.6)		1/12			暗褐～ 暗黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内面復付着
96	Ⅰ-2	近現代	甕瓦	土師質土器	皿 1A	(13.4)		1/8			淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ、内面復付着
97	Ⅰ-2	近現代	甕瓦	土師質土器	皿 3C	(15.6)		1/12			白～ 淡黄	ロクロナデ、口縁部ココナデ
98	Ⅰ-2	近現代	床土	磁器(白磁)	皿 D	(4.2)		1/5			暗灰～ 淡灰茶	ロクロナデ、底部回転糸後回転ヘラケズリ、高台 割出し後抜き、足込ね掻き、内外面胎輪、割 下部外面～底部胎輪、微熱あり

No.	調査区	出土地点		器種		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調整・形態の特徴		
		面	遺構	種類	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎		胎土	
99	1	2	近現代	甕瓦	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(10.0)		1/8	鉄輪・明茶碗 ～暗期	黒灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面蹴輪触、胴下部外面磨、内面滑、後Ⅱ		
100	1	2	近現代	甕瓦	磁器(青磁)	碗 82	(13.6)		僅か	青磁・淡緑黄	白	ロクロナデ、口縁部コナデ、外面通升紋(片切型)、内外面蹴輪、底面磨、後Ⅱ		
101	1	2	近現代	甕瓦	陶器(古瀬戸)	平碗	(16.6)		1/8	鉄輪・灰白	灰白	ロクロナデ、口縁部コナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面蹴輪触、外面下下～底部露筋、蹴熟あり、後Ⅳ古		
102	1	2	近現代	耕作土～床土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・明茶碗	灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面蹴輪触、口縁部外面に横方向の磨筋、後Ⅱ		
103	1	2	近現代	耕作土～床土	陶器(古瀬戸)	茶鉢			僅か	鉄輪・暗茶	黒灰	ナデ、口縁部コナデ、内外面蹴輪触、後Ⅳ古		
104	1	2	近現代	甕瓦	土師質土器	内耳罌A			僅か	相模色～黒茶碗 ～黒期		口縁部コナデ、把手転付、外面保付着		
105	1	3	2面	土16	無釉陶器	甕			僅か	淡黒～暗期		ナデ、外面自然釉付着、常滑		
106	1	3	2面	P59	土師器	台付甕			僅か			内面滑、ロクロナデ、底部回転系切り、台付高		
107	1	3	2面	F39	土師質土器	皿 3C			僅か	灰白～淡黒		ロクロナデ、底部回転系切り		
108	1	3	2面	P8	磁器(青磁)	碗			僅か	青磁・緑黄灰	灰	ロクロナデ、外面ヘラケズリ、内外面ウシ状工具による磨筋、内面片切型状の波線、内外面蹴輪、底面茶系10号型		
109	1	3	2面	整地土	土師質土器	皿 3C			僅か	淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
110	1	3	2面	整地土	土師質土器	皿 3B	(7.2)		1/8	淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
111	1	3	2面	整地土	土師質土器	皿 2B	(10.6)		僅か	淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
112	1	3	2面	整地土	土師質土器	皿 2B	(11.2)	(6.8)	2.5	1/8	僅か	暗期	底部滑、ロクロナデ、口縁部コナデ	
113	1	3	2面	整地土	土師質土器	皿 2B	(12.6)	(7.8)	3.0	1/6	1/12	僅か	暗期	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転系切り
114	1	3	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(10.3)		1/12	淡黒・淡緑灰	灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、口縁部内外面蹴輪触、他露筋、蹴熟あり、後Ⅱ		
115	1	3	2面	整地土	陶器(前藏)	天目茶碗			僅か	鉄輪・茶碗～黒期	淡灰	ロクロナデ、内外面蹴輪触、内面磨		
116	1	3	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・茶碗～黒期	淡灰	ロクロナデ、外面下下～底部回転ヘラケズリ、内外面蹴輪触、外面下下～底部露筋、内面滑、後Ⅱ		
117	1	3	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・茶碗～黒期	淡灰	ロクロナデ、内外面蹴輪触、後Ⅱ		
118	1	3	2面	整地土上面	磁器(青磁)	碗			僅か	青磁・緑灰	灰	ロクロナデ、内面片切型磨筋、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面蹴輪、蹴熟あり、龍泉茶系1型		
119	1	3	2面	整地土	無釉陶器	山茶碗	(13.8)		1/28	淡灰		ロクロナデ、口縁部コナデ、裏面型5		
120	1	3	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗	(16.8)		1/12	淡黒・淡緑黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面蹴輪触、胴下部外面露筋、蹴熟あり、後Ⅱ		
121	1	3	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	新鉢中皿	(18.7)		1/36	淡黒・淡緑黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、口縁部内面～外面上半蹴輪触、他露筋、蹴熟あり、後Ⅳ古		
122	1	3	2面	整地土	土師質土器	内耳罌A	(25.5)		1/20	暗期～黒期		ナデ、口縁部コナデ		
123	1	1面	整地土	浪原遺跡	杯	(14.1)			1/10	僅か		ロクロナデ、口縁部コナデ		
124	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 2B	(8.4)	(4.8)	2.2	1/16	僅か	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転系切り		
125	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 1B	(10.2)		1/12	淡黒～暗期		ロクロナデ、口縁部コナデ、内面保付着		
126	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 1C	(11.7)	(7.2)	2.1	1/3	僅か	淡黒～黒期	底部滑、ロクロナデ、口縁部コナデ、口縁部内面保付着	
127	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 3C	(12.8)	(9.6)	2.8	1/12	1/16	僅か	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転系切り	
128	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 2		(6.0)	1/5	暗期		ロクロナデ、底部切離し後外周ナデ		
129	1	3	1面	P1	土師質土器	皿 1		(5.4)	1/4	淡黒		ロクロナデ、底部切離し後ナデ、外面保付着		
130	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 3C		(8.0)	1/8	淡黒～淡灰		ロクロナデ、底部回転系切り、内面保付着		
131	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 1B			僅か	淡黒		内外面滑、ロクロナデ、口縁部コナデ		
132	1	3	1面	整地土	土師質土器	皿 2			僅か	黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
133	1	3	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗			僅か	淡黒・淡緑黄灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面蹴輪触、蹴熟あり、後Ⅱ		
134	1	3	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	仏花甕	3.3		3/4	淡黒・淡緑黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、頸部・胴部収縮紋(呂条)、底部回転系切り、底部系10号外面蹴輪触、底面保付着、蹴熟あり、中1号		
135	1	3	2～3面	整地土	土師質土器	皿 1C	(10.9)		1/12	淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
136	1	3	1～2面	集石3	土師質土器	皿 3C	(13.6)		2.8	1/20	淡黒	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部切離し後外周ヘラケズリ		
137	1	3	1～2面	整地土	土師質土器	皿 3C	(16.0)		1/16	灰白～淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
138	1	3	1～2面	整地土	磁器(白磁)	皿 E	(7.2)		1/14	白磁・白	白	口縁部コナデ、内外面蹴輪		
139	1	3	1～2面	整地土	無釉陶器	小皿	(3.6)	(2.4)	(0.9)	1/6	淡灰		ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転系切り、裏面型10号	
140	1	3	1～2面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・黒期	淡灰	ロクロナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面蹴輪触、胴下部外面蹴輪触、後Ⅱ		
141	1	3	1面以降	砂研	土師質土器	皿 1B	(12.4)		1/16	淡黒		ロクロナデ、口縁部コナデ		
142	1	3	1面以降	砂研	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・茶碗	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面蹴輪触、後Ⅱ		
143	1	3	近現代	甕瓦	土師器	甕	(23.0)		1/24	暗期		外面ヘラケ、内面ヘラケ工具によるナデ、口縁部コナデ、口縁部内面力メ		
144	1	3	近現代	甕瓦	陶器(古瀬戸)	漆鉢形小鉢	(17.2)		1/16	踏輪・水灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面蹴輪触、後1		
145	1	3	近世以降	陶器(大塚)	丸皿	(4.5)		1/5	淡黒・淡緑黄灰	淡灰	ロクロナデ、底部切離し後ナデ、胎付高台、内外面蹴輪触(全面)、底面茶系7号型			
146	1	3	近現代	甕瓦	陶器(古瀬戸)	水注			僅か	鉄輪・緑黄灰～黒期	淡灰	ナデ、内外面蹴輪触、中剛		
147	1	3	近現代	甕瓦	土師質土器	内耳罌	(29.8)		僅か	暗期		ナデ、底部斜付		
148	1	4	中世以降	製法遺構 埋蔵土	土師質土器	皿 3C			僅か	淡黄灰		ロクロナデ、口縁部コナデ		

№	調査 区	出土地点		部種		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調整・形態の特徴	
		面	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎		胎土
149	1	4	近辺以降	部外塚出土	無胎陶器	甕						淡茶色 ～黒黒	
150	1	5	2面	整地土	直造器	杯		(5.9)				褐色	
151	1	5	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(9.4)	(5.0)	2.2	1/4	1/2	灰輪・緑黄緑 ～灰黒	
152	1	5	2面	整地土	土師質土器	皿 3C		(7.9)				淡黄	
153	1	5	2面	P24	土師質土器	皿 3		(8.2)				淡黄	
154	1	5	2面	整地土	土師質土器	皿 3C		(9.0)			1/12	淡黄 ～暗黒	
155	1	5	2面	整地土	土師質土器	皿 3		(4.6)			1/4	淡黄	
156	1	5	2面	整地土	土師質土器	皿 3C						淡黄 ～暗黒	
157	1	5	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗						淡黄 ～暗黒	
158	1	5	2面	整地土	無胎陶器	片口鉢						褐色	
159	1	5	2面	整地土	磁器(白磁)	小鉢 D	(10.0)				1/12	白黒・白	
160	1	5	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗	(15.5)				1/8	灰輪・暗黄緑	
161	1	5	2面	P23	陶器(古瀬戸)	碗形鉢	(4.4)					淡黄 ～黒黒	
162	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 2B	(8.0)	(5.2)			1/8	1/5	褐色
163	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 2B							褐色
164	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄
165	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄
166	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 3B							灰黄
167	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄
168	1	5	1面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄 ～黒黒
169	1	5	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(13.8)						淡黄
170	1	5	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(7.5)						淡黄
171	1	5	1面	整地土	磁器(青磁)	碗 B4	(13.6)						灰白
172	1	5	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	尊式花皿							灰白
173	1	5	1面	整地土	磁器(青磁)	碗 B3							灰白
174	1	5	1面	整地土	土師質土器	内耳鍋 A							暗黄 ～黒黒
175	1	5	1面	整地土	土師質土器	内耳鍋 A							暗黄 ～黒黒
176	1	5	1～2面	整地土	土師質土器	皿 3A	(12.6)	(9.0)	3.1		1/16		淡茶色 ～黒黒
177	1	5	1～2面	整地土	土師質土器	皿 2A							褐色 ～黒黒
178	1	5	1～2面	整地土	土師質土器	皿 3A							淡茶色 ～暗黒
179	1	5	近現代	耕作土～床土	瓦輪陶器	碗		(5.8)			1/6	1/3	灰輪・白
180	1	5	近現代	耕作土～床土	土師質土器	皿 1B	(2.0)						暗黒
181	1	6	土器状磁土		土師質土器	皿 2		(4.6)			1/2		暗黒
182	1	6	3面	整地土	瓦輪陶器	碗		(7.0)			1/8		淡黄
183	1	6	3面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢皿		(8.2)			1/3		淡黄 ～淡黄
184	1	6	3面	整地土	陶器(古瀬戸)	直縁大皿	(16.9)				1/5		灰輪・淡緑黄緑
185	1	6	2面	整地土	直造器	甕	(21.2)						淡灰～灰
186	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	直縁大皿	(24.9)				1/14		灰輪・淡緑黄緑
187	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄 ～淡黄
188	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄
189	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 2A							暗黒
190	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C							淡黄 ～暗黒
191	1	6	2面	土 24	土師質土器	皿 2B	(7.5)	4.8	1.9	1/2	完		淡黄
192	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C	(9.4)						暗黒
193	1	6	2面	土 27	土師質土器	皿 2B	(9.0)	(7.4)	2.4	1/4	1/8		暗黒 ～暗黒
194	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C	(10.4)				1/10		淡黄
195	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 2C	(12.7)				1/32		暗黒
196	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 3C		(10.0)					淡黄
197	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 2		(5.8)			1/5		暗黒
198	1	6	2面	整地土	土師質土器	皿 2		(6.6)			1/2		淡黄 ～暗黒
199	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿	(6.6)				1/7		灰輪・緑黄緑
200	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	折縁深皿							灰輪・淡緑黄緑
201	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(12.5)				1/8		淡灰 ～黒黒

No.	調査 区分	出土地点		部種		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調整・形態の特徴	
		面	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎		胎土
202	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗	(14.4)		1/24	灰輪・淡緑黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、外面下回転ヘラケズリ、内外面灰輪塗、外面下下~底部露胎、後皿	
203	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	平碗	(16.0)		1/12	灰輪・淡緑黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面灰輪塗、後皿	
204	1	6	2面	土25	陶器(古瀬戸)	平碗	(16.0)		1/4	灰輪・灰白~緑灰	灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、外面下回転ヘラケズリ、内外面灰輪塗、外面下下~底部露胎、被熱灰あり、後IV吉	
205	1	6	2面	整地土	陶器(古瀬戸)	盤	(14.4)		1/10	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部磨し後胴下部外面まで回転ヘラケズリ、内面削滅、後皿~IV吉	
206	1	6	1面	整地土	土師質土器	皿2C	(9.9)		僅か	濁	濁	ロクロナデ、底部回転糸切り	
207	1	6	1面	整地土	土師質土器	皿2C	(13.0)		1/24	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部磨し後胴下部外面までヘラケズリ	
208	1	6	1面	整地土	磁器(白磁)	皿D			僅か	白磁・乳白	乳白	ロクロナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面塗胎	
209	1	6	1面	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・黒濁	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、胴下部外面回転ヘラケズリ、内外面灰輪塗胎、胴下部外面~底部露胎、後皿	
210	1	6	2~3面	整地土	灰輪陶器	碗	(8.2)		1/4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部磨し後回転ヘラケズリ、付高台、皮浅山	
211	1	6	1~2面	紫石2	土師質土器	皿3B			僅か	淡濁	淡濁	ロクロナデ、口縁部コナデ	
212	1	6	2面以降	整地土	土師質土器	皿3C			僅か	淡灰濁	淡灰濁	ロクロナデ、口縁部コナデ	
213	1	6	1~2面	整地土	土師質土器	皿3C	(6.2)		僅か	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部回転糸切り	
214	1	6	1~4面	整地土	土師質土器	皿1	(6.8)		2/5	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部回転糸切り	
215	1	6	2面以降	整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(11.7)		僅か	鉄輪・暗茶濁	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、外面下回転ヘラケズリ、内外面灰輪塗胎、外面下下~底部露胎、内面削滅、後皿	
216	1	6	1~4面	整地土	無釉陶器	山茶碗	(2.7)		1/5	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部磨し後ナデ、付高台、内面自然釉付着、裏透型10	
217	1	6	3~4面	整地土	無釉陶器	山茶碗	(12.8)		1/8	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内面自然釉付着、裏透型10~11	
218	1	6	1~4面	整地土	陶器(古瀬戸)	合子	(3.0)		僅か	灰輪・淡緑灰	灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面灰輪塗胎、被熱灰あり、中皿~吉	
219	1	6	近現代	焼凡	灰輪陶器	碗	(6.3)		1/4	灰輪・淡緑黄灰	淡灰	ロクロナデ、底部磨し後胴下部外面まで回転ヘラケズリ、付高台、内面塗胎、K14	
220	1	6	近現代	焼凡	灰輪陶器	広口瓶			僅か	淡灰	淡灰	ロクロナデ、内外面塗胎	
221	1	6	近現代	耕作土~床土	土師質土器	皿3B	(10.2)	(7.6)	2.4	僅か	淡濁	淡濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部磨し後ナデ
222	1	6	近現代	焼凡	土師質土器	皿3C	(3.4)		1/12	淡濁	淡濁	ロクロナデ、口縁部コナデ	
223	1	6	近現代	焼凡	土師質土器	皿3B	(5.8)		1/8	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面塗胎	
224	1	6	近現代	焼凡・暗濁	土師質土器	皿3C	(14.4)		僅か	淡濁	淡濁	内外面削滅、ロクロナデ、底部磨し後ナデ	
225	1	6	近現代	耕作土~床土	土師質土器	皿2B			僅か	淡濁	淡濁	内面削滅、ロクロナデ、口縁部コナデ	
226	1	6	近現代	焼凡・暗濁	土師質土器	皿3	(7.6)		1/16	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部回転糸切り	
227	1	6	近現代	焼凡	土師質土器	皿2B	(9.6)		1/10	淡濁	淡濁	ロクロナデ、底部磨し後ナデ、内面塗胎	
228	1	6	近現代	焼凡	陶器(瀬戸)	天目茶碗			僅か	鉄輪・明茶濁~暗茶濁	灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、胴下部回転ヘラケズリ、被熱灰あり、内外面灰輪塗胎	
229	1	6	近現代	床土	陶器(古瀬戸)	緑輪小皿	5.2		完	淡灰	淡灰	足込磨滅、ロクロナデ、底部回転糸切り、底部塗胎、被熱灰あり、後皿~IV	
230	2	2	北郊外2面	5X4	土師質土器	内耳罎A			僅か	黒濁	黒濁	ナデ、口縁部コナデ	
231	2	2	北郊外2面	整地土	土師質土器	皿1A			僅か	淡灰濁	淡灰濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転糸切り	
232	2	2	その他	崩落土	陶器(瀬戸系遺)	碗	(9.7)		1/8	鉄輪・暗茶濁	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、内外面灰輪塗胎、近世	
233	2	3	北郊外3面	整地土	灰輪陶器	碗	(8.6)		1/5	暗灰	暗灰	内外面塗胎、ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台、内外面露胎	
234	2	3	北郊外3面	土24	土師質土器	皿3C	(13.0)		1/10	淡灰濁	淡灰濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部回転糸切り	
235	2	3	北郊外3面	整地土	無釉陶器	山茶碗	(22.0)		1/20	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部コナデ、裏透型9	
236	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	皿1C	(12.1)	(7.2)	2.7	1/16	1/3	暗濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、底部磨し後ナデ、足込一方のナデ、内面塗胎
237	2	3	北郊外1面	溝1	土師質土器	皿1C	(13.2)		1/10	暗濁	暗濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、内面塗胎	
238	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	皿2C			僅か	暗濁	暗濁	ロクロナデ、口縁部コナデ、口縁部~内面塗胎	
239	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	皿2	(7.0)		1/6	濁	濁	内面削滅、ロクロナデ、底部回転糸切り、内面塗胎	
240	2	3	北郊外1面	整地土	無釉陶器	片口鉢			僅か	暗灰	暗灰	ナデ、口縁部コナデ、被熱灰あり、尾型6	
241	2	3	北郊外1面	整地土	磁器(白磁)	碗			僅か	白磁・淡灰	灰白	ロクロナデ、内面クシ目紋、内外面塗胎、V or 尾型	
242	2	3	北郊外1面	整地土	磁器(青磁)	碗B2			僅か	青磁・黄緑	暗灰	ロクロナデ、高台削出し、外面塗胎(編)、内外面塗胎	
243	2	3	北郊外1面	整地土	磁器(白磁)	皿D	(2.8)		1/2	白磁・淡灰	暗灰	ロクロナデ、外面~底部回転ヘラケズリ、高台削出し、内外面塗胎、胴下部外面~底部露胎、胴下部~底部塗胎、被熱灰あり	
244	2	3	北郊外1面	整地土	陶器(古瀬戸)	四耳壺	(9.1)		1/8	灰輪・暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部磨し後回転ヘラケズリ、付高台、足込自然釉付着、外面塗胎、底部露胎、皿1a	
245	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎C1			僅か	暗茶濁	暗茶濁	口縁部コナデ、外面塗胎	
246	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎A			僅か	暗茶濁	暗茶濁	口縁部コナデ	
247	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎A			僅か	暗茶濁	暗茶濁	口縁部コナデ、外面塗胎	
248	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎A			僅か	暗茶濁	暗茶濁	口縁部コナデ、把手削付、内外面塗胎	
249	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎A			僅か	茶濁	茶濁	口縁部コナデ、把手削付	
250	2	3	北郊外1面	整地土	土師質土器	内耳罎A	(34.8)		1/8	暗灰濁	暗灰濁	口縁部コナデ	
251	2	3	北郊外1面	土10	土師質土器	内耳罎A			僅か	暗濁	暗濁	ナデ、口縁部コナデ	

No.	調査 区	出土地点		部種		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調整・形造の特徴			
		面	遺構	種類	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎		胎土		
252	2	3	北郭外1面	土12	土師質土器	内耳罎A		(20.9)				硝灰～黒炭	ナデ、口縁部ヨコナデ、底部砂目		
253	2	3	北郭外1面 以前	土13	土師質土器	内耳罎A	(28.0)		1/14			硝灰～黒炭	口縁部ヨコナデ		
254	2	3	近辺以降	郭外埋積土	土師質土器	皿1B	(11.6)	(8.4)	3.8	僅か	僅か	淡黄緑	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ、口縁部外面凹付着		
255	2	4	東郭外	流路2東 壘地上	陶器(古瀬戸)	御日付大皿	(32.4)			1/16		灰胎・黄緑灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部外面凹付ラケズリ、内外面灰胎輪軸、見込・胴下部外面蓋蓋、被熱痕あり、後蓋蓋	
256	2	4	東郭外	流路2東 壘地上	土師質土器	内耳罎D						僅か	硝灰	口縁部ヨコナデ	
257	2	5	東郭外	堀足遺構～流 路1間控地上	土師器	皿	(11.8)				1/12		淡黄緑	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
258	2	5	東郭外	堀足遺構～流 路1間控地上	土師質土器	皿3C						僅か	硝黄炭	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
259	2	5	近辺以降	郭外埋積土	無釉陶器	山茶碗	(11.0)				1/8		淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面自然凹付着、蓋蓋10～11	
260	2	6	地山	P12	土師器	存	(10.3)	(5.4)	3.0	7/8	3/4		硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	
261	2	6	土壘長盛土		土師器	耳皿		3.8	3.6	1/4	完		硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	
262	2	6	3面	壘地上	土師質土器	皿3		(9.0)			1/14		淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	
263	2	6	2面	壘地上	土師質土器	皿3C	(11.0)				1/10		淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
264	2	6	2面	壘地上	土師質土器	皿2C	(10.8)				1/12		硝～ 淡灰胎	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
265	2	6	2面	壘地上	土師質土器	皿2C	(11.8)	(7.4)	2.4	1/18	1/8		硝～硝黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ、見込ナデ	
266	2	6	2面	壘地上	土師質土器	皿2C	(12.2)	(7.6)		1/8	1/8		硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部切離し後ナデ	
267	2	6	2面	壘地上	陶器(古瀬戸)	祖母徳茶壺						僅か	淡灰～ 黒炭	ロクロナデ、耳部凹付、外面鉄胎輪軸、後側	
268	2	6	2面	壘地上	磁器(青磁)	菊形碗	(6.4)					僅か	硝黄～ 黒炭	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、頸部突帯、内外面蓋蓋、外面被熱痕あり	
269	2	6	2面	壘地上	磁器(青花)	碗B						僅か	透明明・乳白	白	ロクロナデ、胴下部外面～底部回転ラケズリ、胴出筋付、内外面貝殻状施彩後透明胎輪軸、見込下蓋の一部、被熱痕あり
270	2	6	1面	壘地上	土師質土器	皿2	(10.9)				1/28		硝黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部外面ラケズリ	
271	2	6	1面	P14	土師質土器	皿3C	(12.8)				1/6		淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部外面凹付着	
272	2	6	1面	柱3	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄	口縁部ヨコナデ	
273	2	6	1面	柱4	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
274	2	6	1面	壘地上	土師質土器	皿3						僅か	硝～硝黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
275	2	6	1面	柱13	土師質土器	皿2	(7.9)				1/12		硝	ロクロナデ、底部回転糸切り	
276	2	6	1面	柱14	磁器(白磁)	皿						僅か	白磁・乳白	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面鉄胎輪軸、口縁端部半取り、口縁端部～頸部付着物、被熱痕あり
277	2	6	1面	壘地上	陶器(古瀬戸)	折縁深皿						僅か	灰胎・黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面鉄胎輪軸、後側
278	2	6	1面	壘地上	陶器(瀬戸美濃)	皿						僅か	鉄胎・明黄灰	灰	ロクロナデ、胴下部外面～底部回転ラケズリ、内外面鉄胎輪軸、胴下部外面～底部蓋蓋、見込高台外面貝殻状施彩、外面透明胎輪軸、貫付・内面蓋蓋、被熱痕あり
279	2	6	1面	壘地上	磁器(青花)	碗	(3.9)				1/6	透明明・乳白	白	ナデ、口縁部ヨコナデ	
280	2	6	1面	溝1	土師質土器	内耳罎B						僅か	硝黄	ナデ、口縁部ヨコナデ	
281	2	6	1面	溝2	土師質土器	内耳罎A						僅か	硝灰～ 黒炭	ナデ、口縁部ヨコナデ	
282	2	6	1面	土16	土師質土器	内耳罎	(20.2)					僅か	硝灰～ 黒炭	ナデ、底部砂目、内面覆付着	
283	2	6	6面以前	壘地上	土師質土器	皿1C	(12.7)					僅か	硝黄～ 硝灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面覆付着	
284	2	6	1～2面	集石	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄～ 黒炭	口縁部ヨコナデ、内面覆付着	
285	2	6	1～2面	集石	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄～ 黒炭	ロクロナデ、内面覆付着	
286	2	6	1～2面	集石	土師質土器	皿1	(8.2)				1/4		硝黄	ロクロナデ、底部回転糸切り	
287	2	6	1～2面	集石	土師質土器	皿3	(8.2)				1/8		淡黄	ロクロナデ、底部切離し後中心部ナデ、見込ナデ	
288	2	6	1～2面	集石	磁器(青花)	碗B						僅か	透明明・乳白	白	ロクロナデ、内外面貝殻状施彩後透明胎輪軸、外面出筋付、被熱痕あり
289	2	6	1～2面	集石	磁器(青磁)	碗E	(11.0)					僅か	青磁・淡緑灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部外面凹付ラケズリ、内外面鉄胎輪軸、被熱痕あり
290	2	6	3～4面	壘地上	土師質土器	皿2C						僅か	淡黄	口縁部ヨコナデ	
291	2	6	3面以前	壘地上	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄	ロクロナデ	
292	2	6	1面以前	壘地上	土師質土器	皿2C	(7.9)	(4.0)	2.1		1/6		硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	
293	2	6	3～4面	壘地上	土師質土器	皿2B	(12.6)					僅か	硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
294	2	6	1面以前	壘地上	土師質土器	皿2	(7.2)				1/8		硝	ロクロナデ、底部切離し後ナデ、見込ナデ、底部木目白面	
295	2	6	1～4面	壘地上	土師質土器	皿3	(6.0)				1/4		淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り	
296	2	6	1面以前	壘地上	磁器(白磁)	皿D						僅か	白磁・乳白	乳白	内外面ヨコナデ、外面凹付ラケズリ、内外面蓋蓋
297	2	6	1～2面	壘地上	磁器(青花)	皿	(15.8)				1/20		透明明・乳白	白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部外面凹付ラケズリ、内外面貝殻状施彩後透明胎輪軸
298	2	6	1面以前	壘地上	陶器(古瀬戸)	天目茶碗						僅か	硝胎・茶褐～ 淡灰	淡灰	ロクロナデ、外面～底部凹付ラケズリ、内面～外面鉄胎輪軸、胴部下半～底部鉄胎輪軸、内面磨蓋、後蓋
299	2	6	近辺以降	郭外埋積土	陶器(瀬戸美濃)	皿	(6.2)					僅か	灰胎・淡灰白	淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部外面凹付ラケズリ、内外面鉄胎輪軸、交互
300	2	6	近辺以降	郭外埋積土	土師質土器	内耳罎B						僅か	黄泥～ 硝灰	口縁部ヨコナデ	
301	2	6	近現代	床土・陶瓦	須臾器	壺	(9.4)				1/4		灰～硝黄	ロクロナデ、底部回転糸切り、底部外周ナデ、胴下部外面凹付ラケズリ、見込自然凹付着	
302	2	6	近現代	床土・陶瓦	灰胎陶器	皿	(5.3)				1/4		灰白	内外面蓋蓋、ロクロナデ、底部回転糸切り、付合蓋、内面蓋蓋	
303	2	6	近現代	陶瓦	土師質土器	皿3C						僅か	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
304	2	6	近現代	陶瓦	土師質土器	皿2C						僅か	硝	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
305	2	6	近現代	陶瓦	土師質土器	皿2B						僅か	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
306	2	6	近現代	陶瓦	土師質土器	皿2						僅か	硝黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	

No.	調査区	出土地点		部類		法量 (cm)		残存度		色調		成形・調製・形態の特徴			
		面	遺構	種類	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	胎土				
307	2	6	近現代	床土・甌凡	土師質土器	皿 3C	(10.5)		1/16		淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ			
308	2	6	近現代	床土	土師質土器	皿 3A	(7.8)	(5.8)	1.4	1/8	1/4	淡黄～淡灰 淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り		
309	2	6	近現代	甌凡	土師質土器	皿 1B		(6.2)			1/3	暗黄～灰黄	ロクロナデ、底部回転糸切り、内外面ターム付着		
310	2	6	近現代	甌凡	土師質土器	皿 2		(8.7)			1/5	暗黄	ロクロナデ、底部に木目状土痕、内外面ターム付着		
311	2	6	近現代	床土	土師質土器	皿 3						僅か	ロクロナデ、底部回転糸切り		
312	2	6	近現代	床土・甌凡	陶器(古瀬戸)	鉢輪小皿		(5.4)				僅か	灰輪・緑灰 灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、内外面胎土付着、足込重紐土痕、被熱痕あり、後蓋	
313	2	6	近現代	床土	陶器(古瀬戸)	櫛形皿						僅か	灰輪・淡黄灰 灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着、後蓋	
314	2	6	近現代	床土・甌凡	陶器(瀬戸美濃)	碗						僅か	鉄輪・茶黒 淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着、近世	
315	2	6	近現代	床土	無胎陶器	片口鉢						僅か	灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部～外面薄く自然胎土着、底型 5 6	
316	2	6	近現代	甌凡	磁器(白磁)	皿 E	(9.3)				1/12	白磁・透明	白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着	
317	2	6	近現代	甌凡	陶器(瀬戸美濃)	碗	(19.0)					僅か	鉄輪・茶黒 淡黄灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着、近世	
318	2	6	近現代	甌凡	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(19.0)					僅か	鉄輪・茶黒～黒 淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着、後蓋	
319	2	6	近現代	甌凡	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	(5.0)						僅か	灰輪・淡黄緑 黄褐色	ロクロナデ、削出高台、内外面胎土付着、底部胎土、後蓋
320	2	6	近現代	甌凡	磁器(白磁)	皿 D	(4.2)				1/4	白磁・白	白	ロクロナデ、底部切離し後回転ヘラケズリ、削出し高台、内外面胎土、削下外部面～底部胎土、足込重紐土痕	
321	2	6	近現代	床土・甌凡	磁器(白磁)	香炉	(3.4)					僅か	青黒・緑灰 灰白	ロクロナデ、削下部外面～底部回転ヘラケズリ、削出し高台、内外面胎土、高台一部胎土、被熱痕あり	
322	2	6	近現代	甌凡	陶器(古瀬戸)	相母橋茶碗						僅か	鉄輪・茶黒 灰	ロクロナデ、外面胎土毛筆土痕、被熱痕あり、後蓋	
323	2	6	近現代	床土・甌凡	土師質土器	内耳皿 B						僅か	暗黄	口縁部ヨコナデ	
324	2	6	近現代	床土・甌凡	土師質土器	内耳皿 B						僅か	暗黄～黒	口縁部ヨコナデ	
325	2	6	近現代	床土・甌凡	土師質土器	内耳皿	(2.4)					僅か	暗黄～暗灰 淡黄	ナデ、底部砂目	
326	2	6	その他	陶器(煎灰)	天目茶碗							僅か	鉄輪・漆黒 淡灰	ロクロナデ、内外面胎土付着	
327	2	6	その他	無胎陶器	山茶碗	(7.4)					1/3	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台、内面自然胎土着、底型 5 古	
328	2	7	近現代	甌凡	無胎陶器	片口鉢						僅か	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着、中津川
329	2	7	近現代	甌凡	無胎陶器	片口鉢	(10.8)				1/10	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内面わずかに自然胎土着、底型 5 古	
330	2	8	近世以降	部外堆積土	土師質土器	皿 2C						僅か	暗黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、漆黒土痕あり、尾型 5	
331	2	8	近世以降	部外堆積土	無胎陶器	片口鉢						僅か	淡灰褐色	淡灰褐色	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、漆黒土痕あり、尾型 5
332	2	8	近世以降	部外堆積土	土師質土器	内耳皿 B						僅か	暗～暗黄	ナデ、口縁部ヨコナデ、基部外面胎土付着	
333	2	8	近現代	耕作土・甌凡	土師質土器	皿 3	(7.7)				1/8	淡黄～淡灰	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り	
334	2	8	近現代	耕作土・甌凡	無胎陶器	山茶碗						僅か	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面自然胎土付着、底型 7～8
335	2	9	土庫状遺土	土師質土器	皿 1C	(8.1)					2/3	黄褐～暗黄	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り	
336	2	9	1～3 面	土 1	土師質土器	皿 2A				2.4	僅か	暗黄	暗黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
337	2	9	近世以降	部外堆積土	灰輪陶器	皿	(9.2)				1/3	灰輪・淡緑	灰	ロクロナデ、底部切離し後回転ヘラケズリ、付高台、内外面胎土、足込自然胎土着、底部胎土、底部胎土	
338	2	9	近世以降	部外堆積土	土師質土器	皿 1A	(10.9)	(6.5)	3.0	2/3	淡黄緑	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り、口縁部内外面胎土付着		
339	2	9	近世以降	部外堆積土	土師質土器	皿 1A						僅か	淡黄緑	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り、口縁部内外面胎土付着
340	2	9	近世以降	部外堆積土	土師質土器	内耳皿 B	(28.4)	(24.0)	12.8	2/5	暗黄緑～黒		僅か	ナデ・オサエ、口縁部ヨコナデ、底部砂目、外面胎土付着	
341	2	9	近現代	甌凡	土師質土器	皿 3	(6.8)					僅か	淡黄	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り
342	2	9	近現代	甌凡	陶器(古瀬戸)	平碗						僅か	鉄輪・黄緑灰 淡黄灰	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面胎土付着
343	2	9	近現代	耕作土・甌凡	陶器(瀬戸美濃)	皿						僅か	長石輪・白 淡黄	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、削下部外面ケズリ、内外面長石胎土付着、近世
344	2	10	土庫状遺土	土師質土器	皿 3							僅か	淡黄	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り
345	2	10	土庫状遺土	土師質土器	皿 3C							僅か	淡黄緑～灰黄	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面胎土付着
346	2	10	近世以降	部外堆積土	灰輪陶器	碗	(6.7)				2/3	淡黄	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台、百代寺	
347	2	10	近世以降	部外堆積土	土師質土器	皿 3						僅か	淡黄～淡灰	淡黄	ロクロナデ、底部回転糸切り
348	2	10	近世以降	部外堆積土	土師質土器	皿 3C						僅か	淡黄	淡黄	口縁部ヨコナデ
349	2	10	近世以降	部外堆積土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗						僅か	鉄輪・黒灰 淡灰	淡灰	ロクロナデ、削下部外面回転ヘラケズリ、内外面胎土付着、削下部外面胎土、内面胎土、底型 1～2
350	2	10	近現代	耕作土・甌凡	土師質土器	皿 2B	(12.0)	(8.2)	1.8	1/12	1/24	暗黄～黒	暗黄～黒	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	
351	2	10	近現代	耕作土・甌凡	土師質土器	皿 2B	(8.2)				1/8	暗黄	暗黄	ロクロナデ、底部回転糸切り、足込一向のナデ	
352	2	10	近現代	耕作土・甌凡	無胎陶器	山茶碗	(13.1)				1/12	淡黄	淡黄	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底型 5	

空 間 測定区 面積 (㎡)	23×3トレンチ 44.9			23×9トレンチ 45.0			23×10トレンチ 24.6			新内運機・豊進土 825.4			井川域全体 1484.6		
	計			計			計			計			計		
	1 樹立 面積	2 樹立 面積	3 樹立 面積	1 樹立 面積	2 樹立 面積	3 樹立 面積	1 樹立 面積	2 樹立 面積	3 樹立 面積	計	%	計	%	計	%
土壌質土層	1層	2	2	9.5	1	3.2	5.1	12	35.3	1	4.5	321	21.5	355	18.9
	2層	4	2	9	42.9	60.7	2	17	65.5	2	8.5	439	29.5	486	25.9
	3層	2	1	3	14.3	76.2	2	28	5.9	17	77.3	340	23.2	414	22.0
	1層	2	2	9.5	9.5	2	3	5	14.7	3	13.6	211	14.2	405	21.5
在来赤須岩層	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8	10.0										
無機質層	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
有機質層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8										
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)		1層	1	1	4.8										
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8										
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)		1層	1	1	4.8										
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8										
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)		1層	1	1	4.8										
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8										
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)		1層	1	1	4.8										
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	2層	1	1	4.8											
	3層	1	1	4.8											
	1層	1	1	4.8											
	層間層 (古湖相・入室)	1層	1	1	4.8										
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
2層		1	1	4.8											
3層		1	1	4.8											
1層		1	1	4.8											
層間層 (古湖相・入室)		1層	1	1	4.8				</						

第5表 井川城址石器・石製品一覧

ID	図 No.	種類	次 数	tr	面	遺構または 整地層	遺構内層位 ・位置等	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	破損状況	備考
1	1	石鉢	試	8	2面以上	上43	No.1	安山岩	(91.0)	(55.0)	(40.3)	(144.0)	3/4以上欠	
2	2	硯	試	8	2面	上31	No.1	頁岩	(52.6)	78.8	23.0	(182.9)	2/3欠	横断面逆台形(15cか)
3		硯か	1	3	2面	整地土	No.17	泥岩	(52.0)	(73.7)	(8.8)	(51.8)	3/4以上欠	側面の1部のみ残存
4		硯か	1	5	1面	P6	No.1	粘板岩	(54.8)	(44.5)	(3.0)	(7.4)	3/4以上欠	わずかに裏面残存
5		硯か	1	6	2面以降			粘板岩	(34.0)	(27.4)	(4.2)	(5.3)	3/4以上欠	側面の1部のみ残存
6		硯か	1	6		耕作土・ 床上		粘板岩	(49.0)	(28.6)	(8.3)	(16.7)	3/4以上欠	わずかに裏面残存
7	3	砥石	試	8	2面	上32	No.1	凝灰岩	146.8	35.5	35.0		完形	砥面4面、中～仕上げ砥、 両端整形痕あり
8	4	砥石	1	2	2面	整地土		砂岩	108.6	40.7	24.9	170.6	完形	砥面2面(表裏面)、自然 礫素材、荒砥、手持ち砥石
9	5	砥石	1	3	2面	整地土	No.23	凝灰岩	(88.9)	(36.4)	(25.0)	(109.9)	1/2欠	砥面2面(表裏面)、中～ 仕上げ砥、側面整形痕あり
10	6	砥石	1	5	4面	P2	No.2	凝灰岩	(66.4)	(24.2)	(18.1)	(40.3)	1/2欠	砥面2面(表裏面)、中～ 仕上げ砥、側面整形痕あり
11	7	砥石	2	2	土層状盛 土	18d層		凝灰岩	(109.7)	(55.1)	(28.5)	(146.2)	1/4以下欠	砥面2面(表裏面)、中～ 仕上げ砥、側面整形痕あり
12	8	碁石	2	6	1面	整地土	No.38	粘板岩	20.7	15.6	5.2	2.5	完形	平面楕円形
13	9	碁石	2	6	1面以降			砂岩	26.0	20.1	4.5	3.3	完形	平面楕円形
14	10	碁石	2	6	1面以降			粘板岩	20.0	16.2	5.2	2.7	完形	平面楕円形
15	11	碁石	2	6	1面以降			粘板岩	22.2	16.0	5.5	2.9	完形	平面楕円形
16	12	火打石	試	7		坪庭		チャート	50.3	35.6	15.8	35.2	完形	2縁辺使用
17		火打石	試	8				チャート	49.3	34.8	19.0	31.7	完形	3縁辺使用
18		火打石	試	8				チャート	58.3	35.3	22.9	47.5	完形	3縁辺使用
19	13	火打石	1	2	1～2面	整地土		石英	58.9	36.7	26.8	55.1	完形	3縁辺使用、搬入品か
20		火打石	2	1	中世以降		No.10 7 層	チャート	47.9	45.1	24.2	41.9	完形	1縁辺使用
21	14	火打石	2	3	1面	整地土	9a-3層	チャート	63.0	38.5	31.8	67.3	完形	3縁辺使用
22		石鏝	試	7		床上?		チャート	18.0	(3.9)	2.7	(0.6)		尖頭部先端・ 片側部欠
23		石鏝 (未成品か)	2	9		排土		黒曜石	30.1	18.9	6.9	4.3	完形	平面形非対称、粗雑な調整
24		磨・凹石	試	8		排土		砂岩	147.9	47.0	46.3		完形	磨面4面、凹部1か所
25		石核	2	6		掘瓦		黒曜石	39.2	24.3	23.0	28.1	完形	打面3面、割離面4面
26		石核	2	6		掘瓦		黒曜石	38.6	28.0	22.7	20.1	完形	1縁辺微細割離あり
27		微細割離あ る剥片	2	3	1面			黒曜石	20.0	14.3	8.0	1.8	完形	4縁辺に微細割離あり
28		剥片	試	7		床上?		黒曜石	(11.1)	9.4	3.7	(0.5)	1側辺折れ	縁磨摩耗(水磨か)
29		砕片	試	7		床上?		チャート	11.0	6.9	1.7	0.1	完形	
30		石垂	2	6		掘瓦		滑石	(30.9)	6.7	6.1	(2.4)	1/2欠	断面円形、近代以降

第6表 井川城址金属製品一覧

図名	ID	調査区	出土位置	層位・位置	図種	寸法(mm)	重量(g)	金属種別	備考
		出土地点		図種		寸法(mm)		備考	
		遺構・部地層		層位・位置		最大長・最大厚		金属種別	
		遺構・部地層		層位・位置		最大長・最大厚		金属種別	
1	試5	北部外 裏面1面	溝1	溝	溝	-	0.6	-	-
2	試6	北部外 裏面	溝1	溝	溝	-	0.6	-	-
3	試6西	近津	(埋藏ST)	溝	溝	23.1	3.2	31	0.5
4	試6西	近津	溝	溝	溝	28.8	5.8	5.7	1.7
5	試6西	近津以降	溝	溝	溝	-	-	-	-
6	試6西	近津	溝	溝	溝	-	-	-	-
7	試7西	2面	溝外埋積土	溝	溝	-	-	-	-
8	試7西	2面	溝	溝	溝	14.5	5.2	5.0	0.6
9	試7西	1面以降	溝	溝	溝	70.3	13.4	7.4	10.1
10	試7西	1面以降	溝	溝	溝	11.3	5.1	3.2	0.2
10	試7西	1面以降	溝	溝	溝	22.3	5.4	4.1	0.9
11	試7西	1面以降	溝	溝	溝	24.4	4.8	4.2	1.0
12	試7西	1面以降	溝	溝	溝	-	-	-	-
13	試7西	3面以降	溝	溝	溝	22.9	6.1	6.1	0.7
14	試7西	3面以降	溝	溝	溝	17.6	8.6	2.0	0.7
14	試7西	3面以降	溝	溝	溝	32.8	8.0	7.8	3.3
15	試7西	3面以降	溝	溝	溝	-	-	-	-
16	試7西	3面以降	溝	溝	溝	-	-	-	-
17	試7西	1面以降	溝	溝	溝	-	-	-	-
18	試7西	18段以上	溝	溝	溝	-	-	-	-
19	試7西	18段以上	溝	溝	溝	-	-	-	-
20	試7西	1面以降	溝	溝	溝	28.1	6.0	5.4	1.9
21	試7西	1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
22	試8	北部外 2面	溝	溝	溝	-	-	-	-
23	試8	北部外 2面	溝	溝	溝	24.5	24.5	1.3	1.4
24	試8	北部外 2面以降	溝	溝	溝	22.9	22.4	2.0	4.2
25	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
26	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
27	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	22.9	15.9	1.1	1.7
28	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	13.0	6.5	5.5	5.5
29	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
30	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
31	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
32	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	51.3	6.7	6.3	2.9
33	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	18.2	5.8	5.8	1.0
34	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	33.5	12.5	7.9	8.2
35	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	20.3	10.9	4.5	1.9
36	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	102.6	24.1	5.6	39.3
37	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	-	-	-	-
38	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	27.5	11.2	5.6	1.9
39	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	30.0	6.7	5.3	2.6
40	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	14.8	14.5	8.8	1.2
41	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	17.8	5.7	5.0	1.5
42	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	41.8	5.7	2.0	2.0
43	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	51.1	7.4	4.7	3.5
44	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	67.6	8.2	6.8	8.5
45	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	36.3	24.3	0.9	1.6
46	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	26.4	14.5	13.7	7.5
47	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	57.6	6.7	5.8	4.1
48	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	54.6	11.7	8.8	5.6
49	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	42.5	13.0	10.6	6.6
50	試8	北部外 1面	溝	溝	溝	9.1	7.7	10.6	10.6

No.	調色区	面	出土地点 遺構・築地	部位・位置	器種	寸法(mm)	最大径	最大厚	重量(g)	金属 種類	備考
50	2	1,3	2面		打	41.7	8.7	7.0	4.4	Fe	頭部・脚部先端・縁化による破損が激しく断面形不明
51	1,3	2面	惣土上		打	42.3	10.6	7.3	3.5	Fe	脚部先端・断面長方形・縁化による破損が激しく断面形不明
52	1,3	2面	惣土上		打	26.0	7.8	4.5	2.3	Fe	脚部のみ残存・断面方形・縁化による破損あり
53	1,3	2面	惣土上		打	38.9	5.5	4.7	2.1	Fe	頭部のみ残存・断面方形・縁化による破損あり
54	1,3	2面	惣土上		打	53.4	7.7	7.3	3.4	Fe	頭部の一部・脚部先端・断面方形・脚部がやや湾曲する
55	1,3	2面	惣土上		打	42.1	12.1	6.3	2.8	Fe	脚部先端・脚部が激しく断面形不明
56	1,3	2面	土19		打	33.5	7.5	6.8	2.9	Fe	脚部のみ残存・縁化による破損あり
57	1,3	2面	土28		打	48.5	6.5	5.9	2.3	Fe	頭部・断面長方形・縁化による破損が激しく断面形不明
26	58	1,3	P46		片張貝	22.3	7.3	4.2	0.8	Cu	片張貝・銅質・形状が長円形のもの
59	1,3	2面	P52		不明	41.7	11.4	6.2	3.5	Fe	不明
60	1,3	2面	P57		不明	41.7	11.4	6.2	3.5	Fe	不明
61	1,3	2面	P77		不明	27.5	7.7	5.5	1.6	Fe	不明
62	1,3	2面	屈化層中1		打	21.7	3.1	2.8	0.3	Fe	断面長方形の特殊製品
63	1,3	2面	屈化層中3		打	58.2	11.4	8.5	5.7	Fe	方形・縁化による破損で断面形不明
64	1,3	1面	惣土上		不明	31.0	7.2	6.1	1.8	Fe	特殊製品・縁化による破損で断面形不明・やや湾曲している
65	1,3	1面	床土		打	40.6	7.1	6.9	2.9	Fe	頭部・脚部先端・断面方形・縁化による破損あり
66	1,3	1面	惣土上		打	23.5	9.9	7.1	2.3	Fe	脚部・断面方形
10	67	1,3	床土		打	81.9	18.0	8.6	9.1	Fe	脚部先端・断面長方形・脚部が大きく折れ曲がる
68	1,3	1~2面	惣土上		不明	48.7	7.0	6.1	2.9	Fe	頭部・脚部・断面方形・縁化による破損あり
69	1,3	2面	惣土上		打	18.1	4.3	4.0	0.5	Fe	断面方形の特殊製品・破損が激しい
70	1,3	2面	惣土上		打	33.6	8.7	6.9	1.9	Fe	脚部・断面方形・破損がある
71	1,3	1面	惣土上		打	21.5	3.9	3.2	0.5	Fe	断面方形の特殊製品
72	1,3	2面	惣土上		不明	21.5	5.9	3.9	1.0	Fe	断面長方形・断面方形
73	1,3	2面	惣土上		不明	14.7	11.4	5.5	1.8	Fe	縁化による破損で断面形不明
74	1,3	2面	惣土上		不明	12.2	8.4	4.2	0.5	Cu	1/4残存・湾曲・縁化による破損で断面形不明
75	1,3	2面	惣土上		不明	33.7	5.0	4.0	2.4	Fe	断面のみ残存・湾曲・縁化による破損で断面形不明
76	1,3	2面	惣土上		打	20.9	5.0	4.0	0.7	Fe	断面のみ残存・断面長方形・破損あり
77	1,3	2~3面	惣土上		打	41.9	12.8	10.4	5.2	Fe	脚部先端・断面方形・縁化による破損あり
78	1,3	1面	惣土上		不明	27.0	6.0	4.3	1.6	Fe	脚部先端・断面方形・破損が激しい
79	1,3	1面	惣土上		不明	30.1	5.3	5.0	2.6	Fe	特殊製品・やや湾曲している・破損が激しい
80	1,3	1面	床土		不明	40.0	2.7	1.5	0.6	Fe	薄く特殊製品・やや湾曲している・縁化により一部ののみ残存
81	1,3	1面	惣土上		不明	40.0	2.7	1.5	0.6	Fe	一部の一部
2	79	1,3	惣土上		片子	18.0	10.3	3.1	1.2	Fe	全部の一部
82	1,5	1面	惣土上		打	25.6	5.8	4.7	1.4	Fe	頭部のみ残存・断面方形・縁化による破損あり
83	1,5	2面	惣土上		打	26.4	6.0	3.5	0.7	Fe	頭部・脚部・断面方形・破損あり
84	1,5	2面	惣土上		打	24.3	7.7	3.7	2.6	Fe	頭部の一部・脚部・断面長方形・破損あり
85	1,5	2面	惣土上		打	35.2	7.3	6.5	2.6	Fe	断面方形の特殊製品・断面長方形・破損あり
86	1,5	2面	惣土上		打	22.1	5.4	5.3	1.0	Fe	頭部のみ残存・断面方形・縁化による破損あり
87	1,5	2面	惣土上		打	28.4	5.5	4.8	1.5	Fe	頭部・脚部先端・断面方形
88	1,5	2面	惣土上		不明	24.5	24.1	1.4	1.9	Cu	わずかに欠損・相銅 621 年 (特)
89	1,5	2面	惣土上		不明	45.2	12.3	10.1	12.6	Fe	断面のみ残存・断面長方形・破損が激しい
90	1,5	2面	惣土上		不明	25.0	5.5	4.6	1.2	Fe	断面のみ残存・断面長方形・破損あり
91	1,5	2面	惣土上		不明	50.6	9.4	8.6	7.7	Fe	断面のみ残存・断面長方形・破損が激しく断面形不明
11	92	1,5	惣土上		不明	72.3	11.1	9.4	7.3	Fe	方形・縁化による破損で断面形不明
30	93	1,5	惣土上		不明	58.9	3.6	1.1	1.3	Cu	断面・薄く特殊製品・出處不明
4	94	1,5	惣土上		不明	41.6	24.7	2.6	4.3	Fe	鉄輪の一部
95	1,5	2面	土15	No.1	不明	-	-	-	162.9	Fe	不明
96	1,5	2面	P20	No.1	不明	53.1	11.3	6.9	4.3	Fe	脚部先端・破損により断面形不明・脚部が十字形に折れ曲がる
97	1,5	1面	惣土上		打	37.5	3.8	3.8	1.0	Fe	脚部先端・断面方形・脚部が十字形に折れ曲がる
98	1,5	2面	惣土上		打	43.6	7.9	7.0	4.3	Fe	頭部の一部・脚部・縁化による破損で断面形不明
98	2	1,5	惣土上		打	20.3	8.1	5.5	1.5	Fe	脚部先端のみ残存・破損により断面形不明・脚部が十字形に折れ曲がる

国%	ID	調査区	面	出土地帯	器種・部位	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	金属 種類	備考
12	99	1-5	2~3面	壱土	釘	釘	40.3	9.7	8.4	3.4	Fe	脚部先端欠/銚による膨張で断面円形/断面がやや面がる
100	100	1-6	壱土	壱土	釘	釘	92.2	9.8	16.9	16.9	Fe	脚部先端欠/断面方形/銚化による膨張あり
101	101	1-6	2面	壱土	釘か	釘か	34.6	3.8	3.4	0.9	Fe	断面方形の棒状製品/断面が歪しい
102	102	1-6	2面	壱土	釘	釘	22.8	9.6	6.2	1.8	Fe	脚部欠/銚化による膨張で断面方形不明
103	103	1-6	2面	壱土	釘	釘	17.5	4.3	3.9	0.4	Fe	脚部先端のみ残存/断面方形
104	104	1-6	2面	壱土	釘	釘	40.2	7.2	5.9	2.0	Fe	脚部欠/断面方形/脚部がL字形に折れ曲がる
22	105	1-6	2面	壱土	脚付き容器	壱土	56.1	33.3	19.3	34.8	Fe	脚部欠/断面、口縁部が一部残存/銚化による膨張/断面が歪しい/香付か
106	106	1-6	2面	壱土	釘	釘	24.6	24.6	1.3	2.3	Cu	断面方形の棒状製品/銚化による断面が歪しい
107	107	1-6	2面	壱土	釘か	釘か	29.2	5.0	4.5	1.2	Fe	断面方形の棒状製品/銚化による断面が歪しい
108	108	1-6	2面	壱土	釘	釘	39.0	7.6	9.6	1.1	Fe	脚部先端欠/断面長方形/銚化による断面が歪しい
13	109	1-6	2面	壱土	釘	釘	99.6	14.5	13.6	16.3	Fe	脚部先端欠/断面方形/銚化による膨張あり
110	110	1-6	2面	壱土	釘	釘	42.2	6.4	6.0	2.1	Fe	脚部先端欠/断面方形/断面が歪しい
111	111	1-6	2面	壱土	釘	釘	21.9	10.3	7.2	0.7	Cu	銚化/破損/欠残が歪しい
112	112	1-6	2面	壱土	不明	不明	35.1	21.3	2.4	3.4	Fe	棒状製品/銚化による断面で断面不明
113	113	1-6	2面	壱土	不明	不明	18.6	10.6	5.5	4.2	Fe	板状製品/銚化による断面が歪しく断面不明/断面製品
114	114	1-6	1~2面	壱土	不明	不明	35.1	13.4	5.5	4.2	Fe	脚部のみ残存/断面方形
115	115	1-6	壱世	壱土	釘	釘	18.1	4.2	4.2	0.4	Fe	断面から基部にかけての断面しか欠残が歪しい
116	116	1-6	2面	壱土	刀子	刀子	27.0	11.6	7.5	3.3	Fe	断面三角形の棒状製品/断面部を欠し片が歪み/断面になる
117	117	1-6	3面	壱土	不明	不明	49.5	8.7	5.0	2.8	Fe	断面方形の棒状製品/断面部を欠し片が歪み/断面になる
118	118	1-6	3面	壱土	釘	釘	28.1	8.7	7.7	2.4	Fe	断面欠/断面方形
119	119	1-6	壱山	壱石3	釘	釘	44.3	5.4	5.4	1.7	Fe	断面欠/断面方形
120	120	1-6	壱山	壱石3	不明	不明	31.5	16.1	2.5	1.3	Fe	断面欠/断面方形
121	121	1-6	壱山	壱石3	釘	釘	85.8	13.1	12.7	18.3	Fe	断面欠欠/断面方形/銚化による膨張あり
19	121	1	1-6	壱山	釘か	釘か	41.7	28.4	7.1	8.0	Fe	断面基部により長方形で異なる/断面している/縁欠の一部か
20	121	2	1-6	壱山	釘か	釘か	27.8	8.6	6.4	2.1	Fe	断面方形の棒状製品/断面している/片端部に円形の膨張あり/断面の一部か
122	122	1-6	壱山	壱石	不明	不明	13.5	8.9	3.8	0.4	Fe	断面欠
123	123	1-6	壱山	壱石	不明	不明	17.8	13.4	1.0	0.9	Cu	縁に僅かに緑布/生蝸原欠
27	124	2-2	北谷外2面	壱土	不明	不明	22.2	11.1	1.1	0.8	Cu	1/3残存/銚化が歪しい
21	125	2-3	北谷外1面	壱土	不明	不明	76.2	9.1	8.0	12.0	Cu	2本の棒状製品を覆り合わせたもの/銚化による断面あり/断面の引手か
33	126	2-6	1面以前	壱石	壱土	壱土	23.8	23.7	1.2	2.6	Cu	完形/初葉1101年(天)
28	127	2-6	1面以前	壱石	壱土	壱土	23.6	8.0	7.2	0.9	Cu	完形/断面の大部分が残存する/欠損が歪しい
15	128	2-6	1面以前	壱石	壱土	壱土	72.6	10.3	8.5	9.9	Cu	断面の一部、脚部先端欠/断面方形
6	129	2-6	1面	壱石	壱土	壱土	42.8	10.6	9.2	2.7	Fe	上部わずかに欠
16	130	2-6	1面	壱石	壱土	壱土	71.9	10.2	9.0	8.6	Fe	完形/断面方形
34	131	2-6	2面	壱石	壱土	壱土	24.8	24.6	1.4	3.1	Cu	完形/初葉1039年(天)
17	132	2-6	1面	壱石	壱土	壱土	49.9	9.5	8.2	5.5	Fe	断面欠/断面方形
18	133	2-6	壱世以前	壱土	壱土	壱土	70.7	10.3	9.9	23.3	Fe	断面方形の棒状製品/断面方形/断面が歪しい
29	134	2-6	近世以前	壱土	壱土	壱土	87.7	10.7	10.6	13.7	Cu	完形/断面している/片の端部
35	135	2-6	壱土	壱土	壱土	壱土	24.0	23.9	1.2	3.0	Cu	完形/初葉1064年(天)
136	136	2-6	壱土	壱土	壱土	壱土	22.0	5.2	1.6	0.2	Cu	断面の端部か
31	138	2-6	壱土	壱土	壱土	壱土	23.0	19.9	2.2	2.3	Cu	断面の端部か
138	138	2-6	壱土	壱土	壱土	壱土	29.6	11.6	3.4	1.6	Fe	断面の一部、断面が歪しい
138	138	3	2-6	壱土	壱土	壱土	23.1	16.0	9.7	5.9	Fe	断面の一部
139	140	2-7	壱土	壱土	壱土	壱土	40.6	25.7	9.3	11.8	Fe	破片/銚化による膨張あり
140	140	2-7	壱土	壱土	壱土	壱土	44.4	6.7	6.3	3.9	Fe	破片のみ残存/銚化による断面で断面方形不明
140	140	3	2-7	壱土	壱土	壱土	19.7	11.1	4.5	1.5	Fe	断面の一部/断面、欠損が歪しい
23	141	2-8	壱土	壱土	壱土	壱土	-	-	-	13.3	Fe	断面欠/銚化による膨張、断面が歪しい
24	142	2-8	壱土	壱土	壱土	壱土	75.4	14.7	7.3	20.8	Fe	断面方形の棒状製品/断面製品/断面は歪しい/断面が
143	143	2-10	壱世以前	壱土	壱土	壱土	23.8	15.0	1.5	1.2	Cu	1/3残存/銚化が歪しい
144	144	2-10	近世以前	壱土	壱土	壱土	25.3	21.6	9.2	7.9	Fe	板状製品/銚化による断面あり/断面している/断面製品

第7表 井川城址土製品一覽

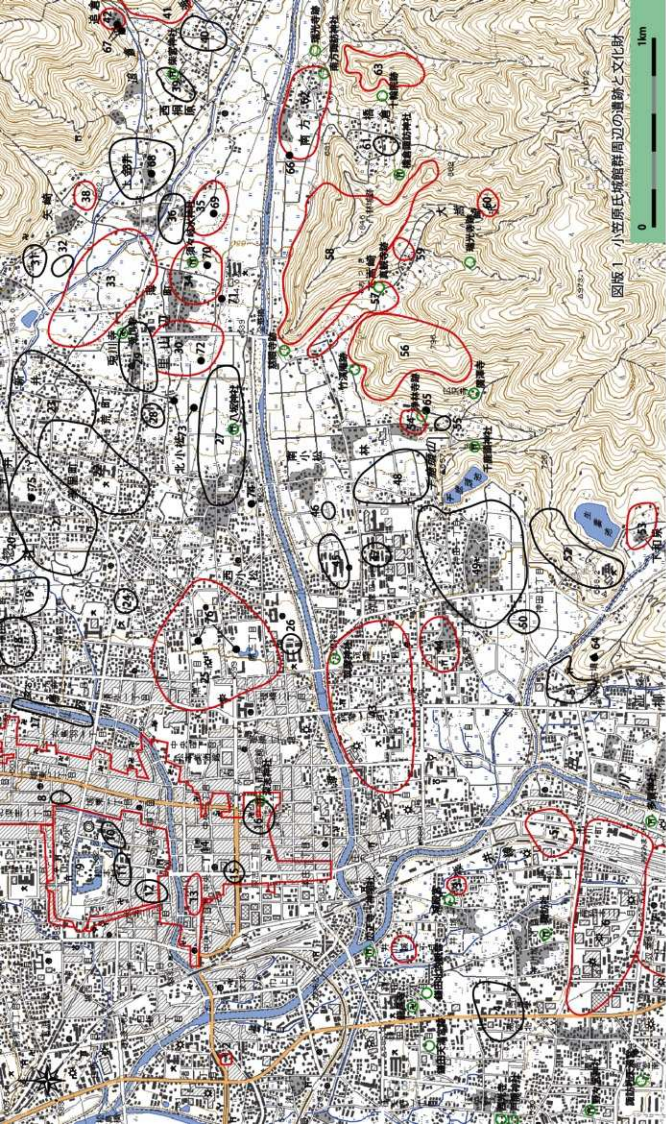
図号	種類	調査区	目付	面	遺構または整地層	層位等	最大径 (mm)	最大幅・最大径 (mm)	最大厚・孔径 (mm)	重量 (g)	備考
	瓦	試-7	130710	1面	整地土					(12.8)	煙瓦、軒瓦、巴杖か。
1	瓦	2-6	141121	1面	土11		(93)	(93)	(22)	(286.8)	布目瓦、須置瓦
5	土師	試-7	130709	底土	底土		27	19	5	11.1	土師瓦、瓦形
6	土師	試-8	130719	北部外3面	整地土		30	11	0.3	3.3	土師瓦、瓦形
4	土師	1-3	140122	2面	整地土		21	22	6	(13.9)	土師瓦、孔部一部破損
3	土師	1-6	131122/131128		溝瓦		39	13	4	6.2	土師瓦、瓦形
2	土師	2-3	140725	北部外1面	整地土	9a-3層	37	16	5	8.1	土師瓦、瓦形
31口	試-7	130906		北の外縁積土	北の外縁積土	1b~1e層(表土層)	(38)	(24)	(23)	(18.1)	
31口	試-7	130722		土師状盛土	整地土		(15)	(27)	(7)	(3.7)	
31口	1-6	140310		2面	整地土		(19)	(26)	(16)	(4.6)	
31口	1-6	131122/131128			溝瓦		(43)	(27)	(17)	(14.3)	
31口	2-10	150128			御作土・溝瓦		(31)	(21)	(28)	(15.2)	浴槽付着
粘土塊	試-7	130808		2面	土1					(2.9)	土師瓦
粘土塊	1-1	131031		1面	炭化物混中4					(0.6)	土師瓦
粘土塊	1-2	131122		1面	溝瓦					(31.3)	土師瓦、板状片
粘土塊	1-3	141010		1面	整地土		(19)	(16)	(15)	(3.8)	土師瓦
粘土塊	1-3	131101		3面以前	整地土					(12.8)	土師瓦
粘土塊	1-3	131106		3面	整地土					(1.4)	土師瓦
粘土塊	1-3	131022/131023			溝瓦		(70)	(60)	(23)	(62.7)	土師瓦、板状片

第8表 井川城址木製品一覽

図号	地区	遺構・整地層	層位	整理番号	器種	手法	寸法 (cm)		備考	
							長口径 底径	幅 厚高		
1	試-5	近世	溝1	002	瓦	丸太材 (みか丸形)	32.60	5.60	4.70	木口両欠損/先端は細く削られる/先端部が凹により切り折り/破けている
2	2-2	3面	溝2-2	012	板	板材 (板目)	21.80	5.40	1.30	木口のみで切り落とし/木端・木裏削りっぱなし/木表・木端一部破けている
3	試-5	近世	溝1	001	板	板材 (板目)	14.40	3.10	0.80	木口切り落としと切り折り/木表削り加工あり/木裏削りっぱなし
4	試-5	近世	溝1	008	角柱 (斜め)	角柱 (斜め)	16.55	1.65	1.60	木口内を斜めにカット/木表削り加工あり/下方は木端を平面削りで切り落とし/上部の部分が切り込み 他加工痕を多量に有った/木端削り加工あり
5	2-1	中世以降	溝1	011	板	板材 (板目)	11.20	2.98	0.42	木口切り折りで欠損と平面削りで折れ/表面破けている/削り痕/圧痕
6	2-2	土師状盛土	溝1	015	板	板材 (板目)	13.70	3.40	3.30	木口切り落とし一部欠損/木端一部欠損/全体削りっぱなし
7	2-3	1面	溝7-7	9a-3層	板	板材 (板目)	11.20	4.30	0.50	木口両欠損/全面削りっぱなし
8	試-5	9面	溝1	009	短冊状板	板材 (板目)	8.99	1.75	0.35	木表に板状のものが見られる/ひびかえる/木口両欠損
9	試-5	9面	溝1	006	短冊状板	板材 (板目)	6.50	1.60	0.55	木口両欠損と切り折り欠損/木端加工痕あり
10	試-5	近世	溝1	007	板状木製品	板材 (削りた)	9.60	0.68	0.50	木口両欠損と切り折り/先端細く削る/角を切り6角上座7角
11	試-8	2面以降	溝積土	003	板状木製品	板材 (削りた)	10.40	4.50	0.50	木口両欠損と削りた/木口両端が折れている/加工痕あり
12	試-8	6面	溝積土	004	板状木製品	板材 (斜め)	13.25	1.00	0.45	木口両欠損/全て面が凹による加工痕あり
13	2-2	2面以降	溝1	014	板状木製品	板材 (削りた)	14.30	0.50	0.45	木口削りたしと折れ/加工痕あり
14	試-5	近世	溝1	010	板状木製品	板材 (削りた)	19.50	0.80	0.60	木口両面削りと先端に加工痕がある/角を削り加工痕あり/木裏削り加工あり
15	試-8	6面	溝1	005	板状木製品	板材 (板目)	19.50	1.20	0.65	木口両面削りと先端に加工痕あり/木表に一部削りたしと折れ
16	2-3	1面	P18	016	建築部材	板材 (板目)	74.70	15.30	7.50	腐食一部残存/木表・木端上部加工痕多量/下部には加工痕なし/木表に一部削りたしと折れ/木裏削りっぱなし

图版

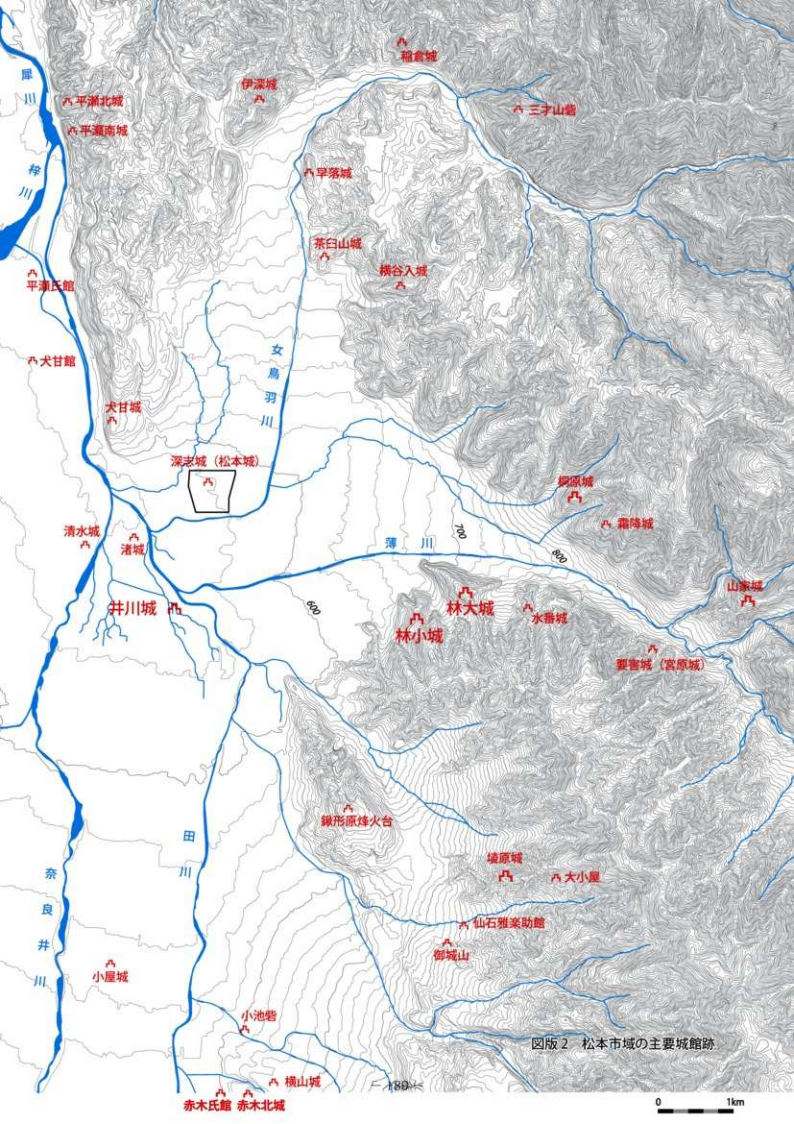




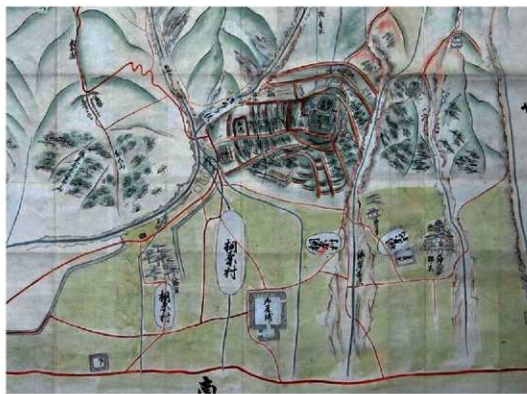
図版1 小笠原氏城館跡周辺の遺跡と文化財

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|------------|----|------------|----|---------|----|---------|----|------------|----|---------|----|---------|----|---------|
| 1 | 井川城址 | 17 | 女鳥羽川遺跡 | 33 | 堀の内遺跡 | 41 | 朝原城址 | 49 | 神田遺跡 | 57 | 林山遺跡 | 65 | 御符古墳 | 73 | 大塚1~2号墳 |
| 2 | 厩城址 | 18 | 丸の内遺跡 | 26 | 堀川遺跡 | 42 | 道倉遺跡 | 50 | 神田西遺跡 | 58 | 林山趾(大塚) | 66 | 南方古墳 | 74 | 北河原塚古墳 |
| 3 | 小高塚 | 19 | 北小高塚遺跡 | 34 | 石上遺跡 | 43 | 武季遺跡 | 51 | 平原遺跡 | 59 | 大崎崎遺跡 | 67 | 人久1~2号墳 | 75 | 惣社塚古墳 |
| 4 | 高宮遺跡 | 20 | 惣社遺跡 | 35 | 石上遺跡 | 44 | 三才遺跡 | 52 | 中山内宮群(精進山) | 60 | わの宮遺跡 | 68 | 上金井古墳 | 76 | 前塚1~2号墳 |
| 5 | 田川遺跡 | 21 | 岩北遺跡 | 36 | 里山辺塚山遺跡 | 45 | 筑摩北山原遺跡 | 53 | 生差遺跡 | 61 | 藤倉遺跡 | 69 | 石上古墳 | | |
| 6 | 田川西遺跡 | 22 | 下原遺跡 | 37 | 上金井遺跡 | 46 | 小松下遺跡 | 54 | 聖府遺跡 | 62 | 入山辺南方遺跡 | 70 | 古吉古墳 | | |
| 7 | 田川南遺跡 | 23 | 新井遺跡 | 38 | 上金井大塚遺跡 | 47 | 筑摩南川原遺跡 | 55 | 林遺跡 | 63 | 水津城址 | 71 | 里山辺塚古墳 | | |
| 8 | 片城遺跡 | 24 | 四ツ谷遺跡 | 39 | 西刺成遺跡 | 48 | 千原北遺跡 | 56 | 林城址(小塚) | 64 | 弘正山古墳 | 72 | 野塚古墳 | | |
| 9 | 松本城跡 | 25 | 新井遺跡 | 40 | 朝原氏館跡 | | | | | | | | | | |
| 10 | 丸の内遺跡 | 26 | 新町遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 11 | 大名前遺跡 | 27 | 北小高塚遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 12 | 王升反遺跡 | 28 | 尻町遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 13 | 伊勢町遺跡 | 29 | 兎川寺遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 14 | 松本城下町跡 | 30 | 針塚遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 15 | 本町南遺跡 | 31 | 藤井山遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 16 | 天神西遺跡 | 32 | 藤井遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 17 | 女鳥羽川遺跡 | 25 | 新井遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 18 | 丸の内遺跡 | 26 | 新町遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 19 | 北小高塚遺跡 | 27 | 北小高塚遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 20 | 惣社遺跡 | 28 | 尻町遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 21 | 岩北遺跡 | 29 | 兎川寺遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 22 | 下原遺跡 | 30 | 針塚遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 23 | 新井遺跡 | 31 | 藤井山遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 24 | 四ツ谷遺跡 | 32 | 藤井遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 25 | 堀の内遺跡 | 33 | 堀の内遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 26 | 堀川遺跡 | 34 | 堀川遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 27 | 北小高塚遺跡 | 35 | 石上遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 28 | 惣社遺跡 | 36 | 里山辺塚山遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 29 | 兎川寺遺跡 | 37 | 上金井遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 30 | 針塚遺跡 | 38 | 上金井大塚遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 31 | 藤井山遺跡 | 39 | 西刺成遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 32 | 藤井遺跡 | 40 | 朝原氏館跡 | | | | | | | | | | | | |
| 33 | 堀の内遺跡 | 41 | 朝原城址 | | | | | | | | | | | | |
| 34 | 道倉遺跡 | 42 | 道倉遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 43 | 武季遺跡 | 44 | 三才遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 45 | 筑摩北山原遺跡 | 46 | 小松下遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 47 | 筑摩南川原遺跡 | 48 | 千原北遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 49 | 神田遺跡 | 49 | 神田遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 50 | 神田西遺跡 | 50 | 神田西遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 51 | 平原遺跡 | 51 | 平原遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 52 | 中山内宮群(精進山) | 52 | 中山内宮群(精進山) | | | | | | | | | | | | |
| 53 | 生差遺跡 | 53 | 生差遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 54 | 聖府遺跡 | 54 | 聖府遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 55 | 林遺跡 | 55 | 林遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 56 | 林城址(小塚) | 56 | 林城址(小塚) | | | | | | | | | | | | |
| 57 | 林山遺跡 | 57 | 林山遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 58 | 林山趾(大塚) | 58 | 林山趾(大塚) | | | | | | | | | | | | |
| 59 | 大崎崎遺跡 | 59 | 大崎崎遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 60 | わの宮遺跡 | 60 | わの宮遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 61 | 藤倉遺跡 | 61 | 藤倉遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 62 | 入山辺南方遺跡 | 62 | 入山辺南方遺跡 | | | | | | | | | | | | |
| 63 | 水津城址 | 63 | 水津城址 | | | | | | | | | | | | |
| 64 | 弘正山古墳 | 64 | 弘正山古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 65 | 御符古墳 | 65 | 御符古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 66 | 南方古墳 | 66 | 南方古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 67 | 人久1~2号墳 | 67 | 人久1~2号墳 | | | | | | | | | | | | |
| 68 | 上金井古墳 | 68 | 上金井古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 69 | 石上古墳 | 69 | 石上古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 70 | 古吉古墳 | 70 | 古吉古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 71 | 里山辺塚古墳 | 71 | 里山辺塚古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 72 | 野塚古墳 | 72 | 野塚古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 73 | 大塚1~2号墳 | 73 | 大塚1~2号墳 | | | | | | | | | | | | |
| 74 | 北河原塚古墳 | 74 | 北河原塚古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 75 | 惣社塚古墳 | 75 | 惣社塚古墳 | | | | | | | | | | | | |
| 76 | 前塚1~2号墳 | 76 | 前塚1~2号墳 | | | | | | | | | | | | |

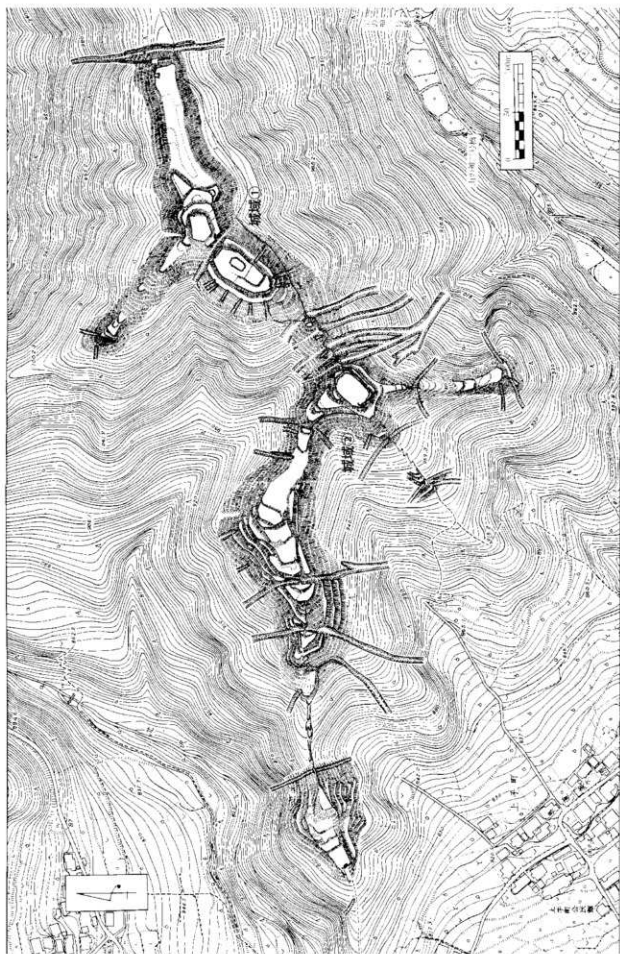
※ 赤線は中世以前の遺跡



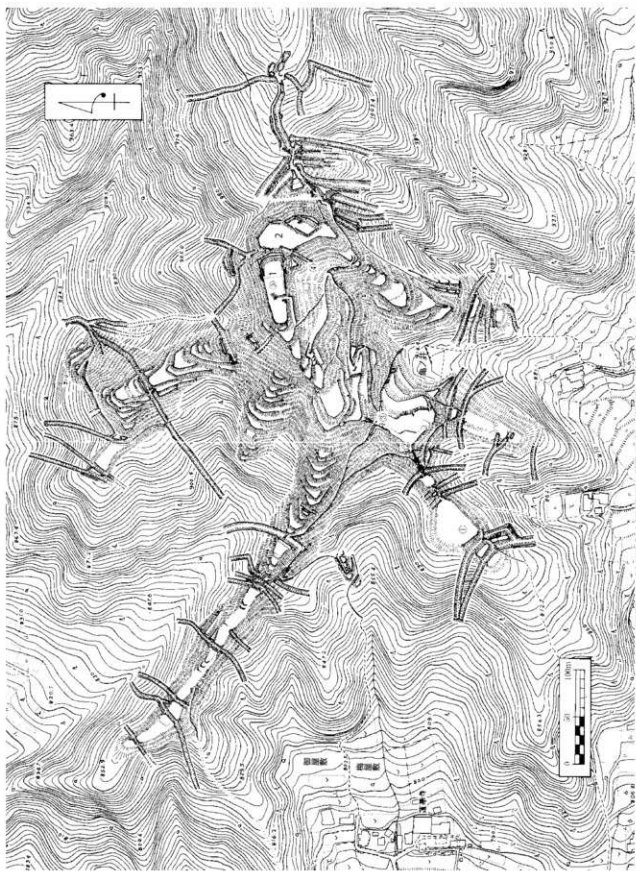
図版2 松本市域の主要城館誌



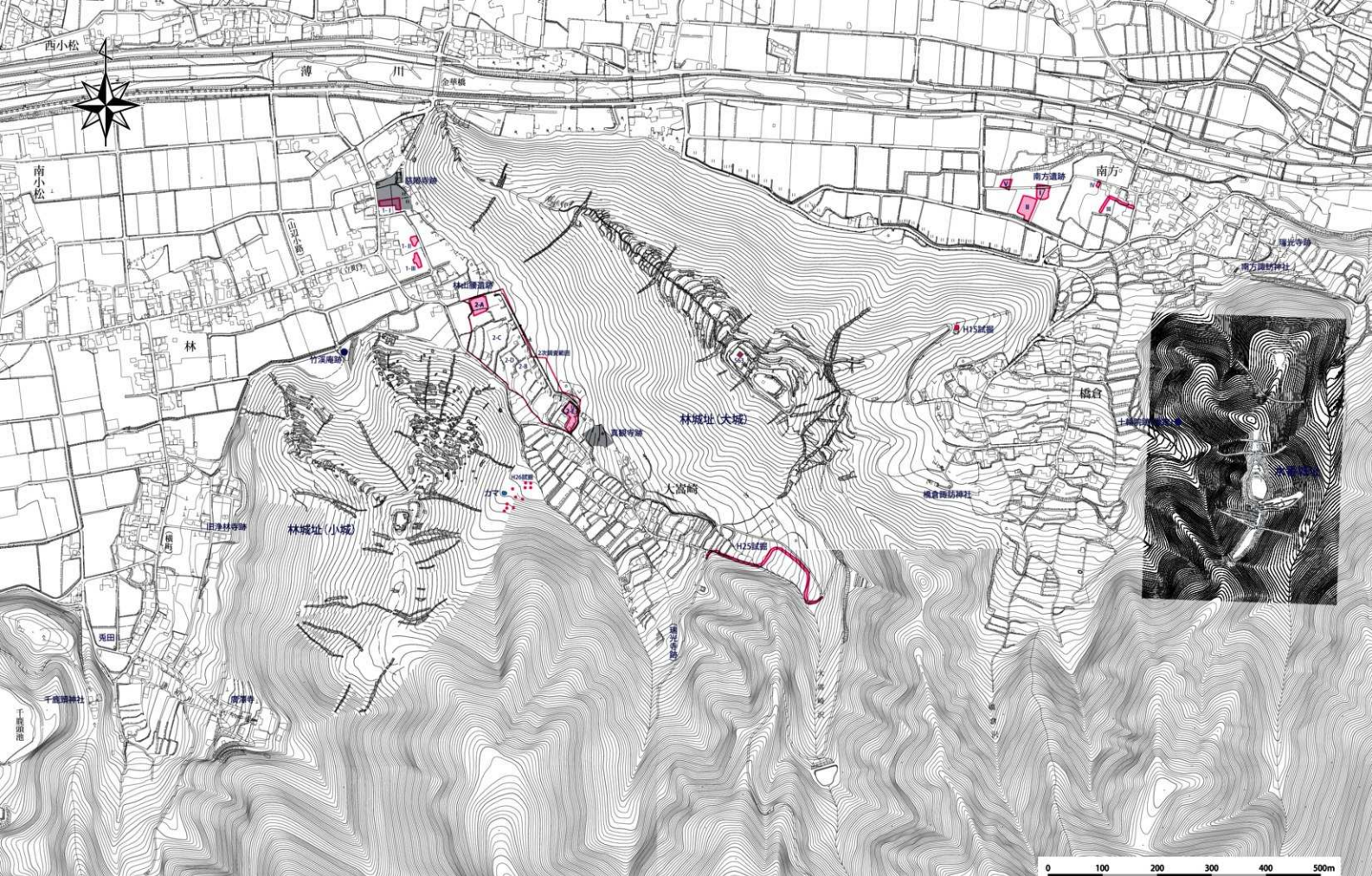
図版3 桐原城址縄張図（三島正之作図・『松本市史』所収）
『桐原城古図』（部分・松本市市立博物館所蔵）



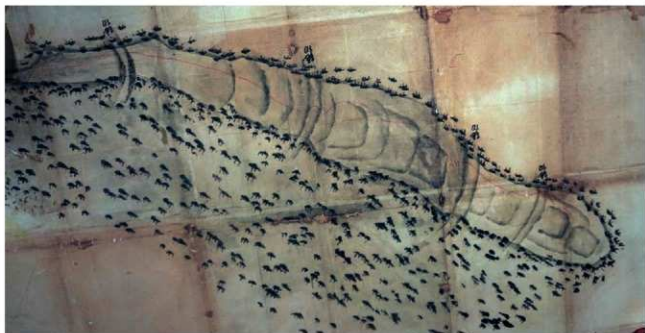
图版 4 山家城址補張図 (福原圭一作図・『松本市史』所収)



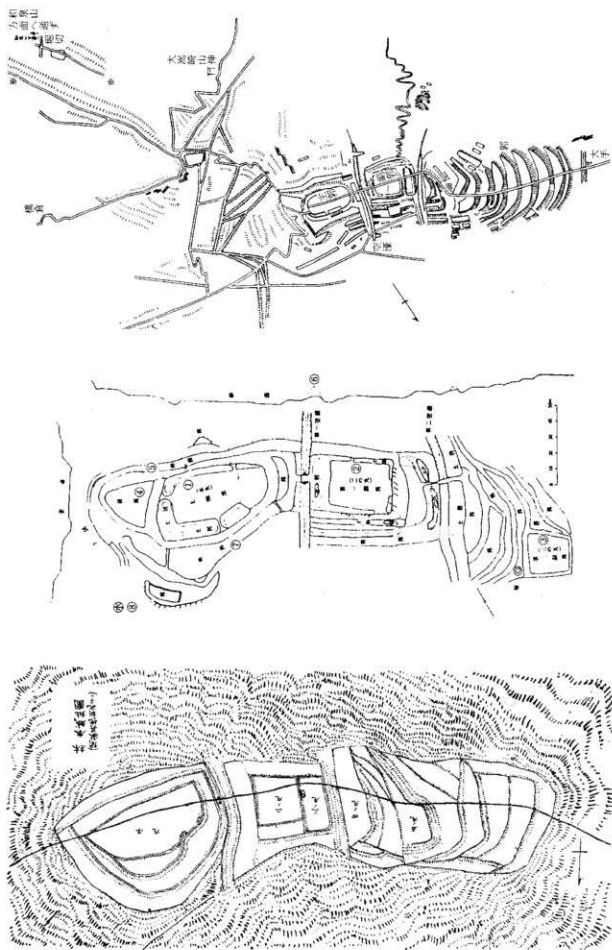
图版5 福原城北縄張り図（福原圭一作図・「松本市史」所収）



図版 6 林城址(大城・小城)と周辺の遺跡・文化財



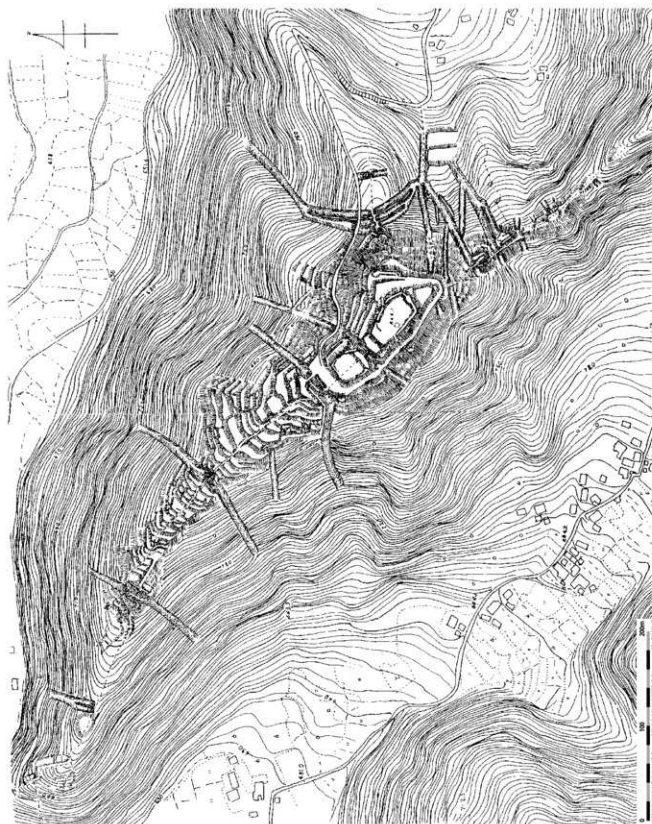
図版 8 『文政 3 年慈眼寺論所立会絵図』に見る林大城（里山辺公民館所蔵の複写を撮影）
昭和 23 年の林大城（米軍撮影、国土地理院 WEB サイトから引用、トリミング）



図版 9 林大城見取図 (左:『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』、中・右:『信濃の山城』所収)



圖版 10 林大城關圖 (宮坂武男作圖)



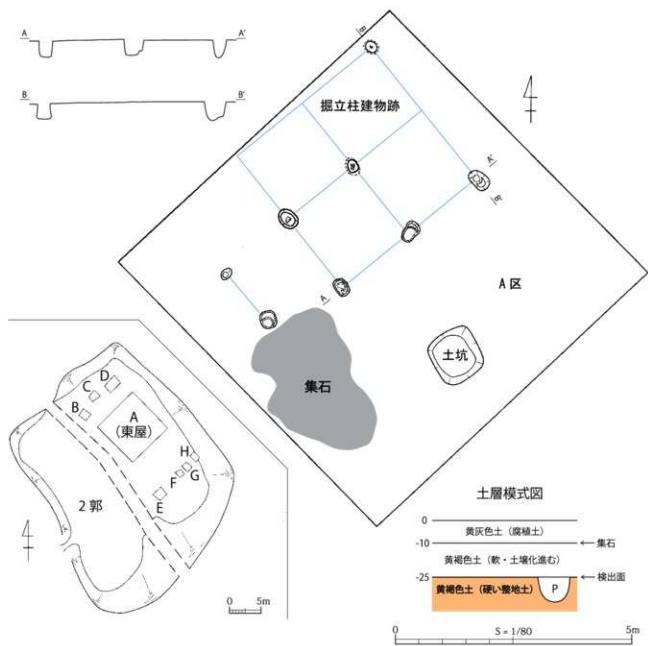
图版 11 林大城補強図（三島正之作図・松本市史」所収）



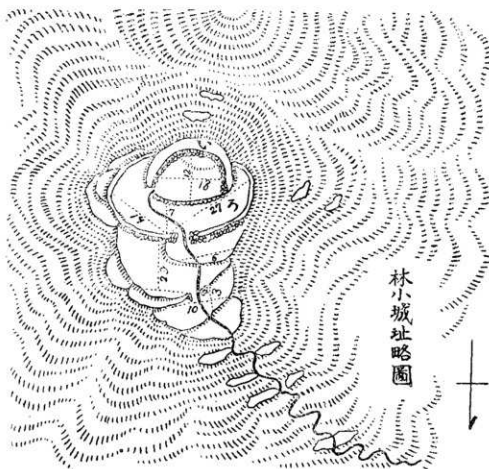
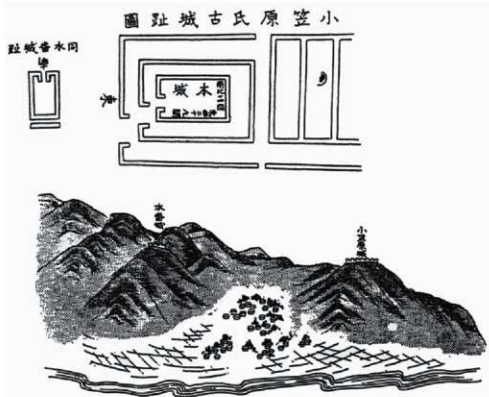
表土直下の集石遺構検出状況（南から）



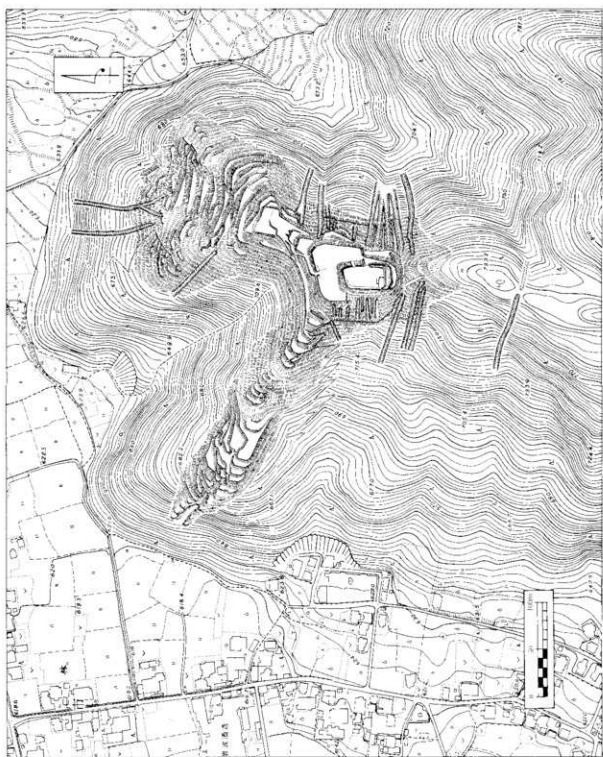
掘立柱建物跡・土坑完掘状況（東から）



図版 12 林大城昭和 63 年 II 郭東屋建設に伴う発掘調査平面図



圖版 13 林城址見取図・鳥瞰図、林小城見取図（『長野県町村誌』所収）

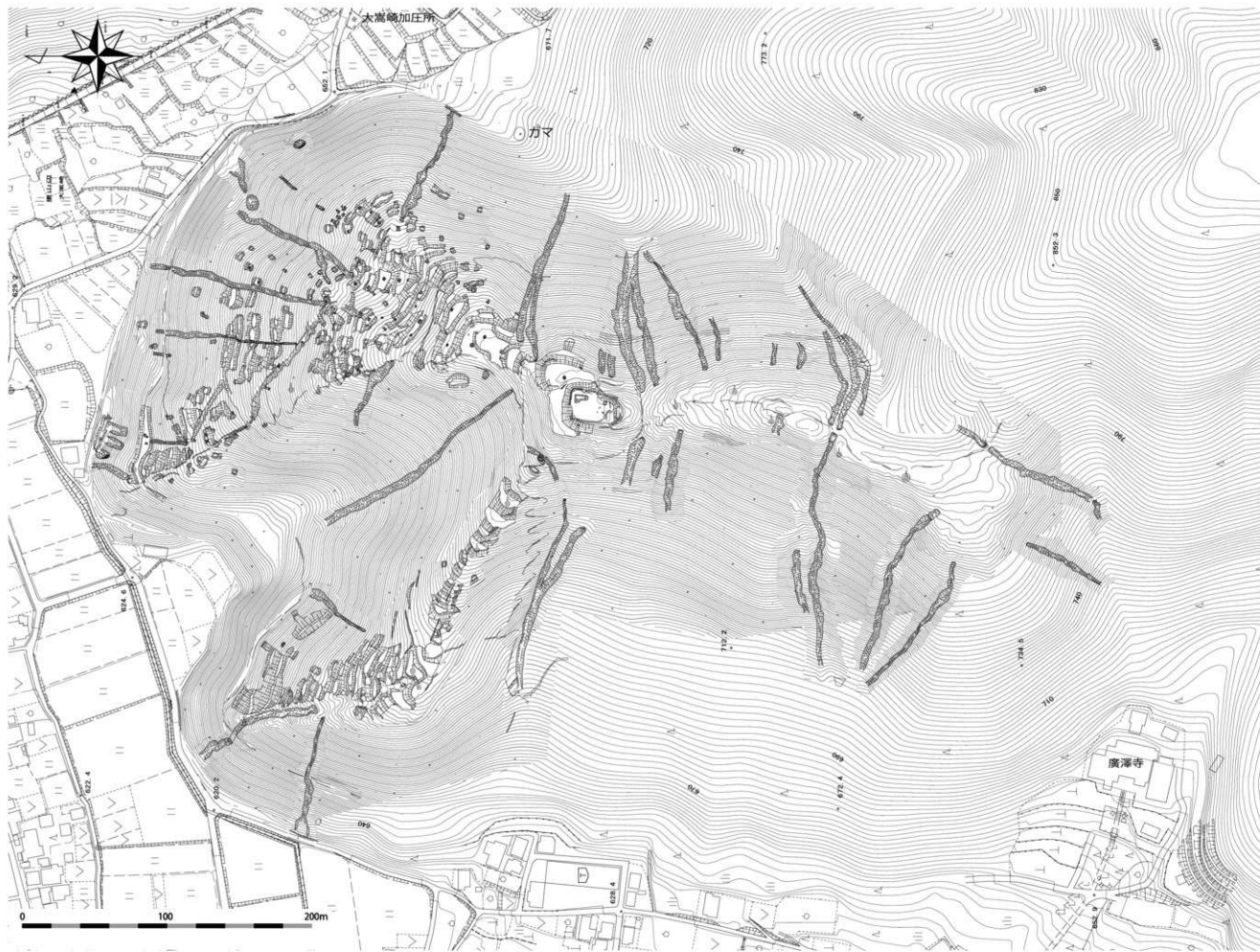


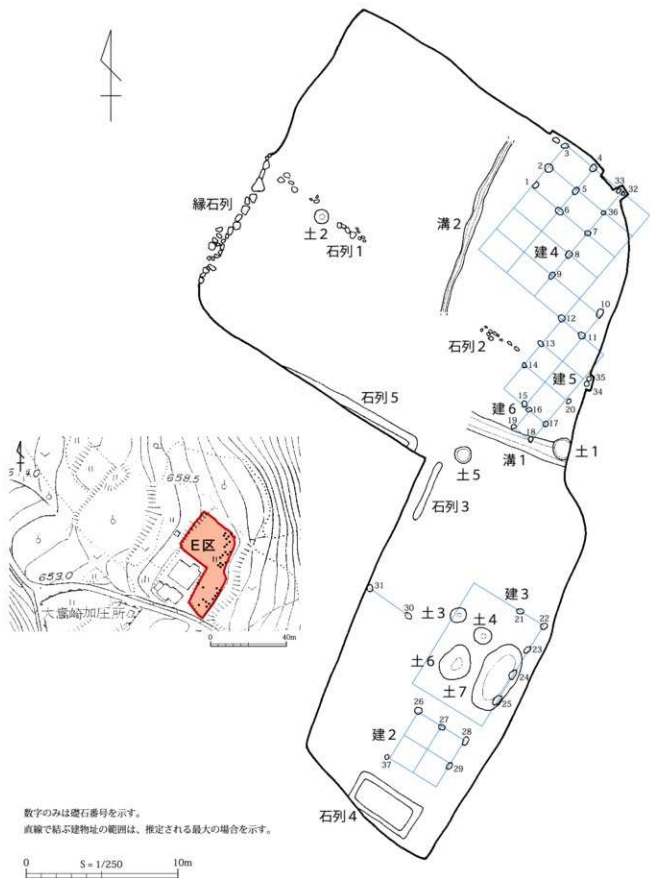
図版 14 林小城縄張り図（福原圭一作図・『松本市史』所収）



圖版 15 水番城址縄張図 (福原圭一作図・『松本市史』所収)

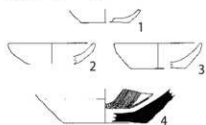
林敏址・旧林町址見取図 (『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』所収)



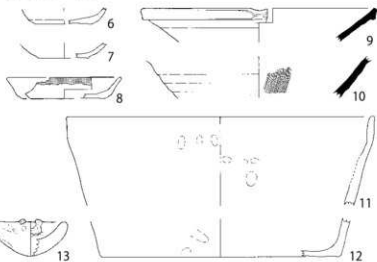


図版 17 林山腰遺跡 E 地区全体図

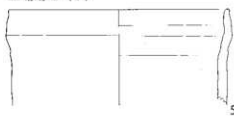
工場跡1 (1~4)



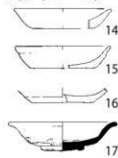
A区 (6~13)



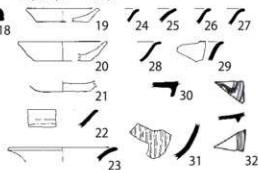
工場跡2 (5)



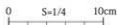
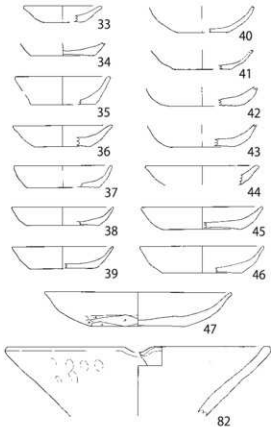
B区 (14~18)



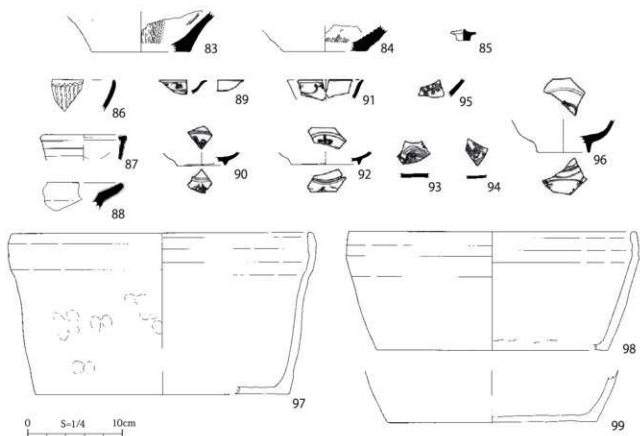
C区 (19~32)



E区 (33~99)



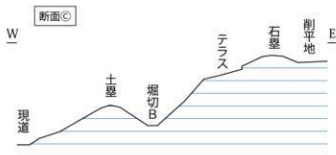
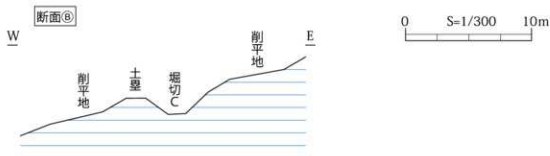
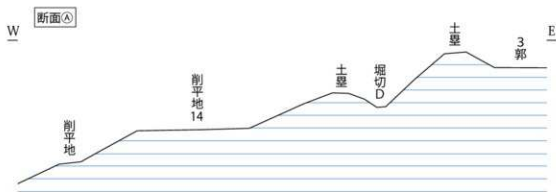
図版 18 林山腰遺跡出土焼物(1)



焼物観察表

№	出土地点	種類	形状	特徴	備考
1	土師窯	土師土器	丸底	丸底	51 ESK 1-7
2	土師窯	土師土器	丸底	丸底	52 ESK 丸底土器
3	土師窯	土師土器	丸底	丸底	53 ESK 丸底
4	土師窯	土師土器	丸底	丸底	54 ESK 丸底
5	土師窯	土師土器	丸底	丸底	55 ESK 丸底
6	AK	土師土器	丸底	丸底	56 ESK 丸底土器
7	AK	土師土器	丸底	丸底	57 ESK 丸底
8	AK	土師土器	丸底	丸底	58 ESK 丸底
9	AK	土師土器	丸底	丸底	59 ESK 丸底
10	AK	土師土器	丸底	丸底	60 ESK 丸底土器
11	AK	土師土器	丸底	丸底	61 ESK 丸底
12	AK	土師土器	丸底	丸底	62 ESK 丸底
13	AK	土師土器	丸底	丸底	63 ESK 丸底
14	AK	土師土器	丸底	丸底	64 ESK 丸底
15	AK	土師土器	丸底	丸底	65 ESK 丸底
16	AK	土師土器	丸底	丸底	66 ESK 丸底
17	AK	土師土器	丸底	丸底	67 ESK 丸底
18	AK	土師土器	丸底	丸底	68 ESK 丸底
19	AK	土師土器	丸底	丸底	69 ESK 丸底
20	AK	土師土器	丸底	丸底	70 ESK 丸底土器
21	AK	土師土器	丸底	丸底	71 ESK 丸底
22	AK	土師土器	丸底	丸底	72 ESK 丸底
23	AK	土師土器	丸底	丸底	73 ESK 丸底
24	AK	土師土器	丸底	丸底	74 ESK 丸底
25	AK	土師土器	丸底	丸底	75 ESK 丸底
26	AK	土師土器	丸底	丸底	76 ESK 丸底土器
27	AK	土師土器	丸底	丸底	77 ESK 丸底
28	AK	土師土器	丸底	丸底	78 ESK 丸底
29	AK	土師土器	丸底	丸底	79 ESK 丸底
30	AK	土師土器	丸底	丸底	80 ESK 丸底土器
31	AK	土師土器	丸底	丸底	81 ESK 丸底土器
32	AK	土師土器	丸底	丸底	82 ESK 丸底
33	AK	土師土器	丸底	丸底	83 ESK 丸底
34	AK	土師土器	丸底	丸底	84 ESK 丸底
35	AK	土師土器	丸底	丸底	85 ESK 丸底
36	AK	土師土器	丸底	丸底	86 ESK 丸底土器
37	AK	土師土器	丸底	丸底	87 ESK 丸底
38	AK	土師土器	丸底	丸底	88 ESK 丸底
39	AK	土師土器	丸底	丸底	89 ESK 丸底
40	AK	土師土器	丸底	丸底	90 ESK 丸底
41	AK	土師土器	丸底	丸底	91 ESK 丸底
42	AK	土師土器	丸底	丸底	92 ESK 丸底
43	AK	土師土器	丸底	丸底	93 ESK 丸底
44	AK	土師土器	丸底	丸底	94 ESK 丸底
45	AK	土師土器	丸底	丸底	95 ESK 丸底
46	AK	土師土器	丸底	丸底	96 ESK 丸底
47	AK	土師土器	丸底	丸底	97 ESK 丸底
48	AK	土師土器	丸底	丸底	98 ESK 丸底
49	AK	土師土器	丸底	丸底	99 ESK 丸底

図版 19 林山腰遺跡出土焼物2)、一覧表

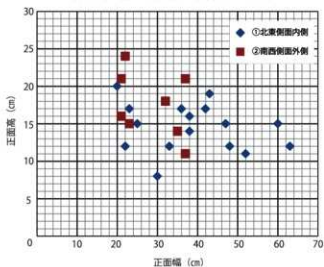


削平地群切岸計測値

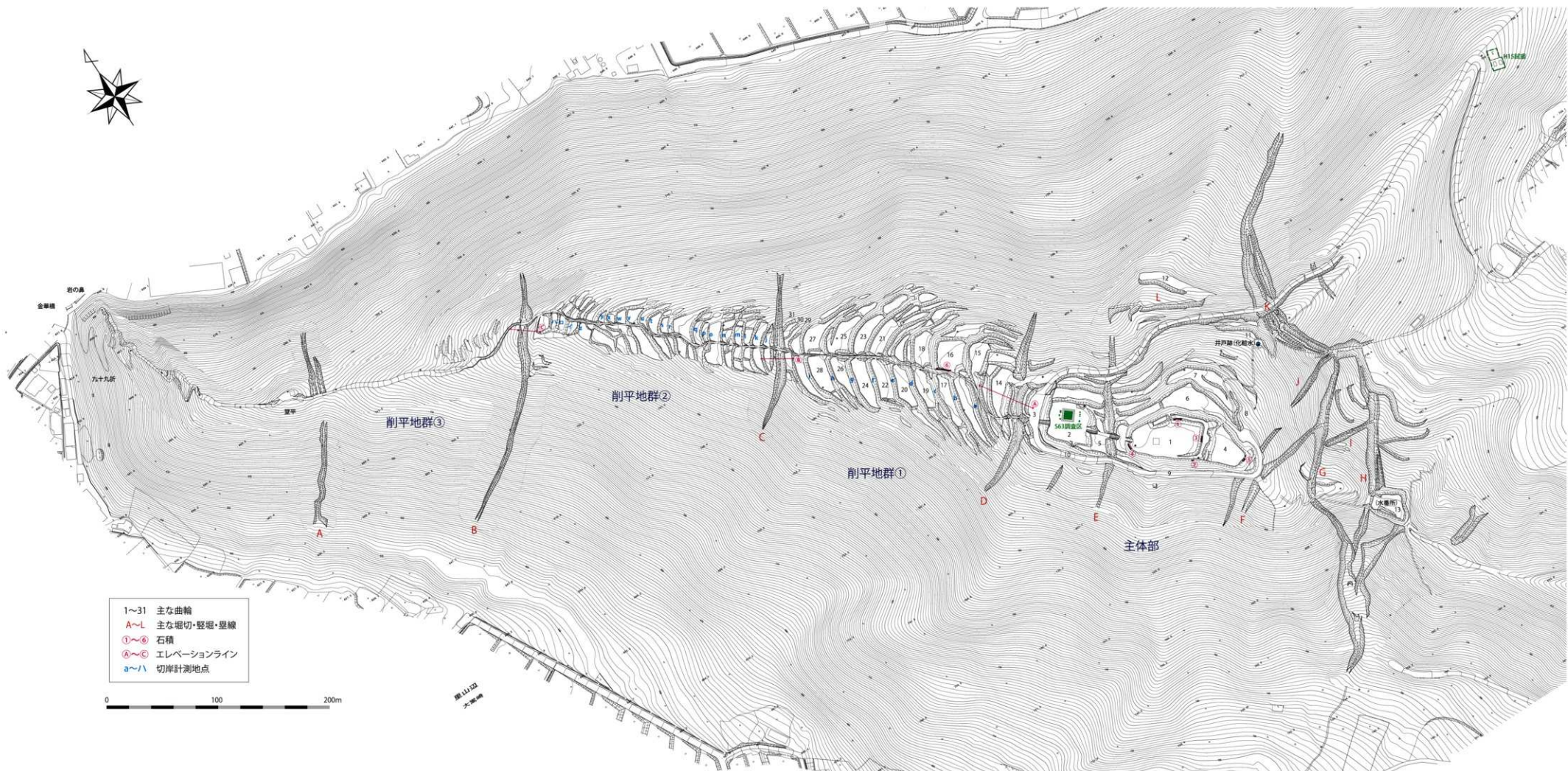
地点	法面長(cm)	斜度(°)	上端標高(m)
a	400	40	821.5
b	530	38	818.2
c	550	46	815.1
d	550	42	810.2
e	410	39	806.2
f	530	36	803.1
g	470	40	800.0
h	400	41	796.1
i	370	39	793.1
j	230	36	786.0
k	250	34	784.0
l	180	26	782.2
m	150	20	781.0
n	170	26	779.5
o	110	26	778.3
p	120	26	777.6
q	270	36	776.4
r	410	36	774.3
s	200	33	772.0
t	180	38	770.1
u	170	31	768.5
v	160	26	767.2
w	120	26	766.2
x	160	27	765.1
y	250	32	764.0
z	360	22	761.1
イ	270	32	758.3
ロ	170	32	757.0
ハ	210	32	755.3

(計測地点は図版21に記載)

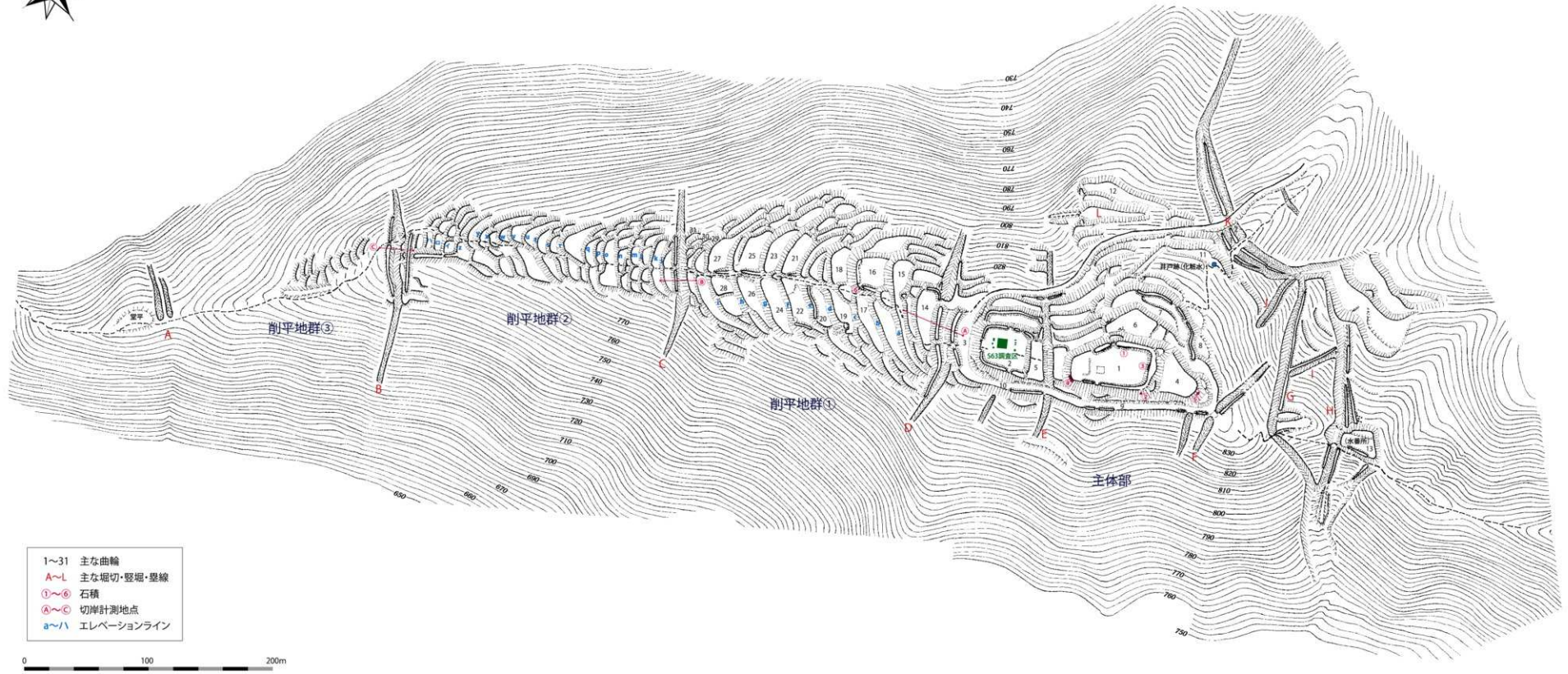
林大城主郭土壘石積の築石大きさ分布



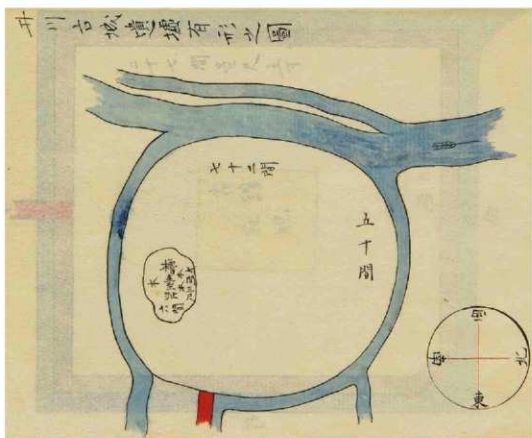
図版 20 林大城削平地群切岸計測値・石積計測値・堀切断面図



図版 21 林大城詳細測量図

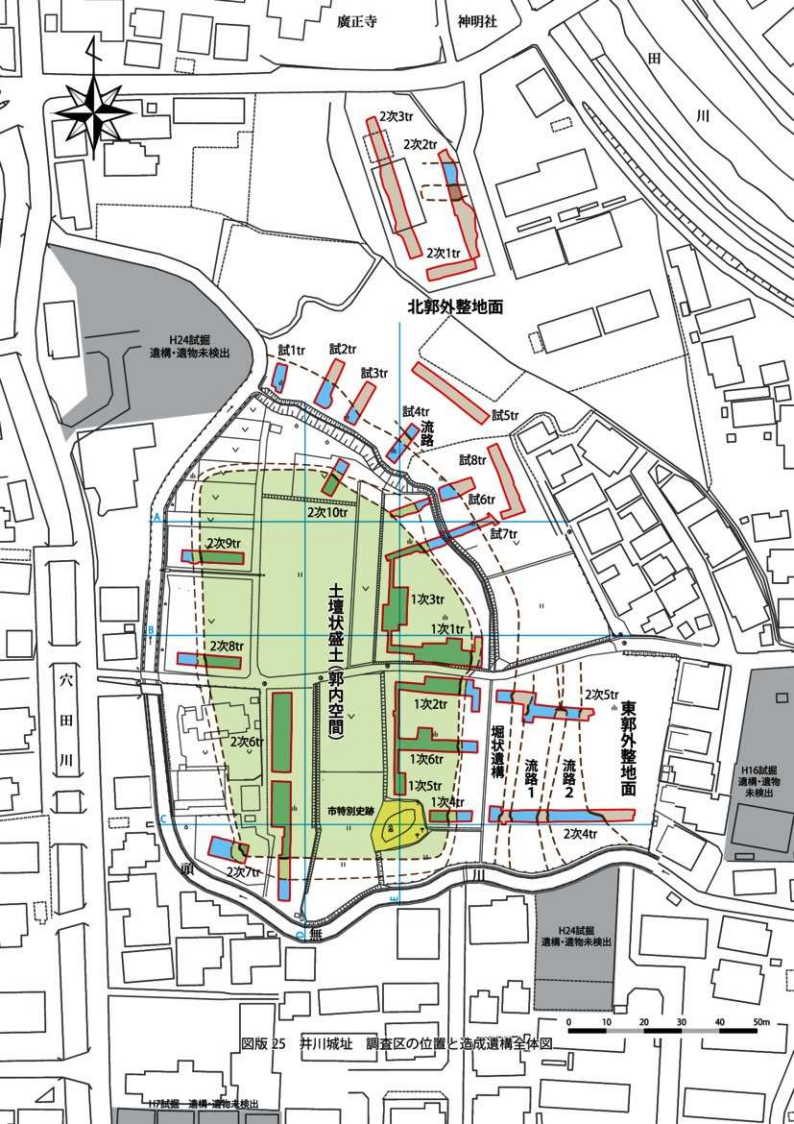


- 1~31 主な曲輪
- A~L 主な堀切・壁堀・塁線
- ①~③ 石積
- A~C 切岸計測地点
- a~ハ エレベーションライン

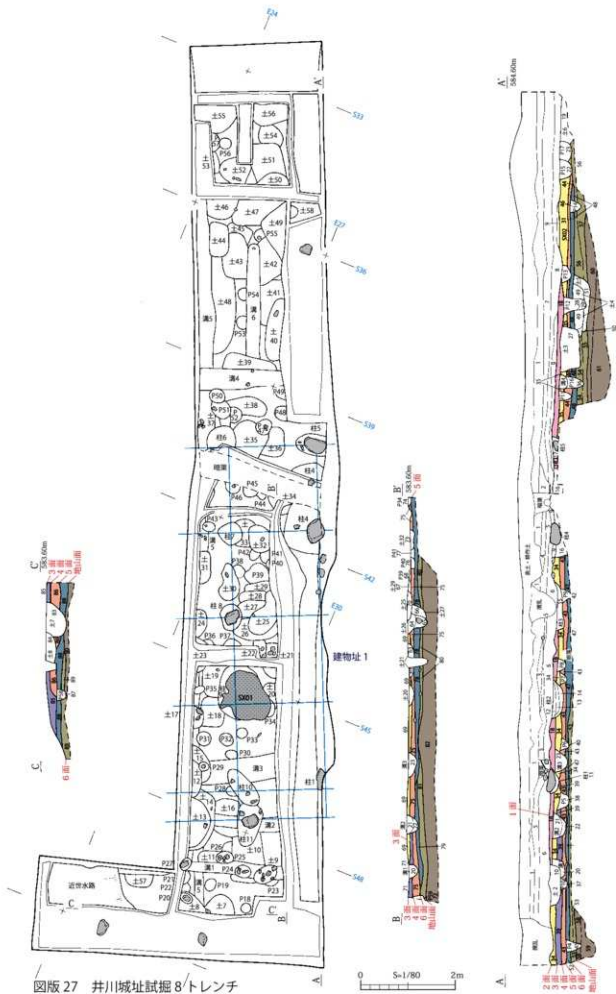


図版 23 『小島村絵図』（松本城管理事務所所蔵）に見る
明治期の井川城址付近
井川城址見取図（『東筑摩郡村誌』所収）

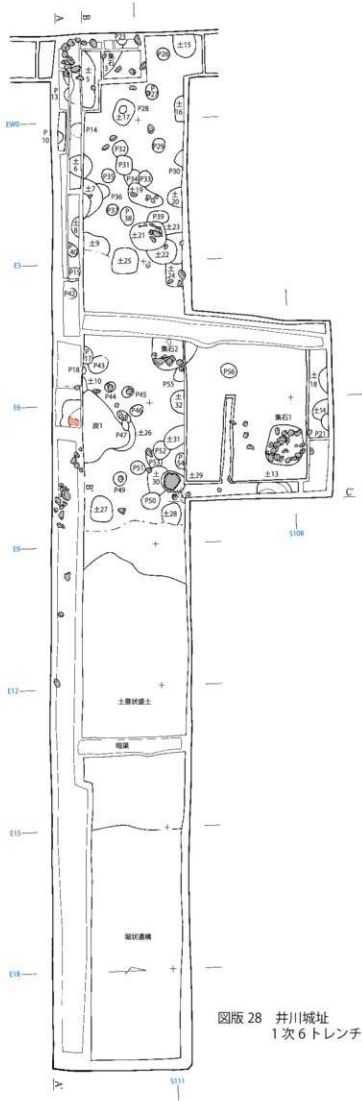
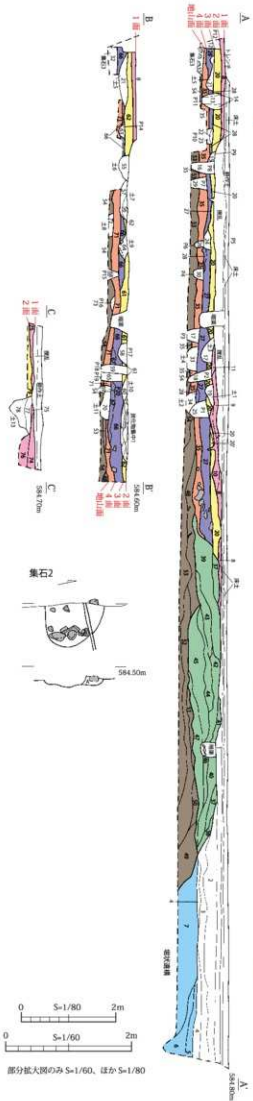




図版 25 井川城址 調査区的位置と造成遺構全体図

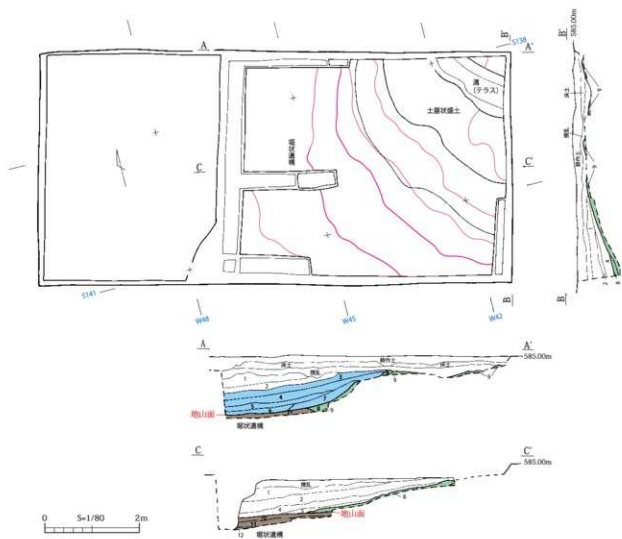


図版 27 井川城址試掘 8 トレンチ



図版 28 井川城址
1次6トレンチ

※ 部分拡大図のみ S=1/60、ほか S=1/80

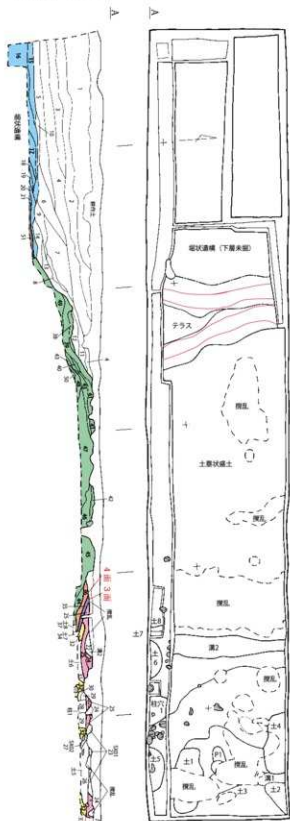


遺構各図凡例

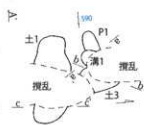
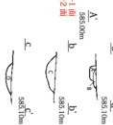
● 1面整地土	● 4面整地土	● 地山
● 1'面整地土	● 5面整地土	● 土層状盛土 (土塁)
● 2"面整地土	● 6面整地土	● 堀状遺構下層堆積土
● 2'面整地土	● 7面整地土	● 堀状遺構人為堆積土
● 3面整地土	● 8面整地土	● 木 ○ 石
	● 9面整地土	— 主郭法面の等高線 (10cm)

図版 29 井川城址 2次7トレンチ

2次8トレンチ

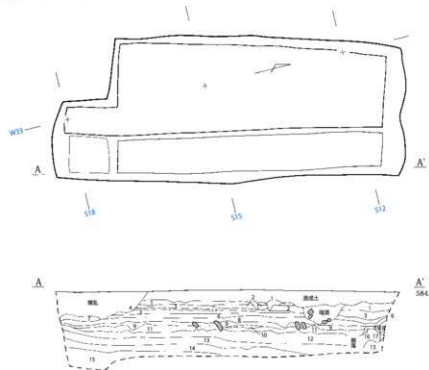


2次9トレンチ

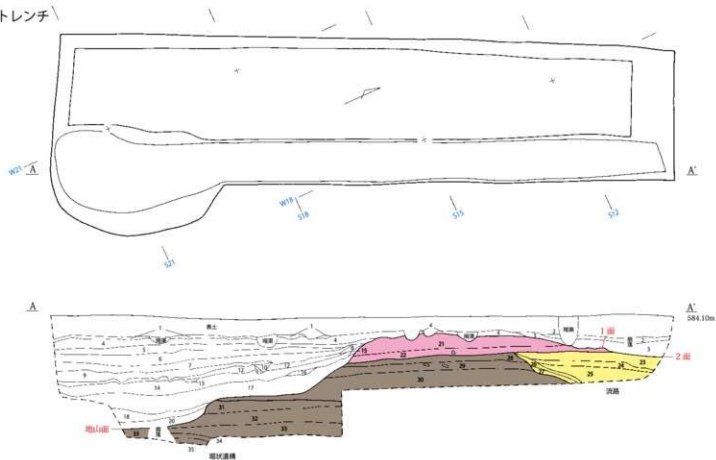


図版30 井川城址2次8・9トレンチ

試掘1トレンチ



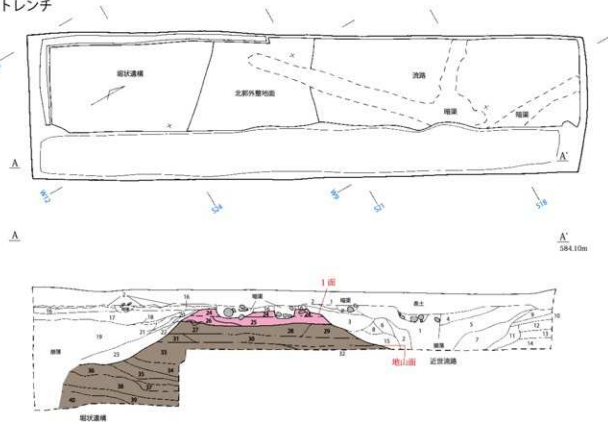
試掘2トレンチ



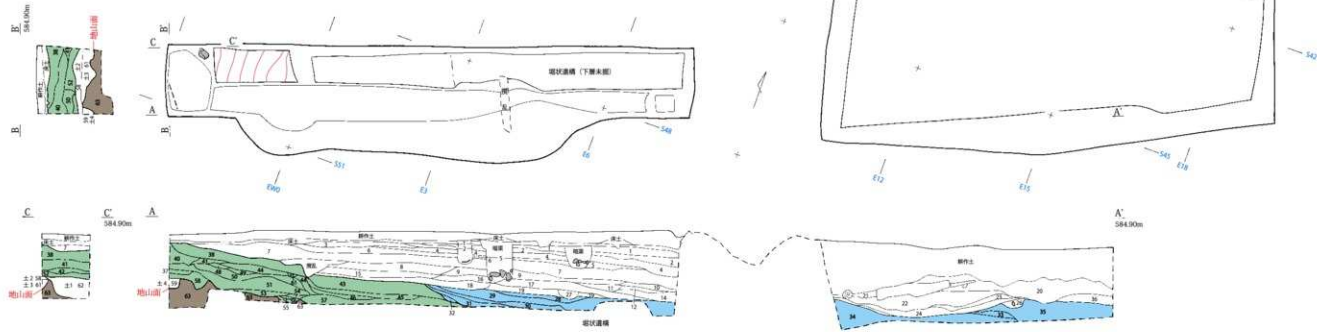
2次10トレンチ



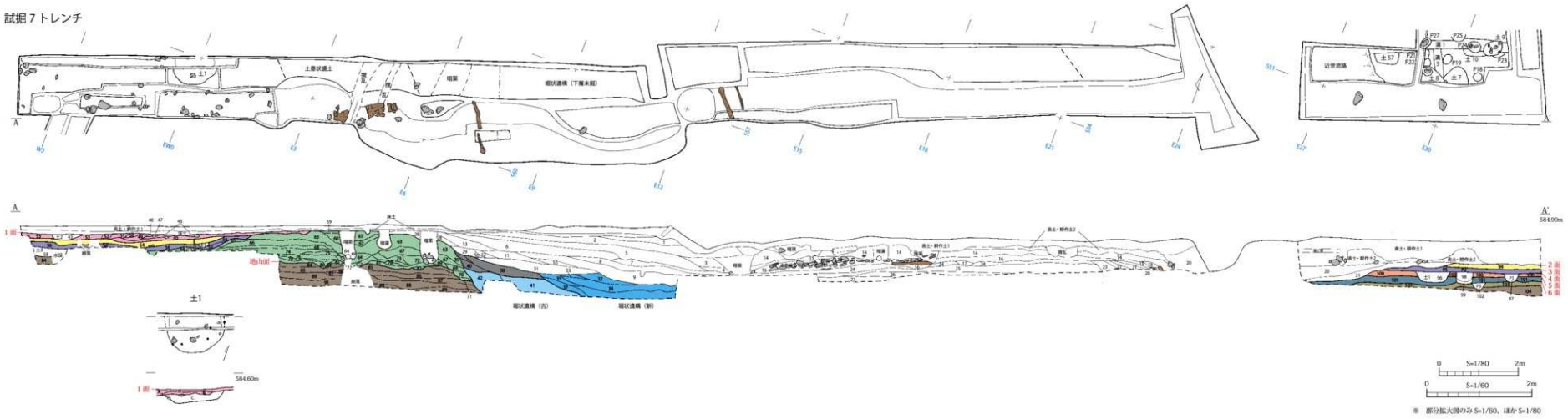
試掘3トレンチ



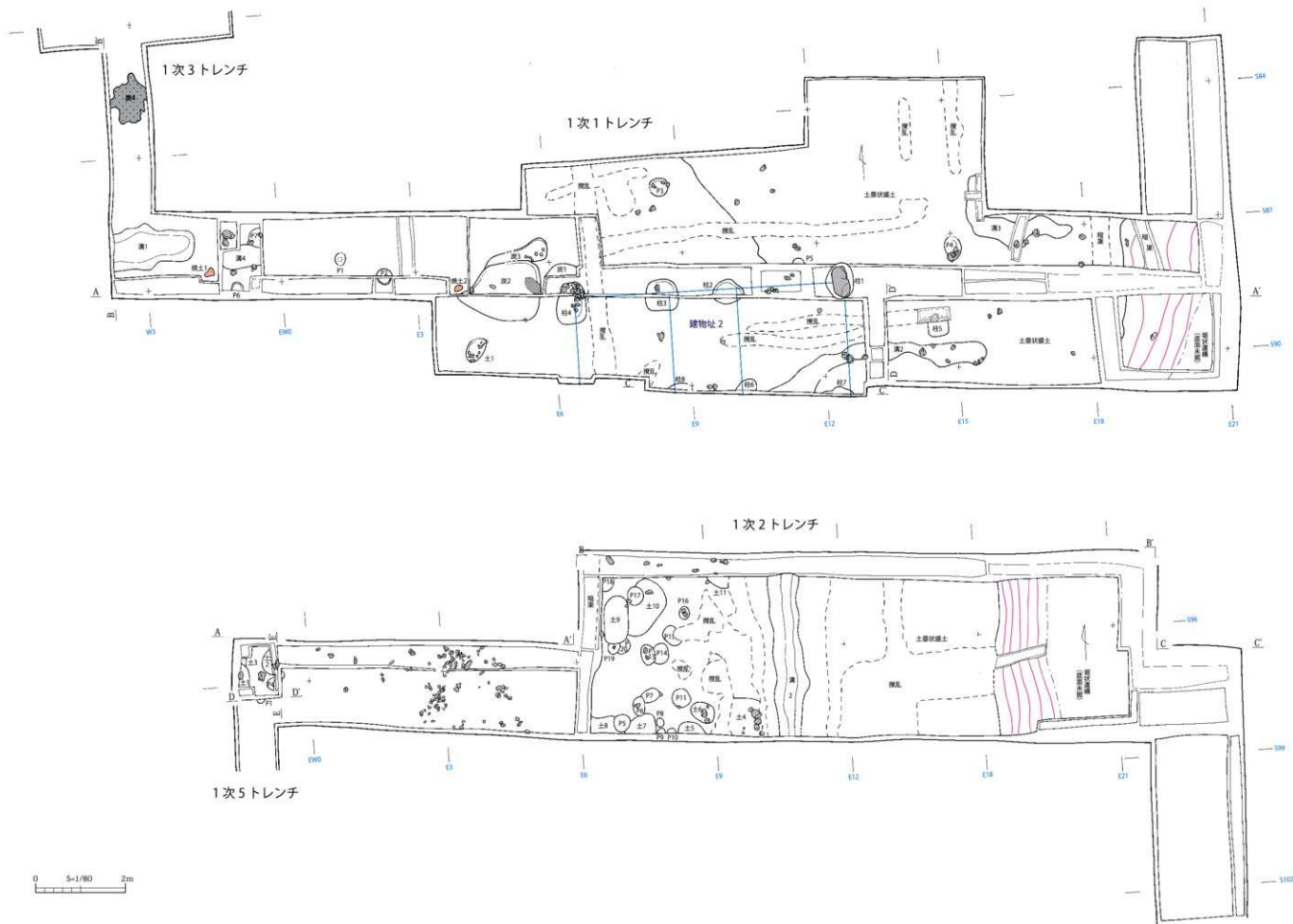
試掘 6 トレンチ

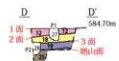
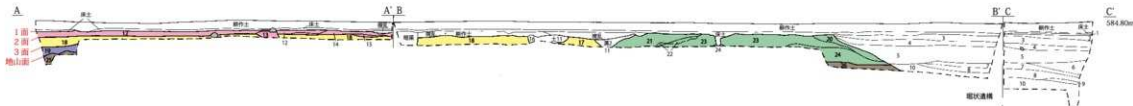
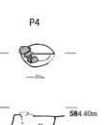
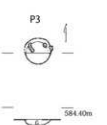
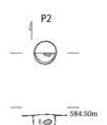
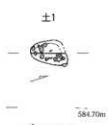
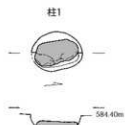
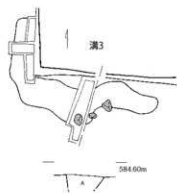
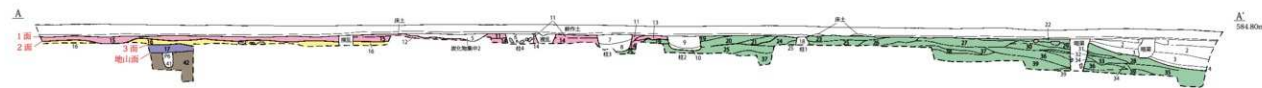


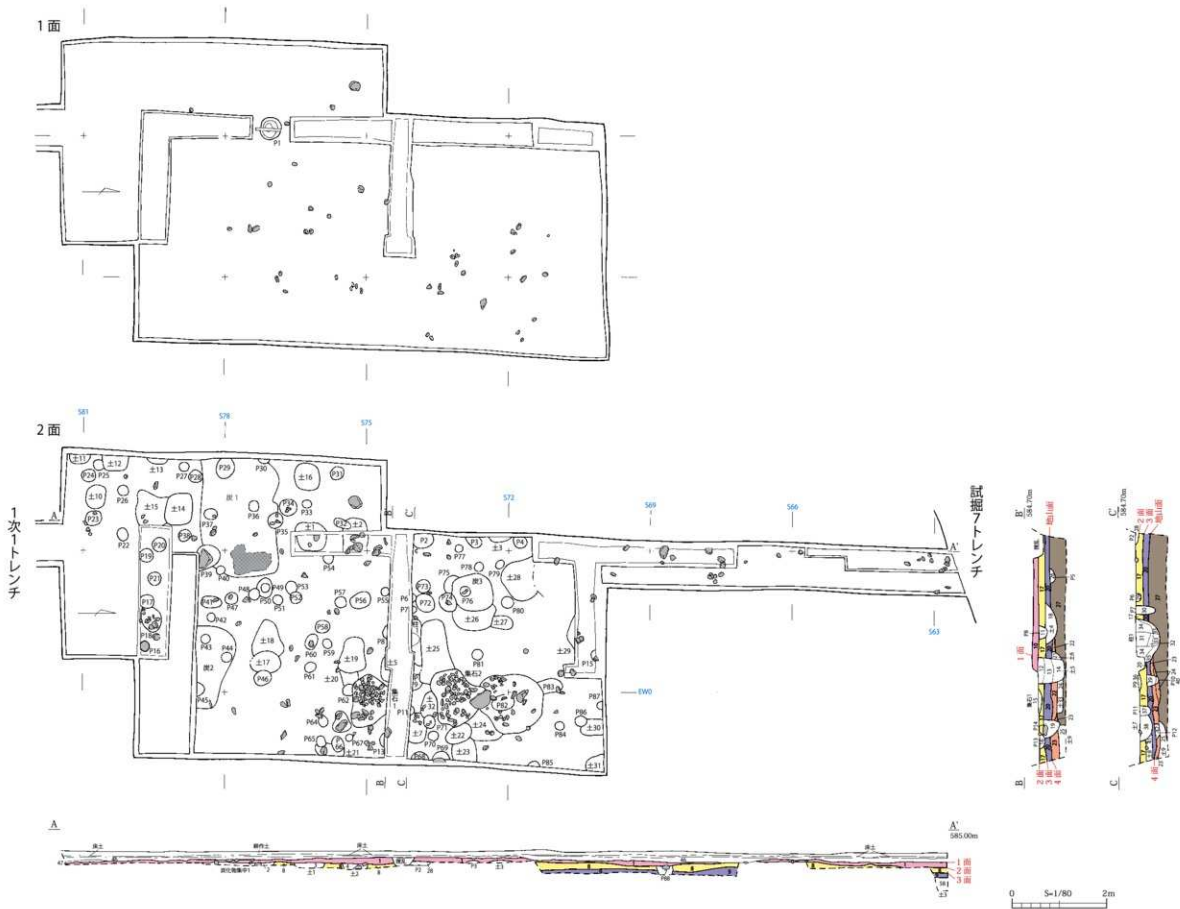
試掘 7 トレンチ



※ 部分拡大図のみ S=1/60、ほか S=1/80

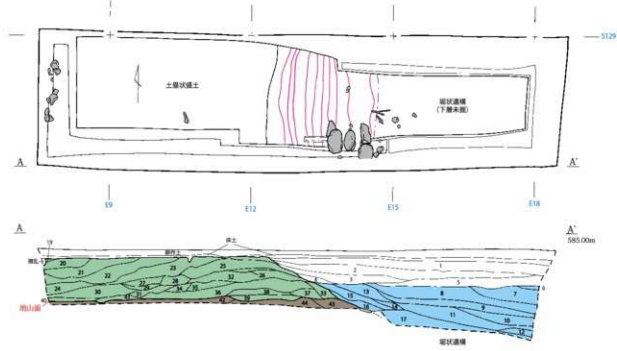




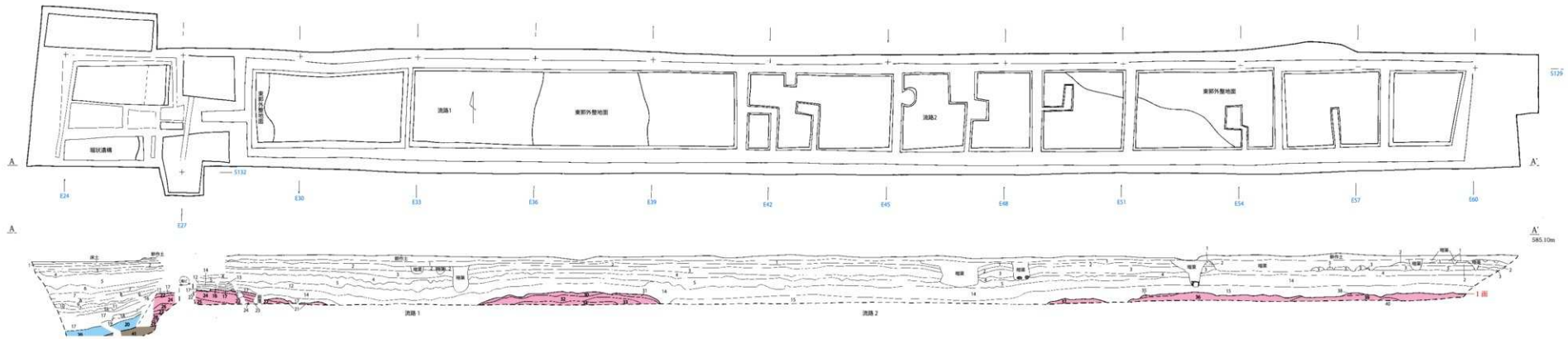


図版 36 井川城址 1次3トレンチ — 225・226 —

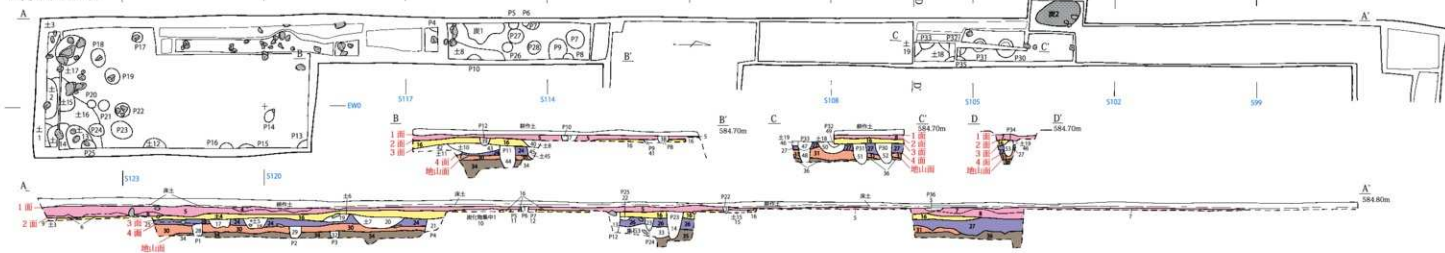
1次4トレンチ



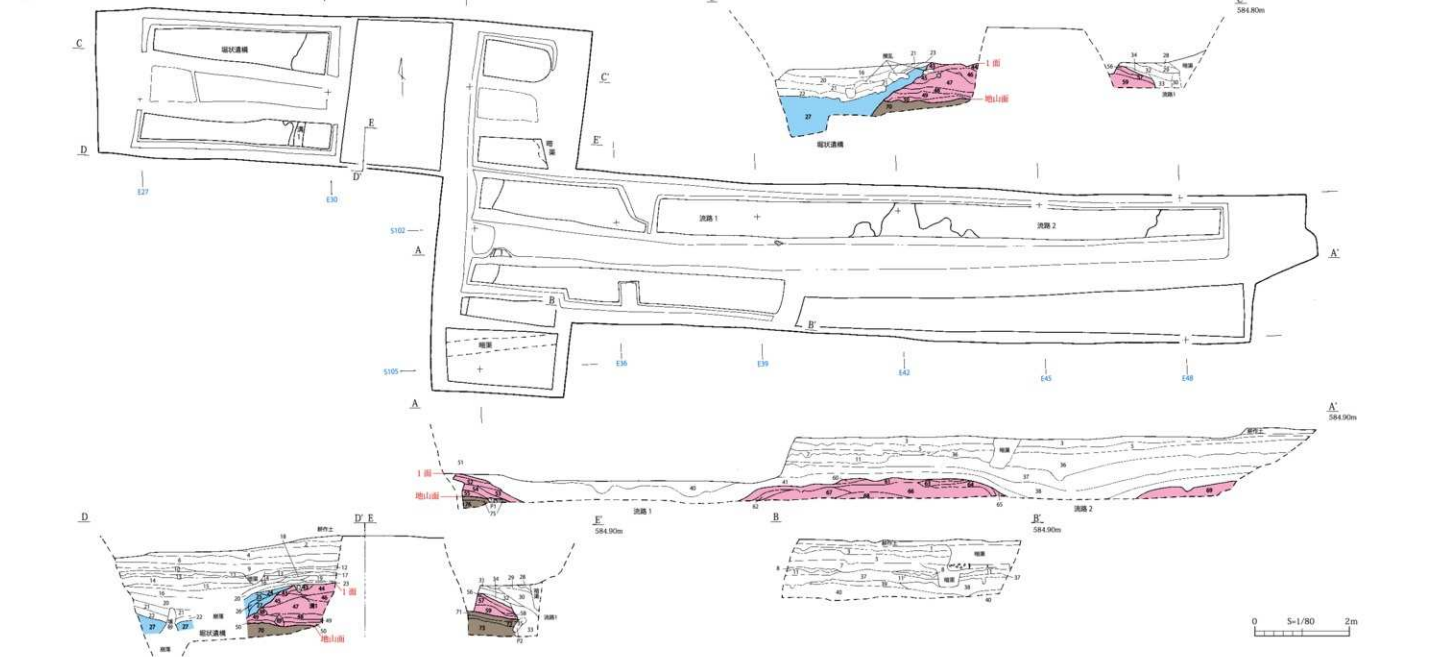
2次4トレンチ



1次5トレンチ

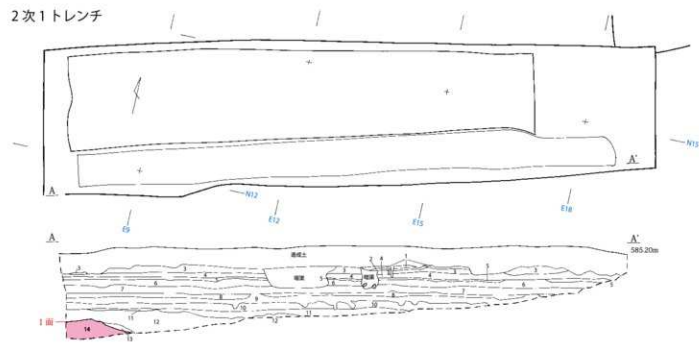


2次5トレンチ

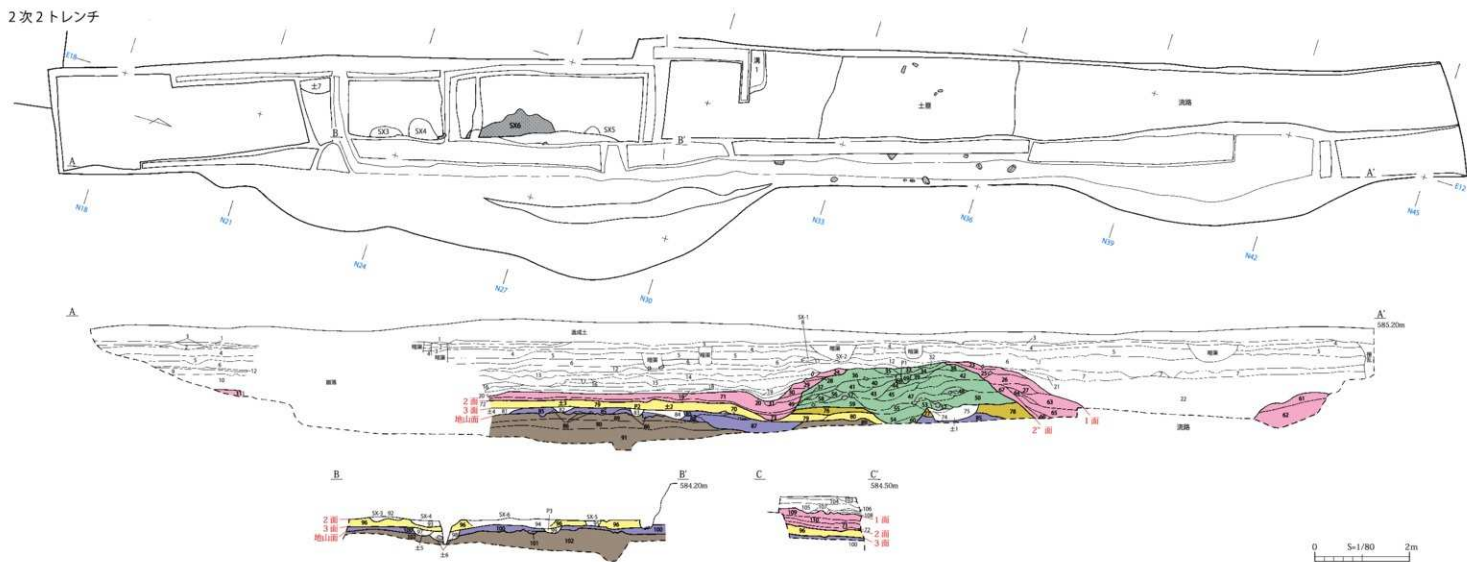


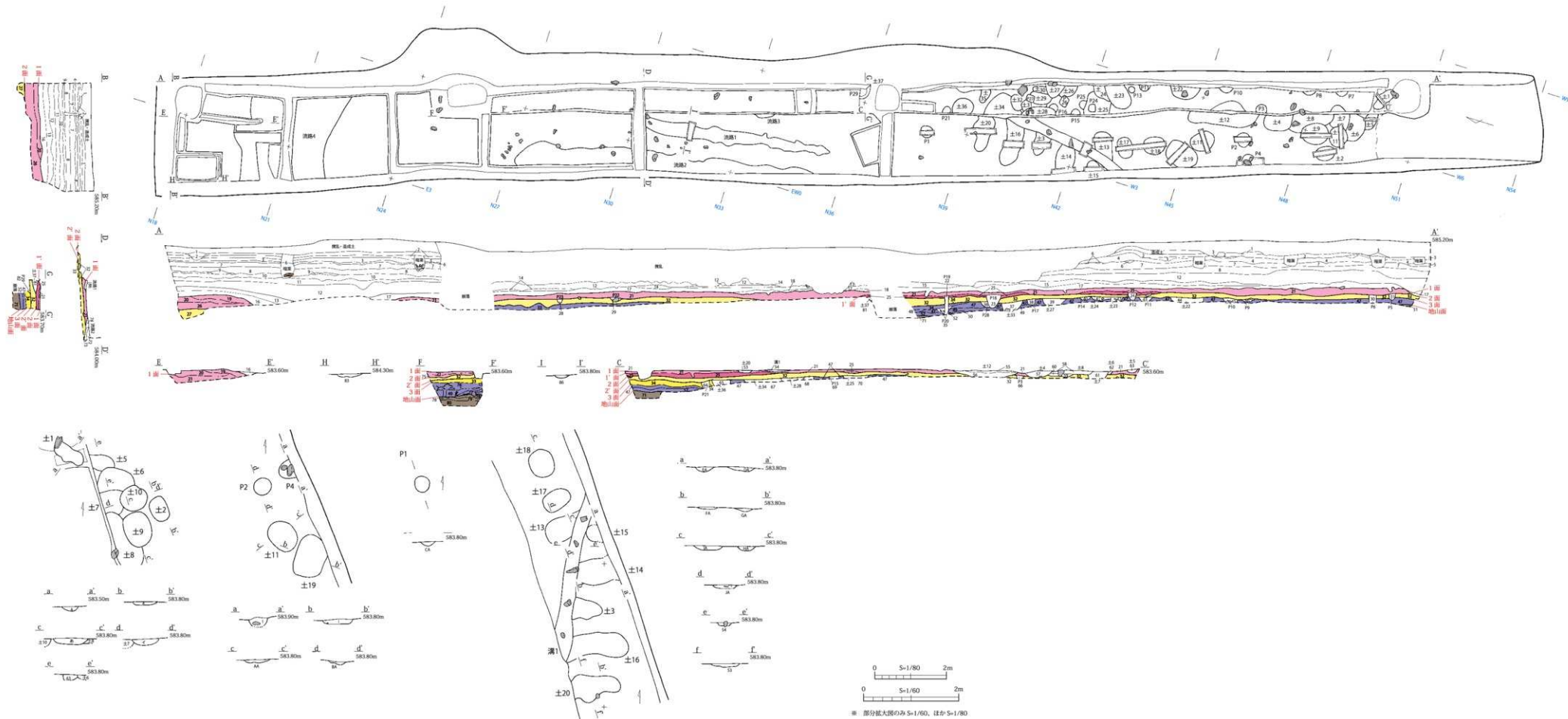
図版 38 井川城址 1次5トレンチ・2次5トレンチ

2次1トレンチ

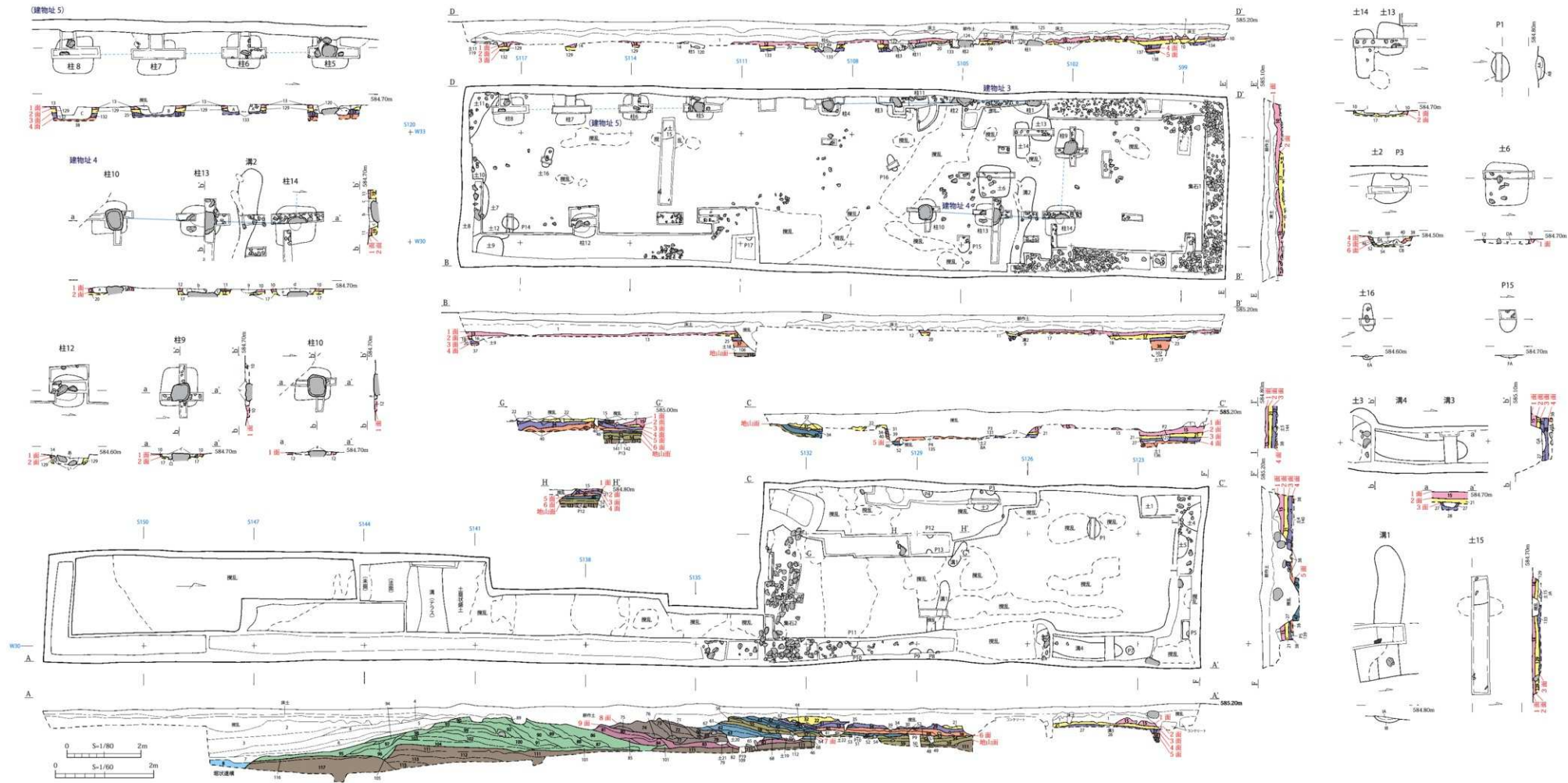


2次2トレンチ



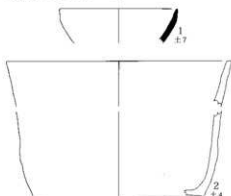


図版 40 井川城址 2次3トレンチ



試掘5 トレンチ (1~13)

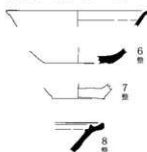
北郭外6面 (1~2)



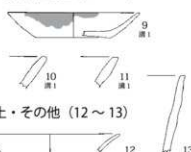
北郭外5面 (3~4)



北郭外2面 (5~8)



郭外堆積土 (9~11)



排土・その他 (12~13)



試掘6 トレンチ (14~17)

地山 (14)



郭外堆積土 (15~16)

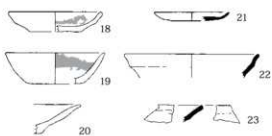


排土・その他 (17)



試掘7 トレンチ (18~40)

土壘状盛土 (18~23)



4面 (24)



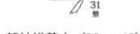
3面 (25~27)



2面 (28~31)



1面 (32~33)



郭外堆積土 (39~40)



1~3面 (34~38)



試掘8 トレンチ (41~72)

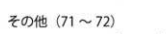
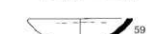
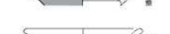
北郭外3面 (41)



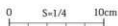
北郭外2面 (42)



北郭外1~3面 (43~70)



その他 (71~72)



図版 42 井川城址 焼物1)

1次1トレンチ (73~83)

3面 (73~74)



1面 (75)



1~3面 (76~79)



1次2トレンチ (84~104)

2面 (84~86)



1面 (87)



郭外堆積土 (91)

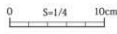
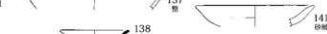
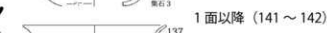
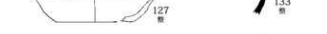
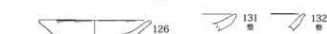


表土・攪乱 (92~104)



1次3トレンチ (105~147)

2面 (105~122)



図版 43 井川城址 焼物2

1次3トレンチ(105~147)

表土・攪乱(143~147)



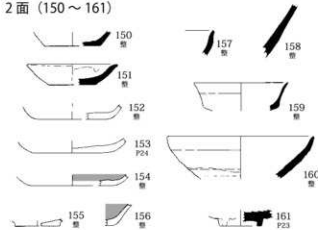
1次4トレンチ(148~149)

堀状遺構堆積土(148) 郭外堆積土(149)

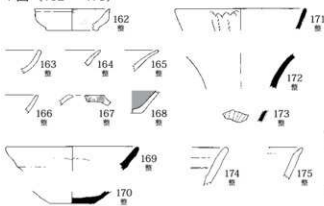


1次5トレンチ(150~180)

2面(150~161)



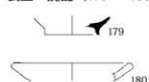
1面(162~175)



1~2面(176~178)

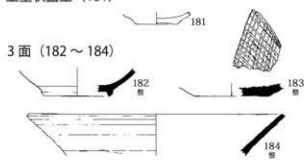


表土・攪乱(179~180)

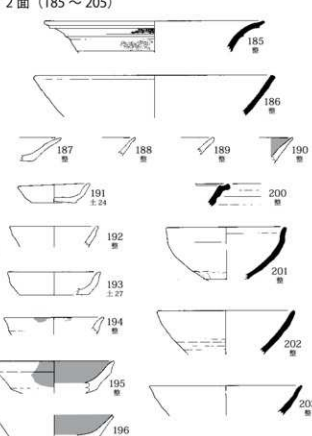


1次6トレンチ(181~229)

土壇状盛土(181)



2面(185~205)



表土・攪乱(197~199)



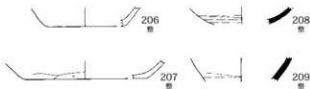
図版 44 井川城址 焼物3)

1次6トレンチ(181~229)

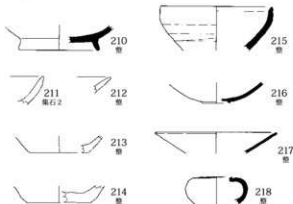
2面(185~205)



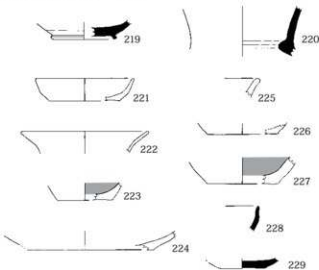
1面(206~209)



1~4面(210~218)

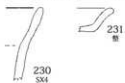


表土・攪乱(219~229)



2次2トレンチ(230~232)

北郭外3面(230~231)

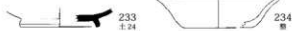


排土・その他(232)

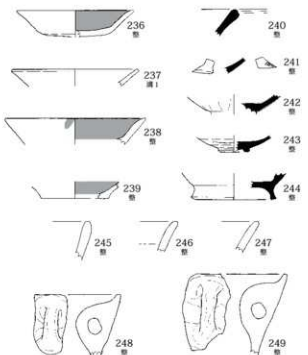


2次3トレンチ(233~254)

北郭外3面(233~235)



北郭外1面(236~252)



北郭外1面以前(253)



図版 45 井川城址 焼物(4)

2次3トレンチ (233～254)

郭外堆積土 (254)



2次5トレンチ (257～259)

東郭外整地 (257～258)



2次6トレンチ (260～327)

地山 (260)



土壘状盛土 (261)



3面 (262)



1面 (270～282)



2次4トレンチ (255～256)

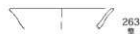
東郭外整地 (255～256)



郭外堆積土 (259)



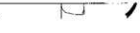
2面 (263～269)



6面以前 (283)



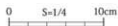
1～4面 (290～298)



1～2面集石 (284～289)



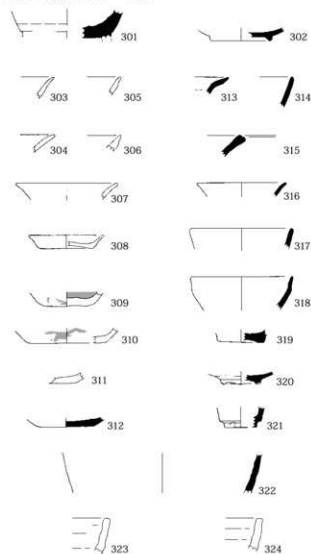
郭外堆積土 (299～300)



図版 46 井川城址 焼物5)

2次6トレンチ (260～327)

表土・攪乱 (301～325)



排土・その他 (326～327)



2次7トレンチ (328～329)

表土・攪乱 (328～329)



2次8トレンチ (330～334)

郭外堆積土 (330～332)



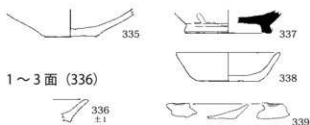
表土・攪乱 (333～334)



2次9トレンチ (335～343)

土壘状盛土 (335)

郭外堆積土 (337～340)



1～3面 (336)



表土・攪乱 (341～343)



2次10トレンチ (344～352)

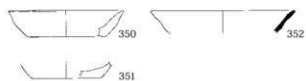
土壘状盛土 (344～345)



郭外堆積土 (346～349)

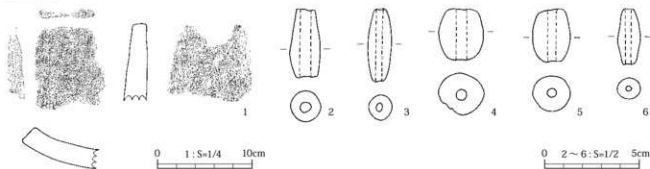


表土・攪乱 (350～352)

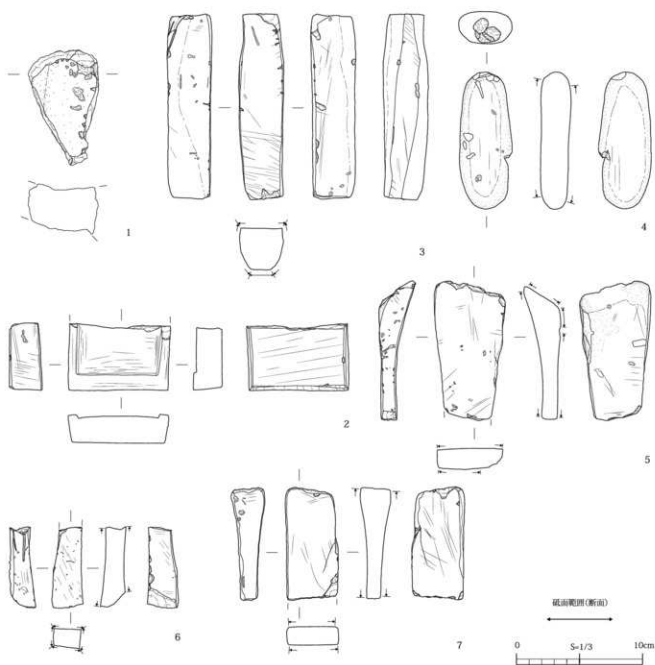


図版 47 井川城址 焼物(6)

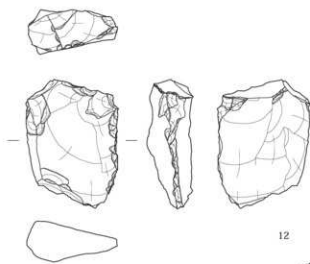
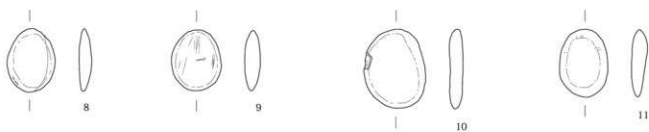
土製品



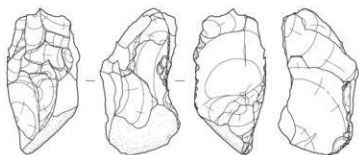
石製品



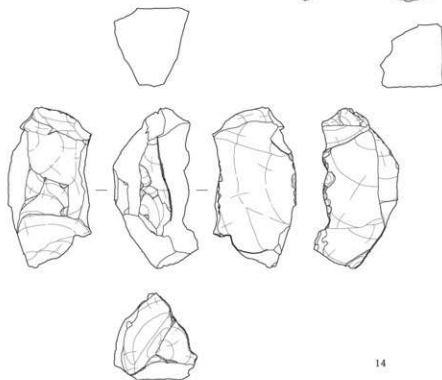
図版 48 井川城址 石器・石製品(1)



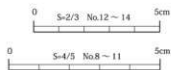
12



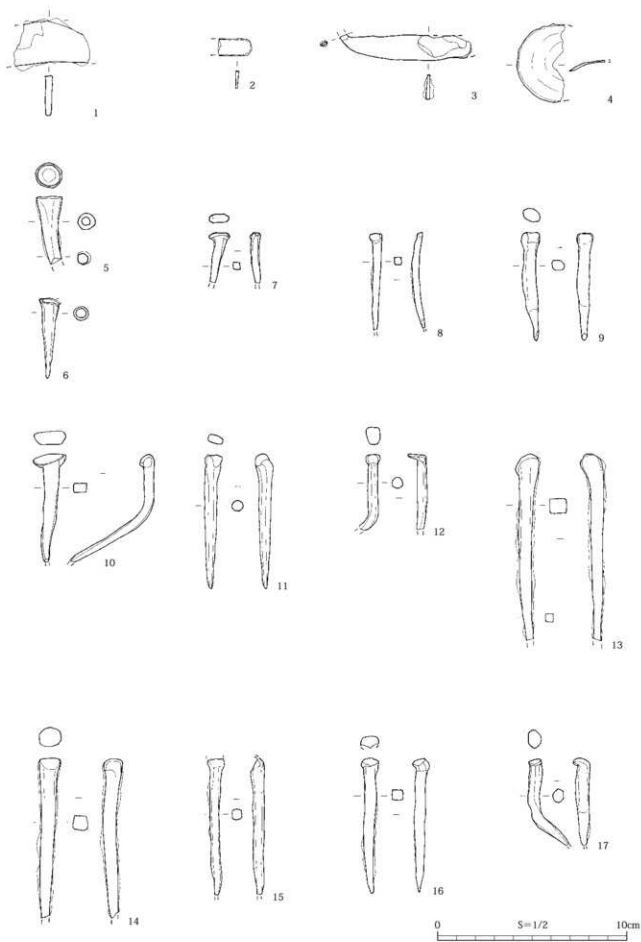
13



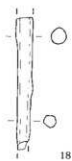
14



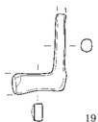
図版 49 井川城址 石器・石製品(2)



図版 50 井川城址 金属製品(1)



18



19



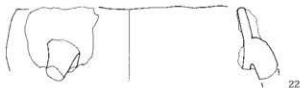
20



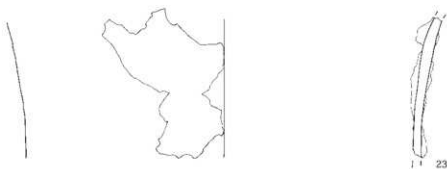
21



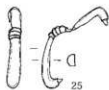
24



22



23



25



26



27



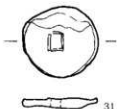
28



29



30



31



32



33



34

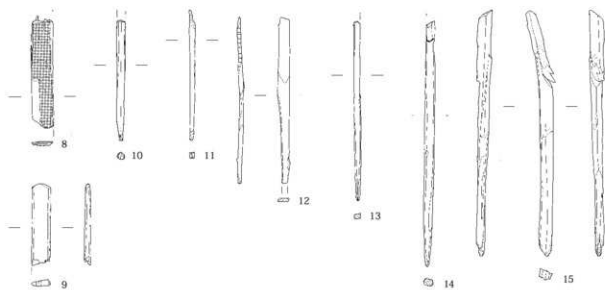
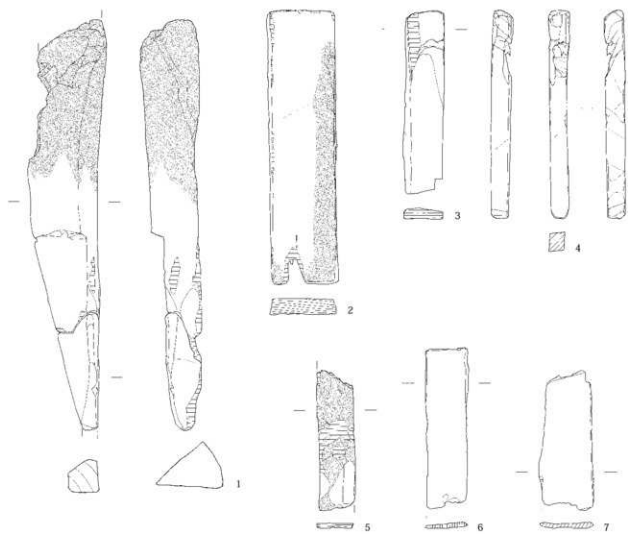


35

0 S=1/2 №18~30 10cm

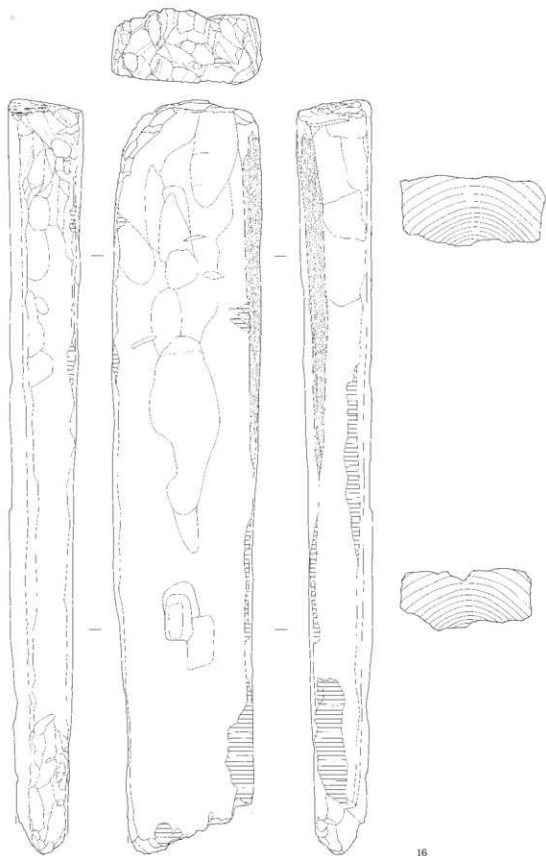
0 S=1/1 №31~35 5cm

図版 51 井川城址 金属製品[2]



0 S=1/3 10cm

図版 52 井川城址 木製品(1)



16

0 1/8 20cm

図版 53 井川城址 木製品(2)

史料



1 主要史料一覧

史料番号	和暦	西暦	月日	史料名	底本	所蔵者	収録文献	対象者・事項	呼称	史料の概要	歴史事象	備考
1	安元1年	1175	2月	八条院御日録	山科家古文書		平安御日古文書 巻10古文 5000号	挿庄	挿	八条院御として「挿(物)」がみられる		挿庄の初見
2	文治2年	1186	2月	未済正女注文	百源藏6		信史3-379	挿庄	挿中村庄	後白河院による関東河内国内の年貢米の月貢などに関する注文		八条院御としてみられる
3	文治2年	1186	10月27日		百源藏6		信史3-386	小笠原長清	地頭加賀美二部 長清	長清が年久郡野庄の年貢を納めたとされている		小笠原長清が挿中村庄の地頭となっており、 小笠原信房前司を小笠原宗長とするとする説があり、信濃守であった可能性が高い。
4	元亨3年	1323	10月26日	北条頼時十三郎忌日事記録	内野守文書	相関白東寺	信史5-43	小笠原宗長力	小笠原信房前司	信房、北條頼時十三郎忌日事を相関白東寺で行う。供養を進める信濃守氏の中に小笠原信房前司がみえる		
5	嘉暦4年	1329	5月	鎌倉幕府下知状案	守次文書	諏訪守矢氏	信史5-70	挿庄	挿庄半分	市河三助助辰を代官として和山へ馳せ参り奉行。府中の騒動にも関係し茂助等に至る。東京、若狭状を承る		
6	建武2年	1335	3月	市河勘助等若狭状	市河文書	山形県本間氏	信史5-260	小笠原貞宗	信濃守	足利将時より信濃国住吉庄・武田義五郎長頼・市河勘助ら御請を宛がひ貞宗に御向する	中先代の乱	中先代の乱
7	建武2年	1335	9月27日	足利尊氏下文	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖5	信史5-295	小笠原貞宗	信濃守	足利将時より伊那大徳寺城に兵を挙げ、東京、若狭御家人とともにこの城頭に御向する	中先代の乱	中先代の乱
8	建武2年	1335	9月30日	市河勘助同助保書判状	市河文書	山形県本間氏	信史5-298	小笠原貞宗	信州	北條時方が伊那大徳寺城に兵を挙げ、東京、若狭御家人とともにこの城頭に御向する		
9	暦応3年	1340	6~10月	守矢直實手記	守次文書	諏訪守矢氏	信史5-441	小笠原貞宗	諏訪守護	北條時方が伊那大徳寺城に兵を挙げ、東京、若狭御家人とともにこの城頭に御向する		
10	康永3年	1344	11月12日	小笠原貞宗講状案	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖15	信史5-480	小笠原貞宗	信濃守	貞宗、頼子・守護職を譲る		
11	貞和3年	1347	4月26日	足利尊氏下文	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖16	信史5-554	小笠原貞宗	法師	足利尊氏、貞宗に頼子・鳥立など奉近重半分を列行する		
12	貞和3年	1347	5月28日		御日記八		信史6-2	小笠原貞宗	信乃入通正宗	貞宗地所する		
13	正平7年	1352	1月19日	足利尊氏御判御教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖23	信史6-126	小笠原政長	小笠原道江守	貞宗の政長に奉近重を安堵する		
14	正平7年	1352	1月19日	足利尊氏御判御教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖24	信史6-127	小笠原長基	小笠原兵衛頭	政長の頼朝長基に奉近重又所分を宛がう		
15	永徳3年	1383	2月12日	小笠原清頼(長基)講状	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本1帖37	信史7-113	小笠原長基	清頼	長基、子忠次郎長基に所領を譲り与える		
16	応永5年	1398	8月24日	足利義満御判御教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本3帖4	信史7-339	小笠原長秀	信濃守	義満、長秀に住吉庄奉近重を返付する		
17	応永6年	1399	5月10日	足利義満御判御教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本3帖3	信史7-343	小笠原長秀	信濃守	義満、長秀に奉近重下地一戸を列行する		
18	応永6年	1399	10月10日	後小笠原直家書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本3帖5	信史7-344	小笠原政康	右馬助	政康、長秀に奉近重下地一戸を列行する		
19	応永6年	1399	11月28日	足利義満御教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵影本3帖4	信史7-348	小笠原政康	右馬助	政康、守重長秀の手に譲し大内弘弘退治での出陣を行うよう足利義満から命じられる	応永の乱	応永の乱

史料番号	和暦	西暦	月日	史料名	蔵本	所蔵者	収録文獻	対象者・事項	呼称	史料の概要	歴史事象	備考
20	応永7年	1400	4月21日	市河國仙車忠状	市河文書	山形県本間氏	信史7-344	小笠原長秀	信濃守	信濃守長秀、市河國仙の車忠状を承了する	大格合戦	信州守護としての内官が入部することを拒否される
21	応永7年	1400	10月5日	足利義満感状	市河文書	山形県本間氏	信史7-376	小笠原長秀	信濃守	義満、市河國仙の大格合戦での長秀に対する忠告を貰う	大格合戦	
22	応永7年	1400	11月15日	市河國仙車忠状	市河文書	山形県本間氏	信史7-375	小笠原長秀	信濃守	市河國仙、大格合戦で長秀方について忠告を提出し、長秀これを承了する	大格合戦	
23	応永12年	1405	11月9日	小笠原長秀感状	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖7	信史7-443	小笠原長秀	信濃前司	長秀、弟政康に所願を渡す		
24	応永23年	1416	12月31日	足利義持御判教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖10	信史7-520	小笠原政康	右馬助	足利義持、政康の知行を安堵する		
25	応永25年	1418	9月9日	足利義持御判教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖11	信史7-526	小笠原政康	右馬助	義持、住吉庄・春近園を政康に返付する		
26	応永30年	1423	11月16日	足利義持御判教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖14	信史7-554	小笠原政康	右馬助政康	義持、政康に春近園内の堀山郡を返付する		府中での所領が拡大になる
27	応永32年	1425	2月3日	松光元口宣案	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖10	信史7-562	小笠原政康	大膳大夫	政康、大膳大夫に任ぜられる		
28	応永32年	1425	12月29日	足利義持御判教書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖17	信史7-579	小笠原政康	治部大輔入道 正通	政康、信濃国守護職を兼任される		小笠原氏再興
29	(応永33年)	1426	8月27日	足利義持御内書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本2帖17	信史7-580	小笠原政康	治部大輔入道	政康、守護として信濃国に下向する。將軍義持、それを褒め、刀を贈る		
30	正長1年	1428	8月28日	室町幕府管領畠山道満奉書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本4帖20	信史8-7	小笠原政康	治部大輔入道	將軍義持、政康に春近園一門の下地を安堵することを見聞家が伝える		春近園領有分が拡大になる
31	(暦吉1年)	1441	5月26日	足利義満感状	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本4帖1	信史8-152	小笠原政康	大膳大夫入道	義政、朝敵國を攻略した政康の戦功を賞す	結城合戦	
32	(暦吉1年)	1441	5月26日	足利義満御内書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本4帖1	信史8-153	小笠原宗康	小笠原五郎	義政、朝敵國を攻略した宗康の戦功を賞す	結城合戦	
33	年次不詳			小笠原正通(政康)置文	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本4帖7	信史8-170	小笠原政康	正通	伊賀守の事は六郎(光康)に任せ、当家の事は五郎(宗康)・小太郎ならで計らうまじく候		
34	文政2年	1445	11月24日	室町幕府奉行入道源意見状	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖20	信史8-205	小笠原持長	信濃守持長	小笠原宗康、徳貞持長と政康の遺領を争う。幕府奉行人が政康に依頼する。とあるという意見を幕府に具申する		
35	年次不詳		5月4日	細川持賢御状	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本4帖2	信史8-219	小笠原光康	六郎	宗康の遺領と守護職などを光康に仰せつけられる		文政4年(1447)に御時山各の遺領を守護六郎として動いている
36	文政4年	1447	12月24日	室町幕府管領畠山道元(暦吉)奉書	大曲寺文書	京都府大龍寺 大龍寺文書	天龍寺文書の研究458号文書	小笠原持長	小笠原大膳大夫	室町幕府御時、持長に四宮・利沼村の役所・人土、御時置役・守護的を免除し、村内に守護使が入部することを仰せさせる		この段階で持長は信濃守護であったと判断できる
37	宝徳2年	1451	6月19日	後花園大願口宣案	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖30	信史8-266	小笠原光康	通江守	光康、通江守に任じられる		
38	宝徳4年	1453		諏訪御符札之古書	小笠原文書	東京大学史料編纂所 所蔵形本3帖30	信史8-295	小笠原持長 押住 重出	守護殿大膳大夫 持長	持住と重田重政が五右衛門源次郎に当たって、持長は謀田で御役を勤める		持住で「大犬守護殿の町」とは持長のことが

史料 番号	和暦	西暦	月日	史料名	史料文獻	対象者・事項	呼称	史料の概要	歴史事象	備考
39	康正2年	1456	1月18日	足利義政御教書案	信史8-360	小笠原政秀	小笠原国松	花会の運びが柳原郡に当てられ、山家為家別当める	祖父政康の例に任せる	
40	長祿1年	1457		龍山御符札之古書	信史8-369	山家為家 柳原		意進山右衛門守の金鼓路に信濃国梓庄園郷と別荘立てている	柳原郷の地頭は山家氏	
41	長祿2年	1458		龍山御符札之古書	信史8-411	柳庄郷 小笠原長時 柳庄	柳庄郷	花会の運びが柳原郡に当てられ、山家為家別当める		
42	寛正2年	1461		龍山御符札之古書	信史8-439	小笠原長時 柳庄	小笠原左京大夫 政秀	寛正二年五月会の運びが柳原郡に当てられ、村長がそを互を勧める	持比佐府中にみられる	
43	寛正4年	1463		龍山御符札之古書	信史8-460	山家為家 柳原	山家相模守為家	花会の運びが柳原郡に当てられ、山家為家別当める		
44	年未詳		11月3日	足利義政御内書	信史9-111	小笠原政秀	政秀	義政、政秀を信濃守護職に補任する	柳原小笠原が守護となる	
45	応仁1年	1467		龍山御符札之古書	信史8-581	小笠原政秀	小笠原兵衛助 政直	義政、伊賀良より府中に乱入して小笠原信守宗清を攻める	宗清は宗清のことか。翌年に庄氏死したという	
46	文明7年	1475	5月17日	守矢瀧貫書留	信史9-131	山家光政 山家孫三郎	山家光政 政直	山家光政、在所を放棄して落ちる。花会信守宗清を攻める		
47	文明12年	1480	8月16日	守矢瀧貫書留	信史9-250	小笠原長朝	長朝	長朝、仁科盛直と郡高で合戦し長朝討ち勝つ		
48	文明12年	1480	9月20日	守矢瀧貫書留	信史9-252	小笠原長朝 山家誠	小笠原民部大輔 山家誠	長朝、仁科盛直、西牧瀧康、山家誠家と対抗し、山家誠を攻め山家孫三郎を討ち死にさせる	府中小笠原の動きが活発になる	
49	文明12年	1480		龍山御符札之古書	信史9-247	小笠原長朝	小笠原民部大輔 長朝	五月会の方面に柳庄が割り当てられ、長朝が領政を勧める		
50	文明13年	1481	4月19日	守矢瀧貫書留	信史9-262	小笠原長朝 井河 日兼	小笠原民部大輔 長朝	長朝と山家光家が敵対し、山家に合力した仁科、香坂が利田城を攻め、井河、山家は無事であった	この時点で井山誠は拠点として機能していた	
51	文明16年	1484	5月	守矢瀧貫書留	信史9-319	小笠原長朝	小笠原民部大輔 長朝	長朝、安藤、眞禰二部の請勢を率い、片山城を攻める	片山城は小笠原政秀の支援を受けていた	
52	長享3年	1489		龍山御符札之古書	信史9-478	小笠原政秀	小笠原左京大夫 政直	五月会直前に柳庄に割り当てられ、政秀が領政を勧める。政秀は府中にいることがわかる	この時点で政秀は柳中を占拠していた	
53	天文2年	1533	7月23日	天文二年記 信州下向記	信史11-56	小笠原長棟	小笠原	府中長棟の軍勢、知久朝元・高遠源清頼重の軍と戦う	府中小笠原が伊原に攻勢をかける	
54	天文2年	1533	7月28日	天文二年記 信州下向記	信史11-58	小笠原長棟		長棟、再び府中より伊原郡に攻め入り、知久軍と対峙する		
55	天文2年	1533	8月17日	天文二年記 信州下向記	信史11-61	小笠原長棟	府中	成田朝信、堀原主で佛を勧め甲山辺林道辺坊および堀原長時邸に放水する		
56	天文14年	1545	6月	高白彦記	信史11-310	小笠原長時	小笠原	長時、村上義清等と同心して御治社下宮に打ち入る		
57	天文17年	1548	4月5日	神使御頭之日記	信史11-375	小笠原長時	小笠原	成田朝信の勢、堀原村にたてこもり長時を攻め破り、旗本討ち取る		
58	天文17年	1548	7月19日	高白彦記	信史11-380	小笠原長時	小笠原長時	長時、將軍足利義嗣の代許えを祝し、長時、將軍を伊勢貞吉に託して働		
59	天文17年	1548		守矢信光系状覚書案 守矢文書	信史11-379	小笠原長時	長時	長時、將軍を伊勢貞吉に託して働		
60	天文19年	1550	7月5日	守矢信光系状覚書案 守矢文書	信史11-464	小笠原長時	小笠原大働大夫 長時	長時、將軍を伊勢貞吉に託して働		

史料番号	和暦	西暦	月日	史料名	底本	所蔵者	収録文獻	対談者・事項	呼称	史料の概要	歴史事象	備考
61	天文19年	1550	7月15日	高白彦記	高白彦記	大塚 朝原城 山家郷	信史11-468	山家郷	長時	大塚・志忠・岡田・朝原・山家郷へ 城白彦する		長時が生人となった2年 後に白彦している
62	天文20年	1551	10月21日	高白彦記	高白彦記	山家郷	信史11-475	小笠原長時	長時	長時、村上精治の助けで安藝郡平瀬 へ出る		
63	天文20年	1551	10月24日	高白彦記	高白彦記	山家郷	信史11-502	小笠原長時	長時	武田晴信、平瀬城を攻め取る		
64	天文23年	1554	1月20日	武田晴信安林状案	武家筆記		信史12-2	山家郷	小笠原大藏大夫	父左馬亮に宛がった大村100貫の 地を安堵される		山家氏または武田の旗印となる
65	永禄4年	1561	3月4日	足利朝臣御教書	上杉家文書		上杉原1文書 藤原1文書	小笠原長時	信長	足利義輝、長尾藤兵衛に長時の領地を 援助するよう132		
67	永禄11年	1568	9月1日	言繼御記	言繼御記		信史13-241	小笠原長時	信濃四年人	長時・信濃父子、三好長慶を頼み頼 津兼光に任ず		
68	元亀2年	1570	2月14日	武田信玄朱印状	武田信玄家文書		大日本史文庫5 冊334	山家郷	山家	武田信玄、山家郷に諏訪上宮御頭を 勤めさせる		山家郷への直隸の命令で、 村の自治が成立している
69	天正3年	1575	2月26日	河尻藤隆書状案	書簡并御証文 集	笠系大成附録	信史14-86	小笠原貞直	小笠原右近太夫	信長、山家郷に諏訪上宮御頭を 勤めさせる		
70	天正3年	1575	11月28日	織田信長書状	小林文書	東京	信史14-122	小笠原貞直	小笠原右近太夫	信長、山家郷に諏訪上宮御頭を勤 めさせる		貞直は信長の家出として行 動している
71	天正5年	1577	2月13日	武田勝頼朱印状	諏訪文書	東京都墨江氏旧蔵	信史14-188	山家郷	山家	勝頼、山家郷に諏訪上宮御頭役を勤 めさせる		
72	天正5年	1577	7月9日	武田勝頼安堵状案	武家筆記		信史14-209	山家郷	山家郷	長慶の戦いで戦死し山家の嫡子 昌形の代領として朝原郷に1000貫 文の地を出す		父山家貞直の跡によるもの のだが、定納1000貫又は 入まききぎ
73	天正5年	1577	8月15日	武田勝頼寄進状案	想願寺文書	信濃所収	信史14-214	林村	勝願、想願寺に祈願料を寄進する			
74	天正9年	1581	6月10日	小笠原貞直伝授状	反町家作氏 所蔵文書		新編歴史資料 編4-328	小笠原貞直	小笠原右近太夫 貞直	貞直、血筋長直に伝授料を渡す		小笠原礼法を伝授している それまでの二本木の動向は 不明
75	天正10年	1582	3月14日	小笠原貞直宛宛行状案	御問文集		信史15-156	小笠原貞直	貞直	貞直、血筋長直に伝授料を渡す		この頃まで貞直は信濃に いない
76	天正10年	1582	6月12日	小笠原貞直書状	三村文書	諏訪市三村氏旧蔵	信史15-234	小笠原貞直	貞直	貞直、二本木吉に安堵額二本額 300貫の地を宛がう		
77	天正10年	1582	6月14日	小笠原貞直書状	三村文書	諏訪市三村氏旧蔵	信史15-244	小笠原貞直	貞直	貞直、石田謙正の援助で、奉康を 後ろに信濃入国を決定する		
78	天正10年	1582	7月8日	小笠原貞直宛宛行状案	御問文集		信史15-287	小笠原貞直	女忠忠	貞直、信州入国に同じく石田謙正 以後の棟梁の相談を依頼する		貞直信濃入国
79	天正10年	1582	7月19日	小笠原貞直宛宛行状	三村文書	諏訪市三村氏旧蔵	信史15-322	小笠原貞直	貞直	女忠忠、二本木吉に安堵額二本額を安 堵する		この頃まで貞直は信濃に いないと考えられる
80	天正10年	1582	7月27日	水曾貞直宛宛行状	小野文書	水曾大森村小野氏	信史15-353	林郷	貞直	貞直、約束の通り三村(後行)期兵衛 前に先馬3000貫の地を宛がう		「本意の正し」と先の文書 に記されていることから深 志願を撤回したものと考え られる
81	(天正10年)	1582	8月9日	小笠原貞直書状案	御問集		信史15-393	小笠原貞直	貞直	貞直、小野有記期に朝原において 100貫の地を宛がう、林の郷を 所貯置く		天正壬午の朝原騒動後、朝原郷に 対する本音議員の勢力は強い
												彼嬢は日成城と御定される

史料 番号	和暦	西暦	月日	史料名	版本	所蔵者	収録文献	対巻者・事項	呼称	史料の概要	歴史事象	備考
82	(天正10年)	1582	8月10日	小笠原貞康書状案	御書集	笠系大成附録	信史15-394	小笠原貞康		貞康、小笠原久知に頼功を請するともに仁科義武の高参を請うす攻めることを示す。	仁科義武は日岐城主	
83	(天正11年)	1583	2月12日	小笠原貞康書状案	御書集	笠系大成附録	信史15-568	小笠原貞康		貞康、頼功の赤澤式部輔の謀略を自腹で加減させ、宍谷村には小笠原軍を遣わしたことを伝える。	赤澤式部少輔は宍谷原の戦いにいたことが推定される	
84	(天正11年)	1583	2月14日	小笠原貞康書状案	御書集	笠系大成附録	信史15-570	小笠原貞康		貞康、頼功・頼忠・頼三河守が同心して逆を企てたため、悉く討ち果たしたことを伝える。		
85	(天正11年)	1583	2月22日	溝口貞秀書状案	御書集	笠系大成附録	信史15-574	小笠原貞康		清口貞系、大駒久知に貞康出馬まで油断なく参することを伝える。	日岐城か。貞康の城普請が ある	
86	天正11年	1583	4月20日	埼玉直石指圖 氏所蔵文書			上越史別編 2-日本文書 集2-407	小笠原貞康	小笠原	頼忠・貞直、貞康との一戦に勝利した 頼忠・貞直を貞康とともに、念田口が 大切所であることから、油断なく心 得るよう伝える。	縁起のみ	上杉と小笠原の対立
87	天正11年	1583	8月7日	小笠原貞康宛行状案	御証文集		信史16-82	小笠原貞康		貞康、日岐城武に頼功を頼野の内万 疋(100貫文)の贈を仰ぐ。	日岐城武の家臣化	
88	天正11年	1583	8月11日	小笠原貞康感状案	御証文集		信史16-84	小笠原貞康		貞康、日岐城武に頼功により日岐の 安藤郡仁科家が貞康に属し鬼無甲 を攻め取る。貞康太日久知等に千見 城の御旗など贈えを兼ねることに てを命じる。		仁科家の取り込み。千見城 の普請
89	(天正12年)	1584	3月3日	小笠原貞康書状案	御書集	笠系大成附録	信史16-133	小笠原貞康		家康、貞康の筑前都麻請・青龍城攻 めを命じる。		
90	天正12年	1584	4月19日	徳川家康感状案	御書簡并証文 集		信史16-142	小笠原貞康	小河原石近大夫	信朝頼功、庄内の小島・出川・高野 に年貢注文を出す。		信正が頼休し村に分れ庄内 と関係している
91	天正13年	1585	9月26日	草間肥前年貢注文	中田文書		信史16-371	井庄	庄内	赤吉、頼川家康が頼休したこと、 外して、頼川家康が頼休すること、 頼川家康が頼休すること、本領直で 相違し、信濃・甲斐を守る計らいを させる。		
92	天正13年	1585	11月19日	豊臣秀吉書状案	長瀬寺殿御 事類稿 七		信史16-383	小笠原貞康	小笠原			
93	(天正14年分)	1586	6月11日	小笠原貞康書状案	御証文集		信史16-429	小笠原貞康		貞康、三河赤葉に千見城の普請を命じ して、高野正・山田首兵衛を奉行と して派遣する。		千見城の普請が本格化する
94	天正18年	1590	9月23日	豊臣秀吉書状案	歴代古案 1		信史17-175	小笠原貞康		赤吉、貞康の所領見廻のため石川 龍正、貞直を派遣する。		拘え上城として筑摩郡青柳 城・大城(林大城)・安藤 郡千見城がみえる
95	享保9年	1724		信州松本城記録	信府統記		信府統記 47	井川城	井河の城	島立石近が小島村から城を松本に 移す。		
96	享保9年	1724		松本重古城記録	信府統記		信府統記 480	井川城	小島村古城地	井河の城の規模や周囲の川の様子 を伝える。		
97	文化15年	1818		松本重古城記録	松本重古 城日記		横山時夫氏 所蔵文書	井川城	深瀬城	小笠原長持、井川城を立て直し深瀬 城という		山家・林の城と所持ち

2 主要史料選

一 八条院領目録「山科家古文書」安元元年(一一七五)二月『平安道文古文書編』十卷五〇六〇号

(前略)

信濃國梓(稱)大井 常田

(後略)

安元元年二月 日

二 未済庄々注文「青巻」六 文治二年(一一八六)二月『信濃史料』三卷三七九

三月十二日。庚寅。(中略)また國東御知行の国々内、乃真未済の庄々注文これを下さる。今日到来す。家司等を召し下して、催促を加え給うべきの由と云々。

注連 三箇国庄々の事。〔下総・信濃・越後等の国々注文〕

(中略)

馬場内藤澤

八条院御領

樺中村庄

蓮華王院御領

樺北條庄

洗馬庄

(中略)

右注連件の如し

文治二年二月 日

三『吾妻鏡』六 文治二年(一一八六)十月『信濃史料』三卷三六六

十月二十七日。庚子。信濃国伴野庄の乃真の送文到来す。一品(頼朝)則ち御書を副え、京都にすすめ給う。地頭加賀美(小笠原)二郎長清曰こそすこぶる観念すと云々。

四 北條貞時十三回公事記録「田原寺文書」元亨三年(一一三三)十月『信濃史料』五卷四三二

廿五日。御八講之結願、一品經之供養也。(中略)

諸大夫

(中略)

砂金廿兩・銀鈔一・馬一疋〔置藏・黒駿〕 小笠原信乃前司

(後略)

五 鎌倉幕府卜知状案「守矢文書」嘉禎四年(一一三九)五月『信濃史料』五卷七十

諏方十言五月会付流綱馬の頭・花次郎と向前たるべき御射山頭役経番の事

(中略)

二重五月会分

左頭・樺庄半分陸奥左近大夫經監(北條英時)。

(中略)

右、結番の次第を守り、輕怠なく勤仕すべし。てへれば鎌倉殿の仰せにより、下知件の如し。

六 市河助房等着到状「市河文書」建武二年(一一三五)三月『信濃史料』五卷二六〇

朝朝を遣宮ぞんがため、觀せ參すべきの由、御催問なきるについて、去る月二十九日、朝市河三郎助房を以つて代官となし、船山に馳せ參じ、御着到に付し候ひおわんぬ、これより、今月四日、市河刑部大夫助房・同舍弟左衛門九郎備房・同左衛門十郎経助、子息家人等を相見し、善光寺より馳せ付け奉り、同八日常岩北條に於いて軍忠を致し、城郭を破却せしめおわんぬ。はたまた府中騒動について、同十六日、御発向のあいだ、浅間宮に到つて同じく馳せ付け奉り候ひおわんぬ、仍つて着到の事件の如し。

建武二年三月 日

(証判) (小笠原貞宗)
「承はり了んぬ(花押)」

七 尾御尊氏下文「小笠原文書」建武三年(二三三)九月『信濃史料』五卷二九五
(花押) (足利尊氏)

下す 小笠原信濃守貞宗

早く信濃國住吉庄ならびに武田孫五郎長高跡・市河輔部六郎跡を領知すべきの事
右の人、勲功の賞として宛がうなり、てへれば先例を守り沙汰致すべきの状件の如し
建武三年九月二十七日

八 市河備房同助保着到状「市河文書」建武三年(二三三)九月『信濃史料』五卷二九八
着到

市河左衛門九郎備房

同子貞三郎助保

(中略) 同(九月)晦日 国司(堀河光繼) 御迎えのため、信州(小笠原貞宗) 浅間に参向のあいだ、
助保同じく馳せ参す。(中略)

建武三年十月 日

(証判) (吉良時衡)
「承りおわんぬ(花押)」

九 市河文書 建武三年(二三三)二月二十三日『信濃史料』五卷三三五

市左衛門十郎経助軍忠の事

右、先代高時一族大尉四郎並びに当国の凶賊深志介以下の亂蜂起のあいだ、御追伐の大將として、村上源備
中並びに守護(小笠原貞宗) 御發向のあいだ、今月(二月)十五日、麻績十日市場において敵方の合戦を致
す上は、御一見書・証判を給わり後登に備えんがため、言上件の如し、

建武三年二月二十三日

(証判) (吉良時衡)
「承りおわんぬ(花押)」

一〇 守矢貞実手記「守矢文書」暦三年(二三四〇)六月二十四日『信濃史料』五卷四四二
(付箋)

「貞実手記」

暦三年「区貢」相模次良(北条時行) 殿 六月二十四日、信濃國伊那郡大徳主守城にたて籠まれ、当
大宛頼義文祖の忠節を忘れ難く、同心に馳せ籠る、当国守護小笠原貞宗 府中の御家人とあいに共に、同
二十六日に馳せ向い、七月一日大寺に於いて数度合戦をなす、(後略)

一一 小笠原貞宗讓状案「小笠原文書」康永三年(二三四四)十二月十二日『信濃史料』五卷四八九

讓与 所領の事

嬪子兵庫助政長

- 一所 甲斐國原小笠原庄 [後は松王丸分たるべし在判]
- 一所 信濃國伊賀良庄 [後は松王丸分たるべし在判]
- 一所 同國守護職 [後は松王丸分たるべし在判]
- 一所 讚岐國塩饅庄
- 一所 上総國姉崎社 [武田孫五郎長高跡]

右の所々、御下し文以下調度の証文をあい副え、認領職として政長に讓与するところなり、後々並び嬪子等
の分の事、而々讓状に見ゆ。遺状察すべからず、且つ条々置き文に載せおわんぬ、仍つて讓り状件の如し。

康永三年十二月十二日

貞宗在判

一二 足利尊氏下文「小笠原文書」貞和三年(二三四七)四月二十六日『信濃史料』五卷五五四
(花押)(足利尊氏)

早く信濃國春近未分「堀尻・島守以下郷村」注文別紙にあり、を領知せしむべき事
右の人を以つて、勲功の實として宛外所なり、てへれば先例を守り沙汰致すべきの状件の如し
貞和三年四月二十六日

一三 師守記「八 貞和三年(二三四七)五月『信濃史料』六卷一

五月二十六日、戊辰、陰晴定まらず。今日小笠原信濃入道正宗(貞宗)他界す。信濃國守護なり。武
家物沙汰無しと云々。

一四 足利尊氏御判御教書「小笠原文書」正平七年(二三五二)一月『信濃史料』六卷二二六
(花押)(足利尊氏)

信濃國春近領のこと、先例に任せ沙汰致さるべきの状件の如し。

正平七年正月十九日

小笠原越江守(政長)殿

一五 足利尊氏御判御教書「小笠原文書」正平七年(二三五二)一月『信濃史料』六卷二二七

信濃國春近領欠所分の事、先例に任せ沙汰致すべきの状件の如し。

正平七年正月十九日 (花押)(足利尊氏)

小笠原兵庫頭(長基)殿

一六 小笠原長基自筆謙状「小笠原文書」永徳三年(二三八三)二月『信濃史料』七卷二二三
謙与 所領等

子息次郎長秀

喜所 甲斐國小笠原庄〔額領地〕

喜所 同國石田郷

喜所 同國八代庄知行分〔比丘尼淨土二期の後これを知行すべし〕

喜所 同國塩田郷〔王用大丸これを知行すべし〕

喜所 同國宮原村

喜所 信濃國伊賀良庄(伊那郡)

喜所 同國嶋立郷(筑摩郡)

喜所 同國浅間郷(筑摩郡)

喜所 同國塩尻郷(筑摩郡)〔次郎長将これを知行すべし〕

喜所 同國福地郷(伊那郡)

喜所 同國片切郷折中分(伊那郡)〔小次郎長将これを知行すべし〕

喜所 同國田嶋郷折中分(伊那郡)〔王用大丸これを知行すべし〕

喜所 同國菅澤郷(佐久郡)〔比丘尼淨土二期の後これを知行すべし〕

喜所 讚岐國塩田嶋

喜所 上総國姉崎保

喜所 陸奥國石河庄

喜所 信濃國小嶋田郷(重祿郡)〔王用大丸知行すべし〕

喜所 同國三子郷折中分(筑摩郡)

喜所 京都屋地〔矣〕

右の所領は、御下し文並びに代々手続き証文等をあい、副え、長秀に譲り与うるところなり、他の妨げあ

るべからず。所領の内、戻付けをなす地には、土用木(小笠原政康)、小次郎長隆にこれを知行せしむべし、違乱相わすべからず、彼等男子無くば、長秀知行すべし、もし長秀に男子無くば、舍弟土用木丸に譲り与へし、敗えて他人に譲るべからず、仍て後日のため、自筆を以て譲るところの状件の如し。

永徳三年二月十二日

清順(花押)(小笠原長基)

(付箋)

「清順より長秀へ譲り状」

一七 足利義満御教書「小笠原文書」応永五年(二二九八)八月『信濃史料』七卷三三九

(花押)(足利義満)

信濃國住吉庄並びに春近の事、返付するところなり、早く小笠原信濃守長秀、元の如く領掌すべきの状件の如し。

応永五年八月二十四日

一八 足利義満御教書「小笠原文書」応永六年(二二九九)五月『信濃史料』七卷三四三

(花押)(足利義満)

信濃國春近領下地の事、一円割がうところなり、早く小笠原信濃守長秀、領掌せしむべきの状件の如し。

応永六年(二二九九)五月十日

一九 後小松天皇口宣案「小笠原文書」応永六年(二二九九)十月『信濃史料』七卷三四四

土郷坊城大納言

源政康 宣旨

源政康

宣任右馬助

藏人頭左大弁藤原兼實奉

二〇 足利義満御教書「小笠原文書」応永六年(二二九九)十二月『信濃史料』七卷三四八

(花押)(足利義満)

大内(義忠)入道対治の事、守護(小笠原長秀)の手に属し、忠節致すべきの状件の如し。

応永六年十一月二十八日

小笠原右馬助(政康)殿

二一 市河興朝軍忠状「市河文書」応永七年(二四〇〇)四月二日『信濃史料』七卷三四四

市河開朝大輔入道興仙申す軍忠の事

右、去年(応永六)、小笠原信濃守長秀、当国信州守護殿として御代官入部の時、嶋津太郎国忠等罪を致すのあいた、御退治のため、十月二十一日小笠原赤澤対馬守秀国・同種置石見守入道清忠発向のあいた、最前を馳せ参じ、彼の手に属し石渡御陣において忠節を致すのところ、(中略)

応永七年四月二十一日

(蓋判)(小笠原長秀)

「承りおわんぬ(花押)」

二二 足利義満御状「市河文書」応永七年(二四〇〇)十月『信濃史料』七卷三七六

(付箋)

「御所御はん」

(花押)(足利義満)

去る月二十四日の合戦に忠節を致すの由、小笠原信濃守(長秀)注し申すところなり。もつとも神妙、向後いよいよ戦功を揃んづべきの状件の如し。

応永七年十月十五日

市河行部大輔入道(輿仙)殿

二三 市河輿仙軍忠状「市河文書」応永七年(二四〇〇)十二月『信濃史料』七卷三七五

市河開原大輔入道輿仙(願房)申す軍忠の事

右、当国(信州)凶徒村土中務少輔満信、上意に違背せしめ、讒訴を運行せしむるにより、御退治のため、今年(上)九月十日、小笠原信濃守長秀善光寺より御打ち立おあり、河中嶋横田に御陣を召さる。よつて大文字一揆、高梨薩摩守朝高以下、満信に向心合力せしめ、所々に陣を張る。同二十四日、彼の凶徒等打ち立ち、一回に翻せ懸けるの間、更敷部四宮において御合戦の時、御手に風し、父市河宗節を致すのところに、若菜五兵衛重助・嶋立太郎二人傷をこうむりおわんぬ。その後横嶋城において堪忍せしめ、忠功を抽んづるものなり。次いで市河六郎頼重、小笠原御直石見守入道清忠の手に加わり、二柳城において戦功を竭(つく)し、疵をこうむりおわんぬ。かくの如く親類同前に軍忠を致すのところに、御見知の上は、御証判を賜り後代の爲めに備えんがため、恐々言上作の如し。

応永七年十一月十五日

(証判) (小笠原長秀)

「承りおわんぬ。(花押)」

二四 小笠原長秀讓状「小笠原文書」応永十二年(二四〇五)十二月『信濃史料』七卷四四二

譲与す 舍弟石馬助政康所

所々朝恩ならびに本領・恩賞の地等の事

右、世上の忿劇により、且釋明し難きのあした、□□の譲り状如なり、長秀実子でませば、この譲り状を証文に立つべからず、その時更に混乱あるべからざるものなり、もし実子無きは、父清順(小笠原長基)の置文の旨に任せ、政康一跡を相続せしむべし。次いで政康以後実子無きは、政康の手により、舍弟掃磨守長将の嫡男彦次郎(実名を知らず(我長))に譲与すべきものなり。仍つて後日のため譲り状件の如し。

応永十二年十一月九日

信濃前司(花押)(小笠原長秀)

二五 足利義持御判御教書「小笠原文書」応永二十三年(二四一六)二月『信濃史料』七卷五一〇

(花押)(足利義持)

小笠原右馬助政康本知行の事、相違あるべからざるの状件の如し。

□□(応永)二十三年十二月晦日

二六 足利義持御教書「小笠原文書」応永二十五年(二四一八)九月『信濃史料』七卷五二六

(花押)(足利義持)

信濃國作吉庄並ぎに春近領の事、小笠原右馬助政康に返付するところなり、てへれば元のごとく沙汰致すべきの状件の如し。

応永二十五年九月九日

二七 足利義持御判御教書「小笠原文書」応永三十年(二四三三)一月『信濃史料』七卷五五四

(花押)(足利義持)

信濃國野村郡(須科郡)春近内船山郷事、小笠原右馬助政康に充行うところなり、早く先例を守り、沙汰致すべきの状件の如し。

応永三十年十一月十六日

二八 徳光大皇口宣案「小笠原文書」応永三十二年(二四三九)二月三日『信濃史料』七卷五六二

□□□□納言

応永三十二年二月三日 宣旨

源政康

夏任大膳大夫

藏人石少弁藤原経直奉

二九 足利義持御判御教書「小笠原文書」応永三十二年(一四二五)十二月『信濃史料』七卷七九

(花押) (足利義持)

信濃国守護職事、小笠原治部大輔入道正透(政康)に補任するところなり。てべれば早く先例を守り、沙汰致すべきの状如の件し。

応永三十二年十二月二十九日

三〇 足利義持御内書「小笠原文書」(応永三十三年)(一四二六)八月七日『信濃史料』七卷五八〇

下向以後、国の時宜定めて無念に候らん、目出候。入国初に候のあいだ、祝着として太刀一腰これを遣わし候。また感後の御教書成すべく候、追て仰せ下さるべく候なり、

八月二十七日

(花押) (足利義持)

小笠原治部大輔入道(正透)殿

(付箋) 応永〇(三十)三年

三一 室町幕府管領畠山道満奉書「小笠原文書」正長元年(一四二六)八月『信濃史料』八卷七

信濃国春近領下地の事、早く応永六年(一三九九)五月十日の旨に任せ、一円その沙汰致さるべきの由、仰せ下さるところなり。仍つて執達性の如し。

正長元年八月二十八日 沙弥(畠山道満)

小笠原治部大輔入道(正透)殿

三二 足利義教感状「小笠原文書」(嘉吉元年)(一四四二)五月『信濃史料』八卷二五二

今度経略節の事、即時に攻め落とし、凶徒悉く討ち捕り、あまつぎに倉主丸・安主丸を虜りおわんぬ、武略比類無し。もつとも感じ思し食し候、仍て眞太刀「互成」、一腰これを遣わし候なり。

五月二十六日

(花押) (足利義教)

小笠原大膳大夫入道(正透)殿

三三 足利義教御内書「小笠原文書」(嘉吉元年)(一四四二)五月『信濃史料』八卷一五三

結城館の事、即時攻め落とし、自身並びに被官人等、疵をこうむるの衆、もつとも感じ思し食し候、よつて太刀一腰遣わし候なり。

五月二十六日

(花押) (足利義教)

小笠原五郎(宗康)殿

三四 小笠原正透(政秀)自事置文「小笠原文書」年不詳『信濃史料』八卷二七〇

今度伊賀良へ趣え候こと、めでたく候。諸事について、伊賀良の事は六郎(小笠原光康)に任せ候。あいはからい候べく候。そうじて、当家の事は五郎(小笠原宗康)・六郎兩人ならでは、あいはからい候まじく候。

正透(花押)

三五 室町幕府奉行人連署置状「小笠原文書」文安二年(一四四五)一月『信濃史料』八卷二〇五

小笠原五郎〇〇(宗康)と同信濃守護持長、七父正透〇〇〇〇〇〇相論す、

右、証陳多端といえども、清順(小笠原長基)の置き文のごとくは、一跡に於ては、長季に譲りし、長季もまた政康に譲り〇おわんぬ、正透契子無くんば長将(正透兄)の子に譲りすと云々、然りとしらえども持長由す如くは、長季持長に譲りするの由申すといえども、証非を出置せず、宗康また譲得の旨申すといえども、同じく譲状無し、但し持長においては沙汰致すべきの由、書状これあり、然れば譲状無しといえども

宗康領事すべきの案勿論か。

文安三年(二四四五)十一月廿四日

(奉行人名略)

三六 細川持賢書状「小笠原文書」年不詳五月『信濃史料』八巻二九

信州の事について、御注進の趣、委細披露せしめ候ひおわんぬ、そもそも小笠原大膳大夫(宗康)方の事、是非なき次第に候、殊に力を落とされ候御心中察し存じ候。然りといたども忠節の至り、感じ思し召され候。仍つて遺跡並びに守護職等の事、六郎(小笠原光康)方へ仰せ付けられ候。その旨御存知有るべく候。巨細精進去字爲監申すべく候。恐、謹言。

五月四日

沙弥道賢(細川持賢)(花押)

謹上 武田刑部大輔(信重)殿

三七 細川勝久施行状案「天龍寺文書」文安四年(二四四七)十二月『天龍寺文書の研究』四五八号文書正文これに在り

一、天龍寺領信濃國四宮・青沼村段錢、人夫・臨時課役・守護役等の事、免除せられおわんぬ。早く去る三月二十三日の下知状の旨に任せ、守護使入部を停止せらるべきの由、仰せ下さるるところなり。仍て執選件の如し。

文安四年十二月二十四日

右京大夫(細川勝久)判

小笠原大膳大夫(持長)殿

三八 後花園天皇口宣案「小笠原文書」宝徳三年(二四五〇)六月九日『信濃史料』八巻二六六

「上卿 日野中納言」

宝徳三年六月十九日 宣旨

源光康

官任選江守

藏人權右中弁藤原綱光

三九 諏訪御符札之古書「宝徳四年(二四五二)『信濃史料』八巻二九五

宝徳四年「壬申、この七月享徳になり」

(中略)

一 椿庄、五月云、御符札三貫三百文、御辨本一貫三百文、使一貫文、代官麻瀬朝重・古野吉信・新井為兵衛、頭役本は百貫文、中比五十貫文、大夫守護殿の時御符使二郎太郎、神護、神鳥先例の如し。八十一一反三百貫、反銭御頭役

一 漆田、五月云、御符札三貫三百文、代官平井、頭役拾五貫文、鹿毛馬一疋、又兩奉行神長三人三貫文、祝達中江二貫五百、御頭殿神長ノ宿所二任先例立申、衣食十貫文、神長殿、守護殿大膳大夫持長勤、代官飯沼勘部助頼景、山中周防守頼直

四〇 足利義政御教書案「書簡并書文集(附録) 康正三年(二四五六)一月『信濃史料』八巻三六〇

(花押)(足利義政)

所々の本、新所領の事、早く祖父正透(小笠原政康)の知行の例に任せ、小笠原国松(政季)領せしむべきの状件のことし。

康正三年正月十八日

四一 諏訪御符札之古書 長祿元年（四四七）四月 『信濃史料』 八卷三六九

康正三年丁丑花会

一 桐原、〔府中〕 山家為家、御符の札 一貫八百文。

〔後略〕

四二 水澤若澤寺金鼓銘 〔銘詞雑纂〕 長祿二年（四四八） 『信濃史料』 八卷四二一

信濃國埴田郡

蘇原山若澤寺

奉主手廻世音

寛長祿二年 施主平朝臣六翁

四三 諏訪御符札之古書 寛正二年（四六一） 『信濃史料』 八卷四三九

寛正二年辛巳五月会

〔中略〕

一 伴氏、小笠原大膳大夫持長、御符七三頁三百文、使二良三郎、頭役三拾貫。

四四 諏訪御符札之古書 寛正四年（四六三）四月 『信濃史料』 八卷四六〇

寛正四年癸未花会

一 宮頭、桐原、〔府中〕 山家相泉守為光、御符の札 一貫八百文、頭役十四貫文 〔使与五郎〕

〔後略〕

四五 足利義政御内書 小笠原文書 年不詳十一月 『信濃史料』 九卷一一一

信濃国守護職の事、小笠原左京大夫政秀を補任しおわんぬ。よろしくその意を得べく候なり。

十一月三日

〔花押〕 〔足利義政〕

小笠原左衛門佐（家長）とのへ

四六 諏訪御符札之古書 応仁二年（四六八） 『信濃史料』 八卷五八一

応仁二年戊子花会

去年（応仁三年）七月十五日より小笠原兵衛助政員（政秀、伊賀良より府中に乱入同小笠原信濃守宗清（清宗九）を責められ候、深志の坂西兵部少輔は政員が願手に、信濃守深志御頭の構立てに当り候存旨に指し寄せ、お櫓を切り折り候兵は、若字征兵衛源四郎、その太刀打ちの場所にて右手を切り折られ、兩人とも死去候。外見外聞の重諾人肝を消し、手を巻き候。この日より信濃守の家風の者は、殊に当国のことは当社を尊らんと信じ申し、巧夫を致すべきのところ、かくの如く神慮に背き給へしは、いよいよ行く末還ましく存ぜず候。彼の切折申し候お櫓に神灰などを添え、神長井河堀へ捨てまき候。

四七 守矢湖美書留 文明七年（四七五）五月 『信濃史料』 九卷三二一

この年五月十七日、山家常陸介光政在座を聞け候て、和田へ發ちられ候。二十五日、渡軍が所へ入御候。御頭無沙汰の神前に候。然りと見えども子息孫三郎御頭人にて候とて、山家へ食し返され候。万事清業常州取りも申し候。

四八 守矢湖美書留 文明十二年（四八〇）八月 『信濃史料』 九卷三二〇

同（八月）十六日、仁科盛直と小笠原民部大輔長朝總當において合戦をなし、長朝討ち勝つ。

四九 守矢湖美書留 文明十二年（四八〇）九月二十日 『信濃史料』 九卷三二二

この日小笠原民部大輔（長朝）を敵と爲し、仁科（盛直）・西牧（盛徳）・山家（盛徳）同心をなすあいた、民部大輔山家へ寄せ懸け、城櫓を責められ、山家孫三郎討死す。口惜しき次第なり。

五〇 諏訪御符礼之古書 文明十二年（一四八〇） 信濃史料 九卷二四七

文明十二年庚子明年五月会御頭足

一 方頭 榊庄 小笠原民部大輔長朝 代官麻生伯耆守朝重、御符禮三頁三百三十三文、此年八月十六日、仁科与民部大輔信頼、仁科討負、御頭役廿五頁礼二頁、此次年、諏訪勢符中四月四月十九日出陣、地二部初出陣申、無念帳、和田城責候、敵身方手負死人教多、

（後略）

五一 守矢湖美書留 文明十三年（一四八一）四月 信濃史料 九卷二六二

小笠原民部大輔長朝と山家前朝和泉守光家と御敵參、然るについで山家全力のため、諏訪刑部大輔政満伊那郡名引率し、四月十九日真奈野まで御門出あり。回二十三府中へ御出陣、神長二男政美始めて出陣す。十六才。然るに仁科、香坂方と同心し、不應に和田城を買められ、井河、山家無為の儀有るべし、五月六日御歸陣あり

五二 守矢湖美書留 文明十六年（一四八四）五月 信濃史料 九卷二九

五月小、押立なし。例三日。「己丑」トツ（ママ）。上宮下位（諏訪羅邁）殿、伊那郡の勢致小笠原左京大夫政貞（政秀）、知久、笠原、諏訪信濃守謙宗、彼の仁々を初めとして三百騎を引率し、峠下より磯並前山に陣を張り、諸勢下るところ、下位騎警備めされ、谷底まで馬敵が、刑申に買かれ給ふあいだ、敵中矢包を失う。馬前時に死す。かの馬は深玉御五月会頭代取西兵部少輔（光親）社家に進めずして、下位殿に進めらるる馬にて候。神は非礼を受け給はず、誠に神慮に背き墮落とされ候と高下申し合わせ、悪敵となす。然りとし、やむも魚鱗に陣を取る。回六日、「壬辰」片山の古城を開き取り立てらる。然るあいだ郡内の勢致敵陣に向かひ、王澤城に馳せ籠る。敵は時々多勢となり、味方買えざりけるところ、小笠原民部大輔長朝、同舍弟中務大輔（光政）大將軍として、安曇・筑摩二郡諸勢あいに列して、片山の向かい城に陣を取り、鶴翼致さる。非例の下位殿追伐のため御發向候あいだ、当社定めて御感度あらん。

五三 諏訪御符礼之古書 長享三年（一四八九） 信濃史料 九卷四七八

長享三年己未西五月会明年御頭足

一 右頭、榊庄、小笠原左京大夫政貞（政秀）御勤仕候、代官廣澤伯耆守、須藤藤右衛門・櫻井外記、御符礼三頁三百三十三文。

（後略）

五四 天文二年信州下向記 天文二年（一五三三）七月 信濃史料 一一卷五六

二十三日（甲子）、晴る。府中よりの諸勢今日着陣す。郡合その勢五百騎ばかり打ち出すと云々。知久同じく出陣するの圖、見物のため寺家勢を引率せしめ遊覧するのどころ、天龍川川において、西林院（宗宗）落馬し、大曲事ともこれあり。向後無益のことなり。知久の弟廣常路次において瓜これを進む。小笠原内膳兼をころむると云々。

五五 天文二年信州下向記 天文二年（一五三三）七月 信濃史料 一一卷五六

七月二十八日「己巳」晴る。陣大合戦これあり。神峯（知久頼元）衆教多手負う。高遠衆また同前と云々。二十九日、「庚午」晴る。陣今日退散なりと云々。春松丸彦握心これを読みはじめるなり。西坊伝役の儀これを申し入る。

五六 天文二年信州下向記 天文二年（一五三三）八月 信濃史料 一一卷六一

八月十六（十七）日、「乙亥」晴る。（中略）府中より今日また出陣と云々。

十七（十八）日、「丙子」晴る。夕雨。知久今日出陣、昨日水出づるのゆえ川越せずと云々。

十八（十九）日、「己丑」晴る。風呂これあり。府中衆今日退散と云々。

五七『高直壽記』天文十四年（一五四七）六月『信濃史料』一一卷二一〇

六月十三日「甲辰」辰の刻寶輪を御立ち、塩尻（筑摩郡）御陣所、高直陣所において勅をたらえ進上す。「十四日」林野所まで放火す。結原原（筑摩郡）御陣所。熊野井の城自落す。子の刻に打ち立ち、小笠原の館を放火す。六月十五日結原原において勝鬨。十六日御歸陣。十七日御着府。」

五八『神使御頭之日記』天文十七年（一五四八）『信濃史料』一一卷三七五

一四月五日に村上（義清）、小笠原（長時）、仁科・藤澤（頼親）同心に当方へ下宮まで打ち入り、たいはかり放火候てすなわち歸陣し候。（下略）

一六月十日に小笠原殿下宮まで打ち入り「下宮地下人ばかり出あり」馬廻りの侍十七騎・健兵衛討ち取り候。小笠原殿二か所手負われ候。高移の御割と風聞に候。その上村上・仁科・小笠原御柱高移後にさむられ候あいだ、未々も御割有るべし。

五九『高直壽記』天文十七年（一五四八）七月『信濃史料』十二卷二八〇

七月六日朝日「甲戌」（中略）十二日「甲申」諏訪の西方衆あい替えの出候あいだ、申刻御馬を出され、跡部越中守田屋御陣所。十三日鹿馬を進上申し候。十八日、大井の森より御馬を進められ、翌十九日卯の刻塩原館にたてこもり、小笠原長時を責め破り數多討ち捕りなされ候。二十五日上原へ御馬を納めらる。

六〇『守矢信実状書書案』『守矢文書』天文十七年（一五四八）七月『信濃史料』一一卷三七九

一長時様は年々のみぎり、副も伊那まで半々の由申し候が、ここをもつて万端申し扱め候段お察したるべく候。副祝は諏訪部の西方衆申付へ逆意の時頭好き親類に持たれ進退す。戊申（天文十七年）に半人に候。然りとせえども社入たるのあいだ免害あり、召し返され候。（前後略）

六一『小笠原長時書状案』『書簡并誄文集』天文十九年（一五五〇）七月『信濃史料』一一卷四六四

御代替えの御礼として、御太刀一腰（盛光）、御馬一疋（川原毛）進上つかまつり候。これらの趣、宜しく御披露に預かるべく候。恐々謹言。

七月五日

小笠原大膳大夫

長時在判

伊勢守（伊勢貞孝）殿

六二『高直壽記』天文十九年（一五五〇）七月『信濃史料』一一卷四六八

七月小、朝日「癸巳」三日。「乙未」御出馬。若神子に御着。十日原形様（武田晴信）村井へ御着城。十三日、「乙巳」孫五郎末の刻始めて出陣す。西の刻駒井へ着、十五日、「丁未」御歸場へすぐに参る。西の刻イヌの城を攻め取り勝鬨を御取す。戌の刻村井の城へ御馬を納められ候。子の刻大城・園田・深志・棚原・山家五ヶ所の城自落す。島立・浅間降参。仁科道外出陣す。十七日八月節、十九日、「辛亥」深志の城西の刻高直歸立す。戌亥に向かい鎧五具・原形様深志へ御出。二十三日誓書請。

六三『高直壽記』天文十九年（一五五〇）十月『信濃史料』一一卷四七五

十月二十一日、義清・長時平瀬へ出らるるの出候あいだ、中下條まで二十三日に御馬を出され候。

六四『高直壽記』天文二十年（一五五〇）一〇月『信濃史料』一一卷五〇二

十月六日朝日「乙卯」朝、十四日村上義清丹生子（安曇郡）に勅ぞ、押し落とさるのよし進進。十五日「己巳」未の刻御出馬。二十日甲戌深志へ御着城。二十二日ほりがね出陣。二十四日「戊戌」平瀬を攻め取る。敵二百四人討ち取りなされ候。終日細雨。「栗原左五門の手において、首十八討ち捕る。」西の刻より大雨（中略）二十八日「壬午」午の刻己の方へ向かいて平瀬城割す。その上歸立す、「この後辰の刻仰せつけられ候あいだ、則ち栗原左五門まかりこし城をわり、その上歸立をつかまつり候。」（中略）十日（十一月）「甲午」原美濃守平瀬に在城仰せつけらる。

六五 武田信玄塔状案「武家事紀」天文二十三年（二五五四）一月『信濃史料』十二卷一

親父（山家左馬允）に出し置き候大付百貫の地、なおもつて相違あるべからず候。忠信肝要に候。恐々謹言。
天文二十三年

正月二十日

晴信

山家松壽殿

六六 足利義輝御教書「上杉家文書」永祿四年（二五六二）三月『上越市史』別上杉家文書集一三三二

小笠原左衛門大夫（長時）歸國の事、異議なきよう馳走神妙たるべく候。なお（大館）晴光申すべく候なり。

壬（永祿四年）三月四日（花押）（足利義輝）

長尾弾正少弼（景虎）どのへ

六七 信濃御記「永祿十二年（二五六八）九月『信濃史料』一三卷四一

九月六日「丁未、晴（日）、午の刻日候。但し曇りさるなり」

「今日おれにまかり出づ。路次の次第、宝鏡寺殿・新御所御懸これをたまわる。（中略）次に武者小路大夫
委かか所へまかり向かう。酒これあり。信濃国牢人（倉時）、三好（貞盛）方これを頼みて芥川に住す。子
喜三郎（貞盛）参入す。次に岡殿、次に竹内殿、次に伏見殿、次に内侍所等へ参りおわぬ。」

六八 武田信玄印状「諏訪子商家文書」元龜二年（二五七〇）二月『大日本史料』五册九三四

定め

諏訪上吉御頭の事、神長官の指圖に任仕、真義なく勤役せしむべき旨、厳重の御下知候ものなり。仍つて件
の如し。

元龜二年辛未

市川宮内助（昌房）これを奉る

二月十四日（龍朱印）（武田信玄）

山家郷

六九 河原秀隆書状案「書簡并御書文集（附録）」天正三年（二五七五）二月『信濃史料』十四卷八六

未だ申し通す候といえども、啓上せしめ候。随つて今度信長直札をもつて申し入れられ候のあいだ、仰せ
調さられどもつものに候。必ず来秋は、信州表に到つて出勢あるべきの由候の条、早速御廻漕のこと勿論に候。
別してその許の御才覚この時に候。はなまた信濃跡目有事に候のあいだ、向後相応の儀、如在に存すべから
ず候。なお小牧但馬守より申すべく候の条、追つて御意を得べく候。恐々謹言。

小笠原右近大夫（貞盛）殿

人々御中

河原右兵衛尉

秀隆

七〇 織田信長書状「小林文書」天正三年（二五七五）二月二六日『信濃史料』一四卷二二三

「小山殿 信長」

未だ申し通す候といえども、事の由をもつて申し候。そもそも武田の事、この方に対し近年不義の体、是非
におよぼす候。然れども去る五月、三、信界目において一戦を遂げ、甲、信、駿、上の軍兵多分に討ち果た
し候。定めてその處あるべからず候。武田四郎一人討ち瀕らし候。然るあいだ、かの国に向かつて出馬せし
め退治せしむべく候。このみぎり、信長、味、天下のため、自他のなほもつものに候か、委曲小笠原右近大
夫（貞盛）伝達あるべく候。恐々謹言。

十二月二十八日

信長（朱印）

小山（秀綱）殿

七一 武田勝頼朱印状「諏訪文書」天正五年（一五七七）二月『信濃史料』十四卷二八八

定

諏訪十右衛門頭役のこと、あい定むる如くこれを勤むべし。もし先規に背き難攻せしめば、百姓等御分國を追放あるべき旨、仰せ出さるるところなり。仍つて件の如し。

今 越中 左衛門尉

天正五年丁丑二月十三日（朱印）（武田勝頼）

これを奉る

山家

七一 武田勝頼女塔状案「武家事紀」天正五年（一五七七）七月『信濃史料』十四卷二〇九

定

孝父公松壽の忠にまかせ、相原郷定郷十貫の所出し置き候。向後直参として奉公、罪莫、定法の如く武良など嚴重に、きつと軍役つとめらるべし。なお忠節の功により重恩せしむべきものなり仍つて件の如し。

天正五年七月九日

勝頼

山家左馬允殿

七三 武田勝頼寄進状案「慈願寺文書」天正五年八月『信濃史料』十四卷二一四

祈禱料として、林村の内において一貫文の所附け置き候。寺納あるべきものなり。仍つて件の如し。

天正五年丁丑

八月十五日

（花押）（武田勝頼）

千手院

（○この文書なお研究の余地あり）

七四 小笠原貞慶授状「反町英作氏所蔵文書」天正九年（一五八一）『新潟県史』資料編四一三三八

当家目取り一流の儀余儀なく承り候あじだ、その意に任せ相任せしめ候。疎有るまじき事肝要に候。後日のための条件の如し。

天正九

小笠原右近大夫

六月十日

貞慶（花押）

色部修理大夫殿

まいる

七五 小笠原貞慶宛行状案「御誼文集」（附録）天正十年（一五八二）三月『信濃史料』一五卷二五六

今度の忠節、比類無く候。二木の郷三三百貫の地出し置くものなり。いよいよ奉公尊用に候。右件の如し。

天正十

三月十四日

（花押）（小笠原貞慶）

二木豊後（重吉）どのへ

七六 小笠原貞慶書状「三村文書」天正十年（一五八二）六月『信濃史料』十五卷三三四

今度召伯（石川伯耆守教正）お取りなしゆえ、家康御光をもって大國の行、備えにその方の覺悟に候。しかれば、本意においては、後件の名字相違せざるべく候。知行の儀は、洗馬にて堀廻三千貫出し置き候。いよいよ忠節尊用に候。委曲溝口新介申すべきものなり。仍つて求件の如し。

天正十年壬子

六月十二日

貞慶（花押）

後序助兵衛尉殿

七七 小笠原貞慶書状「三村文書」天正十年（一五八二）六月十四日『信濃史料』一五卷三四四

今度入国の儀につき、条々その五肝煎りの儀、浅からざる次第に候。それについて、当家御奉行にあい加え候上は、始末少しも疎略あるまじく候。なおもつて關心なく、何事においても申せらるべきこと専用候。そのなほ重ねて折紙をもつてかくの如く候。今度の忠節によつて紙面に露わす上は、自今以後に相続の儀は勿論に候。なお溝口新介申すべく候なり。よつて件の如し。

天正十年壬午

六月十四日

貞慶（花押）

後序勘兵衛尉殿

七八 小笠原玄也死行状案「御武文集」（附録）天正一〇年（一五八二）七月『信濃史料』一五卷三八七

二本の郷かさねて死がいか候。いよいよ忠節を拙んづべきものなり。仍つて状件の如し。

天正十年（一五八二）「潮雲君」

七月八日

玄也（小笠原貞種）（花押）

二本豊後（重吉）殿

七九 小笠原貞慶死行状「三村文書」天正十年（一五八二）七月十九日『信濃史料』一五卷三三二

洗馬三手貫の地、三村勘兵衛にきまつかわし候。おのおのその心得つかまつるべき事肝要に候。仍つて件の如し。

七月十九日

（花押）（小笠原貞慶）

洗馬城廻り

八〇 木曾義昌死行状「小野文書」天正十年（一五八二）七月『信濃史料』十五卷三五三

榎原の内において百貫文の所死がうべく候。並びに林の郷預け置くべく候。納書など奇麗に走り廻るべく、殊に武具、馬具等嗜み極ぐべきものなり。仍つて件の如し。

壬午

玄徹（木曾義昌）（花押）

七月二十七日

小野内記助殿

八一 小笠原貞慶書状案「御武文集」（附録）（天正十年）（一五八二）八月九日『信濃史料』一五卷三九三

なおなおその元油断無き様にとぞんじ候。以上。

急度進進に預り候。祝着の至りに候。昨日の仕合せ、是非に及ぼざる次第に候。今日出雲守・赤澤・百足（更）以下各々指し遣はし、取出の儀申し付け候。然れば古屋・洪田混談合の子細候て、今夜豊高二陣取るよし、只今申し越し候。さりながら、西口の、左右次第分別せらるべく候。はたまた、そのもと裏ぐ飯炊きしむるの由、口惜しき次第に候。殊に今日大剣指し遣わし候ところ、無人にて深くあい動かるのよし、比類なく候。いかさま西口の模様により候て、明日これより申し遣わすべく候。会田も赤澤式部少輔指し越し候。青柳並よつてたてあるまじく候あいだ、心安かるべく候。恐々謹言。

「扱するに天正壬午の年なり」

八月九日

貞慶（花押）

塔原（海野）三河守殿

犬飼半左衛門（久知）殿

八二 小笠原貞慶書状案「御武文集」（附録）（天正十年）（一五八二）八月『信濃史料』十五卷三九四

なおなお、進進祝の至りに候。明日辺の動きの儀は、御筋の儀は先々御無用に候。何節御々注進もつ

とに候。塔原殿へ別紙に申すべく候へども、同前の儀に候あいだ、その分に心得もつとも候。以上。

急度進進祝着の至りに候。よつてその表の儀無人の所に、御郷まで放火、誠に比類なき次第に候。日飯（仁科盛武）の事條々申し分け候。然りと見えども押し詰め、取手の支度多弁入れ、今朝も両度申し遣わし候。

定めて参届程あるべからず候。次に、本山筋の儀、敵(木曾義昌)少し取手候ひつるを、人教を遣わし追ひ
払い候。ことのほか敗北の由申し来たり候。替わる儀候はば申すべく候。恐々謹言。

(朱書)

「扱するに天正十一年なり」

八月十日

貞慶御判(花押)

犬飼半左衛門(久知)殿

八三 小笠原貞慶書状案「御書集」(附録)(天正十一年)(二五八三)二月「信濃史料」一五卷五六八

ななお、明日時分、この方の仕置き、いよいよ使をもつて申し候べく候。おのおのへも、この御
心得専用に候。以上。

きつと使札、祝せしめ候。赤澤(武部少輔)事種々計策隠れなく候の案、切腹をさせ候。この及何事もな
く候。刈谷原(筑摩郡)へはすなわち出雲守(小笠原頼貞)あい移し候。その表用心油断なく申し付けらる
べきこと常用に候。次に一昨日彦直より御鷹の雁などわざわざ給わり候。近日御出馬の案、いよいよ腹目存
分のごとく申し付くべく候。我等申し分はずれも御同心に候。幸松(小笠原秀政)当月七日下着の儀、必定
の由申し来たり候。先々心安かるべく候。珍しき儀これより申すべく候。恐々謹言。

(朱書)

「扱するに天正十一年癸未年なり」

二月十二日

貞慶御判(花押)

犬半左(犬飼半左衛門久知)殿

まいる

八四 小笠原貞慶書状案「御書集」(附録)(天正十一年)(二五八三)二月「信濃史料」一五卷五七一

ななお、いずれもこの由申したく候。以上。

これより申しつるところ、飛御祝着に候。よつとをまよ(古厩盛助)とうの原(三河守貞幸)同心にて、きや
くしのくわだてもつての外の案、申し付け、悉くうちはたし候。一人もられ候はず候。この方の者には手
おい一人もこれ無く候。まきもつて大籠に存せらるべく候。御部の仕置き、大方存分の如く候。なお明日ま
た申すべく候。その表用心油断なきよう専用に候。おのおのへもこのよし申したく候。恐々謹言。

(朱書)

「扱するに天正十一年癸未年なり」

二月十四日

貞慶御判(花押)

犬半左(犬飼半左衛門久知)

まいる

八五 溝口貞秀書状案「御書集」(附録)(天正十一年)(二五八三)二月「信濃史料」十五卷五四四

ななお、その元油断なく御用心専一に候。御本儀ながら、五三日の内は御番なさるべく候。吉日を以

て御出馬あるべきの由にて候。この方仕置きのこと、進分申付け候。これまた御心易かるべく候。以上。
この方より申し入り越すべく候所に思し直し寄せられ、御飛脚に預り候。近日は、その表承々の御在番、御
御周察し奉り候。御番の儀もつとに披露申し候へども、御本儀ながら、五三日の期さ候へよし御意に候。
吉日次第御馬を出され、その地の御警備あるべきよしに候。世上如何様なる表裏候とも、動揺仕らず候。御
心易かるべく候。兼ねて申し合わす如く、家中形の如く仕置き申し候のあいだ、貴殿(詞重)と拙者談合申し、
進分の仕置きまじるべく候。少しも油断これなく候。委曲は面談の如く申し述べべく候の案、つまびらかにする
能はず候。恐々謹言。

(朱書)

「扱するに天正十一年癸未年なり」

溝口美作守

二月廿一日

貞秀(花押)

犬飼半左衛門(久知)殿

八六 嶋津忠直書状『埼玉県石川町民所蔵文書』天正十一年四月『上野市史』別冊上杉氏文書集二〇四〇六
 昨日未の刻、小笠原(貞慶)と一戦を逢けられ、おのおのかせきをもつて御勝利、実にもつて目出これを
 過ぎざり候。この上早々先半途(中途)おわんぬ。おのおの御縁離れるべく候。会田口大切所(飯沼)の義
 候条、自然、深志に至る御動きなどは勿体なく存じ候。かかる御勝利の時分は、先九分になられ候てかなわ
 ず義に候。その御心得もつとも候。恐々謹言。
 追つて、何むきも駒山(駒沢山城守)・原大(原大和守)その外おのおの談合有り、早々半途まで御歸陣
 然るべく候。以上。

四月二十日

(嶋津) 忠直 (花押)

左京亮(嶋津義忠)殿

まいる

八七 小笠原貞慶死行状案『御証文集』(附録)天正十一(一五八三)八月『信濃史料』一六卷八一
 今度の重恩として、押野(安曇郡)の内定納万疋の所出し置べく候。この旨をもつて、忠信を抽んづべき
 ものなり。仍つて件のごとし。

天正十一 癸未

八月七日

貞慶(花押)

日岐丹波守(盛武)殿

八八 小笠原貞盛状案『御証文集』(附録)天正十一年(一五八三)八月『信濃史料』一六卷八四
 今度の忠信、誠にもつて比類無く候。これにより日岐一勝出し置き候。いよいよ戦功を抽んでらるべきこと
 肝要に候。仍つて件の如し。

天正十一

八月十一日

貞慶御判(花押)

日岐丹波守(盛武)殿

八九 小笠原貞盛状案『御証文集』(附録)天正十二年(一五八四)三月『信濃史料』一六卷二二三
 おつて、七料衆こと、昨日に魂無里へ調儀(儀勢)候て、悉く打ち散らし、先度よりなお乱取りま
 たいたし、人をも討ち捕り候。高名の注文、若田見(伊勢守)うちへ首十七、細河(細置河内守長矩)
 うちへ首六つ、等々豊うちへ四つ、その外直參衆へ八つ。かれこれ三十あまり討ち捕り、昨日注進候。
 千見なども散々の体に候の間、おのおの力を得られ候べく候。

その上おのおの言調精を入られるの由、是非に及ばず候。溝口(貞秀)差し遣すべきこと、榊兵衛(仙
 石秀忠)殿所用これ有るについで、あい留め候。今日若金山内者として越し候条、その儀無く候。おのお
 の油断なく、いかにも丈夫にこれあること肝心に候。横目として、土田大次助指し越し候。その分心得ら
 べく候。

(朱書)

「格するに天正十二年申中三月が、」

赤生三日

貞慶(花押)

(宛名略)

九〇 徳川家康状案『書簡并証文集』(附録)天正十一年(一五八四)四月『信濃史料』一六卷二四二
 去る四日、信州の内麻績・青柳城一の曲輪まで責め寄り、よく者数輩討ち取り、注進の段、神妙の至りに候。
 いよいよ忠信を抽んづべきものなり。

四月十九日

家康(花押)

小笠原右近大夫(貞慶)どのへ

九一 草間肥前年貢注文「中田文書」天正十三年（一五八五）九月『信濃史料』十六卷三七二

庄内御年貢まえ

こじまの

九百文 かんざえもん

いで川

二百文 畷右衛門

つかまの

七百文 神助

同所

三百十文 宮内えもん

合せ二百二十文

酉

九月二十六日 草肥（草間肥前）（黒印）

中田源二郎殿

九二 豊臣秀吉書状案「長岡寺跡御事蹟稿」天正十三年（一五八五）十一月『信濃史料』十六卷三八三

真田安房守（昌幸）殿 （羽柴）秀吉

わざわざ飛脚をもって申し候。

（中略）

一信州・甲州國間の儀、小笠原（貞慶）、木曾伊予守（義昌）とあい談じ、諸事申し合わせ越度なきよ才覚もつどもに候こと。

（中略）

十一月十九日

（花押）（羽柴秀吉）

真田安房守（昌幸）殿

九三 小笠原貞慶書状案「御証文集」（附録）（天正十四年九）六月『信濃史料』十六卷四二九

定

千見（安曇郡）曾請奉行として、一木六右衛門（盛正）・山田善兵衛指し進むし候。少しも油断の程は、貴賤を遣はず、進乱に及ぶべく候。物真栗、右の奉行につぶさに申付け候条、相譲りて堅く申付けらるべく候。普請の模様、四人に申し付け候。いかさまの儀候とも、喧嘩停止肝要に候。法度にあい背く者においては、誰やの仁に候とも、おのおのとして成敗もつどもに候。自然、地下へ狼藉など候へば、いかがの關手、明の者兩人を横目として進むし候。冬々奉行人口才に及ぶべく候。仍つて件の如し。

（黒印）（小笠原貞慶）六月十一日

仁科上下衆中

九四 豊臣秀吉書状案「歴代古案」一天正十八年（一五九〇）九月『信濃史料』十七卷二七五

きつと御せ進むされ候。小笠原（貞慶）分御礼明のため、石川出雲（康正）・石川兵衛（光吉）差し進むされ候のところ、曰ころ小笠原あいかかえ候青柳城・大城・千見城へ賁勝人数を入れ置き、上使承引つかまつらざる候の由、曲事に候の条、御謀罰を加えらるべきと思し召し候とらえども、賁勝の者に候由に候の条、この度は是非に及ばず御免なされ候。只々当知行の旨に任せ、右兩人にあい渡すべく候。もし油断においては、御成敗なされるべく候なり。

九月廿三日

「天關御朱印」

（宛名略）

九五 信州松本城記録 信府統記 享保九年（一七二四）四七

○当郡（筑摩郡）は中古小笠原氏の領地たりし故、彼の幕下の氏族たる人々分ち頼して或は古城の跡に寄り、または新たに城築き屋敷を構えて住居す。その中に島立右近「本氏廣野」と云う人始は庄内の小島村井河の城に住し、後城を今の松本の地に移せり。「この井河の城は四方に流れありて、井の字の如くなる故に井河の城と云う。古く誰人の獲けるといふことを知らず。久しく小笠原家にて持ち来たれる所、城主中絶して城郭産壊せり。寛正六年之酉（一四六五）、再びこれを修復して改め名づけて深志城と云う。此の辺は小笠原氏数代の領地なるが故に文龜年中（一五〇一）一五〇四）まで林の城主より兼ね持てり。島立右近も小笠原の一旗たりしとなり。」

九六 松本領古城記 信府統記 享保九年（一七二四）四八〇

○小島村古城地「井河の城と称う沼城なり」本城地形少し高し、広そ「東西四十間ほど、南北十六七間」東の方に虎口の跡一所あり。その進合は雑地に草生し水つきなり。本城の内皆畑になりたり。土圭形尖倉台の跡と目する所塚のごとくなりてあり。四方沼にて流れもあり。その内に取り分け深き所を釜と云ふ。辰巳の圃に黒田釜というあり、その所へ南東より流るるを鑿取りといひ伝ふ所田あるにや。縫てこの地の流れ水上ある川にあらず、皆近辺の出水なり。西の方の川「これをて川と云う、出水ゆえ昇せるなるべし」幅六七間「尺八ゆえ渡ることならず」この川と本城の間、南にては十七八間の所もあり。皆田になせり。川の向こう西の方に鎌田村あり、これより西南五六町ばかりに征兵野あり。この北の方まで三の曲輪とて、今に堀の跡あり。今の鎌田村は曲輪の内なりしと云う。この城辺の水皆北へ流れて薄川・田川へ落ちる。本城の地形も高し。すべてこの近所の田は深田の足入り多し。「小笠原家より久しく在城ありて林の館へ移られし後までも兼ね持てり。永正五年（一五〇四）島立右近城を松本の地へ引き移せるとくわく城主記に載す。島立も小笠原の支族なり。その後は庶産臣氏何業領せり。小島村より戌亥の方二町二十間あり。上小島村は松本の城より午の方八町三十間あり」

九七 松本間記 文化十五年（一八二八）四月八十歳これを写す小嶋村頼山長左衛門重臣

（中略）

- 一 寛正四癸未年（一四六三）、小嶋井川城をお建て直し深瀬城と云う。城主小笠原修理大夫源長棟公。山家林の城と尚持ちなり。永正四丁卯年（一五〇七）八月御逝去。廣澤寺願五伴正安大居士。孫西條に分る。（後略）

※底本名に（附録）と付したものは筭業大成附録の意である。

3 建武以後の信濃守護

和暦	西暦	月日	守護	出典	備考
建武2年	1335	3月8日	(小笠原貞宗)	市河文書 信史5-260	船山で市河助房等の着状状を受ける
		7月13日	小笠原貞宗	市河文書 信史5-264	守護信濃守
		9月27日	小笠原貞宗	小笠原文書 信史5-295	信濃守 住吉庄等を宛がわれる
		9月30日	小笠原貞宗	市河文書 信史5-298	信濃下向、親摩郡伐間へ
建武3年	1336	1月13日	(村上信直)	市河文書 信史5-317	信州静謐のため御下向
		2月23日	小笠原貞宗	市河文書 信史5-325	深志介以下蜂起、守護免向守護代小笠原余次兼経
暦応3年	1340	10月24日	小笠原貞宗	守矢文書 信史5-441	当国守護 北条時行攻め
康永3年	1344	11月12日	小笠原文書	信史5-489	守護職譲与
貞和2年	1346	9月20日	小笠原貞宗	金沢文庫文書 信史5-543	信濃前司 水内郡太田庄大倉郷地頭職の事
貞和3年	1347	5月20日	小笠原政長	小笠原文書 信史6-2	守護職安堵
貞和5年	1349	3月17日	小笠原政長	金沢文庫文書 信史6-40	警察権の実行 水内郡太田庄大倉庄地頭職
観応1年	1350	10月21日	小笠原政長	小笠原文書 信史6-71	九州鎮定のため上洛要請
		1月5日	(小笠原政長)	市河文書 信史6-76	船山郷内守護館放火
観応2年	1351	12月10日	諏訪直頼力	佐藤文書 信史6-112	諏訪信濃守以下凶徒
		7月26日	小笠原長基	小笠原文書 信史6-443	信濃守 小笠原清政に安曇郡大和田郷を預ける
貞治5年	1366	12月2日		金沢文庫文書 信史6-469	当守護人 水内郡太田庄大倉郷の押勘に対処
応安3年	1370	4月3日	(小笠原長基)	市河文書 信史6-508	沙弥 水内郡常呂御牧南桑五ヶ村を預ける
応安7年	1374	3月4日			
		4月19日	上杉朝房	豊原信秋記 信史補遺編上283	信濃守護上杉朝房
至徳2年	1385	2月12日	斯波義種	市河文書 信史7-137	修理大夫 地頭職を与える
至徳2年	1385	7月18日	斯波義種	市河文書 信史7-145	修理大夫
至徳3年	1386	8月12日	(斯波義種)	市河文書 信史7-155	市河朝房への感状
嘉慶1年	1387	4月28日		市河文書 信史7-178	小笠原長基善光寺で挙兵
嘉慶1年	1387	閏5月28 ～ 9月	斯波義種	市河文書 信史7-185	市河朝房の軍忠を賞し、軍忠状を受ける
嘉慶1年	1387	9月15日	斯波義将	市河文書 信史7-193	市河朝房への感状
嘉慶1年	1387	9月26日	(斯波義将力)	守矢文書 信史7-194	義朝御判 小笠原長基との合戦
応永6年	1399	10月21日	小笠原長秀	市河文書 信史7-344	信濃守 当国信州守護殿
応永7年	1400	10月29日		市河文書 信史7-408	信濃守 所領の安堵
応永8年	1401	2月17日	斯波義将	吉田家日次記 信史7-410	信濃国守護殿 右衛門督入道に充てがう
応永8年	1401	6月25日	斯波義将	市河文書 信史7-414	警察権の実行
応永9年	1402	9月17日		市河文書 信史7-419	
応永11年	1404	12月	代官細川慈忠	市河文書 信史7-430	幕府料国
応永32年	1425	12月29日	小笠原政康	小笠原文書 信史7-579	補任
嘉吉1年	1441	5月26日	小笠原文書	信史8-152	結城館を落城させる
文安3年方	1446		小笠原宗康	小笠原文書 信史8-209	名字・国・所領一分も残さず渡し申し候
文安3～4年		5月4日	小笠原光康	小笠原文書 信史8-219	守護職等の事、六方に仰せつけられ
文安4年	1447	12月24日	小笠原持長	天竜寺文書 天竜寺文書の研究458号	段銭、守護使入部の停止
文安4年	1447		小笠原光康	諏訪御符禮古書 信史8-234	守護六郎殿
宝徳4年	1453		小笠原持長	諏訪御符禮古書 信史8-295	守護殿大膳大夫持長
文明5年	1473	11月3日	小笠原文書	信史9-111	守護補任
文明9年	1477	10月28日	小笠原政秀	山科家禮記 信史補遺編上345	信濃小笠原山科言国に太刀を贈る
文明9年	1477	12月	小笠原政秀 上杉房定	尋尊大正記79 信史9-207	信乃国 上杉、小笠原
文明12年	1480	9月14日	(小笠原政秀)	観元日記別録下 信史9-250	小笠原左京大夫政秀

4 小笠原氏と城館をめぐる関係年表

和暦	西暦	日付	事 項	事 件
元暦1年	1184	5月1日	源朝綱、志水冠者義高の残党が謀叛を企てる風聞を聞き、小笠原長清等を甲斐に派遣する	
文治1年	1185	8月29日	16日に行われた小除目の結果が判来し、加々美遠光が信濃守になる	
文治2年	1186	10月27日	小笠原長清、信濃国伴野住地頭職	
承久3年	1221	5月	京都方の軍兵に対し東山道大將軍の一人に小笠原長清が命じられる	承久の乱
		6月5日	山道の計つ手として小笠原長清等美濃大井戸を渡り官軍と戦う	
		6月・7月	合戦の翌本人の内右雅入道を小笠原長清が預かり甲斐に下着し殺害する	
仁治3年	1242	7月15日	小笠原長清没す	
元応1年	1319	7月11日	小笠原政長、信濃政原井川館において生まれる	
元亨3年	1323	10月26日	幕府、北條貞時十三回忌私事を相模川畔で行う。供物を進める信濃諸氏の中に小笠原信乃前司(小笠原宗長力)がみえる	
元弘1年	1332	10月15日	北条氏の軍、楠木正成を河内赤坂城に攻める。大和道の軍勢の中に小笠原彦五郎(貞宗)が含まれる	元弘の乱
元弘3年	1333	4月27日	足利尊氏、伯耆国より勅命を受け小笠原宗長に合力を頼む	
建武1年	1334		小笠原貞宗この年信濃守護就任か	
建武2年	1335	3月	守護小笠原貞宗、船山守護所(更級郡)に兵を集める	
			市河助房、期の市河三郎助保を代官として船山へ馳せ参じ着到。府中の騒動にも発向し浅間館に至る。小笠原貞宗着到状を承る	中先代の乱
			諏訪頼朝、北條時行を取り立て、信濃国司を近入道少将入道を府中に襲い、少将入道自害をする	
			9月27日	小笠原貞宗、足利尊氏より信濃国住吉庄・武田孫五郎長高跡・市河掃部六郎跡を宛がわれる
建武3年	1336	9月30日	小笠原貞宗、国司堀河光盛を迎えに筑摩郡浅間に向参する	
		1月1日	小笠原貞宗、甲州守護武田政義等と諏訪に攻め入り、大祝藤政政頼を廢して諏訪頼朝を立てる	
		2月23日	市河経助、小笠原貞宗発向について麻績十日市場で北條高時一族及び信濃国凶徒深介を相手に軍忠を行い、軍忠状を出す。	北條高時一族討伐
暦応2年	1339	9月9日	小笠原貞宗、兼任二宮(宮)「宮村大明神」を創建する	
暦応3年	1340	6~10月	北條時行伊那大徳寺城に兵を挙げ、小笠原貞宗、府中御家人とともにこれを攻める	中先代の乱
年次不詳			小笠原貞宗、この頃井川館を築城か	
暦応4年	1341	5月28日	小笠原貞宗、吉良時義等と高井郡志久見河原で新田残党に迎撃され、市河一族とともに撃破する	南北朝の内乱
康永1年	1342	3月13日	小笠原貞宗、南朝の東国拠点の常陸大宮城の攻撃に参加。翌年11月に陥落する	
康永3年	1344	11月12日	小笠原貞宗、嫡子市河助政長を惣領職となして所領、守護職を譲る	
貞和3年	1347	1月27日	小笠原長基、信濃政原井川館において生まれる	
		4月26日	足利尊氏、小笠原貞宗に塩尻・島立など春近領半分を宛がう	
		5月26日	小笠原貞宗他界する。	
観応2年	1351	1月10日	市河経助、先の信濃守護小笠原政長舎第七郎、守護代小笠原弥二郎らを筑摩郡故光寺に攻める	観応の擾乱
		8月	足利直義方に諏訪軍が船山守護館を攻める	
正平7年	1352	1月19日	足利尊氏、信濃春近領を小笠原政長に宛がう	
正平10年	1355	4月16・17日	足利尊氏、小笠原長基に春近領欠所分を宛がう	
		8月17日	小笠原長基、南朝方の上杉憲時、祐津宗貞等と越後で戦う	南北朝の内乱
		8月17日	小笠原長基、坂西・麻生・麻沢・山家・平瀬・赤沢等を率いて栲幡ヶ原で宗良親王の軍と戦う	
貞治4年	1365	11月6日	小笠原長基、塩尻郷春近折中分を石清水八幡宮に寄進する	
貞治5年	1366	2月9日	小笠原長基、塩尻郷内東条を諏訪下社に寄進する	
		9月18日	小笠原長秀、信濃政原井川館において生まれる	
永和2年	1376	4月16日	小笠原政康、信濃井川館において生まれる	
永徳3年	1383	2月12日	小笠原長基、子息次郎長秀に所領を譲り与える	
至徳4年	1387	閏5月カ	小笠原長基、守護所波義將の平芝の守護所を攻撃し、守護代二宮氏泰の子息余一穂氏と漆田で合戦	
		7月9日	小笠原長基、伊那の田切で新波方の諏訪頼宣と戦い敗れる	
		9月26日	小笠原長基、筑摩郡熊井原で諏訪頼宣の軍を破る	
明德2年	1391		小笠原長基、京都に出陣し、武田信存と内野合戦の評定衆として武功をたてる	明德の乱
応永5年	1398	8月24日	足利義満、小笠原長秀に住吉庄と春近領を返付する	
		5月10日	足利義満、小笠原長秀に春近領下地一丹を宛がう	
		10月10日	小笠原政康、右馬助に任じられる	
		10月21日	小笠原長秀の守護使の信濃入部に島津国忠が反発したため、赤沢秀国・柳瀬清忠らを派遣する	石渡の合戦
応永6年	1399	11月3日	小笠原長秀、市河興仙に島津退治についての感状を送る	
		11月6日	大内義弘、和泉で謀反を起こす。小笠原長秀、幕府の召により伊那郡伊賀良庄を發する	応永の乱
		11月28日	小笠原政康、守護長秀の手に属し大内義弘退治での忠節を足利義満から賞せられる	

和暦	西暦	日付	事 項	事 件
応永7年	1400	3月16日	幕府、小笠原長秀に山城海城領信濃田太田庄領家職の押領人を選びさせる	大塔合戦
		4月21日	信濃守護小笠原長秀、市河興仙の高井郡烏帽子形城を攻めた軍忠状を承了する	
		6月11日	小笠原長秀、筑前郡春近塩屋東西・小笠原東西・新村南方を諏訪下社に安堵する	
		7月21日	中河二郎(小笠原政康)、守護小笠原長秀の善光寺入部の行列の筆頭に名を添ねる	
		10月5日	足利義満、市河興仙の大塔合戦での小笠原長秀に対する忠節を賞する。	
		11月15日	市河興仙、大塔合戦で小笠原長秀方について軍忠状を提出し、長秀これを承了する。	
応永9年	1402		小笠原長基、頼田に天満宮を勧請する	
応永12年	1405	11月9日	小笠原長秀、弟政康に所領を譲渡する	
応永14年	1407	10月6日	小笠原清原長基が卒す	
応永22年	1415	12月5日	足利義持、住吉・春近を小笠原長秀に返付する	
応永23年	1416	12月31日	足利義持、小笠原政康の知行を安堵する	
応永24年	1417	1月23日	足利義持、小笠原政康の上杉禪秀討伐の忠節を賞する	上杉禪秀の乱
応永25年	1418	2月21日	足利義持、武田信元の甲斐入部および国内統治を小笠原政康に協力させる	
		9月9日	足利義持、住吉庄・春近領を小笠原政康に返付する	
応永30年	1423	7月10日	関東管領足利持氏が幕府に反旗、幕府、市河義房を小笠原政康に使いこれを討伐することを命じる	足利持氏の幕府反抗
		8月19日	將軍足利義教、足利持氏討伐の命令を発し、小笠原政康を軍団の長として碓氷峠より上野原に入る	
		11月16日	足利義持、足利持氏討伐の功を賞し、小笠原政康に春近領内の船山郷を免がう	
応永32年	1425	2月3日	小笠原政康、大膳大夫に任ぜられる	
		3月15日	小笠原長秀、清盛(松本市)で卒す	
		12月29日	小笠原政康、信濃国守護職を補任される	
応永33年	1426	8月27日	小笠原政康、守護として信濃国に downward する。將軍義持、それを褒め、太刀を贈る	
応永34年	1427	2月18日	足利義持、小笠原政康に越後へ発向することを催促する	
応永34年	1427	6月19日	足利義持、重ねて小笠原政康の越後発向を促す	
応永34年	1427	10月26日	足利義持、小笠原政康に越後まで発向させる	
正長1年	1428	8月28日	將軍足利義教、小笠原政康に春近領一円の下地を安堵することを畠山満家が伝える	
永享5年	1433	7月17日	小笠原政康、近江草津で男僧十段数千人と戦う	
		11月27日	小笠原政康、延暦寺の乗徒の蜂起を山名持豊等と鎮定する	
永享7年	1435	1月25日	幕府、小笠原政康に命じ越後守護代長尾邦景等とともに芦田下野守の討伐を命じる	
		10月7日	小笠原政康、府中に下着する	守護所は府中(井川か)
永享8年	1436	8月3日	芦田下野守、信濃守護小笠原政康に降り、將軍足利義教これを賞す	
		12月20日	小笠原政康、村上頼清と戦う。頼清足利持氏に援軍を要請するが得られず敗れる	小笠原政康信濃統一へ
永享10年	1438	9月6日	幕府、細川持之の書状をもって小笠原政康の関東出陣を促す	永享の乱
		9月24日	小笠原政康、関東に向け出陣する。足利義教、上杉憲実と協力するように催促する	
		10月1日	幕府方合戦に勝利する。小笠原政康には事後処理のため関東に居残ることを命じる	
		12月23日	足利義教、小笠原政康の関東での忠節を賞す	
永享11年	1439	2月15日	足利持氏切關する	
永享12年	1440	11月	小笠原政康、筑摩神社(松本市)の本殿を再建する	
嘉吉1年	1441	関東管領執事上杉清方、諸軍に結城城を攻めさせ、小笠原政康陣中奉行を命じられ、その手兵の降参を定める	結城合戦	
		5月26日	足利義教、結城館を攻略した小笠原政康の戦功を賞す	
		5月26日	足利義教、結城館を攻略した小笠原宗康の戦功を賞す	
嘉吉1年	1441	6月26日	將軍足利義教、赤松満祐に殺害される。管領細川持之、これを小笠原政康ら諸將に報じ、また結城氏朝の死仇竹義憲討伐のことを命ずる	嘉吉の乱
			小笠原政康、畠山辺村に護法山竜雲寺を開く	
年次不詳			小笠原正透遺言「伊賀良の事は六郎(光康)に任せ、当家の事は五郎(宗康)・六郎ならで計らうまじく候」	
嘉吉2年	1442	8月9日	小笠原政康、小糸郡海野において死去する	
嘉吉3年	1443		小笠原長朝、林の館に生まれる	
文安2年	1445	11月24日	小笠原宗康、従兄持長と亡政康の遺領を争う、幕府奉行人は宗康に安堵するべきという意見を幕府に具申する	小笠原家遺領を争う
文安3年	1446	3月11日	小笠原宗康、弟光康に惣領職・所領を譲り渡す	
文安3年	1446		小笠原宗康、従兄弟の小笠原持長と水内郡藤原原で戦い敗死する	藤原原合戦
年次不詳		5月4日	細川持之、「そもそも小笠原大膳大夫方のこと、是非無きしたいに候。」宗康の戦死を伝える文言か	
年次不詳		5月4日	小笠原宗康の遺跡と守護職等を光康に仰せつけられる	
文安4年	1447	12月24日	管領細川勝元、小笠原持長に四宮・青沼村の段銭・人夫・臨時課役・守護役を免除し、持長守護村内に守護使が入部することを停止させる	
宝徳1年	1449		小笠原持長、寄書一紙和尚を竜雲寺(広沢寺)に招き、曹洞宗の寺とする	
宝徳2年	1450	6月19日	小笠原光康、遠江守に任じられる	

和暦	西暦	日付	事 項	事 件
宝徳3年	1451	10月5日	小笠原大膳大夫(清宗)、諏訪社社田の安堵状を授ける	
			小笠原清宗、林に館を移す	
宝徳4年	1452		徳田(水内郡)五月会の頭役を神長と守護殿である小笠原持長が勤める	
享徳4年	1455	1月16日	藤府、小笠原光康に上杉憲実の子房実への協力を命じる	享徳の乱
康正2年	1456	1月18日	足利義政、小笠原政秀に所領を安堵する	
		9月11日	足利義政、足利成氏の征伐を賈し、ともに又次郎(小笠原清宗)の治別を命じる	享徳の乱
長祿3年	1459		小笠原清宗、林館を築城する	
寛正元年	1460		小笠原清宗、水番城を築く	
寛正2年	1461		寛正二年五月会の頭役が俣庄にあてられ、小笠原持長がそれを勤める。	
		11月26日	小笠原光康卒す	
寛正3年	1462	6月15日	小笠原持長卒す	
		9月	小笠原清宗、俣庄内に深志神社を築く	
年次不詳		11月3日	足利義政、小笠原政秀に守護職を補任したことを小笠原家長に申し渡す	
寛正6年	1465	12月15日	小笠原政秀、公方(足利義政)に御札を申し上げる	
応仁1年	1467		小笠原政秀、伊賀良より府中に乱入して小笠原信濃守宗清(清宗)を攻める	
応仁2年	1468		小笠原宗清(清宗)卒す	
文明3年	1471		諏訪上社五月会で小笠原殿(長朝)が当代初として俣庄の頭役を勤める	
年次不詳			小笠原政秀、府中に小笠原長朝を襲撃し、長朝一旗更級郡役之島(長野市)に難を逃れる	
年次不詳			小笠原政秀、府中を占領するが、国人等の同意を得られず長朝を養子として館岡に帰る	
文明9年	1477	10月	興福寺大乗院尊尊、諸国の守護人を注し、信濃の守護は上杉房定・小笠原政秀の2名を挙げる	2人守護体制
		8月16日	小笠原長朝、仁科盛直と徳高で合戦し長朝討ち勝つ	
文明12年	1480	9月20日	小笠原長朝、仁科盛直・西牧満兼・山家満家と対抗し、山家城を攻め山家孫三郎を討ち死にさせる	
			五月会の左頭に俣庄が割り当てられ、小笠原長朝が頭役を勤める	
文明13年	1481	4月19日	小笠原長朝と山家満家が敵対し、山家に合力した仁科・香坂が和田城を攻め、井河・山家は無事であった	
文明14年	1482	8月15日	小笠原長朝、諏訪頼宗に合力して伊那山田城を攻める	
文明15年	1483	3月19日	小笠原長朝、金刺興春と戦う矢崎政頼等を援けて諏訪下社郡の小野・塩尻等を押領する	
文明16年	1484	5月6日	諏訪頼満、小笠原政秀等の援けにより片山城を修築して籠る。小笠原長朝、安曇・筑摩2郡の諸勢を率いこれを攻める	
文明17年	1485	5月	文明17年五月會流鏑馬が府中桐原・神田に割り当てられ、小笠原政政と桐原次郎三郎有知が勤める	
長享3年	1489	8月2日	香坂某、小笠原長朝に合力するため府中に出陣する	小笠原政秀の府中制庄
			五月会石頭が俣庄に割り当てられ、小笠原政秀が頭役を勤める。政秀は府中にいることがわかる	
明応2年	1493	1月4日	小笠原定基、政秀父子を誘殺し伊賀良荘を押領する。小笠原長朝復讐のため定基と戦う	
文龜1年	1501	7月10日	府中の小笠原貞朝、定基・斯波義隆の要請をもって遠江に遠征する	
		8月12日	小笠原長朝卒す	
永正10年	1513		深志の長時、筑摩村に淨林寺を創建する	
永正11年	1514		小笠原幸松丸(長棟)、筑摩神社別当安養寺の銅鐘を寄進する	
永正12年	1515	6月3日	小笠原貞朝卒す	
天永2年	1522		金物山福山の峰にあったという慈眼寺が館に移され、法印窟室に中興される	
天文2年	1533	7月22日	府中小笠原長棟の軍伊那郡に陣する	
		7月23日	小笠原長棟の軍、知久と対陣する	
		7月28日	府中小笠原長棟の軍、知久頼元・高遠諏訪頼継の軍と戦う	
		8月17日	小笠原長棟、再び府中より伊那郡に攻め入り、知久軍と対峙する	
年次不詳	1534		小笠原長棟、松尾小笠原氏を圧倒し、松尾城に次男信定をおく	
天文6年	1537	2月2日	諏訪頼重、小笠原長棟の軍を塩尻の城に攻め、赤木・吉田に放火する	
天文7年	1538	10月13日	小笠原長棟、神龜二羽を諏訪上社に奉納する	
天文8年	1539	6月26日	小笠原長棟、諏訪頼重と和解する	
天文14年	1545	4月カ	小笠原長時、伊那郡ヶ崎城に籠り、藤澤頼親を援護する	
		6月13日	武田晴信、塩尻まで陣を進め山田林近辺および小笠原長時の館に放火する	
		4月5日	小笠原長時、村上義清等と同心して諏訪社下宮に打ち入る	
天文17年	1548	7月19日	小笠原長時、勝兼(勝笠)峠において武田晴信と戦い敗戦する	
			小笠原長時半人となる	
天文18年	1549	10月8日	小笠原長棟卒す	
		7月5日	小笠原長時、將軍足利義輝の代替えを祝し太刀・馬などを伊勢貞直に託して贈る	
天文19年	1550	7月15日	大城・深志・岡田・朝原・山家五ヶ城陥落する	
		8月14日	小笠原頼盛、小笠原長時の御礼に対して御内書が下されたことを告げるとともに、半人の身になったことを憂う	
天文20年	1551	10月21日	小笠原長時、村上義清の助けで安曇郡平瀬へ出る	
		10月24日	武田晴信、平瀬城を攻め破る	

和暦	西暦	日付	事 項	事 件
天文21年	1552	6月	小笠原長時、本意の上は織崎万正を寄進すると建仁寺摩利支天に書状をもって預う	
永祿4年	1561	3月4日	足利義輝、長尾景虎に小笠原長時の帰国を援助するように命ずる	
永祿11年	1568	9月1日	小笠原長時・貞慶父子、三好長慶を頼み摂津芥川に住す	
元龜2年	1571	3月18日	信州小笠原入道平人となり、京都に借家する	
天正3年	1575	2月26日	織田信長、小笠原貞慶とともに信濃に出陣するよう促し、川尻秀勝の書状をもってそれを伝える	
		11月28日	織田信長、小山秀綱に武田勝頼追討を促す書状を出し、小笠原貞慶に伝達をさせる	長篠の戦い
天正9年	1581	6月10日	小笠原貞慶、色部良真に伝授状を渡す	
		6月11日	小笠原貞慶、色部修理大夫に幕の伝授書を相伝する。	
		6月17日	小笠原貞慶、色部良真に貞吹様の次弟を伝授する。	
天正10年	1582	3月14日	小笠原貞慶、二本重吉に安曇郡二本郷300貫の地を宛がう	
		6月12日	小笠原貞慶、石川数正の取成で、家康を後ろ盾に信濃入国を決意し、後藤勘兵衛尉に忠節を促し、本意の上は筑摩郡洗馬に3000貫の地を宛がうことを伝える	
		6月14日	小笠原貞慶、信州入国に際しての五戸勘兵衛尉の忠節を賞し、奉行人に加え、以後の後継の相続を安堵する	
		7月8日	小笠原玄也、二本重吉に安曇郡二本郷を安堵する	
		7月19日	小笠原貞慶、約束の通り三村(後行)勘兵衛に洗馬3000貫の地を宛がう。	
		8月9日	小笠原貞慶、塔原三河守・犬飼久知に敵城西口の状況からさらに指示を出すことを伝える。筑摩郡会田へ赤澤部少輔を遣わす	日岐城攻め
		8月10日	小笠原貞慶、犬飼久知に戦功を賞するとともに仁科盛武の降参を許さず改めることを指示。また筑摩郡本山に出兵し、木曾義昌の兵を追い払ったことを伝える	
		11月	小笠原貞慶、上杉と内通し矢久の城に籠った会田院一党を攻め滅ぼす	会田攻め
		2月14日	小笠原貞慶、古郡盛勝を逆心の罪で成敗し、その一派の成敗を犬飼久知に申付け。また、仁科の仕置きがすまば番替えをすることを伝える	
		2月14日	小笠原貞慶、古郡盛勝・塔原三河守が同心して逆心を企てたため、悉く討ち果たしたことを伝える	
天正11年	1583	2月22日	溝口貞秀、犬飼久知に貞慶出馬まで油断なく番をすること、小笠原貞慶が出馬し城普請をすること等を伝える	
		4月20日	幡津忠直、小笠原貞慶との一戦に勝利した幡津義忠を賞するとともに、会田口が大切所であることから、油断なく心得るように伝える	麻績城攻め
		8月11日	小笠原貞慶、日岐盛武の忠信により日岐の地を宛がう	
		3月3日	安曇郡仁科衆が貞慶に属し鬼無里を攻め取る。小笠原貞慶犬飼久知等に千見城の普請など備えを厳重にすることを命じる	
天正12年	1584	3月18日	敵(小笠原貞慶の軍)、上杉景勝の属城筑摩郡青柳城を攻める。海津城の將上條宣順、大日方佐渡守に青柳城の守備につかせる	青柳城攻め
		4月19日	徳川家康、小笠原貞慶の筑摩郡麻績・青柳城攻撃の功績を讃える	
		4月21日	上杉景勝の軍、小笠原貞慶の軍を筑摩郡麻績城に迎え撃ってこれを破る	
		10月5日	徳川家康、小笠原貞慶の木曾吉昌居城の放火など戦功が大きかったことを賞する	
天正13年	1585	10月17日	羽柴秀吉、真田の今後の進退を保証し、小笠原貞慶と相談し国を守るように指示を出す	
		11月19日	羽柴秀吉、徳川家康が離反したことに對して、明春出馬することを伝え、真田昌幸・小笠原貞慶・木曾義昌で相談し、信濃・甲斐を守る計らいをさせる	
天正14年外	1586カ	6月11日	小笠原貞慶、仁科衆に千見城の普請を命じて、二本盛正・山田善兵衛を奉行として派遣する	
天正14年	1586	11月14日	羽柴秀吉、徳川家康と和解し関東を委ね、真田昌幸・小笠原貞慶・木曾義昌の領地を家康に返還する	
天正15年	1587	3月18日	真田昌幸・小笠原貞慶、関白秀吉の命令で徳川家康に謁見する	
天正16年	1588	2月20日	小笠原貞慶、里山辺に竹沢庵を開基する	
天正17年	1589	1月7日	徳川家康、小笠原秀政に書状を送り、貞慶との代替えを秀吉が認めた旨を伝え、安曇・筑摩郡の所領を安堵する	
		9月17日	小笠原秀政、浅野右衛門を千見城在番とし安曇郡船尾の内9貫500文の外屋敷500文を宛がう	
		4月8日	小笠原秀政、安曇郡日岐城の存番順を定める	
天正18年	1590	6月28日	小笠原貞慶、上杉景勝とともに武蔵八王子城を攻め落とす、その戦況を澤藤盛忠に伝える	
		9月23日	豊臣秀吉、小笠原貞慶分の所領札幌のため石川数正・光吉を派遣する。貞慶がかかた城として筑摩郡青柳城・大城・安曇郡千見城が見える	
文祿4年	1595	5月10日	小笠原貞慶下総古河で卒す	
慶長16年	1611	3月	石川康勝、林村の慈恩寺観音堂を造立	
慶長19年	1614	6月25日	小笠原秀政、天満宮を宮村宮の北側に移す	

年表中の斜文字は一次史料によらない事項を示す

写真图版





林城址近景（大城—大崎崎谷—小城）



海岸寺沢から林大城・橋倉谷を見下ろす



林大城 3 郭（南西から）



林大城 3 郭—削平地群①間の堀切 D（北東から）



林大城 2 郭北西面（3 郭から）



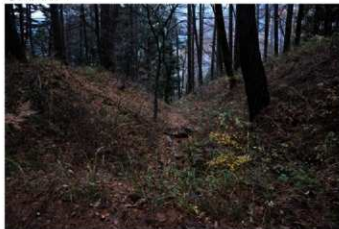
林大城 2 郭を背後から見下ろす



林大城主郭側から 2 郭北東側面の土塁と段郭を見下ろす



林大城 2 郭から背面・主郭 1 方向を見る（北西から）



林大城主郭1—2 郭間堀切E (南西から)



林大城主郭1—2 郭間堀切Eと北東側段郭群 (林道から)



林大城主郭1 東半・東面土塁 (北東から)



林大城主郭1 背面土塁から虎口側側面土塁を見る



林大城主郭1 虎口 (内側)



林大城主郭1 虎口南側面



林大城主郭1 北東側面土塁内面の石積①



林大城主郭1 背面土塁内面の石積③



林大城主郭1 南西外面の石積②



林大城主郭1 背面土塁を4郭から見る(南西から)



林大城主郭1 南西側の9郭



林大城6郭(西から)



林大城主体部北東の7郭と土塁(南から)



林大城11郭の化粧水井戸跡



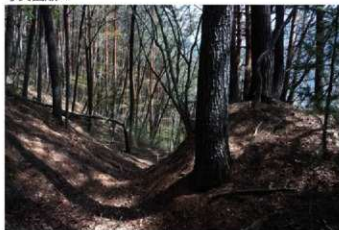
林大城主体部東側の堀切Hと切岸・土塁



林大城主体部東側の堀切H(北西から)



林大城林道下の12郭(南東から)



林大城背面尾根鞍部の堀切 G



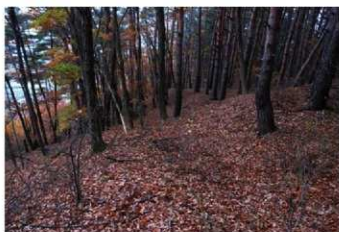
林大城背面尾根東斜面の塁線 I



林大城削平地群① 14 郭から堀切 D・土塁を見上げる



林大城削平地群① 16 郭の西面石積



林大城削平地群① 19 郭の虎口（上から）



林大城削平地群① 22 郭の側面土塁



林大城削平地群② 最下段の南西側面土塁（南から）



林大城小削平地群② 堅堀 B（南西から）



林小城副郭の虎口を見上げる（北から）



林小城主郭背後の大堀切（西から）



林小城主郭東面の石積（東から）



林小城主郭東面石積の顎止め石



林小城大堀切から下り途中で合流する堰堀（東から）



林小城主郭西土塁から背面土塁を見る



林小城主郭を背面土塁から見下ろす（南から）



林小城主郭北面（2郭から）



大高崎谷と林山腰遺跡（手前：A区、奥に大高崎集落）



林山腰遺跡E区の平場遺構と礎石建物跡



林山腰遺跡出土陶器（3列目左端：B区出土古瀬戸端反皿、他はE区出土大窯端反皿・小壺蓋）



林山腰遺跡出土大窯天目茶碗、貿易陶磁（青磁・青花・白磁）



井川城址上空から市街地を望む（南から）



試掘2トレンチ 整地土・塌状遺構断面（東壁）



試掘3トレンチ 整地土・塌状遺構断面（東壁）



試掘5トレンチ 全景（南西から）



試掘5トレンチ 土坑4内杭断削状況（南東から）



試掘6トレンチ 土壘堆積断面（南壁西端）



試掘6トレンチ西区 全景（東から）



試掘7トレンチ西区 全景(東から)



試掘8トレンチ 全景(建1他・南から)



試掘8トレンチ 硯(1)出土状況(東から)



試掘7トレンチ 2面土1(南から)



試掘8トレンチ 1面建1柱1礎石・土層断面(西から)



試掘8トレンチ 1面建1柱2土層断面(西から)



試掘8トレンチ 1面建1柱3・柱4土層断面(西から)



1次1・2トレンチ 全景（手前1tr・奥2tr、北東から）



1次1トレンチ 1面建2柱1礎石断割状況



1次1トレンチ 1面建2柱4西壁土層断面



1次1トレンチ 1面建物址・2・溝2（東から）



1次2トレンチ 1～2面遺構検出状況（南から）



1次2トレンチ 土塁・堀状遺構堆積断面（北壁）



1次3トレンチ 2面全景(北から)



1次4トレンチ 法面の石列1(北東から)



1次4トレンチ 全景(北東から)



1次5トレンチ 南半全景(北東から)



1次5トレンチ 西壁P36周辺整地土層



1次6トレンチ 1面集石1(東から)



2次2トレンチ 全景(北から)



2次2トレンチ 土層検出状況・断面(西から)



1次6トレンチ 2面遺構検出状況(西から)



2次3トレンチ 全景(北から)



2次3トレンチ P18(東から)



2次4トレンチ 流路1-2間整地土(南壁)



2次4トレンチ 全景(北東から)



2次5トレンチ 全景(西から)



2次5トレンチ 流路1以東全景(北西から)



2次6トレンチ 北区遺構検出状況(南東から)



2次5トレンチ 掘状遺構断面(d-d')



2次6トレンチ 建3柱4断面



2次6トレンチ 建4柱13断面



2次6トレンチ 建4柱14断面



2次6トレンチ 南区全景



2次6トレンチ 北区全景



2次6トレンチ 土塁・郭外堆積土断面



2次6トレンチ 集石1(東壁下・西から)



2次6トレンチ 土塁断面(東壁)



2次7トレンチ 土塁法面～掘状遺構断面(北壁)



2次7トレンチ 全景(南西から)



263



264



265



2次6トレンチ 遺物出土状況



2次8トレンチ 全景(西から)



2次9トレンチ 全景(西から)



2次8トレンチ 全景(東から)



2次9トレンチ サイカチ立木出土状況(北から)



2次9トレンチ 土塁・郭外堆積土断面(南壁)



2次10トレンチ 土塁・堀状遺構堆積断面(東壁)



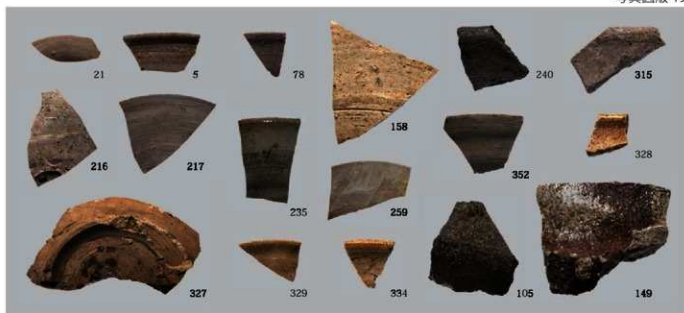
2次10トレンチ 全景(南西から)



井川城址 古瀬戸仏花瓶・土師質土器・瓦質土器(12～339・瓦質土器：S=1/2、Noは実測図中の番号に同じ)



井川城址 古瀬戸・大窯製品 (S=1/2、Noは実測図中の番号に同じ)



井川城址 無軸陶器・中国産陶磁器 (S=1/2, Noは実測図中の番号に同じ)



井川城址 石器・石製品 (1～7: S=1/2, 8～11: S=4/5, 12～14: S=1/2, Noは実測図中の番号に同じ)



井川城址 金属製品 (1～30：S=1/2、31～35：S=1/1、Noは実測图中的の番号に同じ)



井川城址 木製品・土製品（木製品はすべてS=1/3、土製品：S=1/2、1のみS=1/4、Noは実測図中の番号に同じ）

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしおがさわらしじょうかんぐいがわじょうししくつ・だいいちじ・だいにじはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	長野県松本市小笠原氏城館群井川城址試掘・第1次・第2次発掘調査報告書								
副書名									
巻次									
シリーズ名	松本市文化財調査報告								
シリーズ番号	№224								
編著者名	遠藤公洋、小山奈津美、笹本正治、竹原 学、辻 誠一郎、中井 均、原田健司、三村竜一、宮島義和								
編集機関	松本市教育委員会								
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代)								
	(記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)								
発行年月日	2016 (平成28) 年3月25日 (平成27年度)								
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村							
いがわじょうし 井川城址	ながのけんまつもとし 長野県松本市 いがわじょう 井川城1丁目	20202	172	36度 21分 12秒	137度 59分 34秒	20130617 ～ 20150330	1484.6㎡	範囲内容確認調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
井川城址	城館跡	縄紋	なし	石器・石製品		遺跡の範囲・内容確認のための 発掘調査			
		古墳	なし	土師器・須恵器					
		ナ食・平安	土坑	15基	土師器・黒色土器・須恵器・ 灰輪陶器				
		中世以前	集石	1基					
			溝状遺構	1基					
		中世	建物址	5基	焼物：土師質土器（皿・内耳罐）				
			柱穴・ピット	327基	瓦質土器				
			土坑	257基	無輪陶器（山茶碗・小皿・片 口鉢・甕）				
			炭化物集中	10基					
			焼土	2基	瀬戸・大空（天目茶碗、平碗）				
			集石	5基	緑釉小皿、盤類、播鉢、茶入、 花散他				
			溝状遺構	19基					
			流路	11基	船載陶器（天目茶碗）、磁器（青 磁碗、白磁皿、青花碗・皿）				
			石列	1基	石製品：硯・砥石				
不明遺構	10基		金属製品：釘・鋼・刀子・刀装具・ 木製品：串状木製品他						
不明遺構	1基	土器							
不明遺構	1基								
近世以降	溝状遺構	2基	陶磁器						
	水路・流路	5基	金属製品						
	不明遺構	2基							
要約	信濃守護小笠原氏の居館跡と伝わる遺跡の実態把握と将来的な保護を目的として、3次にわたる範囲・内容確認調査を実施した。その結果、松本市特別史跡を含む「字井川」地籍のほぼ全域に及ぶ南北105m以上・東西70mの長方形の土壇状盛土遺構が検出され、周囲を頭無川やその旧河道とみられる低湿地や堀状遺構で囲むことが判明した。盛土による造成面上には複数の遺構面があり、掘立柱建物・礎石建物址等、多数の遺構の存在を確認した。また、外周には土塁が巡る可能性も窺えた。造成時期は、伴出する瀬戸産陶器の年代から14世紀後半まで遡る可能性があるが、そのピークは15世紀前半～中葉とみられ、15世紀末には終焉を迎える。また、焼物組成全体に占める土師質土器皿の比重が非常に高く、形態・胎土から京都志向が窺える。伴出する貿易陶磁には威信財である青磁筒形瓶をはじめ、青花磁や青磁・白磁の碗・皿類が豊富にあり、焼物の他にも碁石や小札等が存在する。こうした状況から、土壇状の造成遺構の性格は守護・国人に匹敵する武士勢力の居館跡である可能性が高く、文献や地名、伝承から小笠原氏の居館である可能性が高いものと考察される。								

松本市文化財調査報告書№224

長野県松本市

小笠原氏城館群

—井川城址試掘・第1次・第2次発掘調査報告書—

発行日 平成28年3月25日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 二光印刷

『小笠原氏城館群』正誤表

ページ	行	誤	正
42	上から3行目	遺構<事実>	遺構
44	上から2行目	城外	城外
49	上から9行目	にも破線	に工事の法面
50	上から12行目	塁線]	塁線I
51	上から14行目	平場10	平場12
51	上から21行目	防御構造の存在	防御構造
51	下から3行目	西尾根	西北西尾根